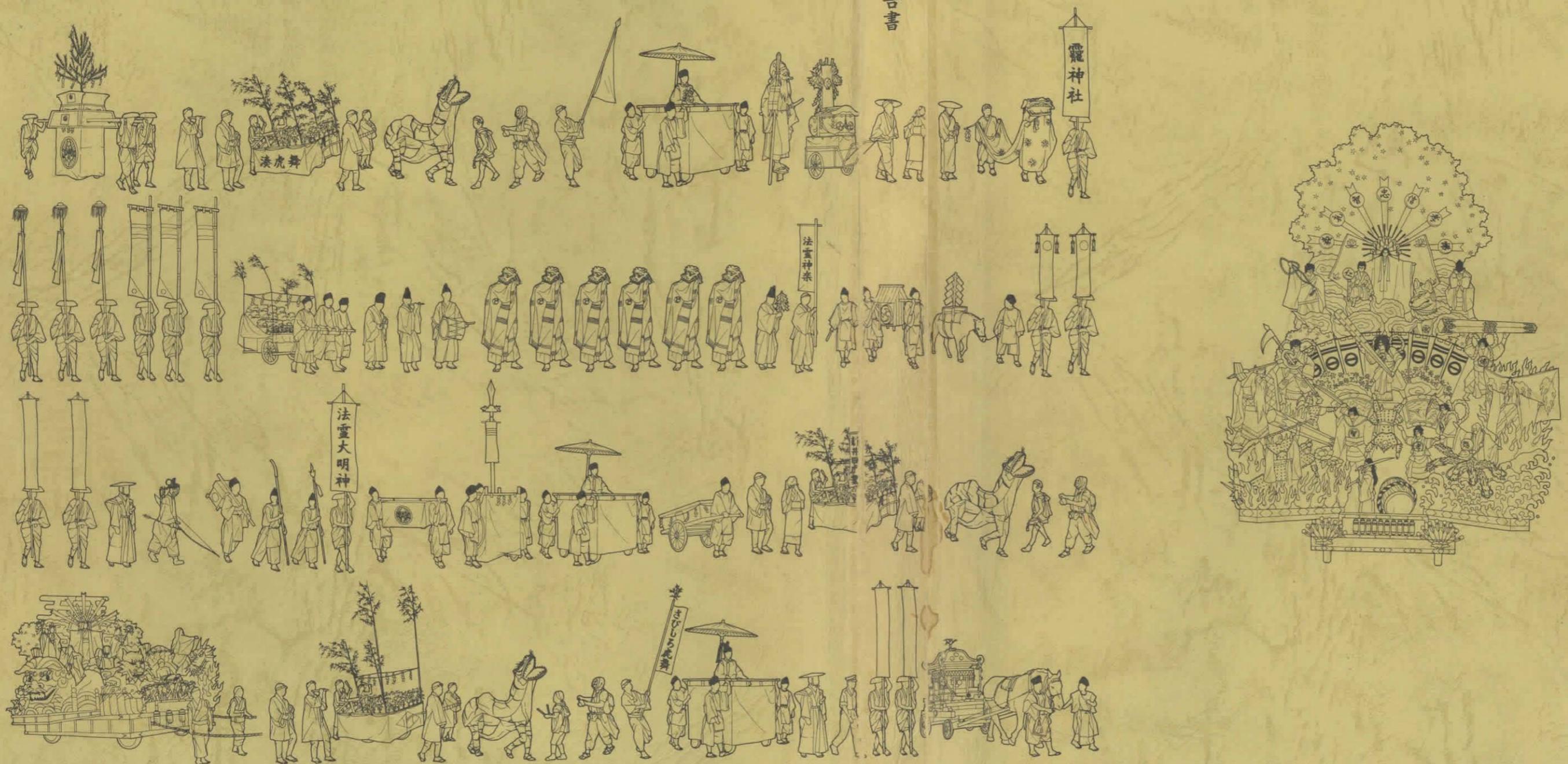


八戸三社大祭文化財調査報告書

八戸三社大祭文化財調査報告書



八戸三社大祭文化財調査報告書



カラー写真1 為朝鬼ヶ島（西町屋石橋家旧蔵・八戸市博物館展示）



カラー写真2 神功皇后と武之内宿禰（和泉屋鈴木家蔵・八戸市博物館展示）



カラー写真3 高砂（村井千秋氏所蔵）



カラー写真4 武田信玄屋形人形（龍神社所蔵）



カラー写真5 太公望屋形人形（籠神社所蔵）



カラー写真6 お通り行列の先頭



カラー写真7 赤穂浪士の討ち入り（昭和63年 類家）



カラー写真8 風流才女紫式部・源氏物語（平成10年 十一日町）



カラー写真9 奇襲源義経（平成11年 吹上）



カラー写真10 八犬伝（平成12年 内丸）



カラー写真11 新鏡獅子（平成4年 廿六日町）



カラー写真12 前夜祭の風景

序

八戸三社大祭は、市の中心部に位置する法靈社（現靈神社）、神明宮、長者山新羅神社の三神社が合同で行う祭礼行事であります。これまで本格的な調査が行われておらず、地元の人間であつても、祭り本来の意義や歴史はあまりよく知らないといわれています。

祭礼行事はそれぞれの地域の風土に密着したものであり、その伝統は貴重な文化財でもあります。

そこで、祭りの歴史と価値について認識し、その貴重な伝統文化を後世に伝えるために、文化庁と青森県の補助を受け、平成十一年度から平成十三年度までの三年間にわたり、八戸三社大祭民俗文化財調査を実施してきました。その結果、これまであまり知られていなかつたことも明らかになつてきました。この度、その成果として調査報告書を刊行する運びとなりましたが、本書を活用することによつて八戸三社大祭の保存と伝承に役立つものと期待しております。

結びに、調査および報告書の作成にあたりご指導ご尽力を賜りました文化庁大島暁雄主任調査官および京都学園大学植木行宣教授をはじめとする諸先生方、そして調査にご協力いただきました三社、ならびに関係者の皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成十四年三月

八戸市教育委員会教育長 森林康

例　　言

一 本書は、八戸市が文化庁および青森県の補助を受け、平成十一年度から平成十三年度まで実施した八戸三社大祭に係わる民俗文化財調査の調査報告書である。

二 本事業は、八戸三社大祭の歴史や現状を調査し、今後の伝承に資することを目的に実施された。

三 本調査の体制は、次のとおりである。
事業主体　　八戸市教育委員会（担当課—文化課）
指導機関　　青森県教育厅文化財部伝統文化課

青森県教育厅文化財保護課

調査員

植木行宣（京都学園大学人間文化学部教授）

小池淳一（元弘前大学文学部助教授、現愛知県立大学文学部助教授）

福原敏男（元国立歴史民俗博物館助教授、現日本女子大学人間社会学部助教授）

外崎純一（日本民俗学会会員）

小山隆秀（元五所川原市立五所川原第一中学校教諭、日本民俗学会会員）

大村達郎（日本民俗学会会員）

井上貫之（八戸市児童科学館館長補佐兼指導主事）

藤田俊雄（八戸市博物館主任主査兼学芸員）

古里泰子（八戸市美術館主任主査兼学芸員）

山田勝江（八戸市博物館主任主査兼学芸員）

佐々木勝江（八戸市博物館主任主査兼学芸員）

工藤竹久（文化課副参考事）

久保満（文化課主事 平成十一年度～平成十二年度）

小田弘行（文化課主事 平成十三年度）

正部種康（八戸市文化財審議委員）

阿部達（八戸市文化財審議委員）

坂和良（山車研究家）

調査協力員

中里進（郷土史研究家）

四 調査報告書の執筆は、第一章・第五章二・四・七・第六章三を工藤竹久、第二章を藤田俊雄、第三章を山田泰子、第四章を古里淳および佐々木勝江、第五章一・三を小山隆秀、第五章三・六・八を大村達郎、第五章五・第六章一・二・四を阿部達、第七章・第八章を小池淳一、第九章を植木行宣が担当した。

五 本調査を実施するにあたり、次の団体や多くの関係者からご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します（順不同敬称略）。

靈神社、長者山新羅神社、神明宮、三嶋神社、盛岡八幡宮、八戸市観光協会、八戸三社大祭協賛会、はちのへ山車振興会、廿六日町山車組、新荒町山車組、上組町山車組、根城新組町山車組、壳市山車組、吉田産業グループ、青山会、朔日町山車組、塩町山車組、城下山車組、十一日町山車組、柏崎新町山車組、淀山車組、下大工町山車組、下組町山車組、新井田附祭振興会、内丸附祭親睦会、吹上山車組、糠塚山車組、長横町山車組親睦会、六日町山車組、類家山車組、十六日町山車組、鍛冶町山車組、八戸市職員互助会、八戸共作連、泉屋薬局、石橋順夫、瀧本壽史、富岡昭、村井千秋、村井裕通、江刺家均、丸山二郎、青森市役所、青森県立郷土館、秋田市教育委員会、角館町教育委員会、仙台市歴史民俗資料館、亀岡市教育委員会、長浜市教育委員会、上野市教育委員会、八代市立博物館未来の森ミュージアム、盛岡市役所、盛岡市中央公民館、盛岡八幡宮、十和田市教育委員会、三沢市教育委員会、五戸町教育委員会、三戸町教育委員会、名川町教育委員会・新郷村教育委員会、百石町教育委員会、上北町教育委員会、福地村教育委員会、下田町教育委員会、七戸町教育委員会、東北町教育委員会、天間林村教育委員会、六ヶ所村教育委員会、野辺地町教育委員会、二戸市教育委員会、久慈市教育委員会、一戸町教育委員会、九戸村教育委員会、種市町教育委員会、輕米町教育委員会、淨法寺町教育委員会、野田村教育委員会、小倉房次（二戸町）、惟子雅英（盛岡市）、松尾千代志（三戸町）、柏木宏之、遠藤正夫、前田美帆、三戸大神宮、吉田和正、鎌田視久、長谷川睦雄、沼田昌敏、工藤三穂子

六 古文書の解説にあたり、工藤祐董、三浦忠司、斎藤潔、森越良の各氏、次の方々から御協力を賜りました。

七 本報告書作成に当たり、デーリー東北新聞社、カメラの和弘、朔日町山車組（刈田享典）、上組町山車組（原宏次）、廿六日町山車組（佐々木伸夫）、城下山車組（安藤豊）、壳市山車組（川口義国）、夏坂和良、中里進、大村喜久男、橋本八右衛門、新山なを、中島松藏、工藤茂美の各氏等から写真資料の提供を賜りました。

八 本書の執筆にあたり、次の方々から説明を賜りました（順不同敬称略）。

伊藤喜三郎（廿六日町、大正九年生）、横田悦郎（同、大正一〇年生）、橋修（同、昭和一五年生）、泉山文男（新荒町、昭和三五年生）、原宏次（上組町、昭和四二年生）、根城忠（根城新組町、昭和三三年生）、川口義国（壳市、昭和三六年生）、大谷地一夫（吉田産業グループ、昭和一六年生）、柳田諭（朔日町、昭和三二年生）、大野素敬（淀、昭和四三年生）、渡部仁（下組町、昭和二九年生）、長谷川宏（新井田、昭和二一年生）、赤間糸一（城下、大正一三年生）、佐々木石雄（同、昭和六年生）、上澤佐太郎（同、昭和十一年生）、和山正治（同、大正一四年生）、類家栄一（柏崎新町、昭和一七年生）、石岡義弘（下大工町、昭和三五年生）、重石和人（十一日町、昭和三二年生）、田中吉彦（同、昭和三六年生）、田村安博（塩町、昭和二三年生）、下館政光（糠塚、昭和三三年生）、十日市雅一（長横町、昭和二九年生）、小野寺代志夫（六日町、昭和二〇年生）、高屋敷正敏（類家、昭和二二年生）、秋田清（十六日町、昭和二十五年生）、橋本謹三郎（鍛冶町、昭和九年）、工藤哲（八戸市職員互助会、昭和二八年生）、中居康陽（吹上、昭和三四四年生）、金田正和（同、昭和四二年生）、泉山彰（八戸共作連、昭和二一年生）、蛭子長太郎（元廿八日町在住、明治四三年生）、音喜多てる（元見番、大正八年生）、三島キク工（同、大正一四年生）、富田蝶子（同、大正一五年生）、新山なを（同、大正一〇年生）

九 本書の編集は、植木行宣の指導を得て工藤竹久が担当した。

目

次

カラーワ 写真

序 文 言 例 目 次

第一章 八戸市の概要	1
一、八戸市の位置と自然	3
二、原始～古代の八戸	3
三、中世～近世の八戸	4
四、近代～現代の八戸	5
第二章 八戸三社大祭の変遷—江戸時代—	7
一、八戸御館神としての法靈大明神	9
二、神輿渡御の始まり	11
三、長者山での祭りの様子	13
四、「出し」の始まり	14
五、法靈御神事における藩士の勤番	15
六、祭礼日の変更と武者行列・騎馬打毬の始まり	16
七、出し人数書き上げにみる「出し」	17
八、「出し」人形・「屋台車」の製作と「出し持ち人足」	18
九、「出し」の運行について	20
一〇、現存する「出し」人形	23
第三章 八戸三社大祭の変遷—明治から現代まで—	27
一、明治新体制と法靈御神事祭礼	29
二、靈神社祭礼から靈・新羅二社の祭礼へ	30
三、靈・新羅・神明の三社御祭礼	31
四、三社大祭の変遷の様子	33

第四章 八戸三社大祭の神事

一、靈神社	1
二、新羅神社	2
三、神明宮	3

第五章 八戸三社大祭の組織と活動

一、三社大祭の運営組織と運行	1
二、三社大祭の行列編成	2
三、各山車組について	3
四、三社大祭の山車類型	4
五、三社大祭のお囃子	5
六、三社大祭と華屋台	6
七、町内会と消防組織	7
八、失われた山車組	8

第六章 八戸三社大祭と芸能

一、神樂	1
二、虎舞	2
三、騎馬打毬・徒打毬	3
四、その他の芸能	4

第七章 八戸三社大祭の山車の造形

一、山車の変容とその意味	1
二、題材決定のプロセスと特徴	2
三、題材にみる八戸の風土	3
四、昭和史にみる八戸三社大祭—地元新聞の報道から—	4

第八章 南部地方の山車祭りと八戸三社大祭

- 一 南部地方における山車祭礼の概観 155
- 二 南部地方の山車祭礼の特徴 156
- 三 八戸型風流山車文化圏の存在と意義 157

第九章 八戸三社大祭の位相

- 一 三社大祭の特色 163
- 二 山鉾の類型と作り山のひろがり 165
- 三 人形山から風流山車へ 166

第一〇章 八戸三社大祭「史料」

八戸藩目付所日記（享保五年、享保六年、延享四年）	175
書状 西町屋文書①（八戸市博物館）	181
書状 西町屋文書②（八戸市博物館）	181
書状 西町屋文書③（八戸市博物館）	181
書状 西町屋文書④（八戸市博物館）	182
永歳覚日記 明和六丑年より安永六酉年迄	183
永歳覚日記 安永六年三月および安永十年四月より天明五年迄	184
延亨四年卯七月十九日 法靈御神事行列	184
天保四年巳七月廿日 法靈御神事行列	185
嘉永元年申七月廿日 法靈御神事行列	186
安政三年辰ノ七月廿日 法靈御神事行列帳	187
明治二年巳七月廿日 法靈御神事行列帳	188
明治廿二年八月十六日 三社御祭禮行列帳	189
明治廿五年三社御祭禮行列帳	190
明治廿三年庚寅八月 三社神事祭禮諸用控	191
明治四年 霊神社御祭事二付人足大略調書上帳	192
〔陸奥國八戸靈祭〕『風俗画報』明治二五年	193
新聞記事史料	199

201 199 197 192 191 190 189 188 187 186 185 184 184 183 182 181 181 177 175

170 166 165 163 158 156 155 153

付表

- 八戸三社大祭參加山車組一覽 209
- 八戸三社大祭山車組題名一覽 211
- 八戸三社大祭參加芸能一覽 230
- 平成十二年度八戸三社大祭山車貸出表 235
- 八戸三社大祭編年表 236

236 235 230 211 209

第一章

八戸市の概要

一・八戸市の位置と自然

八戸市は、青森県の南東部に位置し、市の南北と西側は近隣の町村と接し、東側は太平洋に面している。この市は、海から開けたまちといわれており、早くから港湾整備が進められ、現在は人口二四万五千人余を擁する青森県随一の工業都市・水産都市として発展し続けている。

また、八戸市は東北地方のなかでは極めて積雪が少なく、寒さが厳しい割に日照時間が長いという太平洋側気候区の特徴を有しており、このような気候を生かし早くからスケートが盛んで、これまで多くの名選手を輩出してきた。

一方、夏の八戸は「やませ」とよばれる太平洋から吹き付ける霧を含んだ冷たい風が吹き付け、それが続くと低温と日照不足のためしばしば冷害にみまわれ、特に稲作に大きな被害をもたらしてきた。このため、津軽地方に比較して畑作の占める割合が高い点に八戸地域の特徴がみられる。

八戸市の地形は、市の南北と西側に丘陵が連なつておおり、この丘陵を刻むよう岩手県に源流をもつ馬淵川と新井田川が流れ、下流では河川の堆積物により形成された沖積平野が太平洋に向つて大きく広がっている。

丘陵上には、縄文時代以来の遺跡がみられ、糠部地方統治の拠点となつた

中世の根城や近世の八戸藩の城もまたここに築かれており、過去から現在まで營々として人々の生活の舞台となってきた。

一方、沖積低地は、縄文時代早期末期には入り江になつていた地帶で、地盤が軟弱で水はけが悪く住宅地

には適さないとされてきた。しかし、近年では区画整理事業が実施され、下水道完備の近代的な住宅地に生まれ変わった地区も多い。

二・原始～古代の八戸

八戸市には旧石器時代を除く各時代の遺跡が数多く存在し、登録されている埋蔵文化財包蔵地は平成十三年七月現在で二七六か所に達し、県下でも有数の分布密度を誇っている。

これらの中で、今から約七千年前の長七谷地貝塚は、縄文海進期に形成された遺跡で、当時の環境や生業の内容を知るうえで学術的に重要な貝塚として、昭和五六年に国史跡に指定されている。

また、是川遺跡は、今から約三千年前の高度に発達した工芸技術を特徴とする亀ヶ岡文化の代表的な遺跡であり、普通の遺跡では腐食して残らない植物性遺物が大量に出土した遺跡として全国的にも知られている。この遺跡は昭和三二年に国史跡に指定され、約四千点にのぼる出土遺物のうち、六三三点が国の重要文化財に指定されている。

この他、風張遺跡、松ヶ崎遺跡、石手洗遺跡など、新井田川下流には、縄文時代の大規模な遺跡が集中して分布しており、縄文文化の研究上重要な地域となつている。

弥生時代になると、この時代の粗痕の付いた土器が出土することにより、稻作農耕文化が伝播したことが知られているものの、縄文時代のように大規模な広がりをみせる遺跡は知られていない。

飛鳥時代から奈良時代になると、八戸地方でもようやく古墳が築造されるよ

うになる。丹後平古墳は、直径五メートル前後の円墳群であるが、当時の支配者階層の人々が使用した、武器・武具や装飾品が出土しており、特に十五号墳

からは、朝鮮半島の新羅で製作されたと考えられる、三累の付いた刀の柄飾りが国内で初めて出土し、当時蝦夷と呼ばれたこの地域の社会や古墳の被葬者の身分を研究するうえで大きな発見となつた。

この時代以降から平安時代にかけて、馬淵川と新井田川の下流の丘陵上には大規模な集落が営まれるようになつたことが知られており、発掘された出土遺物の内容から、八戸地方に本格的な農耕が定着し、それに伴い集落数が増加していくことがうかがわれる。

しかし古代の八戸は、蝦夷とよばれた中央政府の支配が及ばない人々の住む地域であつた。

南北朝時代になると、甲斐に本領をもつ南部師行が根城に城を築き、広大な糠部郡を支配する拠点と定めた。南部氏は、北奥羽における南朝方勢力の中心的な存在として活躍し、最盛期の支配圏は糠部郡にとどまらず、比内・仙北・鹿角・岩手・閉伊・遠野へも及んでおり、津軽地方にも領地を有していた。いま根城は、発掘調査により検出された建物跡に基づき主殿や板蔵などが復原され、中世における館の様子が展示公開されている。

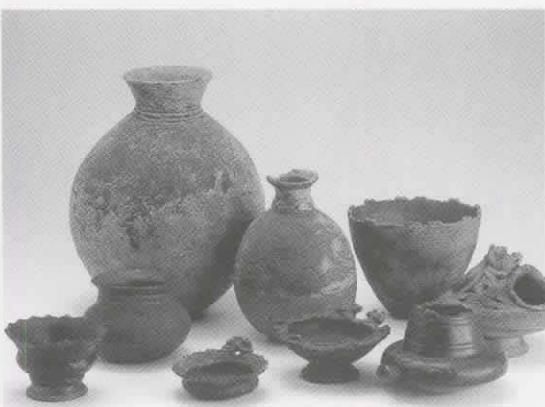
戦乱に明け暮れた南北朝時代が終わり足利方の勢力が伸張するに伴い、根城南部氏の勢力は徐々に弱まつていつたといわれる。そして寛永四年（一六二七）、根城の南部氏は盛岡の南部利直の命により岩手県の遠野へ転封となり約三〇〇年にわたり住み続けた八戸の地を後にすることになった。

城下町八戸は、三戸の南部利直の代に縄張りにされたと伝えられている。城の大手より長横町へ縦線を引き、中央から上へ三日町、十三日町、廿三日町の三丁を開き根城の商家を移し、中央から下へは八日町、十八日町、廿八日町の三丁を開き新井田町の商人を移した。この町づくりは正保から慶安年間には一応の完成をみたといわれている。

寛文四年（一六六四）、盛岡の南部重直が世継ぎを決めないまま死去したことにより、幕府は弟重信に盛岡八万石、同じく直房に八戸二万石を与える裁定を下した。これにより、盛岡藩領から三戸郡四一か村、九戸郡三八か村、飛地の志和郡四か村、合計八三か村が分割され八戸藩が誕生した。

江戸時代の八戸は、たびたび厳しい冷害に見舞われたが、領内の商業の中心

三・中世～近世の八戸



写真二 是川遺跡出土遺物



写真三 丹後平古墳群全景

地として発展し、特に東廻り航路が安定した宝暦年間（一七五一—六五）頃には重要な湊となつていった。その後、文政二年（一八一九）から始まる藩政改革により八戸藩の海運は飛躍的に発展し、大豆・鰯・粕・干鰯・鉄などが江戸およびその周辺の都市にも運ばれた。特に出雲鉄と並び称された八戸鉄は、相馬・岩磐方面や仙台石巻の鋳銭場へ大量に移出された。

江戸時代における八戸藩の特徴として見逃してはならないものに、湊を中心とした産業の振興があげられる。この頃になると藩権力とつながりの深い有力商人が急速に台頭し人形山車を参加させたり人足を出すようになり、祭りの運営に深く関わつていつたようである。

江戸時代の漁業の発達や港湾の賑わいは、明治以降の港湾都市・産業都市としての発展へと連なるものであり、近代八戸の発展の基礎が築かれた時代であった。



写真四 根城跡本丸



写真五 八戸城跡

四 近代～現代の八戸

明治四年（一八七一）七月の廢藩置県によつて、弘前・黒石・八戸・七戸・斗南の各藩はそれぞれ県となり、九月には合県が行われ、これら五県と北海道の館県（旧松前藩）が統合されて弘前県になり、その後青森県と改称され県庁も青森に移つた。

明治二二年、町村制の施行に伴い八戸町が誕生し、明治二十四年には、日本鉄道会社青森線（現東北本線）が敷かれ尻内に駅（現八戸駅）が設けられた。さらに、明治二七年には、尻内から分岐した湊線が開通し、八戸は近代化に向かつて力強く歩み始めた。

昭和四年（一九二九）、八戸町、小中野町、湊町、鮫村が合併して、五月一日に市制を施行した。このとき、八戸市の人口は五万人であつた。本州北端に位置し、大消費地からも遠い八戸市は、交通網の発達を促進させ、地元の資源を活用できる工場の創設を図つてきた。特に、昭和三九年の新産業都市の指定は、その後の八戸の産業発展に大きく貢献するものとなつた。そして、それまでの基礎素材型および地方資源型産業に依存した構造から新しい時代へ対応すべく高度技術産業への構造の転換が図られ現在は北東北随一の工業都市と呼ばれるまでになつてゐる。

漁業においては、明治時代の中頃から漁法や漁船が次第に近代化されるようになり、明治三三年には水産補修学校（現在の八戸水産高校）が開校し漁港の整備も進んだ。魚市場が開設された昭和四年の八戸港の水揚げは六千トンであつたが、平成十年には二四万トン、金額四二一億円と全国でも有数の漁港になつた。その背景には、加工原魚の冷凍施設の拡充や水産加工業の集団化と協業体制の構築などが成功したことがあげられる。

また、農業においては深刻な冷害にたいする備えとして、耐冷・耐病性品種

の育成、保温苗代などの栽培技術の開発により、適地適作とはいえない八戸での稻作に取り組んでいる。また、日照時間の多さを利用したいちごのハウス栽培などもおこなわれている。

八戸の商業圏は、県南地方と岩手県北を抱え市町村数・商圈人口とともに県内最大の規模である。町村数は五市十六町十一村で、商圈人口は約七〇万人にのぼる。そのうち、買い物で八戸市の商店を最も多く利用する人口は約四〇万人である。しかし、ここ数年、周辺町村に大型店ができたため八戸商圈の伸びが止まつてきている。

このため、卸売業界においては団地化をはかり経営の合理化をめざして取り組んでおり、小売業界においても市街地再開発事業による店舗の近代化が進められている。

また、これまで集積されてきたインフラを活用し国際物流拠点港としての整備が進められ、これまで東南アジアコンテナ航路・韓国航路・北米航路が開設され、八戸港の利便性を生かし物流コストの削減と商取引先の拡大化が図られている。

近年、八戸三社大祭は参加する山車が大型化し、動力による派手な仕掛けをもつ山車の登場と祭りの伝統的な部分の変化が話題となつていて。善し悪しは別として、祭りがこのように大きく豊かに育ってきた背景には、八戸が古くから南部地方の経済や文化の拠点となつて今日に至つており、祭りを応援できる町内会組織などが大きく変化していないことなどが考えられる。

(工藤 竹久)

第二章

八戸三社大祭の変遷

—江戸時代—

一・八戸御館神としての法靈大明神

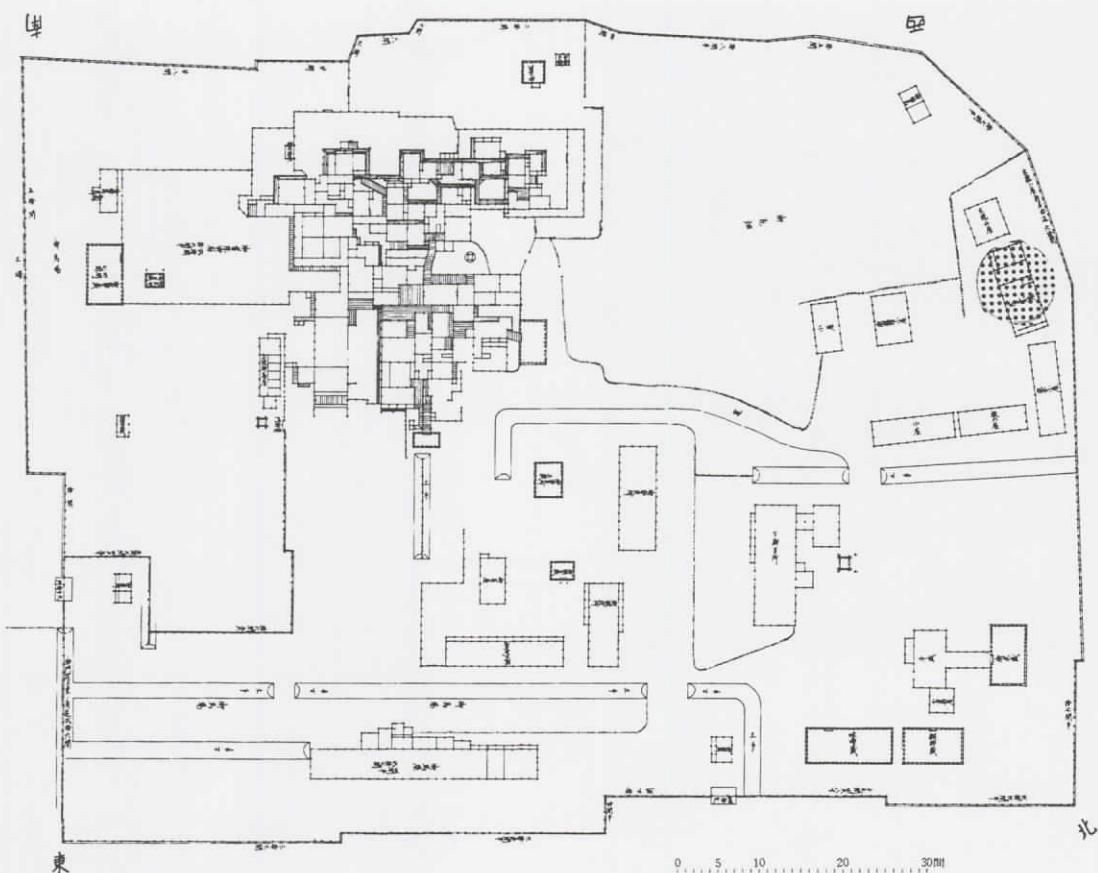
図一 法靈大明神の旧鎮座推定図

現在、内丸二丁目に鎮座する靈神社は旧号を法靈大明神と唱えていた。その社地は、昔は御屋舗（八戸城）の内北の方、三つの木のあるところ、大工小屋のあたりであった。ここを往古は柏崎といい、または宮台、または都台とも書いた。勘定所前井戸のあつた所に大きな沼があり、この沼には大蛇が住んでいたという（「神社調　式冊之内」八戸市立図書館所蔵）。元来、法靈大明神は龍神であり、水の神であるところから、稻作に伴う農耕神でもあつたわけで、より古い段階では柏崎村の産土神として祀られていたものであろう。

社の名は法靈という山伏に由来する。法靈が年々五穀成就、日和乞、または雨乞など、何でも祈念すると、感應があり靈驗あらたかであつたため、人々の信仰が厚かつた。ある時雨乞をした。念を入れて心をこめて祈つたが何のしるしもなかつた。そこで、ついに彼は社地の池に身を投げた。死んだ後から雨が降り続き、五穀は豊かに稔つた。年ごとに秋の収穫が続き、いろいろな願いが聞きとどけられないことがなかつた。それをあがめて法靈大明神として勧請したとい（鈴木堯子『附録伝記』一九八八年、種市町立図書館）。

寛永四年（一六二七）、八戸直義（のち直栄・根城南部家二三代当主）は、盛岡藩初代藩主南部利直の命により、遠野（岩手県遠野市）に村替となり、約三〇〇年におよぶ根城南部家の八戸支配に終止符が打たれた。八戸は三戸・五戸地方における交通の中心であり、寛永六年（一六二九）、利直は自ら縄張りし、土工を起こして城壁を築き、且つ城下の町割を定め、翌年の暮れになつて六丁の町（三日町・十三日町・廿三日町・八日町・十八日町・廿八日町）が完成したとい（前田利見編『八戸南部史稿』一九九九年、八戸市史編纂室——以下「南部史稿」と略す）。慶安元年（一六四八）には、四人の代官が管轄していた八戸地方の四万四〇〇石の地を城代に管轄させている（盛岡市教育委員会・盛岡市中

古
跡
考
究
記



央公民館編『盛岡藩雑書』第一巻、一九八六年一下「雑書」と略す)。また、

八戸に御蔵を置き、御蔵奉行に蔵米を管轄させた。

盛岡藩は慶安三年(一六五〇)に、「八戸古御家」に代わる「八戸御城」の作事を行い、翌四年には、八戸に城館を設け城代を派遣した(雑書)。さらに、承応元年(一六五二)に「八戸御家」・「八戸新館」を建てた(雑書)。藩主の利直は、八戸地方でしばしば鷹狩りを行い、八戸の城館に滞在している。藩は、八戸の城館に「八戸御館神」として法靈大明神を祀った。承応二年(一六五三)、二代藩主南部重直の病氣平癒祈願を行つた領内外の諸寺社の中に「御立願之御初尾米被遣事、八戸御城八満・同所法領・同所地蔵」、「八戸御館神法領一昨十六日御神樂御湯立仕上候所ニ」とみえる(雑書)。

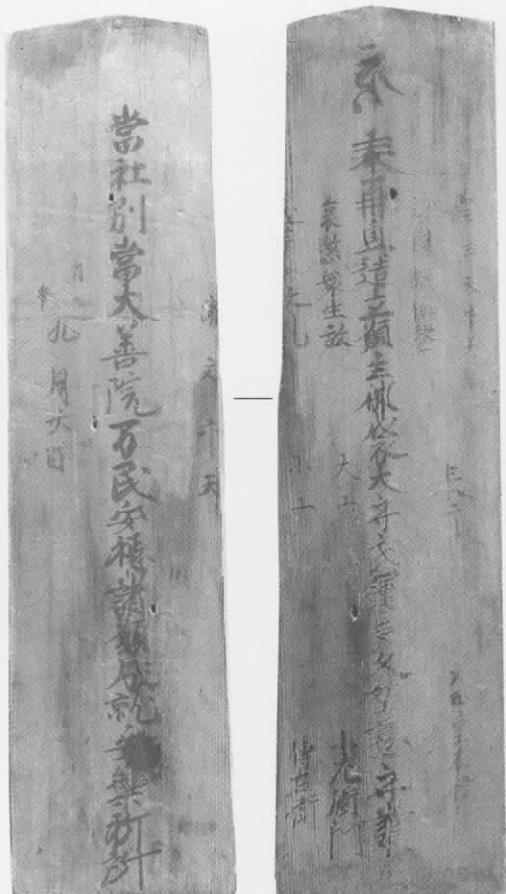
寛文四年(一六六四)九月、重直が嫡子を定めぬまま死去した。幕府は、その所領一〇万石を收公し、新たに重直の弟重信に盛岡八万石、同直房に八戸二万石を与えた。直房は、八戸の城館を居城と定めた。翌年五月、直房の初入部に際して、領内の平穏と藩主の武運長久を祈願し、各神社や觀音堂へ絵馬などが奉納されている。この中で、「御城二ノ丸 宝領神 戸張錢堂納事」とみえる(八戸市史編さん委員会『八戸市史 史料編 近世1』)以下、八戸市史1と略す)ことから、すでに社が本丸から二ノ丸に遷座していたことがわかる。寛文六年(一六六六)九月には、直房生母の仙寿院が願主となり、御堂を再興し、九月二〇日に現社地へ遷宮している(上杉修「八戸祠佐嘉志抄」八戸市立図書館所蔵——以下「祠佐嘉志抄」と略す)。現存する靈神社棟札によれば、このときの別当は、大善院であった。

貞享三年(一六八六)に一〇石を給され、八戸城と八戸町を鎮護する藩神として藩主や領民の信仰を集めた。ちなみに、現在の社殿は文政七年(一八二四)八月十九日に再建の鉄立があり、文政八年(一八二五)七月九日に落成し、遷宮式を挙行している(南部史稿)。

写真七 寛文六年の棟札(靈神社所蔵)



写真八 八戸城本丸から二ノ丸への遷宮「文久改正八戸城下略図(部分)」
八戸南部家文書・八戸市立図書館蔵



二、神輿渡御の始まり

享保五年（一七二〇）の年は土用に入つても天氣悪く毎日荒れ、殊に冷氣も強かつた。このため八戸町の庄屋、町老（乙名）は法靈社の社人と相談し、法靈社に祈願して大願成就すれば祭礼を賑やかに務めることを誓つた。そうすると天氣も良くなり暖気になつたので、長者山虚空藏堂を御旅所として、法靈神輿の渡御を執行されるよう願いが出された。「来年よりハ法靈為御祭礼七月十九日前法靈御神輿長者山虚空藏堂江御旅被成、廿一日御神輿御帰座被遊、前度之通、踊など相勤、御祭礼仕度由願上候」（八戸市史4）

また「渡御神輿料之儀ハ、御家中並御町之者氏子ニ候間、存寄次第相出候筈、尤、御祈祷之儀候間、從御前も御相応ニ御出シ可然由」とみえ、藩士も町人も法靈社の「氏子」であるとしている。

渡御に使用される神輿は、同年十二月に「法靈御神輿御建立ニ付御家中御侍中家來まで壱人ニ付十錢づゝ來正月廿日までノ内致寄進候様ニと御役人中より被仰候ニ付両御町奉行中より取立申候様ニと廻状ニテ相触ル」（八戸市史4）とみえ、藩士ならびに八戸町の町人に至るまで献金が行われ、建造された。

法靈の神輿が初めて長者山の三社堂（現長者山新羅神社）へ渡御したのは、享保六年（一七二一）七月十九日のことである。行列の次第は「一 御幡拾壱本 二 獅子權現 三 法螺式人 四 太鼓笛 五 手平可年ニツ 六 御鉢 別當上下三人 七 神前湯立 御幣三本 八 參錢箱 九 五龍御幡二本 十 御輿 十一 龍頭御幡三本 十二 常泉院騎馬 山伏五人内壱人法螺壱人太刀持 同壱人金剛杖持外二草履取 長刀挾箱長柄 十三 笠鉢太神樂」、ほかに「一 踊子 床机持 一 役者 一 笠鉢 一 乙名 一 押上下拾五人」という構成であつた（八戸市史4）。山伏参加の行列であることがわかる。この中の踊子とは「商宮律（しゃぎり）」の踊子のことで、別名「笠の葉踊り」ともいい、

武士と商家の子女が笠の葉を振りながら二列になり、「しゃぎり」の歌を唱えて行列に参加するものである（阿部達『八戸の民俗芸能』二〇〇一年、八戸市）。

神輿は御宮を出、南ノ御門—三日町—荒町—新町—上大工町—かち丁（鍛冶丁）を経て長者山に至る。二一日の還御の節は、長者山より鍛冶丁—大工町—新町—下大工丁—廿八日町—八日町札ノ辻—南ノ御門から再び御宮に戻つた

写真九 神輿渡御・環御道筋 「文久改正八戸御城下略図（部分）」
(八戸南部家文書・八戸市立図書館所蔵)



央公民館編『盛岡藩雑書』第一巻、一九八六年一下「雑書」と略す)。また、

八戸に御蔵を置き、御蔵奉行に蔵米を管轄させた。

盛岡藩は慶安三年(一六五〇)に、「八戸古御家」に代わる「八戸御城」の作事を行い、翌四年には、八戸に城館を設け城代を派遣した(雑書)。さらに、承応元年(一六五二)に「八戸御家」・「八戸新館」を建てた(雑書)。藩主の利直は、八戸地方でしばしば鷹狩りを行い、八戸の城館に滞在している。藩は、八戸の城館に「八戸御館神」として法靈大明神を祀った。承応二年(一六五三)、二代藩主南部重直の病氣平癒祈願を行つた領内外の諸寺社の中に「御立願之御初尾米被遣事、八戸御城八満・同所法領・同所地蔵」、「八戸御館神法領一昨十六日御神樂御湯立仕上候所ニ」とみえる(雑書)。

寛文四年(一六六四)九月、重直が嫡子を定めぬまま死去した。幕府は、その所領一〇万石を収公し、新たに重直の弟重信に盛岡八万石、同直房に八戸二万石を与えた。直房は、八戸の城館を居城と定めた。翌年五月、直房の初入部に際して、領内の平穏と藩主の武運長久を祈願し、各神社や観音堂へ絵馬などが奉納されている。この中で、「御城二ノ丸 宝領神 戸張錢堂納事」とみえる(八戸市史編さん委員会『八戸市史 史料編 近世1』)以下、八戸市史1と略す)ことから、すでに社が本丸から二ノ丸に遷座していたことがわかる。寛文六年(一六六六)九月には、直房生母の仙寿院が願主となり、御堂を再興し、九月二〇日に現社地へ遷宮している(上杉修「八戸祠佐嘉志抄」八戸市立図書館所蔵——以下「祠佐嘉志抄」と略す)。現存する靈神社棟札によれば、このときの別当は、大善院であつた。

貞享三年(一六八六)に一〇石を給され、八戸城と八戸町を鎮護する藩神として藩主や領民の信仰を集めた。ちなみに、現在の社殿は文政七年(一八二四)八月十九日に再建の新立があり、文政八年(一八二五)七月九日に落成し、遷宮式を挙行している(南部史稿)。

写真七 寛文六年の棟札(靈神社所蔵)



写真八 八戸城本丸から二ノ丸への遷宮「文久改正八戸城下略図(部分)」
八戸南部家文書・八戸市立図書館蔵



(八戸市史4)。城下の表町と裏町を一巡する形で神輿の渡御行列が初めて実施された。この神輿行列を機に法靈社の祭礼は城下の町人と近郷近在の農民とが楽しむ全城下あげのお祭りへと成長することとなつた。

この背景には八戸の商業が元禄期(一六八八～)を契機にして興隆し、享保年間(一七一六～三六)に至つて急速に発展期を迎えて、町衆の社会的勢力や地位が一段と向上したことがあげられよう。

八戸藩の場合、大豆・干鰯・粕などが特産物だつたが、元禄期頃から移出の記録が次第に藩日記にも増えてくる。これは消費都市としての江戸の発達に連動していた。すなわち、従来畿内中心であつた桑・綿などの商品作物が関東近辺でも栽培されるようになり、より生産を拡大するための肥料として干鰯の需要が増えたのである。

また、人口の増加は味噌・醤油の原料としての大豆の不足を招き、当地方の大豆移出の増加をもたらした。

これに対し、江戸からは木綿・小間物といつた加工品が運ばれた。一方、干鰯・粕需要の増加は他領からの出稼ぎ漁民の増加もよんだ(中野渡一耕「国産物の形成と輸送体制の確立」『写真が語る八戸の歴史 近世編 世紀を越えて』一九九九年、八戸ガス興業株式会社)。

宝永元年(一七〇四)から幕府の城米船が定期的に入港するようになると、これら移出量の増大に対応すべく、藩は、宝永三年(一七〇六)に鮫村に「浦役所」、湊村に「十分の一役所」(のちの川口役所)を設立して藩の海運体制を確立した。

さらに、この時期には、湊村の大規模な改修工事が行われ、流路が安定して船着場が整備されると、次第に鮫湊の本船へ荷物を運ぶ駒船が湊の河口から発着するようになった(三浦忠司『八戸湊と八戸藩の海運』一九九〇年、八戸港湾運送株式会社)。

以上のように、消費都市としての江戸の発達に連動して、八戸の特産物である大豆・粕・干鰯などの需要が増えたことや、藩の海運体制が確立し、港湾整備が行われることにより、町衆の社会的勢力や地位が一段と向上したのであろう。



写真10 現在の龍神社の御神輿

三・長者山での祭りの様子

神輿渡御の御旅所となつた長者山三社堂とは、城下南側の長者山に鎮座する御堂である。延宝六年（一六七八）九月に十一日町より虚空蔵菩薩を勧請したのが始まりで、天和三年（一六八三）に新羅大明神を勧請し、元禄七年（一六九四）に虚空蔵・新羅・愛宕の三社を合祀し、正面に新羅、右に虚空蔵、左に愛宕を祀つた。当初虚空蔵を祀つたことから虚空蔵堂と称することもあり（祠佐嘉志抄）、後には新羅大明神などとも称した。

別当は常泉院で、寛文七年（一六六七）領内山伏の惣録に任せられ、無量院を常泉院と改めている。隠居して榮尊といい、福田村（現三戸郡福地村）にて地形三〇石を賜つていて、寛文十三年（一六七三）領内惣廻りの勧進を命じられている。延宝六年（一六七八）には、糠塚村（現八戸市内）で二〇石を賜り、都合五〇石となる（祠佐嘉志抄）。天保十三年（一八四二）五月「御家中分限帳」（八戸南部家文書・八戸市立図書館所蔵）には「六拾石 長者山常泉院」とみえる。また、「領内十力寺」の一つとされ、格が高かつた。

祭礼になると、長者山には出店や芝居小屋が立ち並び、様々な興業が行われた。領内で興業を行う興業主は、藩に直接届け出をするのではなく、すべて典屋頭松太夫や目明かしの手を経て届けるというシステムになつていた（阿部達「江戸時代の八戸の祭り 法靈祭礼と民俗芸能」『八戸地域史』第二号、一九八三年、八戸歴史研究会）。

七月十九日より二一日までの三日間、長者山において盛岡歌舞伎役者太夫今村権之助による歌舞伎興業が、享保十二年（一七二七）に、同今村権六による歌舞伎が同十四・十五年（一七二九・三〇）、元文二年（一七三七）・同三年に行われている。わけても文政十年（一八二七）七月十七日には、長者山三社堂の遷宮式が行われ（八戸市史8）、華やかな年となつた。

莊厳華麗規模広大で、実に領内第一の大社といわれた社殿は、三か年にわたる藩営の富籤興業による資金で造営された。同年の覚書（三浦家文書・八戸市立図書館所蔵）によれば富札は三五〇〇枚で、一枚五〇〇文で、各村々に半ば強制的に割り当てられている。十九日の神輿渡御の際には、鮫・湊より御供の踊子が長者山において二〇・二一日の昼夜（歌舞伎）芝居を仰せ付けられる。見物人の内筵の上にいる者よりは十二文ずつ、また立つている者よりは八文ずつ取り立てるよう沙汰があつた（八戸市史8）。

また、文政十年（一八二七）、境内の東南に馬場が新設され、新羅大明神の御祭事の節には流鏑馬と騎馬打毬が行わることになつた（八戸市史8）。



写真11 県重宝 新羅神社本殿

四 「出し」の始まり

延享四年（一七四七）の行列に、町人の出した「出し」が初めて登場する。「延享四年卯七月十九日法靈御神事行烈」（靈神社所蔵）から行列の次第を抜き

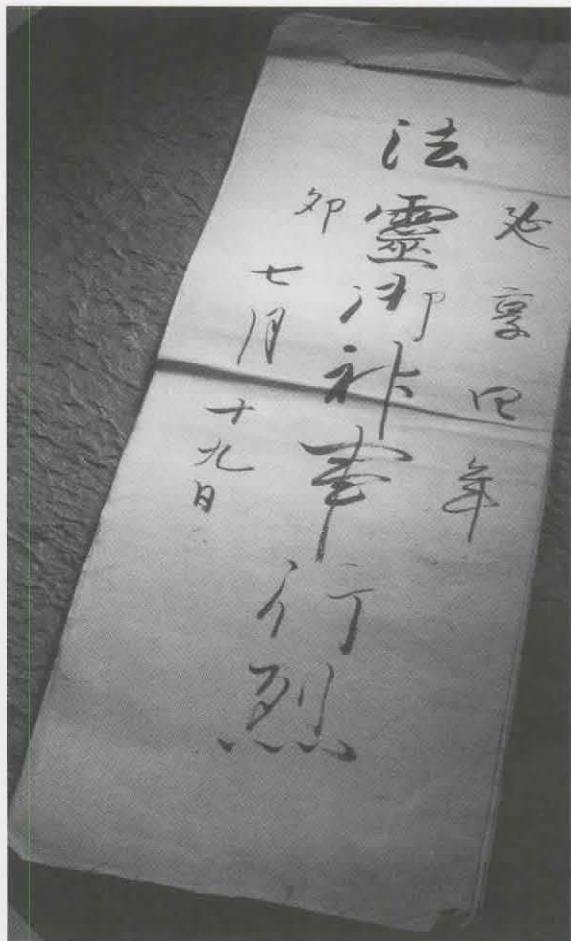
露払		御神幡
御神立願御供子共	御輿台	九郎次様 弥祖右衛門様 勘大夫様 弥太郎様
露払		御神幡
文右衛門様 金石衛門様 小豊治様 惣兵衛様 市太夫様 丈五郎様 清右衛門様		
唱様 治兵衛様 兵衛様 傳右衛門様 辰右衛門様 儀助様 六郎様 忠五郎様		
李之進様 御廣間古轍 奇進幡 獅子權現	法螺 上下着 山伏 手平金山伏 上下着	御鉾
別當 草履取 神前湯立	法螺 上下着 山伏 手平金山伏 上下着	
草履取 御弊三本 錢箱	御弊三本 龍頭御幡 乙名 同 同 白御幡 赤御幡	御輿
乙名 同 同 龍頭御幡	山伏 常泉院名代 法螺山伏 大泉坊 太刀 草履取	長刀
乙名 同 同 龍頭御幡	山伏	法螺山伏 挟箱
合羽持 合羽持 御町行列	笠鉢 太神樂 踊子 床机持 壱人立 出し 笠鉢	役者 乙名 同 同
同 同 御先供 口取 御馬脇 同 御草履取 御狭箱持 御査箱 御合羽持 押		
御先供 御押奉行		
同 同 御先供 口取 御馬脇 同		
御馬脇 同 御長柄持 押		

出してみる。

行列帳の後書きに、十九日は御旅所にて御神樂・御湯立が行われ、二一日は法靈にて花踊三番（踊子八人）・笛（三人）・三味線（三人）・音聲（三人）・古轍（三人）が奉納されたことを記す。

前記の享保六年の行列と異なる点は、立願御供子共、藩士二〇人、御輿の前後に乙名六人ずつ、御町行列、出し、御押奉行の前に乙名一〇人が加わったことである。乙名は、庄屋の指示を受けて実際に各町内の世話にあたつた人で、いわば町人の代表役員である。このことから藩と町衆が一体となつての行列であることがわかる。「出し」が加わったことで一層華やかな行列となつた。「出し」を出した人数については後書きがあり、計三〇人である。その内訳は、三日町七人、十三日町七人、廿三日町五人、八日町三人、六日町三人、荒町・八日町・朔日町・大工町・廿六日町各一人であつた。出しの飾り付けについて

写真十二 延享四年の法靈御神事行烈（靈神社所蔵）



は不明である。ほかに笠鉢番二人、支配人五人がいる。このうち三日町、十三

日町、廿三日町、八日町、十八日町、荒町は表町であり、城下商業の指導層たる特権商人が居住し、木綿屋、塩問屋、塩小売、大豆買方商などの生活必需品を主に販売する商店街であつた。一方、朔日町、六日町、廿六日町、大工町は裏町であり、同一職業集団の居住する職能別の町として形成されていた。城下の町人町の中心街は、廿三日町の中頃から、十三日町・三日町・八日町の中頃にかけての地域であり、裏町では六日町が卓越していた町であつた。また、藩から御目見得待遇をえている特権商人の居住地を「八戸御目見得町人由緒調」（八戸市史編纂室所蔵）からみると、延享二年（一七四五）には、八日町三人、廿八日町二人に対して、三日町三人、十三日町七人、廿三日町五人となつてゐる（高島成侑・三浦忠司『南部八戸の城下町』一九八三年、伊吉書院）。以上のことから、財力のある商人が多い町内ほど「出し」人数も多かつたと考えられる。

五、法靈御神事における藩士の勤番

延享四年（一七四七）の「八戸藩日記」（八戸市立図書館所蔵）から、この年の法靈神事の流れと藩士の勤番についてみることにしたい。

○七月五日 法靈御神事に付、来る十九日よりの五日間、長者山地蔵堂（現天聖寺管理の山寺墓地）の後ろの場所で芝居興業することが許可されている。

○七月七日 法靈御神事の節、御供を勤める栄扇が喪中に付、名代の大泉坊が御供するよう寺社奉行が申し渡している。栄扇は領内山伏惣録の常泉院であり、大泉坊は壳市年行事職（惣録配下の各地域の山伏取締役）である。

○七月十二日 例年は徒目付四人で勤番のところ、この度の御神事御供は二人で見廻、二人で本役を勤めること。一人も殿中詰がない間は三人で勤めるよう申し渡されている。御神事御供を勤めることになつた平田庄作・北田弥右衛門

門の兩人には御役料が下付された。

○七月十五日 来る十九日・二一日法靈神事に付、岡本源右衛門に大手御門警固を、松井九郎右衛門には代参を命じている。月番の者頭宗忠右衛門は、例年のとおり御町堅・辻々堅を足軽に申し渡している。また、徒目付は三人で勤めることになつたので、足軽三人を徒目付へ渡すよう目付より月番の者頭へ伝えている。御新屋敷棧敷前へ堅足軽を前後へ二人申し渡している。徒目付が御神事に付、人数不足の故、遠藤多兵衛・荒木田武助へ徒目付加番を申し渡している。七月十五日付で、目付から家中へ法靈神事の節、賭博停止の触れが出されている。徒目付を派遣し、もし不法の者があれば捕縛するので召し使い共へも申し付けるように、という内容である。

○七月十七日 宗忠右衛門・煙山小豊治・太田八十助は、法靈神事に付、火廻を仰せ付けられている。三人には御馬の拝借願い上げが許可されている。御新屋敷棧敷へ堅足軽二人詰めるよう杉澤和右衛門へ申達している。前々のとおり御新屋敷棧敷には御両所様が座る旨の口上触れが出された。法靈御神事に付、徒目付御供二人、見廻り二人のところ、人数不足に付、御供・見廻りを三人で勤めるよう立花新蔵・平田庄作・北田弥右衛門へ命じている。例年のとおり法靈御通筋を掃除するよう触れが出された。明後日十九日に法靈神輿御通に付、御祝儀が前々のとおり下されることになつた。長者山において歌舞伎があるので、前々のとおり目付より一人詰めるよう申し渡されている。来る十九日御神事に付、御祝儀は通輿以後、渡すとの書状が廻された。年寄格・番頭・用人・大手詰者頭・吟味・目付・同格・勘定頭・刀番・山目付そのほか御殿付当番の者へ御祝儀が下された。十九日の神輿御通の節は例のとおり年寄・用人・惣役人は大手へ詰める。御神事に付、御町足軽が不足であると、町奉行が申し出、本組へ二人の足軽の応援を申し渡す。津村傳右衛門は、南御門番に十九日・二一日は二人詰め、看板・羽織を着用し、御門の出入りの際は疑わしき者は改め、

通さないように申し渡している。

○七月十七日 松井九郎右衛門が足軽一人同行の上、法靈に代参を勤め、御懸銭壱貫文を奉納した。神輿・御通行に付、吉例の如く大手へ年寄中・用人・勝手役人・刀番・漆沢惣十郎詰める。御祝儀の為、年寄中・同格・当番番頭・用人迄、御用之間において御祝儀を頂戴し、惣役人・目付格・刀番・山支配・御側医師・本方迄、御目付所にて御吸物・御酒・強飯・甘酒が下された。御側廻・御廣間・御勝手諸役所当番に限り、祐筆・下吟味・勘定所組頭迄、何れも麻上下着用の事。御神事に付、御裏御門、明け番の御座敷番より詰めること。於類・恵の方が御新屋敷へ参るので、御裏御門を早朝より開ける事。法靈御通行に付、諸役所に忌服の御改を命じている。御神事に付、足軽不足に付大手土蔵番三人が通して番をするよう命じられている。これにより御常番の五人が町辻堅を命じられている。

○七月二一日 法靈神輿九ツ時（昼の十二時）帰御。法靈帰社後は、平服にて出座の事。また、諸役所当番の者は、帰社前は麻上下を着用し、帰社後は何れ

も平服の事。寺社奉行の及川友右衛門・戸来又三郎、徒目付の平田庄作・北田弥右衛門より法靈御神事が滞りなく済んだことの報告があつた。徒目付へは上司の目付から大儀の旨申し渡された。また、大手御門警固の岡本源右衛門へ帰社済みなので引き取る旨の使いを出し、源右工門が席へ罷り出たので大儀の旨申し渡された。一方、二三日迄芝居があるので、見廻りの立花新蔵へ申し合わせて相勤めるよう、三丁目兵蔵へ申し渡している。

六 祭礼日の変更と武者行列・騎馬打毬の始まり

長者山新羅大明神の祭礼は、これまで法靈大明神と同日の七月十九日に行われてきた。文政八年（一八二五）に至り、法靈御神事を本年より七月二〇日通

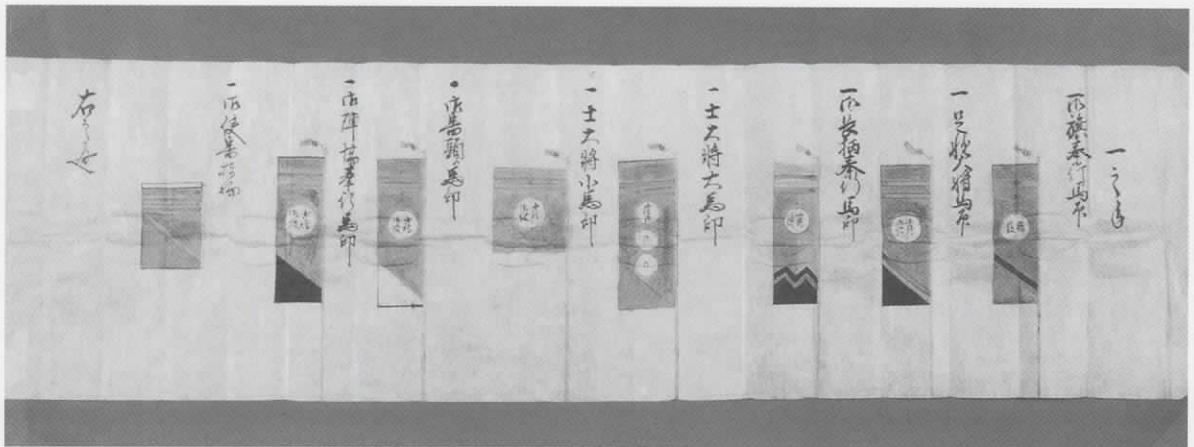
行、二二日帰社と日程の変更を藩より命じられている（八戸市史8）。このため新羅大明神別当の常泉院は、祭礼日を往古の九月十九日に戻し、二夜三夜の祭礼を行いたいと出願し、藩の許可を得た（八戸市史8）。同年九月十九日に、御陣場詰一ノ手騎士上下都合三〇〇人程が甲冑を帯び、内三〇人は馬上御旗乗物にて内丸豊山寺に参集し、行列乱れず九ツ時（昼十二時）に長者山へ参詣した（「永歳覚日記」文政八年九月廿日条、西町屋文書・八戸市博物館所蔵）。以後隔年毎に一ノ手・二ノ手が交替で参詣することになった。一ノ手については、「御備調練之節一之手拾騎御着到」、慶應三年（一八六七）九月の「新羅大明神御祭礼二付一ノ手士大将行列改附帳」が、二ノ手については、天保二年（一八三一）・嘉永六年（一八五三）九月の「新羅大明神御祭礼二付二ノ手御人数参拝被仰付御手筈試帳」などが現存している（いずれも富岡昭氏蔵）。これは藩士の軍事教練あるいは藩の武威を城下の人々に広めるという意味合いもあつた。この時の藩主は八代藩主信真であり、野村武一（軍記）を御主法掛に登用し、藩政改革を行つてゐる。

同じく信真—軍記という藩体制のもとで、文政一〇年（一八二七）に長者山境内に馬場が新設され、この年の祭礼日から流鏑馬と騎馬打毬が行われるようになつた。信真是、加賀美流馬術の「騎射八道」の中でも流鏑馬・笠懸・犬追物の騎射に力を入れ、御家流馬術として武一に道統を継がせた。信真是野村武一と共に、加賀美流騎射八道の伝書を編集し、當時江戸を中心に行われている打毬を騎乗武術訓練の目的で創案し、騎射八道に採用したのである。この加賀美流の呼称は南部家の遠祖である加賀美次郎遠光、および二男の小笠原長清（加賀美流祖）に由來を求めたものである（岩岡豊麻『八戸の騎馬打毬』一九七二年、八戸市教育委員会）。騎馬打毬は、白・赤の二組に分かれた騎馬武者が馬上から毬杖を持つて、毬を奪い合い、白組は白毬門へ、赤組は赤毬門へ投げ込む競技であり、詳細については第六章三（本書139ページ）を参照願いたい。

七 出し人数書き上げにみる「出し」

靈神社および富岡昭氏所蔵の「法靈御神事行列」から藩政期の「出し」人数、御町行列の内容について検討してみる。比較史料は以下の三点である。

- ① 「天保四年巳七月廿日 法靈御神事行列」
- ② 「嘉永元年申七月廿日法靈御神事行列」
- ③ 「安政三年辰ノ七月廿日 法靈御神事行列」



まず「出し」について検討する。①で「出し」と判断できるものは、信玄・真田左衛門佐・関羽・式三番双・金平・弁慶・草前山王・僧正坊の八台、②は信玄・太公望・関羽・式三番双・僧正坊・金平・真田左衛門・草前山王・弁慶・神功皇后と武内宿禰の一〇台、③は神功皇后・信玄公・布袋・恵比寿・関羽・弁慶・金平・草前山王・太公望の九台である。このうち①～③を通してみられる「出し」は、信玄・関羽・金平・弁慶・草前山王（ただし①では草前山王）の六台である。①と②でみられる「出し」は、真田左衛門佐・式三番双・僧正坊の三台である。②と③でみられる「出し」は、太公望・神功皇后と武内宿禰の二台である。③のみでみられる「出し」は、布袋・恵比寿の一台である。このことは何を意味しているのだろうか。①～③を通してみられる「出し」や、①と②でみられる「出し」は、これらの中では製作年代が古く、③のみでみられる「出し」は新しいといえるのではないだろうか。

時代が下つて、④「明治四辛未年七月靈神社御祭事二付人足大略調書上帳」（靈神社所蔵）には、「美濃屋」、「河内屋」、「近江屋」、「六日町平七」、「六日町丁印」「十三日町馬助」、「三日町長右衛門」、「古屋新三郎」、「二十六日町・十六日町丁印」とあり、八台の「出し」の所有者・町内名がみえる。明治四年（一八七二）の「出し」を前記の行列帳のうち、最も年代が近い③の行列帳と比較すると、「美濃屋＝神功皇后」、「河内屋＝信玄」、「近江屋＝太公望」、「六日町平七＝布袋」、

表一 山車人數書き上げにみる出し

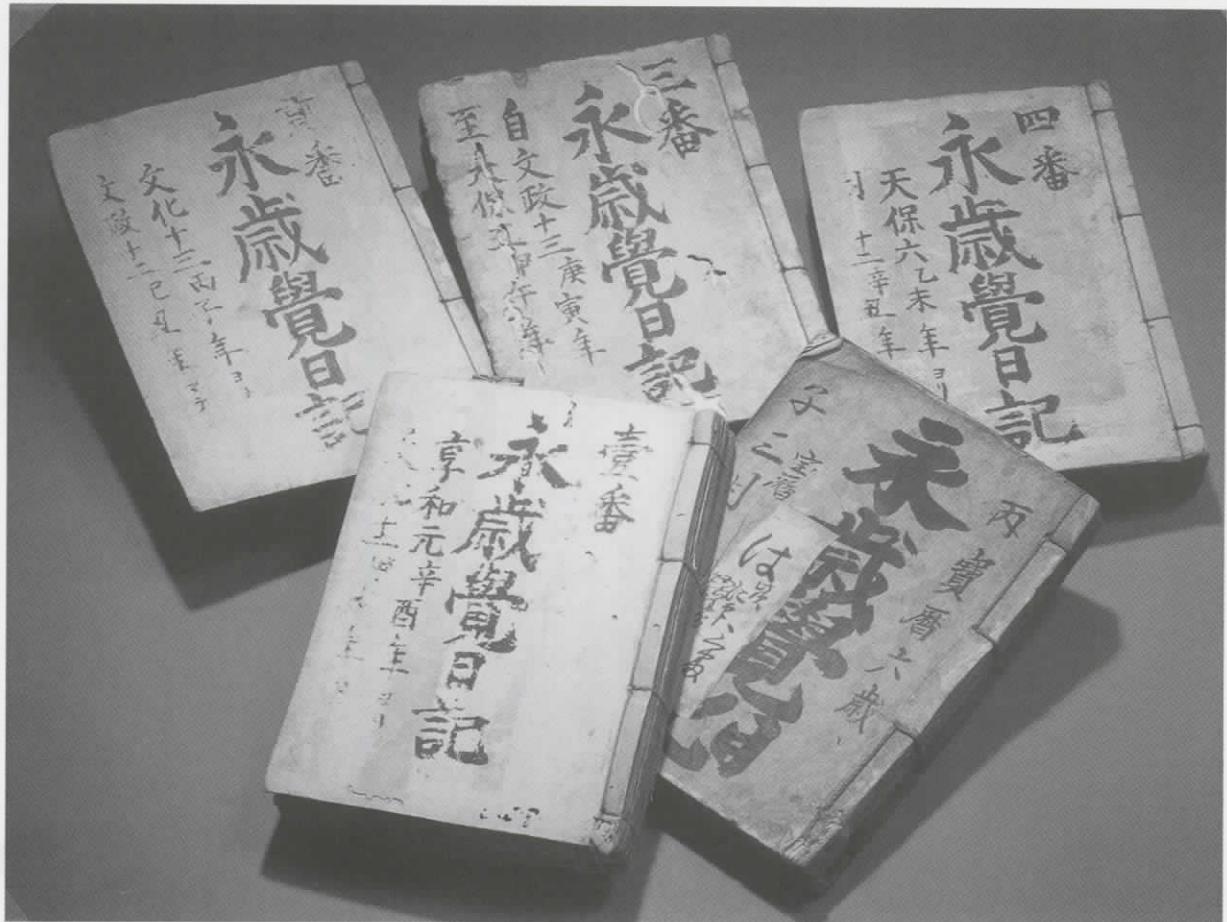
天保四（一八三三）年	嘉永元（一八四八）年	安政三（一八五六）年
—— 大幡 大塚屋市藏 —— 対幡 十一日町 —— 信玄 橋本八右衛門 —— 真田左衛門佐 惣門丁 権太 —— 青龍刀 朔日町 —— 関羽 廿三日町 利藏 又次郎 —— 式三番双 十三日町 左藏 —— 金平 六日町 善八 —— 井慶 十三日町 善七 —— 草前山王 廿六日町 —— 僧正坊 八日町市十郎 —— 大幡 寺横町 —— 虎舞 鮫村 —— 風流踊子 湊村 —— 御供馬五疋 —— 荒町 八郎兵衛 —— 同日町 伝右衛門 —— 三日町 長左衛門 —— 八日町 与惣次 —— 風流踊子 虎舞 —— 同毫流 同毫流 —— 鯫村 湊村 —— 猪々絆 大幡壳流 —— 野田屋徳兵衛 —— 種屋伝右衛門 —— 大阪屋太郎兵衛 —— 松屋 長助 —— 井筒屋八郎兵衛 —— 大坂屋市兵衛 —— 古屋清七 —— 和泉屋吉兵衛 —— 三春屋新助	笠鉾 三日町 大神楽 踊子役 笠鉾 八日町 大幡 大塚屋市兵衛 対幡 十一日町 青龍刀 朔日町 関羽 廿三日町 式三番双 十三日町 金平 六日町 井慶 十三日町 草前山王 廿六日町 僧正坊 八日町市十郎 大幡 寺横町 虎舞 鮫村 風流踊子 湊村 御供馬五疋 荒町 八郎兵衛 同日町 伝右衛門 三日町 長左衛門 八日町 与惣次 風流踊子 虎舞 同毫流 同毫流 鯫村 湊村 猪々絆 大幡壳流 野田屋徳兵衛 種屋伝右衛門 大阪屋太郎兵衛 松屋 長助 井筒屋八郎兵衛 大坂屋市兵衛 古屋清七 和泉屋吉兵衛 三春屋新助	笠鉾 三日町 大神楽 踊子役 笠鉾 八日町 大幡 大塚屋市兵衛 対幡 下大工町 青龍刀 朔日町 種屋傳右衛門 式三番双 十三日町 金平 六日町 真田左衛門佐 石屋平七 草前山王 廿六日町 僧正坊 八日町市十郎 大幡 寺横町 虎舞 鮫村 風流踊子 湊村 御供馬五疋 荒町 八郎兵衛 同日町 伝右衛門 三日町 長左衛門 八日町 与惣次 風流踊子 虎舞 同毫流 同毫流 鯫村 湊村 猪々絆 大幡壳流 野田屋徳兵衛 種屋伝右衛門 大阪屋太郎兵衛 松屋 長助 井筒屋八郎兵衛 大坂屋市兵衛 古屋清七 和泉屋吉兵衛 三春屋新助
「六日町丁印＝金平」、「十三日町馬助、三日町長右衛門＝弁慶」、「古屋＝恵比寿」、「二十六日町・十六日町丁印＝草薙山王」に比定することができる（但し「古屋＝武内宿禰」の可能性も考えられる）。ここでは「出し」のことを「丁印」とも標記していることに注目しておきたい（「丁印」については後述する）。	「六日町丁印＝金平」、「十三日町馬助、三日町長右衛門＝弁慶」、「古屋＝恵比寿」、「二十六日町・十六日町丁印＝草薙山王」に比定することができる（但し「古屋＝武内宿禰」の可能性も考えられる）。ここでは「出し」のことを「丁印」とも標記していることに注目しておきたい（「丁印」については後述する）。	「六日町丁印＝金平」、「十三日町馬助、三日町長右衛門＝弁慶」、「古屋＝恵比寿」、「二十六日町・十六日町丁印＝草薙山王」に比定することができる（但し「古屋＝武内宿禰」の可能性も考えられる）。ここでは「出し」のことを「丁印」とも標記していることに注目しておきたい（「丁印」については後述する）。

八、「出し」人形・「屋台車」の製作と「出し持ち人足」

ここでは、城下東側の廿八日町に居住し、代々八戸藩の御用商人を勤めた西町屋徳右衛門の日記「永歳覚日記」（西町屋文書・八戸市博物館所蔵——以下「日記」と表記）から「出し」人形の製作と管理、「出し持ち人足」について検討し、小山田かく家旧蔵文書（現青森県立郷土館所蔵）から「屋台車」の製作について検討する。

安永三年（一七七四）の「日記」に「人形組武ツ 指図形有、遣人形二ハ無御座候、祭り飾り物也。此代銀三拾匁值 但し仮箱二入」とみえる。一両は銀六〇匁なので〇・五両ということになる。支払先の「広尾新助」が江戸の商人か上方の商人かは不明である。

安永六年三月および安永十年四月より天明五年までの「日記」中、天明三年（一七八三）の条に「法靈御祭飾物出心得之事」とあり、「飾り屋台仕出のこと、飾りの手入れをすることは大変金銭のかかることで大変だけれども、それを苦しいとは思わず、なおざりにするべからず。他人が数度用いて来た古い屋台を借りて、出す者も見受けられるが、神前に對し如何なものか。今度人形三つ物台を細工することになった。これにより屋台二つ所持することとなるが、その訳は隔年に用いるためで、数十年も同じ物を飾るのは見苦しいものである。」という記述がみえる。このことから安永三年（一七七四）の「人形組武ツ」と、この年の「人形三つ物（人形が三体で一セットを構成する「出し」人形）」によつて西町屋



では屋台を二台所持することになり、隔年に用いることになつたことがわかる。天明三年（一七八三）に作成された「人形三つ物」の製作を示すと考えられる四通の書状がある（西町屋文書）。四通とも年号はないが、同一年代の書状と考えられる。うち三通は高来兵助より石橋文蔵・差兵衛・孝蔵の三名宛、残り一通は鈴木新五郎より石橋若旦那宛のものである。文面から高来兵助は江戸佐内町和泉野（現東京都中央区江戸橋周辺）に在住し、同室町弐丁目（同室町二丁目）の美濃屋惣三郎とともに、八戸の御祭礼御人形細工の御用向きを取り次いでいることがわかる。依頼先は江戸京橋鈴木町（同京橋二丁目周辺）の人形師・鈴木新五郎である。

高来兵助がどのような人物であるか不明であるが、美濃屋惣三郎は八戸藩の江戸蔵元で、諸穀物類、延鉄類、布苔並外物、紫根を取り扱っていた（天保末年「御産物方御用手控」八戸市立図書館所蔵・遠山家文書）。

さて、書状の内容は次のとおりである。①「為朝の像外嶋人式人の人形新規説」を「鈴木新五郎与申者江細工仕立相頼」（五月廿一日 高来兵助書状）、②「御地下り船二少々出帆間合せ積下し申度奉存候所細工念入見積り 日数相懸り此度之鶴栄丸江難積奉存候」（六月十一日 高来兵助書状）とみえ、下り船の鶴栄丸に積む予定であったが、細工念入のため見積りの日数よりもかかつてしまい、間に合わなかつたことを記している。③「細工仕方おそらく江戸ニも珍鋪上出来人形二御座候」、「尤右仕立様者別段小雛形相添是亦丹治船へ積入申候間着岸之節御熱覽可被下候」（七月廿一日 高来兵助書状）とみえ、人形製作に際し、小雛形が作られていたことがわかる。なお、為朝像の小雛形が八戸市博物館に収蔵されている。④「最初積上候代金三拾八両に而者中々出来上り兼候ニ相成金拾弐両程茂餘形相掛申候」（七月廿四日 鈴木新五郎書状）とあり、当初見積り金額三八両に金十二両程を足していた、だきたい旨の依頼をしている。最終的には「為朝の像外嶋人式人の人形」は計五〇両で納品されることになつたのであろう。

享和元年より文化十二年までの「日記」には、西町屋では四、五年の間家業のやり繰りができないため、「出し」を出すのを免じてもらっていたが、文化三年（一八〇六）より「出し」を出すように申し付けられている。このときは数年手入れをしていかつたので、「出し」衣装や水引その外看板物まで傷みが見えるが、今すぐに支度もできかねるので、仮の手入れをして「出し」をだしている。

西町屋の「出し持ち人足 借り人覚」によれば、文化三年（一八〇六）が十二人（外に雇人足二人）、文化四年（一八〇七）が十一人中七人が「出し持ち」、文政三年（一八二〇）と同四年（一八二二）が十四人、文政七年（一八二四）が十五人中七人、文政八年（一八二五）が十六人中七人、文政九年（一八二六）が十七人であった（「日記」）。「出し持ち」なので曳いたのではなく、担いだのである。

これを検証する上では、「盛岡八幡宮御神事行列番組」（盛岡市中央公民館郷土資料室・盛岡八幡宮所蔵）が参考となる。この横長の木版画には、「丁印」と呼ばれる屋根の付いた屋台に飾り人形を乗せ、前後三人の計六人が担ぐといった「担ぎ屋台」と、曳く形の「山車」が描かれている。この盛岡八幡宮の「丁印」と呼ばれる「担ぎ屋台」こそが、藩政期における八戸の「出し」行列の姿であろう。現在、「丁印」は鉢屋町・川原町（南大通三丁目）の「丁印 司馬温公」一

台のみが完全な形で保存され、盛岡市中央公民館郷土資料室に展示されている。靈神社所蔵の「山車」との大きな違いは、①「丁印」は前部と後部の二面に流麗な唐破風様式に造作してあるのに対し、「出し」は左右にも唐破風様式を加え、前後左右の四面が見事に造作されていることが特徴である。これは、前部と左右側部の三方向から「出し」の中に展示されている人形の飾り付けが見られるよう工夫されている。②「丁印」は担ぐ形式であるが、「出し」は車輪付の曳く形式であることがあげられる。一方、共通点としては①屋根や台部分が組立式となっていること、②見返しの飾り幕が同じ形態であることである。

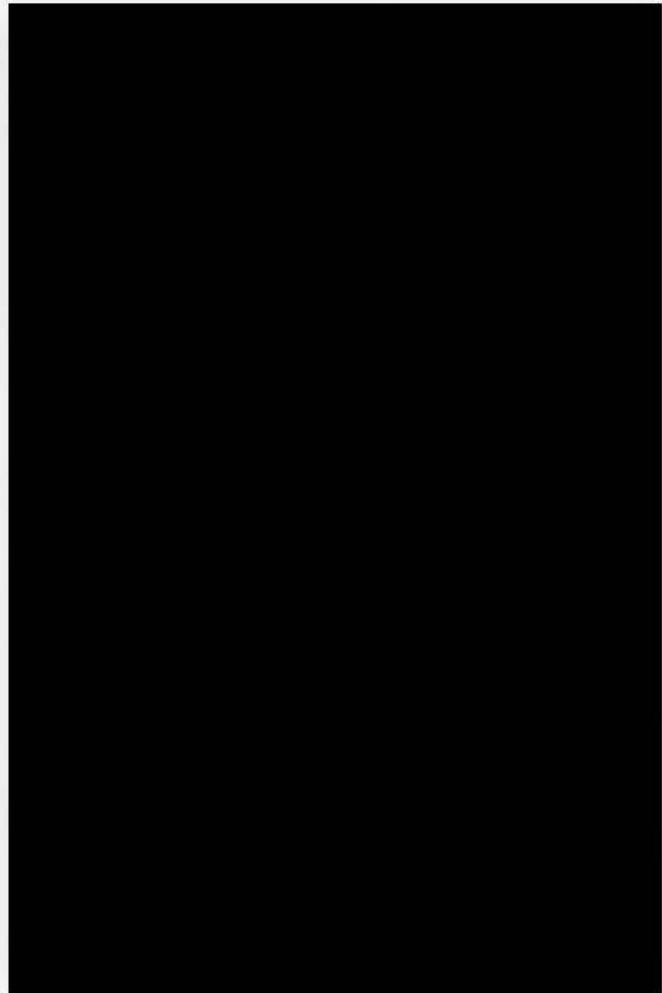
一方、小山田かく家旧蔵文書には「一 兼て奉願上之屋台車 金七両武歩ト銀弐拾匁ニ而仕揚ニ相成候ニ付 下り船順永丸江御積入可被成候旨：（略）十月廿七日 村井小右衛門 小 源内様 上」（青森県環境生活部県史編さん室編『青森県史資料所在目録』第四集、二〇〇〇年）とみえる。この書状によれば、「屋台車」の代金は「金七両武歩ト銀弐拾匁」である。「屋台車」とあるので、こちらは担ぎ屋台ではなく、山車と考えられる。書状の月日は十月廿七日であり、来年以降の祭礼で使用する屋台車が完成したので、下り船の順永丸へ積み入れるという内容である。受取人の「小 源内」は、小山田源内であり、天保十三年（一八四二）の「御家中分限帳」によれば、「二〇石五駄二人扶持」の下級藩士であるが、天保年間以来、御藏奉行・勘定組頭などの勘定方の役職を勤め、藩財政の実務を担当していた。一方、差出人の村井小右衛門は、表町の十三日町に店を構える御用商人であつた（慶應三年「御町御礼列」『多志南美草』所収）。書状の年代は天保年間（一八三〇～一八四四）頃と推定される。以上のことから、これまで「担ぎ屋台」が中心であつた「出し」が、天保年間頃になると「屋台車」の製作もみられるようになつたことを指摘しておきたい。

九 「出し」の運行について

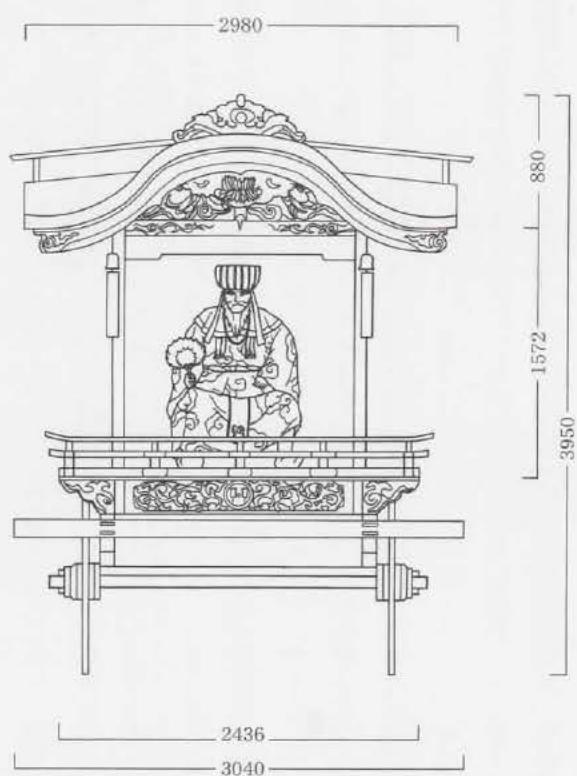
法靈通輿の節、途中において急な雨のときは雨にかまわず続けること、ただし、行列のうち、「出し」は引き取つてもかまわない（「文化元年 法靈御神事諸事覚」靈神社所蔵）とされた。寛政四年（一七八四）還御の節、八日町より大雨となり神樂は常泉院の指図により帰社、「出し」は残らず町より引き取つてはいる（「日記」）。文化元年（一八〇四）には「御町出しが近年勝手に引き取つてはいるようだが、出しは祭りの賑わいにもなつてはいるので、寺社奉行に伺つてから引き取るようだ。ただし雨天のときはこの限りではない。」（日記）という旨がみえる。



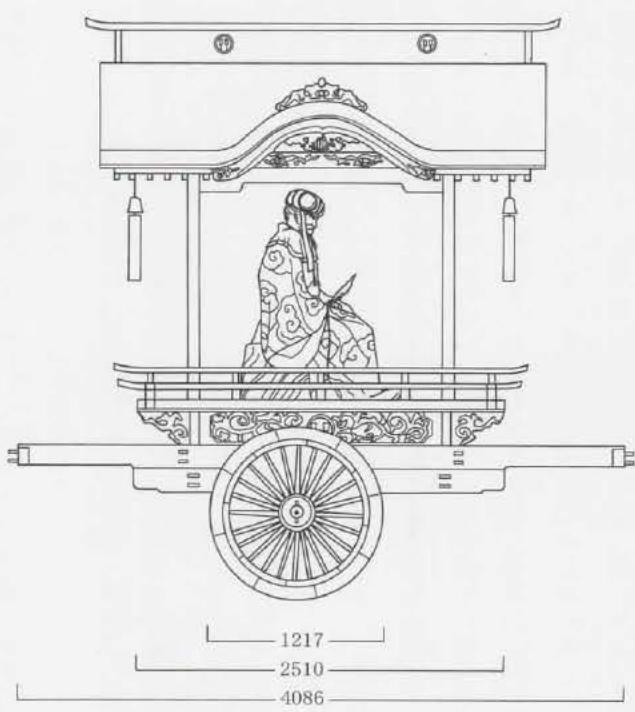
写真十六 太公望山車（霍神社所蔵）



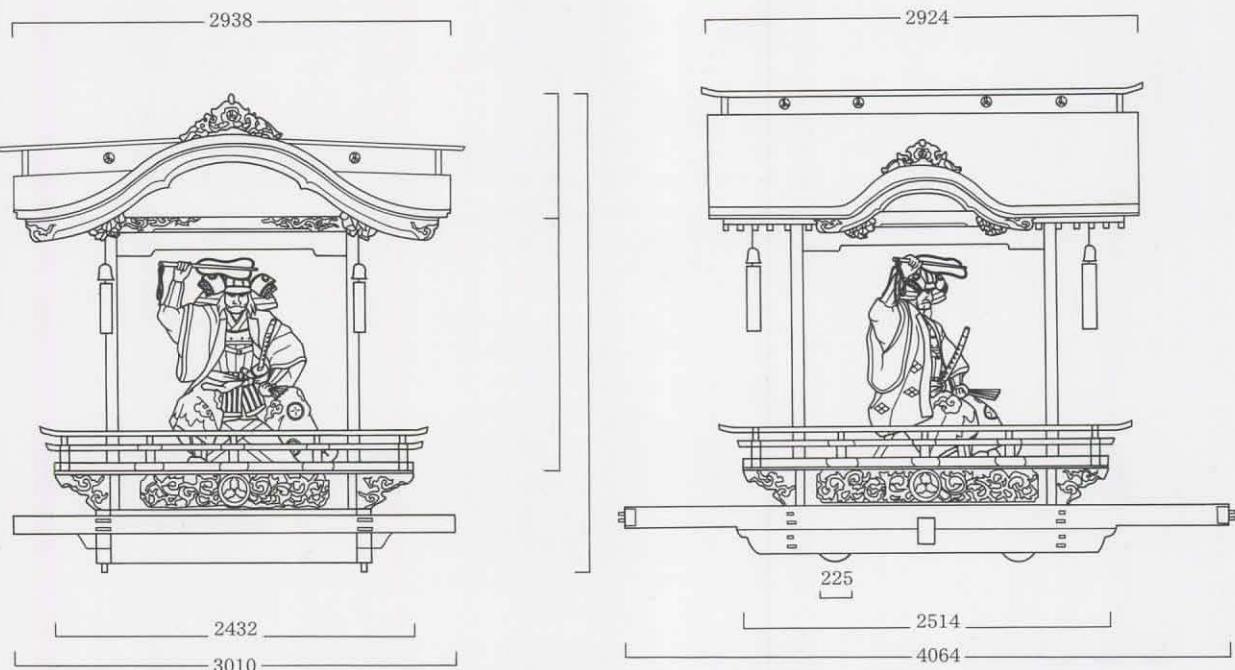
図一 太公望山車実測図



(正面)



(側面)



一方、「宝暦十二壬午年 永歳目安録」（西町屋文書・八戸市博物館所蔵）に「法靈御神事支配当番之事」があり、延享三年（一七四六）から寛政一〇年（一七九八）までの支配人書上がある。天明三年（一七八三）条には、支配人の名前の後に「此前代未聞之大凶作」とみえる。天明四年（一七八四）条には「卯年凶作二付御通行御榊、御旗、御神輿、笠鉾斗り、御徒目付様跡押、出シハ銘々の前置」とみえ、出しは銘々の店前に置いたことがわかる。翌年は「去々卯ノ年大凶作已來、御町在共ニいたく困窮之砌ニ候へとも、当年諸作ノ模様も宜相見得候間、諸人氣補之ため、去年とは御行列少々氣を付候様、隨而出し人形、踊子も見合、相出さセ候様ニと被仰付、依之仲間相談之上、出し踊り子別而御帰社之砌之踊子等御免願上候へは、かれ是と被仰付、一しほ御祭礼賑ハしく候、尤、年柄ゆへ質素ニ取斗申候」とみえ、一昨年（天明三年）の大凶作以来、町や在の人々がたいそう困窮してきたが、当年諸作も宣しくみえるので、諸人氣補いのため出し人形を出すようにとの達しがあつたというのである。

また、天保九年（一八三八）の「法靈御神事行列」に「法領御神事、江戸にて大奥様（七代藩主信房正室）御遠行のため八月十七・十八・十九日に行う。当年違（不）作二付難渋ノため出し屋台は銘々家之前ニ飾り置く」とみえ、翌年は「当年も御神事去年のとおり相略す。出し屋形も銘々居宅の前に飾り立て置くこと。ただし、お帰りの時は通行あり。」とみえる（同書）。このことから、藩政期には南部家の不幸事があつた場合は、日程を延期したこと、凶作・飢饉の際に「出し」は行列に加わらず、銘々店の前に飾り置いたことがわかる。

時代が下り、明治三三年（一九〇〇）八月十八日付の東奥日報には「本年ハ傳染病発生の憂ひあるより警察署は之れ又許可を與へず為めに各々宮祭となすことになれる由：屋台ハ各々店頭に飾り置し或る店頭口は活花敷瓶と人形等を飾したるもの数軒」とみえ、伝染病（赤痢）発生の憂いある年は、店頭に人形等を飾り置いたことがわかる。

一〇. 現存する「出し」人形

①～③の行列帳の中で、現存する「出し」人形は信玄と太公望が靈神社所蔵、神功皇后と武内宿禰が和泉屋鈴木家所蔵のものである。信玄は享和二年（一八〇二）に河内屋（橋本八右衛門）が、太公望は文化九年（一八一二）に近江屋が寄進したと伝えられてきた。寄進される前の「出し」人形所有者は、信玄が①橋本八右衛門、②と③が共に河内屋八郎兵衛である。また、太公望は②と③が共に近江屋市太郎であり、靈神社の言い伝えと矛盾しない。河内屋は表町通で、大手筋に面する八日町に店を構え、造酒業・鉄問屋・粕積出を行っていた。藩政期には、河内屋前に各街道への伝馬繼所（つぎどころ）がおかれ、賑わった。近江屋は大塚屋・美濃屋と共に「八戸三店（さんたな）」と呼ばれた有力商人で、表町通で、大手筋に面する三日町に店を構え、造酒業・移出入業・質屋・為替方を営んでいた（高島成侑・三浦忠司『南部八戸の城下町』）。次に寄進された年代を検討する。信玄は享和二年（一八一二）、太公望は文化九年（一八一二）と伝えられてきたが、これら年代よりも後の時代の行列帳（①～③）に、信玄は河内屋、太公望が近江屋所有であることを記載していることや、書上帳（④）の記述から、靈神社に寄進されたのは明治以降のことと推察される。

では、言い伝えの年号は何を示しているのだろうか。平成十二年八月四日の八戸市公会堂においての調査で、太公望は衣装下の胸部に「平安 面師 伊藤道明、松屋清左衛門製 文化九年壬申五月吉日」の墨書きが確認されている。文化九年（一八一二）五月に京都の面師伊藤道明が製作したことが明らかとなつた。また、松屋清左衛門は京都の絹問屋で、緞（緞）布風呂敷類を取り扱い、八戸藩と取引があつた商人である（三浦忠司『八戸湊と八戸藩の海運』、一九九〇年、八戸港湾運送株式会社）。松屋清左衛門の名前は、三戸町村尾千代志氏蔵の弁財天人形の頭部を入れた箱側面に「弘化二乙巳歳中夏吉祥日再建 京沙松屋清左衛門 取次」

の墨書きがあり、これからも確認されている。のことから、弘化二年（一八四五）夏に、出し人形補修の取り次ぎを行つたことを知ることができる。残念ながらもう一体の信玄からは、墨書きは確認されていない。奉納年代と伝えられて来た享和二年（一八〇二）に製作された可能性も充分考えられる。

一方、神功皇后と武内宿禰については、②では神功皇后がみのや（美濃屋）・武内宿禰が古屋浅吉、③では神功皇后が美濃屋とみえる。このことから、元々の所有者は和泉屋ではなく、神功皇后が美濃屋、武内宿禰が古屋浅吉所有であったことがわかる。美濃屋は近江屋・大塚屋とともに「八戸町三店」の一店であり、表町通の廿三日町に店を構え、造酒業・移出入業・紫根問屋・塩問屋などを営んでいた（高島成侑・三浦忠司『南部八戸の城下町』）。「明治廿五年 三社御祭禮行列帳」（南部家旧蔵文書）には「神宮皇后 鈴木吉十郎」と記載されていることから、明治二五年（一八九二）以前に「出し」人形の所有が美濃屋から和泉屋鈴木家に移つたのであろう。

①～③の中に記載されていないが、この他に現存する「出し」人形としては、西町屋の「為朝鬼ヶ島」（八戸市博物館所蔵）、十八日町佐の川の「高砂」（村井千秋氏蔵）、靈神社所蔵の児島高徳、三嶋神社所蔵の「福禄寿」がある。このうち、三嶋神社所蔵の「福禄寿」は、奉納札裏書に「大正四年七月七日（旧五月二十五日献） 今ヨリ凡ソ六・七十年以前、八戸古浅・熊河ノ二氏代々八戸祭リノ時山車ニ出テシモノヲ故アツテ今ノ泉山忠蔵氏ノ先代幸次郎ノ所有ニ帰シ家内に奉斎セシヲ、今回本社ニ寄附奉獻セシナリ」とみえる（島浦千晴『三嶋神社』）。大正四年（一九一五）よりおよそ六・七〇年以前だと嘉永から安政年間頃まで、八戸古浅（古屋浅吉）・熊河の二氏が八戸祭りの時、山車に出していたものといふ。古屋浅吉は表町通の廿三日町に店を構えていた、木綿仲間十軒の一つである。共同出資並びに藩庁よりの拝借金をもつて、嘉永三年（一八五〇）に木綿の直仕入れを行つている（大岡長兵衛『多志南美草』第二卷 一九七一年、青森県文化

写真十七 太公望山車人形墨書き（二）



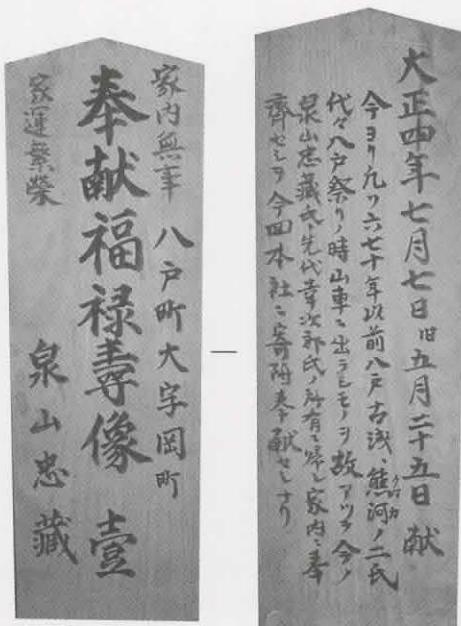
写真十八 太公望山車人形墨書き（二）



写真十九 福禄寿（三嶋神社所蔵）



写真二〇 大正四年の福禄寿奉納札（三嶋神社所蔵）



写真一一 箱蓋の墨書（八戸市博物館所蔵）



写真一二 為朝鬼ヶ島の木札（八戸市博物館所蔵）



財保護協会）。古屋浅吉直系の村井裕通氏から平成十三年七月に八戸市博物館に寄贈された箱の蓋に「京都麿屋町三條北へ入 松屋清左衛門様取次 奥州南部八戸（古屋浅吉様行）」の墨書きがみえる。蓋の大きさは縦六五センチ×横二〇・八センチ×厚さ〇・六センチであり、横が欠損している。人形の頭部を入れていた箱と推定される。その人形は現在、三嶋神社所蔵となつていて「福禄寿」か和泉屋鈴木家所蔵となつていて「武内宿禰」に比定できそうである。

また、西町屋の「為朝鬼ヶ島」には縦五一・四センチ×横一四・六センチ×厚さ二・五センチの木札が付く。表に「人形細工人 東都於京橋鈴木町 龍雲高鈴木新五郎橋信匠」、裏に「龍雲齋 鈴木信匠敬作」とあり、江戸京橋鈴木町の人形細工人・鈴木新五郎橋信匠によつて製作されたことがわかる。

では、これらの「出し」人形はいつごろまで実際行列に参加していたのであるか。これまでの言い伝えでは、明治二十四年（一八九一）頃、大沢多門の口入れで各町内毎に毎年新しい人形を作るようになり、「作り人形」「つけ祭り」と呼ぶようになった（上杉修『上杉修遺稿集 安藤昌益と八戸の文化史』一九八八年、八戸市文化協会）と言わってきた。明治三四年（一九〇二）九月七日付の「東奥日報」に「山車の数は十一個にして：其他商家は思ひ思ひの見世飾り生花等ありし又從來の山車は各見世先きに飾り其重なる物は廿八日町西町屋の為朝鬼ヶ島、十八日町佐の川の高砂、八日町河内屋の武田信玄と児島高徳、三日町近江屋の太公望、鈴木の神后皇后、大工町大久保の恵比壽鯛釣、六日町岩岡の源義家等なり」とあり、古い「出し」はこのころから各見世先に飾り置かれるようになつたことがわかる。また、「八日町河内屋の武田信玄と児島高徳」、「三日町近江屋の太公望」とあり、靈神社に奉納されたのは、これ以降のことと考えられる。

おわりに

柏崎村の産土神として祀られていた法靈社が、盛岡藩の代官所時代に八戸御館神として祀られ、寛文四年の八戸藩誕生後は八戸城と八戸城下を鎮護する藩神として藩主と領民の信仰を集めめた。法靈社の神輿が初めて、八戸南部家の遠祖である新羅三郎義光を祭神とする長者山の三社堂へ渡御したのは、享保六年（一七二一）七月十九日のことである。行列の構成みると山伏参加の行列であることがわかる。城下の表町と裏町を一巡する形で神輿の渡御が初めて実施されたことにより、法靈社の祭礼は城下の町人と近郷近在の農民が楽しむ全城下あげての祭りへと成長することになった。この背景には八戸の商業が元禄期を契機として興隆し、享保年間に至つて急速に発展期を迎える町衆の社会的勢力や地位が一段と向上したことがあげられよう。祭礼時になると、長者山には出店や芝居小屋が立ち並び、様々な興業が行われた。鮫・湊より御供の踊子が芝居を行つたり、盛岡歌舞伎役者太夫今村権之助による歌舞伎興業が行われた。文政一〇年（一八二七）には境内の東南に馬場が新設され、新羅大明神の御祭事の節には流鏑馬と騎馬打毬が行われることになった。延享四年（一七四七）の行列に、町人の出した「出し」が初めて登場する。「出し」が加わったことで一層賑やかな行列となつた。「出し」を出す商人がいなない町のなかには、町として「出し」を出したところもあるが、参加の中心は個々の商家であった。「出し」を出した人数をみると、財力のある商人が多い町内ほど「出し」人数も多かつたことがわかる。藩では法靈神事に際し、藩士を警護に当たらせている。

「法靈御神事行列」から藩政期の「出し」を一覧表で紹介し、その変遷を探つた。古い行列帳にみられる「出し」ほど製作年代が溯ることを指摘した。また、「出し」のことを「丁印」とも表記していることに注目したい。代々藩の御用商人を勤めた西町屋徳右衛門の日記から、「出し」人形の製作・管理について紹介

した。屋台二つを所有することにしたのは、隔年に用いるためであり、その管理も大変だったことを知ることができた。「出し持ち」人足の書き上げと、盛岡八幡宮御神事行列の丁印と靈神社所蔵山車の比較から、藩政期における当初の八戸の「出し」行列の姿は「担ぎ屋台」であることを検証した。一方、天保年間にになると、「屋台車」製作の記録も見られるようになり、「担ぎ屋台」から「屋台車」へと変化する様子を断片的ながらもうかがうことができた。「出し」は、当時の八戸を代表する町衆である商家の人々が、江戸や京阪で買い求めてきた流行の山車を、銘々店の前に飾つていたものが、山車に乗るようになつたと考えられてきたが、藩政期の記録をみると、「出し」は行列に加わらず、銘々店の前に飾り置いたことがわかる。このことは、通年は「出し」は行列に参加していたが、凶作・飢饉の非常時に際してのみ飾り置いたことを示している。

現存する「出し」人形の調査の結果、靈神社所蔵の信玄は享和二年（一八一二）、太公望は文化九年（一八一二）に寄進されたものと伝えられてきたが、これら年代よりも後の時代の行列帳にその名前が見えることから、明治以降に寄進されたことがわかつた。また、太公望は衣装下の胴部に墨書が確認され、文化九年に京都の面師伊藤道明が製作し、京都の絹問屋である松屋清左衛門が取り次ぎをしていることが明らかとなつた。松屋清左衛門の墨書は、その後の調査で二例確認され、八戸・三戸の「出し」人形の製作・修理に関わった様子を知ることができた。一方、西町屋の為朝鬼ヶ島は、江戸京橋鈴木町の人形細工人の鈴木新五郎橋信匠が製作している。古い「出し」人形は、明治三四年（一九〇二）から各見世先に飾り置かれるようになつたことがわかつた。

本稿をまとめにあたつて、高牧實の『近世の都市と祭礼』（一〇〇〇年、吉川弘文館）、江刺家均の『南部山車祭の系譜 八戸三社大祭のルーツをたどる』に多々刺激されるものがあった。感謝申し上げます。

（藤田 俊雄）

第三章 八戸三社大祭の変遷

—明治から現代まで—

明治四年（一八七一）七月、明治政府による廢藩置県に伴い、八戸藩は八戸県となり、同年九月に弘前県、さらに青森県と改称され、これをもつて旧藩体制は崩壊した。

このような社会の変化をうけて藩政時代までの祭礼はどのようにかわつていつたのであろうか。ここでは主に明治以降から現在に至るまでの祭礼の変遷の様子を報告する。

ここで使用する主な史・資料は齋神社文書、西町屋文書、東奥日報、奥南新報、はちのへ新聞、デーリー東北の各新聞などであるが、明治二〇年代までの史・資料が少なく不明な点も多いことをあらかじめお断りしておく。

一、明治新体制と法靈御神事祭礼

江戸幕府の崩壊と明治の新政府体制のもと、明治三年（一八七〇）、法靈大明神は齋神社と社名を改める（大岡長兵衛著『多志南美草』）が、この争乱のなか江戸時代から続いていた法靈社の祭礼はどのような変化をたどつたのであろうか。

江戸末期にはすでに法靈社の祭礼は八戸城下の最大の祭礼となっていた。この祭礼に深くかかわっていた商人の一人に、二十八日町居住の八戸藩御用商人西町屋石橋徳右衛門がいた。西町屋には代々の当主が書き残した日記や種々の書留類が残されているが、この日記類には、城下の祭礼の記録も多々みられる。明治年間の記録をみると、

「永歲覚日記」

- ・明治三年（一八七〇）「七月齋神社御祭二付、踊子人足書上覚・・・・・」
- ・明治四年（一八七一）「當末年御神事二付、踊子人足書上覚」
- ・明治九年（一八七六）「予年は九月齋神社御神事二付、踊子人足書上」
- ・明治十年（一八七七）「齋神社御祭事二付踊子人足書上 八月廿八日旧七月

廿日二中（アタル）

・明治十一年（一八七八）「齋神社御祭事二付踊子人足書上 八月十八日旧七月
廿日二中ル」

・明治十二年（一八七九）「齋神社御祭事二付踊子人足書上」

・明治十三年（一八八〇）「八月廿五日、旧七月廿日二中ル 御祭事二付踊子人足書上」

・明治十四年（一八八一）「九月十三日旧閏七月廿日二当ル 御祭事二付踊子人足書上……本年は御巡幸（明治天皇御巡幸）ニ付、

日延ニ相成候」

・明治十五年（一八八二）「齋神社御祭事踊人足、本月は差支これ有り、踊子出さず」

・明治十七年（一八八四）「御祭事二付踊子差出候ニ付」

・明治二一年（一八八八）「御祭事踊子貸人」

・明治二二年（一八八九）「御祭事踊子借人」

・明治二三年（一八九〇）「踊子人足」

・明治二十四年（一八九一）「御祭事供人足」

「諸用日記留」

・明治二二年（一八六九）「・・・廿八日町太神樂、是迄庄屋所より法靈御神事御供致すべき旨相達置候処、此度御改革ニ付、古來の通り乙名より相達申すべく御達ニ付・・・」

「歳中行事帳」

- ・明治五年（一八七二）「齋神社御祭事の節
- 一、二十疋 七ツや太神樂ヘ
- 一、二升 鮫虎舞ヘ
- 一、二升 同所踊子ヘ

(以下略)

この西町屋の史料によると、明治元年こそ確認できないものの、以降はほぼ順調に祭礼が行われていたことがわかる。

また靈神社には「法靈御神事行列帳」と題された文書が、延享四年（一七四七）をはじめに明治二二年（一八八九）まで、通年ではないが十一か年分残っている。

明治以降では二年、三年、四年、九年、十七年、二二年の六か年分が残り、また、行列帳ではないが御祭事に関する覚書き等の史料も、明治三年、四年、八年、九年、一〇年、十五年、一二年の七か年分ある。

これら靈神社の史料と西町屋の史料をあわせると、明治二十五年までの間で祭礼が確認できないのは元年、六年～七年、十六年、十八年～二〇年の七か年分となる。

このように、明治の混乱期にもかかわらず祭礼は、旧暦の七月二〇日を初日に三日間にわたり行われていたのである。

そもそも靈神社の祭礼は、城下の町内の庄屋・乙名達が豊年を願い法靈社の神輿を長者山の虚空蔵まで渡御させたのが始まりである。藩との関わりはあつたが、法靈社の氏子、総代および町内の商人たちの手による部分も大きかつたのである。

そのことが、新体制から大きな影響を受けることなく続けられた要因であろうし、祭礼＝神にかける人々の豊年祈願や武運長久などの祈りが、大切に受け継がれていたことも重要な一因であると思われる。実際、明治になつても祭事に必要な金銭は、各町内の商人たちが出し合つて賄つっていた。そして彼らはそれぞれ年番制をもつて祭礼の諸用を受け持つていたのである。

二、靈神社祭礼から靈・新羅二社の祭礼へ

靈神社の祭礼はある時期から靈・新羅二社の祭礼へと変わる。この時期について郷土史家上杉修氏は『北方春秋』創刊号（昭和三一年）の「八戸祭りと大澤多門」の中で、「明治十七年に、長者山新羅様の神籬（ヒモロギ）が参加して二社になつた」と述べている。

また、これを裏付けるものに靈神社文書の明治十七年九月九日の祭礼行列帳がある。この行列帳の題名をみると「新羅・靈両社御祭礼行列帳」となつている。この前年の明治十六年は、前項で述べたとおり、祭礼の有無の確認ができるのに、前々年の明治十五年は、まだ「靈神社祭事」となつていてことから、現段階で確認できる二社の祭礼の始まりは明治十七年とみてよいのではないだろうか。

これに伴い新羅神社の祭礼の目玉でもあつた武者行列の参加も始まつたといわれる。昭和三一年八月二九日付デーリー東北に「三社まつり今昔」と題された記事が掲載されている。

その中で「武者押し」について、「七月二十日の靈祭とは別に旧暦九月十九日に具足祭りといつて数百人の藩士たちがヨロイ、カブトの出陣姿に身を固め勢揃いし隊伍を組んで新羅神社に参拝する行事があつた。これは文政二年、八代信真のとき家老野村軍記が始めたもので……（中略）……この行事は幕末まで続けられたが、廃藩後は七月の靈祭に「武者押し」として合流した。明治年間には士族たちが各自先祖伝来のヨロイをつけ行列に参加し……（後略）」と述べているが、この記事では廃藩後というだけで合流の年代までは述べていない。明治二年の行列帳には旧藩士の名前が多数みられるが、彼らがヨロイを身に着け行列をなしていたのであろうか。

では新羅神社が合流した明治十七年の行列帳はというと、そのトップに「騎

士」という文字がみえるほか武者行列を示すものはみえない。「騎士」＝武者行列なのであろうか。

ここにもう一つ気になる史料がある。靈神社文書の「明治九年九月七日靈御祭礼行列面附帳」である。この史料は祭礼行列に参加した人たちの名前を書き留めたもので、その中に次のような部分があるので紹介する。

(前略)

- 一 神功皇后 金子宗七郎貸人
二十四人 新荒町 灑沢治平
(以下人足の名前は略す)

- 一 十三日町大旗 富岡新十郎行貸人

九人

- 一 八日町笠鋒

十人

- 一 学隊旗一流
一 騎馬具足隊
(中略)
一 学隊 大澤

三人

騎士頭

- 一 逸見元膳

(後略)

この「騎馬具足隊」や「騎士」は何を意味するのであろうか。「騎士」が明治十七年の行列のトップを飾る「騎士」と同じと考えてよいのか。これに関して、さらにさかのぼり江戸時代の天保四年（一八三三）の「法靈御神事行列」をみ

ると、その中に「打毬騎士」の名がみえる。これは騎馬打毬の格好をした武士の行列参加である。この表現からきた「騎士」であれば、鎧、甲冑に身を固めた騎馬隊や、徒步武者の行列とは意味が異なるのである。

もう一つの「騎馬具足隊」はどうであろうか。この言葉の表現からいうと「武者押し」、つまり「武者行列」に近いようにもみえる。とすれば、明治九年までさかのぼることとなる。

このように限られた史料では、これ以上の武者行列の合流年代の特定は難しい。しかし、明治中頃にはすでにこの武者行列は老年会の協力を得て、古風を今に伝える出し物として、祭礼の中心にならうまでの人気を博していたのは確かである。

三・靈・新羅・神明の三社御祭礼

靈・新羅の二社の祭礼から現在の形となる三社への移行は、明治二二年（一八八九）といわれる。これについても前出の上杉氏は「明治二十二年に大澤多門が主唱して神明様のヒモロギが参加して、初めて三社になった」と述べている。そしてこれもまた同様に靈神社の文書「明治二十二年八月十六日三社御祭礼行列帳」の題名からも確かめられる。

しかし、ちょうど二社御祭礼となつた明治十七年以降この明治二二年までの間、つまり明治十八年から二年にかけての祭礼の確認ができないので、必ずしも二二年とは言いきれない部分もあるが、現段階で確認できる最も古い年代が明治二二年といえる。

これまで三社の合併については、明治二八年、大澤多門が中心となつて日清戦争の勝利を祝い、祭りを盛大に行うため三社合併による祭礼を行つた、といわれてきた。

この明治二二年・二八年の両年に登場する大澤多門は、根井沢定右衛門と称

し元八戸藩士であつた。明治維新後、名前を改名し、明治五年八戸地方初の劇場を創設し、各種の興業を行うなど、明治になつてからは芸能文化面でその中心を担つた。そして八戸を代表する郷土芸能「えんぶり」を復興させた人物としても有名である。その彼が二社から三社への改変にも登場するのである。

しかし、この三社となつた説は、前出の明治二三年の行列帳や次の史料からみて、上杉氏の説の方が正しいようと思われる。

西町屋文書中に明治二〇年（一八八七）十一月七日から二七年（一八九四）一月二〇日までの記録「日々雑誌」がある。このなかで明治二三年に次のような記述がある。

御届

本月四日五日六日の間、例年の通り新羅神社及び三社合併例祭執行候二付、市街中御通輿相成候、總て旧例の通り執行候間、此段御届申上候なり

新羅神社祠官

石橋寿備

明治廿三年九月二日

八戸警察署長

警部吉見十一郎殿

この記録からも、この頃にはすでに三社合併の祭礼が例年のとおり行われていたことになり、明治二二年説で間違いないといえるのではないだろうか。

ここで明治二八年説に關係する話が東奥日報の記事にあるので紹介する。

「八戸靈神社 大祭は毎年旧七月二十日より三日間の処、本年は日清戦争勝利祝賀祭を兼ね盛大なる祭典を執行せんとのより、祭事総世話人大澤多門氏は遇般來京坂地方に趣き八戸商人の各取引店を誘導して、種々の祭旗及び神輿二台

写真一三 八戸三社大祭発展の功労者「大澤多門」（中央）



を購求し（以下略）」

この記事は明治二九年八月十五日付のもので、これからいうと、神輿を購入して行列に出したのは明治二九年ということになるが、三社になつたという記事ではない。

これらから、靈・新羅の祭礼に神明が初参加したのは明治二二年で、神輿本体の参加が始まったのが明治二八年ということになろうか。

四、三社大祭の変遷の様子

こうして靈・新羅・神明の三社合併による大祭が行われるようになり、その後祭りはどのような変遷をたどつて現在に至つているのであろうか。これについては、祭り日程の変遷、行列コースの変遷と様子、山車の変遷、参加形態の変遷、華屋台の五点からたどつてみることにする。

- 灵・新羅・神明の三社合併による大祭が行われるようになり、その後祭りはどのような変遷をたどつて現在に至つているのであろうか。これについては、祭り日程の変遷、行列コースの変遷と様子、山車の変遷、参加形態の変遷、華屋台の五点からたどつてみることにする。
- 旧暦七月二〇日からの三日間—明治四二年まで

明治になり新暦を用いるようになつても、当初は旧暦の七月二〇日からの三日間を祭礼日としていた。

- 九月一日から三日間 — 明治四三年から昭和三四年まで

旧暦の七月二〇日をやめ、九月の一日から三日間と祭礼の日程を固定化したのは明治四三年（一九一〇）からである。これは奥南新報の明治四年の祭礼広告に旧暦・新暦の併記がみられることから、この年までは旧暦にそつた日程で行つていた。同じく奥南新報の明治四三年の記事には、九月二日・三日・四日（一日からの予定であつたが雨天のため順延）に行つた記録があり、これを境に翌年以降は九月一日・二日・三日の日程で開催し

ていることが新聞記事から伺える。この日程は大正期もかわらず昭和三四年まで続いた。

• 八月二一日からの三日間 — 昭和三五年（一九六〇）から五六六年まで

昭和三五年、これまで九月一日から行われてきた祭りを繰り上げ、八月二一日からと変更した。従来の九月一日は、立春から数えて二一〇日目にあたり、この頃は晚稻の開花期にあたり、特に農家では台風などの災害に注意しなければならない日でもあった。そのためか、以前から日がよくないときれ、天候にも恵まれず、再三日程の変更を要望する声があつた。

• 八月一日からの三日間 — 昭和五七年から現在まで

この日程への変更は、東北の三大夏祭りの一つ青森の「ねぶた」に日程をあわせることにより、もつと八戸三社大祭の知名度を上げ、広く多くの人に知つてもらう事を目的に行つたものである。この頃から神事よりも観光に重点を置いた政策がとられるようになる。

八戸三社大祭は現在でも日程の変更を求める声が聞かれる。一方は、昔の秋祭りにもどす意見、一方は、観光客の誘致のためにも決まつた土・日に定めるべきとする意見、これらは神事を重視した立場と観光を重視した立場にあるために起つくるべくしておこる対立意見である。

- 行列コースの変遷と様子

享保六年（一七二二）、法靈の神輿が初めて長者山の新羅神社へ渡御した際の行列は、

• お通り 法靈御宮—南ノ御門—三日町—荒町—新町（裏通りの町）—上
大工町—鍛冶町—長者山へ
• お帰り 長者山—鍛冶町—大工町—新町—下大工町—二十八日町—八日

となつてゐる。（図四参照）。

この行列のコースは、江戸時代を通じて変わらなかつた。

明治期もほぼ同様のコースで行われていたようで、明治三二年（一八九九）の八月三〇日「東奥日報」の記事に、行列の様子が次のように詳しく紹介されている。祭りは八月二十五日から二七日までの三日間行われ、「各町附祭諸種の催し等にて市中の賑わい申し分なく、近県よりも観客群集し各宿屋は客室のなきに困窮せる程」の賑やかさを呈していた。

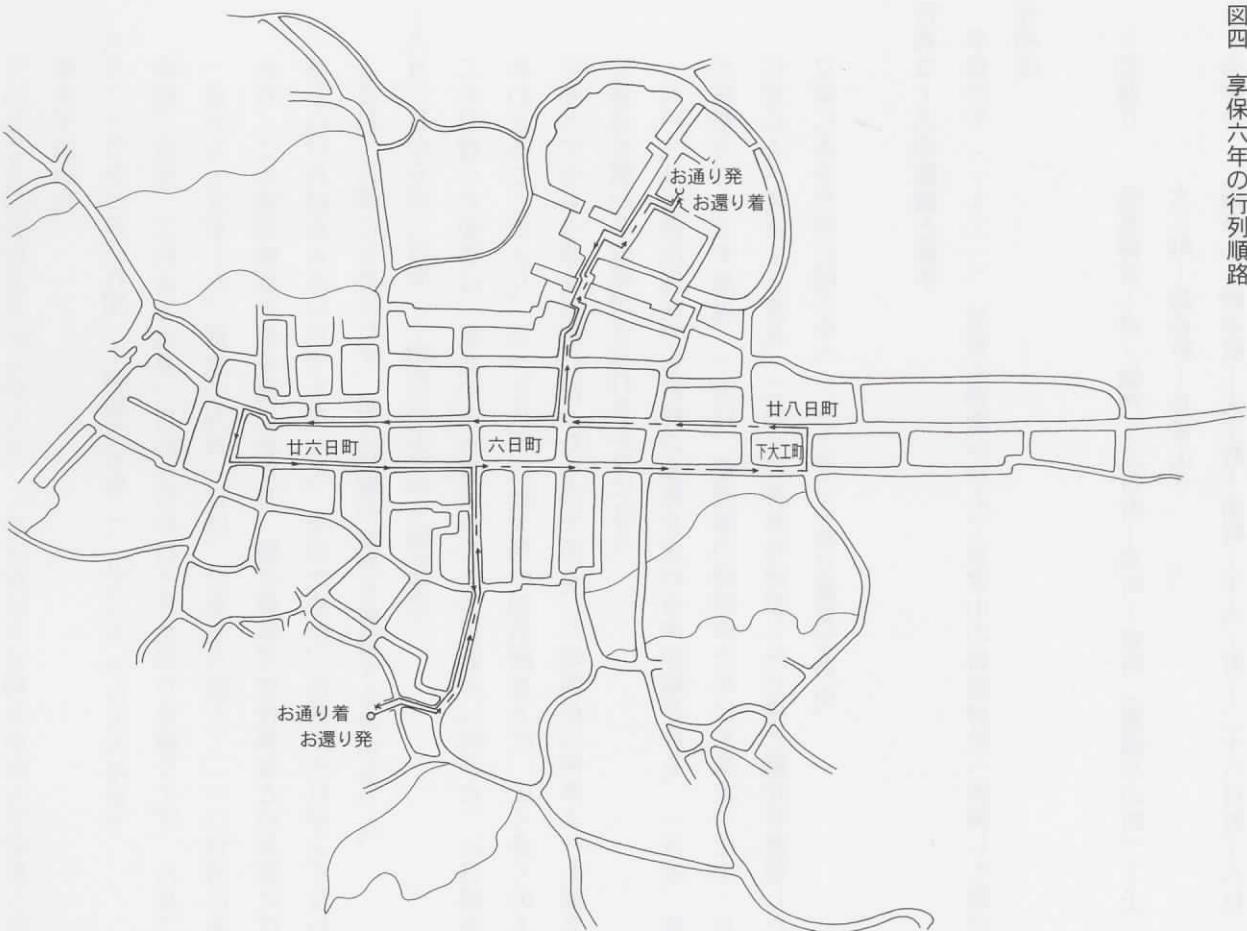
その時の行列は、

- ・お通り 霊神社—停車場通り—二日町—（大通り）—新荒町—上組町—
（裏通り）—十六日町—鍛冶町—長者山新羅神社
- ・お帰り 長者山新羅神社—（裏通り）—六日町—柏崎新町—下組町—
（大通り）—八日町—番町通り—靈神社

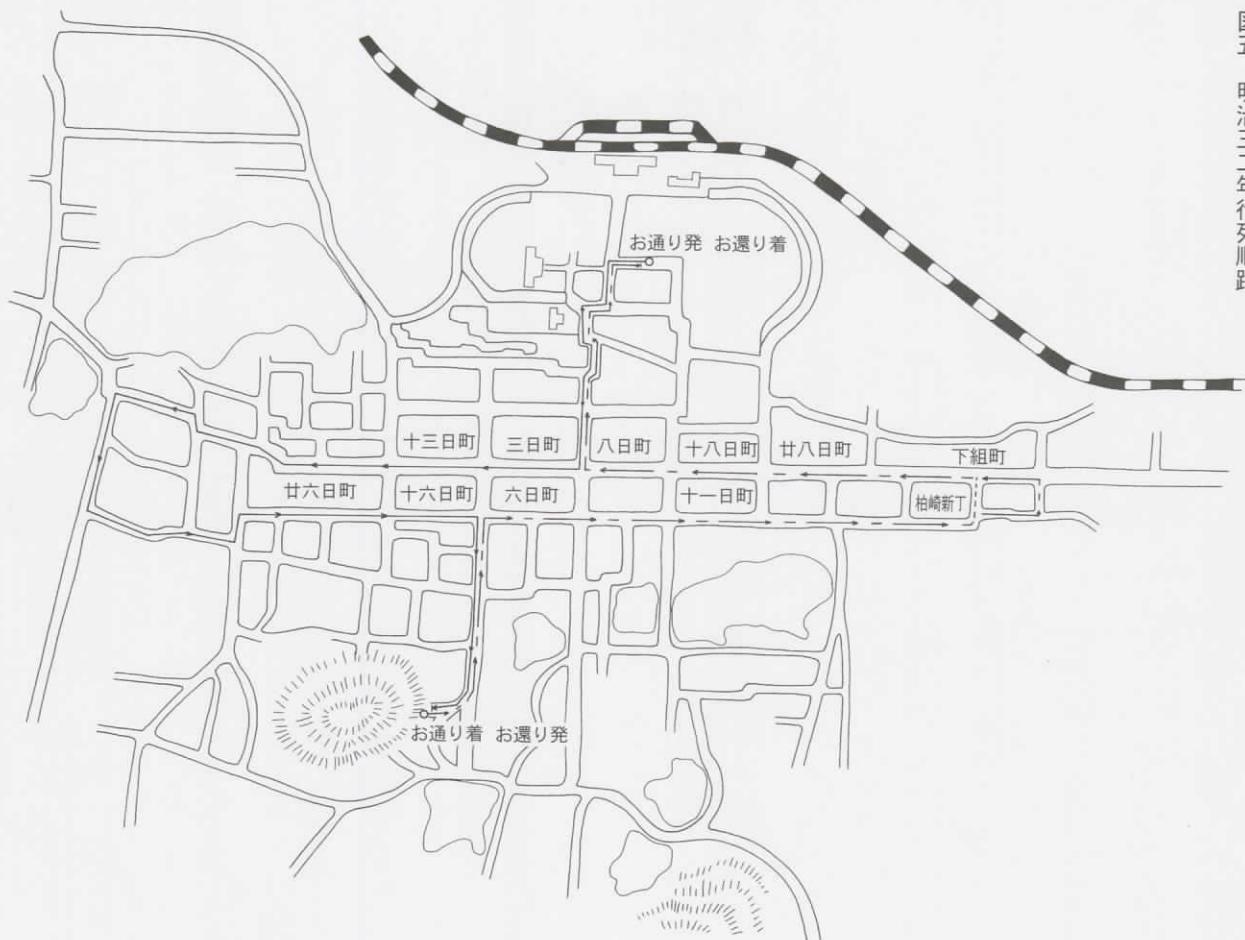
となつており（図五参照）、初日の行列は午後二時に出発し、式が終わつたのは午後五時、行列は整然として屋台や手踊りなど万般の催しにて賑々しく終わつたとある。お通りとお帰りの中日である二日目は、長者山にて騎馬打毬の催しがあり、市中では虎舞、大神楽、芸子手踊りなどが行われていた。

この行列のコースの一部変更をみたのが、昭和七年（一九三二）であつた。

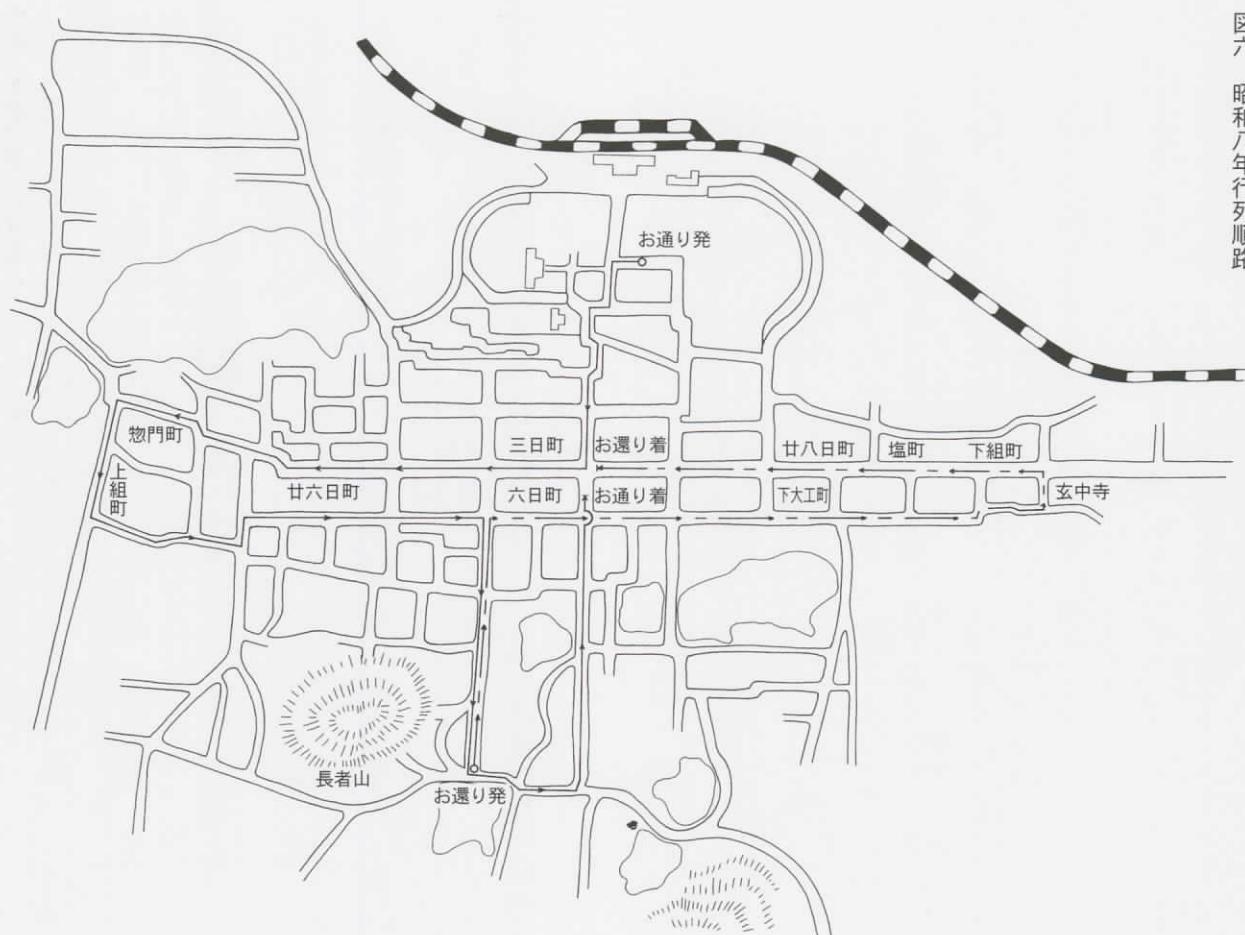
昭和七年九月一日付の奥南新報の記事によると、その表題に「けふから大祭順路を変更して今年の渡御際は長横町廻り」とあり、行列はお通りの時に変更され、



図五 明治三二年行列順路



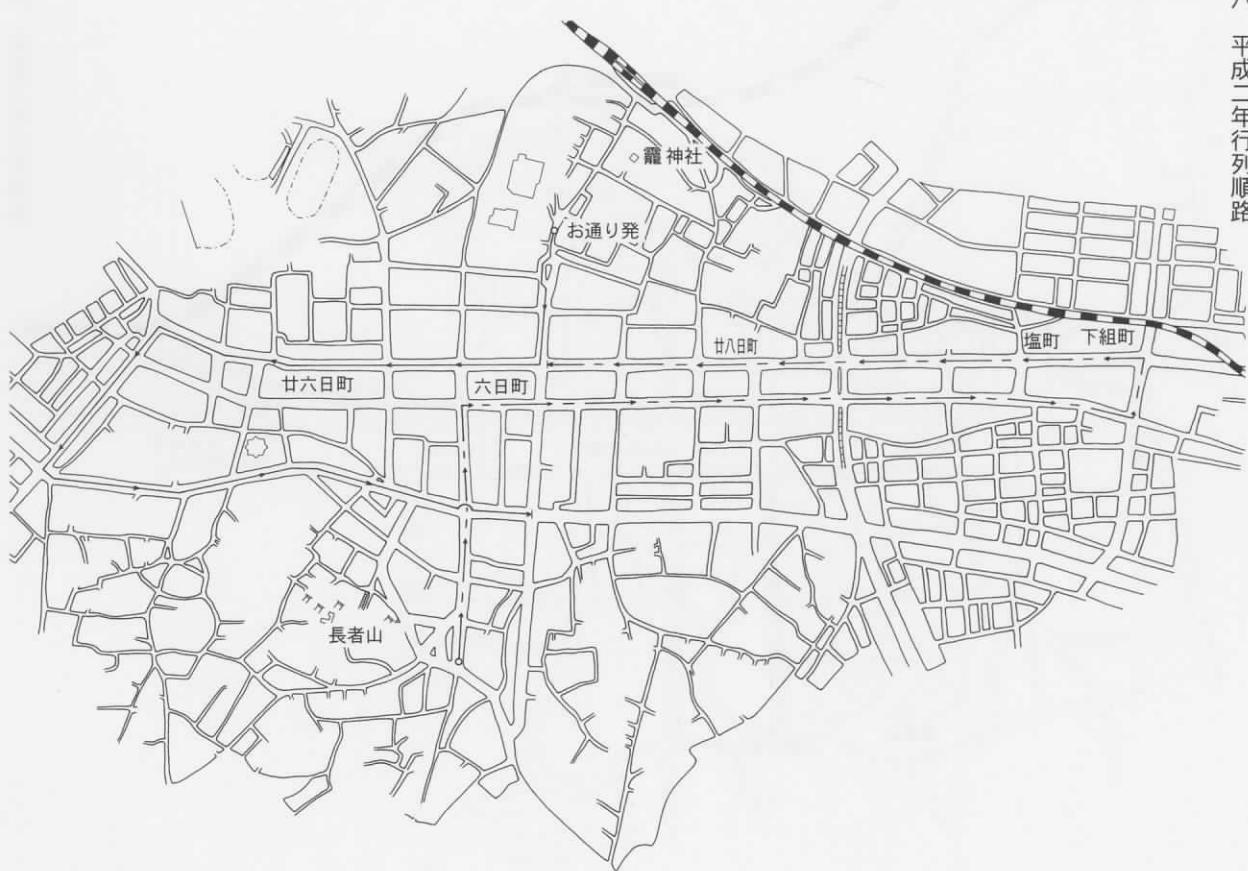
図六 昭和八年行列順路



図七 昭和三七年行列順路



図八 平成二年行列順路



おがみ神社—停車場通り—三日町—上組町—二十六日町（裏通り）—

六日町—長横町—吹上—長者山

となつており、例年は二十六日町の裏通りを進み、十六日町から寺横町へ折れて鍛治町を通つて長者山へ渡つていたのが、十六日町を通り過ぎ、六日町で右折して、長横町—吹上を通つて長者山へと至るコースに変更されたのである。

この変更の感想を、同年の奥南新報の九月四日付の記事で、「今年初めて通ることになつた長横町に行列が入つた。見物人は無いわけではないが、家並みのいまだ完全に揃つていらない町内のこととて、吹上まで廻つてみた感じは、大工町鍛治町通りに比ぶべくも無かつた」と述べ、さらに「祭りを見る人はやはり人出の多い、繁華なところに集まるらしい。祭事を執行する人はこの見物人の動きも見過ごしてはならないと思う」と再考を促している。この昭和七年には、消防組が附祭りの監督として行列に加わるようになる。

翌年の昭和八年、これまでお通りとお帰りが通つていた大工町、鍛治町の人々と長横町の人々の間で、コース変更のことでかなり激しい紛争が起つた。その結果、お通りの行列は、おがみ神社を出、長者山でお休みせずに吹上、長横町を通り八日町で解散することになつたのである（図六参照）。

三日目のお帰りは、鍛治町に集合の上、大工町—寺横町を経て右折、六日町—朔日町—十一日町—下大工町—柏崎新町から左折—下組町—塩町—二十八日町—十八日町—八日町—三日町解散となつた。

この紛争について、奥南新報八月二八日の記事で次のように意見が述べられている。「毎年のように町内町内の希望でお祭りの順路が変更されることは、お

祭りを執行する人々の心も落ち着かないことであろうし、又お祭りを挙げる人としても同様のことであつて、煩わしいことである。執行の期日といい、この順路といい猶考るべきだ。」として、コースの変更等に疑問を投げかけている。ちなみにこの年に参加した山車は十一台であった。

これ以後、昭和三五年（一九六〇）に祭りの日程が大きく変更され、九月一日からの開催が、八月二一日から三日間の開催へとなつた。

そして、山車の大型化などからその行列のコースの見直し論も出始め、ついに昭和三七年（一九六二）、お通りのコースの上組町から常番町へぬける道路の道幅が狭いという理由で、上組町—平中—町組町へと通るコースへと変更となり、お帰りのコースも柏崎新町から下組町に出た順路を、東北タンク横から戸郵便局前を通り大通りへ出て、二十八日町—十八日町—八日町解散となつた（図七参照）。

現在は、山車がさらに大型化され、裏通りを通つていた行列はその順路をはずれ、平中から通称「ゆりの木通り」の広い道路を通り、鍛治町、長横町へは入らず、つまり長者山に立寄らずにそのまま解散となつてしまつ（図八参照）。

このように、江戸時代から続いている行列形態ではあるが、当初のおがみ神社、神明宮、新羅神社の三社の神事祭礼に始まつた行列は、次第に附け祭りの「山車」が主役となり、行列の道筋も新しい道路の開通に伴いコースに変化がみられるようになり今日に至つてゐることがわかる。

山車の変遷

明治以降の山車の様子を追つてみる。その前に、江戸時代に見られた「山車」のことをもう一度整理すると、次のようになる。

表二 山車所有者の変遷

		出し名	所有者ならびに変遷
1	(武田) 信玄	橋本八右衛門	(河内屋)
2	真田左衛門佐	惣門丁権太	若狭屋善八
3	関羽	利藏	十一屋直吉
4	金平	又次郎	種屋伝右衛門
5	弁慶	六日町 太郎兵衛	六日町
6	草刈山王	十三日町 善七	能登屋長左衛門
7	僧正坊	八日町 与七	中居屋万助
8	式三番双	八日町 市十郎	三日町長左衛門
9	太公望	十三日町 左藏	十三日町万助
10	神功皇后	二十三日町 善八	十三日町万助
11	惠比寿	石屋平八	石屋平七
12	布袋	古屋浅十郎	板屋

衛門・古屋所有の「出し」が参加しているが、「出し」名は記載が無いので不明である。しかし江戸時代の一覧と比較しても所有者に同じような名前が見られることから、明治初期には「出し」そのものに大きな変化は見られない。明治二十五年発行の『風俗画報』には、八戸の祭礼の様子が実際に詳細に報告されているので、一部紹介する。

行列は先ず第一番には靈神社と記したる金の縫い付けの大旗二本、次に猿田彦命にて六尺有余の大人物、殊に高さ一尺ばかりの一本歯の足駄を穿き（中略）鉢山車一二本目抜き々々の町々より出す物にて、第一番には児島高徳桜樹を削るの像、第二番は太公望の像、第三番は神功皇后の前に武内宿祢応神天皇を懷く像、第四番は鎮西八郎為朝鬼に弓を引試みさするの像、第五番は草刈童牛背に笛吹く像、第六番は八幡太郎義家弓を抱える像、第九番は布袋小兒の舞を見る像、第八番は恵比寿鯛を釣る像、第九番は鍾鳩赤鬼を捉挫しく像、第十番は小栗判官碁盤馬乗の像、第十一番は加藤清正槍を以て虎を突殺す像、等なり。何れも皆三十人位の脇附にて、これも一様に黒布染の衣裳に紅唐染の脚絆、黒の角鳥帽子をかぶり、順次に隊をして進む。（後略）

新聞記事で確認できる明治中期になると、「出し」に変化が見られる。

以上のように十二種類の出し人形が見られたわけであるが、明治になつてこれらの「出し」はどのようになつていったのであろうか。

明治四年（一八七二）の「おがみ神社御祭事一付人足大略調書上帳」（靈神社所蔵）には美濃屋・河内屋・近江屋・六日町平七・十三日町万助・三日町長右

二十日より三日間の処、本年は日清戦争勝利祝賀祭を兼ね、盛大なる祭典を執取引店を誘導して種々の祭旗及び神輿二台を購求」とあり、大奮發にて各町より思い思いの附祭を行つたと記載されている。これにより商人や個人で参加していた祭りの形態も町の参加、新しい形式の山車へと姿をえていった。

明治三三年（一九〇〇）、赤痢予防のため三社合併の大祭は取り止め、各宮の祭礼とすることとなり、神輿や山車などの市中の引き回しは行われず、商家では店頭に人形を飾り置いて見せたという。この慣習はすでに、天明の飢饉の際にもみられ、西町屋の日記の中にも「世の中が困窮しているので、出しの運行は行わず、店先に人形を飾り置くこととし、世の中が落着き景気も安定してきたなら行列を再開する」という記録がみられる。

明治三四四年（一九〇一）九月七日付の東奥日報には、山車の参加町内名が記されている。これによると、

- ・二十三日町「素盞鳴尊の大蛇退治」
- ・十三日町「足柄山楠公父子」
- ・三日町「楠公の像」
- ・八日町「一ノ谷雛鳥越畠山義経馬上の様」
- ・廿八日町「大黒」
- ・塩町「大天狗」
- ・十六日町「加藤清正」
- ・十六日町「大鯛」
- ・朔日町「布袋唐子遊び」
- ・大工町「桃太郎」
- ・鍛冶町「鬼若丸鯉退治の様」

と、十一台の山車をあげていて、これらはすべて江戸時代の「出し」とは一致しないものばかりである。さらに山車の中身については、「形は大ならざれども意匠の巧みに出来しは二十三日町、形の大なるは八日町なり。その他何れも上出来なり」と評している。

また、商家の祭礼中の様子として「思い思いの店飾り生け花等あり。また從来の山車は各店先に飾り、その重なる物は、二十八日町西町屋の為朝鬼ヶ島、

十八日町佐の川の高砂、八日町河内屋の武田信玄と児島高徳、三日町近江屋の太公望、鈴木の神功皇后、大工町大久保の恵比寿鯛鈎、六日町岩岡の源義家等なり」と報じていて、これらはいわゆる江戸時代からの「出し」であり、この時は行列に参加せず、店先に飾り置かれるようになっていた事がわかる。この頃には形の違う山車の新旧交代がなされていたと思われる。

では、この旧式の「出し」人形は、いつ頃行列から姿を消したのであろうか。明治四〇年（一九〇七）九月三日、東奥日報に次のような記事が掲載されている。

- 大正二年（一九一三）「草刈童子」（十六日町）「恵比寿」（加賀平酒店）
大正四年（一九一五）「草刈小兒」（十六日町）「恵比寿」（大久保酒店）
大正五年（一九一六）「草刈山路」（十六日町）

大正六年（一九一七）「草刈山童」（十六日町）「恵比寿」（大工町加賀平酒
造店）

大正七年（一九一八）「草刈山童」（十六日町）「恵比寿」（加賀平酒店）
大正八年（一九一九）「草刈山路」（十六日町）「太公望」

大正九年（一九二〇）「草刈山路」（十六日町）
大正十年（一九二一）「草刈山路」（十六日町）

大正十一年（一九二二）「草刈山路」（十六日町）
大正十二年（一九二三）「草刈山路」（十六日町）

と続く。

のことから、一番最後まで使用された旧山車は十六日町の「草刈山路」でついで「恵比寿」「太公望」であった。

現在、市内に現存する旧山車人形では、「武田信玄」「太公望」（靈神社所蔵）、「神功皇后と武内宿禰」（いずみ屋鈴木家所蔵）、「為朝と鬼ヶ島」（西町屋旧蔵、現八戸市博物館所蔵）、「高砂」（村井家所蔵）、「福禄寿」（三嶋神社所蔵）の七体である。

このほかに岩手県二戸郡一戸町の小倉酒店に「恵比寿」が伝えられている。この人形は、高さ一・六メートル、幅一・五メートルの大きさで、胴体には「安政三丙辰年〔略〕大阪島之内玉屋町住 細工人大江宗七」と墨書きがあり、夙川学院短期大学の高島幸次氏によれば大阪天満宮の天神祭に登場するお迎え人形とされ、幕末から明治の混乱期に何らかに事情があつて売られたものとみられている。

盛岡市の帷子雅英氏が由来を調べたところ八戸の恵比寿屋が江戸時代末期に購入したもので明治初め頃譲られたものであるという。小倉家には人形のほかに火災にあつてはいるが屋台も残されており、屋根が四方唐破風作りである点で靈神社に保存されている一台の旧山車屋台と全く同じ形式であり、屋台の骨材に貼られた和紙には「陸奥 八戸」の押印もみられる。



写真24 一戸町小倉房次氏宅の「恵比寿」

この人形が当時の史料のどれに特定できるかであるが、明治二十五年の『風俗画報』の中に登場する「恵比寿鯛を釣る像」のことであろうと思われる。恵比寿は大正年間の新聞記事によると加賀平酒店と大久保酒店が祭りの運行に参加させているが小倉氏所蔵のものとの関連は不明である。同一のものを年番により出していったのであろうか。

なお「恵比寿」名の人形 자체は安政三年（一八五六）の「法靈御神事行列帳」にすでに登場しており、なぜか人形の胴にみられた墨書きの年代と一致している。安政三年の恵比寿が小倉家のものであつた可能性も考えられるが、それについては今後の研究課題としておきたい。

新聞記事を調べてみると、行列には参加しないが、商店の店頭飾りとして祭りを盛り上げていた人形が大正年間にはまだ見られることから、これらの人形が実際に神社などに奉納されたのは大正十二年以降と考えられる。

さらに大正十三年（一九二四）五月、八戸大火が発生し、以後旧山車人形のみならず、古い旗や幟、笠鉢などもいつせいに姿を消したといわれる。

参加形態の変遷

当初の山車は、靈神社の氏子であり、八戸藩を代表する商人たちが個々で人形を所有し、行列に参加して祭礼に華を添えていたが、のち明治中頃から次第に町内単位の山車参加に変わっていく。町内の数も一〇前後で、三社の氏子たちの町々であり、旧城下の町の範囲であった。この町単位も昭和の戦後以降徐々にその数を増し、旧城下をはずれた町や、高度成長の時代の波をうけて、企業グループの参加が始まるなど、三社の祭礼範囲は大きく膨らんでいった。現在、参加組数は二〇を超える。

山車の形式も屋根の付いた屋台の上に人形が一、二体のるだけの簡素なもので、人形も作りかえることなく同じものが例年参加していたが、やがて毎年山車は作り変えられ、岩や波、数多くの人形がのせられ、見返しやからくり仕掛けの登場と、年々その規模を大きくし、題材も「武者」だけではなく「神話・物語」「歌舞伎」「ふるさとの歴史」などをとりあげ、「日本一の山車祭り」のスローガンのもと、豪華な山車祭りへと変化していった。

華屋台の変遷

祭礼を彩った芸能には、虎舞、神楽、鶏舞、駒踊りなどが参加していた。なかでも庶民に人気があったのは、華屋台であった。明治四一年の「東奥日報」の記事によると、本年は参加しなかつたものの「例年は湊及び鮫などの芸妓連中は、附祭として屋台の上で得意の手踊りを演じつつ、各町内を引き廻し夜中大景氣を付けていた」と報じている。華屋台の言葉は明治四三年の東奥日報の記事「花屋台（鮫・小中野芸妓連）」が初見である。しかし、芸妓連の手踊りの意味では、もっと早く江戸時代の法靈祭礼にすでに参加しているのである。天保四年の「法靈御神事行列帳」には、行列の最後の方に鮫踊子・湊踊子という名で記載され、その後の嘉永元年（一八四八）の「法靈御神事行列帳」にも鮫

写真二九 華屋台（伝明治末頃）



踊子・湊踊子として参加していることから、すでに慣例となつていたと思われる。しかし、この行列形態が屋台形式であつたのかどうかは、わからない。

明治期になると、明治二十五年の「三社御祭礼行列帳」には湊踊子秋山連の参加がみられる。ちょうどこの頃の祭礼の様子が、明治二十五年に東京東陽堂発行の『風俗画報』第四二号に詳細に報告されている。それによると、

・・・湊新町 是れまた大屋台に多くの芸妓演劇なり。これを挽く牛二頭は満體飾り付けたり。また、この牛をば、一六、七歳ばかりの芸妓数十人洒落な風に装つて挽きつつ歩む・・・

この様子からは、牛に挽かれた屋台の上に芸妓たちが乗つていることがわかる。さらに明治四二年の奥南新報の「小中野芸者連の屋台手踊り及び近年珍しき剣舞等にて見物の喝采を博したり」というように、屋台形式での参加が認められる。この芸妓連の屋台の参加は、昭和に入つてもしばらくは見られたようであるが、昭和三九年（一九六四）「十六日町の虎舞、花屋台が今年から姿を消した」と『テーリー東北』の記事にみられ、以後華屋台の参加はみられなくなつた。

その後、平成九年に再度華屋台が登場し、往時の祭礼の華やかさを現代に伝える姿が復活した。

このように祭りは、時代とともにその形をかえていったが、二〇〇年を過ぎた今でも、三社大祭のもつ古式ゆかいな行列の雰囲気や、騎馬打毬、神樂、虎舞などの芸能のかかわり方などから、昔と変わらない伝統の姿が根底に息づいている「歴史あふれる祭り」であるといえる。

（山田 泰子）

第四章

八戸三社大祭の神事

【由 来】

現在、八戸市内丸二丁目に鎮座する靈神社は、法靈神社、法靈さんとも呼ばれる。江戸時代には、八戸城と八戸町を鎮護する藩神として藩主や領民の信仰を集めた。

祭神は法靈大明神。元来、法靈大明神は龍神であり、水の神であるところから、農耕の神としての性格も強い。

「八戸祠佐嘉志（写）」（江戸時代）によれば、起源は法領という修驗僧に由来する。法領は、毎年五穀成就、日和乞い、雨乞いなどを祈念し、靈験あらためて、人々の信仰が篤かつた。そのようななか、正中年間（一三二四～二六）に日照りが続き、農民がとても苦しんでいたときがあつた。法領は全靈を込めて雨乞いをしたが効果が現れなかつた。そこで、当時柏崎（現三八城公園付近）の三崎社という小社の傍にあつた大沼に身を投げて祈念するに至つた。すると、雨が降り続き、五穀は豊に稔つた。人々は、法領の靈を三崎社に合祀し明神と崇めて、法靈大明神として勧請したといわれる。

盛岡藩「雜書」によれば承応二年

（一六五三）四月十八日には、すでに八戸城の「御館神」として扱われていたことをみることができる。承応二年は根城

南部氏が遠野へ移り、八戸地方は盛岡藩の直轄領となつていた時期である。寛文四年（一六六四）には南部直房が八戸二万石を与えられ、八戸城を居城と定めた。



写真30 灵神社

寛文五年（一六六五）五月、直房の初入部に際して、領内の平穏と藩主の武運長久を祈願し、各神社や觀音堂へ絵馬などが奉納されており、この頃、社が本丸から二ノ丸の現在地に遷座された。寛文六年（一六六六）九月六日に、直房の実母、御生母仙寿院が願主となり、御堂を再興し、現在の社地へ遷宮している。このときの棟札が神社に保存されており、別當は大善院である。現在の社殿は文政八年（一八二五）に建立されたものである。

【氏子町内】

内丸・常海町・窪町・番町・八日町・十八日町・朔日町・城下・沼館・淀・甘八日町・塩町・下組町・柏崎新町・下大工町・十一日町・若葉町・緑町・青葉町・岩泉町

【三社大祭関係の神社の日程】

七月二五日頃 道具出し

蔵から神輿、道具類を出し、掃除する。補宜と氏子數名で行う。

七月二七日頃 遷靈祭

夜中に宮司が神輿に御神体を移す。おこもりはない。

七月二九日頃 山車のお祓い

新井田・内丸・朔日町の山車だけを山車小屋に行つてお祓いする。

七月三一日

本殿の中には、靈神社の獅子頭と氏子町内にある権現さま（獅子頭）が数十頭祀られる。八戸藩の守護神であった当社には、藩内の山伏が神樂を奉納たと伝えられている。

神社には、各山車組の代表が参拝し、木遣り音頭を奉納して祭りの無事を祈る。

(木遣り音頭例)

「今年や世が世で三社の祭り。おかは万作、浜大漁、めでためでたの若松様は、枝も栄える、葉も繁る。めでためでたのこの家の、座敷に鶴と亀とが舞い遊ばる。ヤーレコリヤノセー」

午後五時 前夜祭

総代・祭事委員・神社附祭の各山車組代表・法靈神樂組代表が参列し、祭典を行い、祭りの無事を祈る。

八月一日

午前中 法靈神樂組が氏子町内を門付けし、祓い清める。

午後一時 神輿渡御祭

祭典の後、神輿が神社を出る。鳥居の前で歯打ち（權現舞）奉納。この後、神社の境内で待機。

午後二時三〇分

神社の境内で行列を整え、市庁前へ向う。

午後三時

神明宮・龍神社・新羅神社の順で、市庁前から行列出発。附祭の各山車組はすでに市庁前で待機しており、各神社の行列の後につく（行列順序・附祭については第五章二・三を参照）。

本殿に祀られていた獅子頭は、すべて持ち出し行列に供奉する。かつては、

お通りのときに歯打ちをした獅子頭は、お還りのときは車に乗せ、お通りのときには車に乗せた獅子頭は、お還りのときに歯打ちをした。しかし、現在は歯打ちをする人が増えたので、ほとんど行きも還りも同じ獅子頭を使い、いたんだいる獅子頭を車に乗せて供奉させる。

女性の歯打ちが平成十一年から参加した。宮司の配慮で、時代の流れという。

午後六時 直会

写真三二 前夜祭に集められた獅子頭（平成十一年）



写真三三 前夜祭の神事（平成十一年）



写真三一 木遣り音頭の奉納（平成十一年）



写真三四 輿の運び出し（平成十一年）



関係者による簡単な飲食後、解散。

八月二日 正式参拝

正式参拝といつて、三社の代表（宮司とは限らない）がそれぞれの神社を参

拝し、玉串を供える。

午後一時 例大祭

（次 第）

参進→雅楽奏上→修祓→一拝→開扉→献饌→宮司祝詞奏上→玉串奉奠→
(宮司・総代・祭事委員・神社附祭の各山車組代表・法靈神樂組代表) 徹饌
→閉扉→一拝→宮司挨拶→退下

午後一時三〇分 直会

関係者による簡単な飲食。

芸者に来てもらい、八戸小唄などの唄・踊りを披露してもらう。

八月三日

午後二時

神社の境内で行列を整え、長者山のふもとに向つて出発。

午後三時

神明宮・新羅神社・龍神社の順で、長者山のふもとから行列出発。附祭の各山車組はすでに長者山のふもとで待機しており、各神社の行列の後をつく。

午後六時 神輿還御祭

神事の後、神輿を蔵に納める。そこから、宮司が御神体を着物の中に包むよう隠して、神殿に納める。

午後六時三〇分 直会

関係者による簡単な飲食後、解散

【由来】

八戸市長者の長者山に鎮座し、祭神は、素戔鳴尊、新羅三郎義光（甲斐源氏の祖）。ほかに、倉稻魂命、大物主命、素戔鳴命、天照大神、豊受姫命、誉田別命を合祀する。創建は寛文五年（一六六五）と伝えられる。現在の社殿は、文政一〇年（一八二七）に建てられたもの。古くは、虚空蔵堂・三社堂・新羅大明神などと称され、明治の神仏分離令によつて新羅神社となつた。江戸時代には、八戸藩の最も重要な祈願所の一つであり、藩命により多くの祈禱を行つた。寛政二年（一七九〇）二月には、毎年正月中、国家安全・五穀豊穣・漁乞の祈禱を行うように命じられた六寺社中の一つである。

延宝六年（一六七八）九月、十一日町より虚空蔵菩薩が勧請された。この虚空蔵菩薩は、八戸藩初代藩主南部直房が、盛岡に居つて信仰されていた「盛岡下小路水口虚空蔵菩薩」を勧請したものであつた。天和三年（一六八三）新羅大明神が勧請され、元禄七年（一六九四）

には社殿造営にあたつて愛宕大明神が勧請され、虚空蔵・新羅・愛宕の三社を合祀し、正面に新羅、右に虚空蔵、左に愛宕を祀つた。藩政期の長者山は、頂上に三社堂のほか長者山権現や牛頭天王などのお堂があり、さらには地蔵堂や八幡堂なども祀られていたことを示す記録がある。神明宮も一時この山に祀られていたが、享保二年（一七一七）神明社跡に牛頭天王を勧請した。これが八坂神社となり、現在は新羅神社に



写真35 新羅神社拝殿

二・新羅神社

合祀されている。

【氏子町内】

吹上・糠塚・類家・中居林・田向・十三日町・三日町・長横町・新長横町・長者町・鍛冶町・大工町・山伏小路・古常泉下・六日町・十六日町・鳥屋部町・堤町・新堀端町・番町

【行列の参加者】

戦前までは、氏子町内のえんぶり組が神輿を担いだり、行列に参加してくれていた。

【祭りの道具類】

新羅神社では昔からの道具を修理しながら使っている。江戸時代からの鞍や甲冑も、現在使用しているものがある。維持・管理および新調が費用的面から大変であるという。

七月二七日頃 藏開き

藏から神輿、道具類を出し、掃除する。惣宜、氏子数名で行う。

七月三一日

八戸市職員互助会の山車を山車小屋に行つてお祓いする。

午後五時 前夜祭

役員・総代など参列し、祭典を行い、祭りの無事を祈る。山車組、神楽組関係者は参列しない。

八月一日

午前一〇時 朝御饌
献饌の儀。

午前一〇時三〇分 御靈移し

宮司が神輿に御神体を移す。白布で神殿を覆い隠し、宮司も白布に包まれて、御神体を神輿に移す。その間、「オー」という唸るような発声（警蹕）と太鼓が

鳴る。

午後一時三〇分 神幸祭

祭典を行う。

午後二時

神社の境内で行列を整え、市庁へ向う。太鼓を打ち鳴らし、神輿を送り出す。行列の先頭は女坂の上のあたりで、最後尾は本殿前。市庁に到着次第、待機している新羅神社附祭の各組の山車をお祓いする。

午後三時

神明宮・龍神社・新羅神社の順で、市庁前から行列出発。附祭の各山車組はすでに市庁前で待機しており、各神社の行列の後をつく（行列順序と附祭については第五章二・三参照）。

午後六時 御靈移し

神輿が還り次第、朝と同じ様式で、御神体を社殿に移す。昭和の終わり頃までは、宮司が社殿に泊まり込み、「おこもり」の形態をとっていた。神事は行わず、防犯の意味合いが強かつた。現在は行わない。

午後七時 夕御饌・直会

祭典の後、神前で御神酒を拝載する。

八月二日 正式参拝

正式参拝といって、三社の代表（宮司とは限らない）がそれぞれの神社を参拝し、玉串を供える。

午前十一時 大祭

（次 第）

典儀 一 長者山新羅神社大祭斎行の旨を宣す→国歌斎唱（二唱）→敬婦生

活綱領唱和→号鼓→修祓→宮司一拝→御開扉→献饌→宮司祝詞奏上→本庁幣献上（惣宜）→祝詞奏上（献幣使）→玉串を奉りて拝礼（宮司）→玉串を奉

写真三六 神事の様子（平成十一年八月二日）



写真三七 神事の様子（平成十一年八月一日）



写真三八 神事の様子（平成十一年八月二日）

写真三九 用意された甲冑（平成十一年八月一日）

- りて拝礼（献幣使）→玉串を奉りて拝礼（八戸南部家第十四代 南部直敬公）
→玉串を奉りて拝礼（大祭委員長 役員列拝）→玉串を奉りて拝礼（総代会
長 総代列拝）→玉串を奉りて拝礼（警備委員長 警備委員列拝）→玉串を
奉りて拝礼（来賓代表 来賓列拝）→玉串を奉りて拝礼（敬神婦人会会长
会員列拝）→本庁幣を徹す→神饌を徹す→御閉扉→宮司一拝→号鼓→典儀→
大祭終了の旨を宣す→宮司挨拶→退出→直会
- 午前十時 朝御饌
- 午後二時 騎馬打毬
- 八月三日
- 午前一〇時三〇分 御靈移し
- 午後二時 還幸祭
- 午後三時 祭典を行い、神社の境内で行列を整える。
- 午後三時 宮司が神輿に御神体を移す。
- 午後六時 御靈移し
- 神輿が還り次第、一日と同じ様式で、御神体を社殿に移す。
- 午後六時三〇分 夕御饌・直会
- 祭典の後、神前で御神酒を拝載する。

三、神明宮

【由来】

現在、八戸市廿六日町の西端に鎮座する。祭神は天照皇大神。ほかに豊受命、誉田別命・天兒屋根命を合祀する。江戸時代には、八戸藩の最も重要な祈願所の一つであり、藩命により多くの祈禱を行つた。寛政二年（一七九〇）二月には、毎年正月中、国家安全・五穀豊穣・漁乞の祈禱を行うように命じられた六寺社中の一つでもあつた。

社伝によれば、昔は金浜村にあつたものを新井田村に移し、その後中居林へ移し、さらに長者山へ遷宮したとされている。「八戸藩日記」によると、寛文九年（一六六九）中居林から長者山の東北隅へ「御伊勢堂」として遷座している。

その後は、伊勢神宮と同様に二〇年ごとの建て替えが行われていたことが「八戸藩日記」に見られる。さらに、宝永六年（一七〇九）になって、何らかの事情により長者山より遷宮することになり、町奉行や吟味役・目付・勘定頭などの立会いによつて、この御伊勢堂の建立場所を見分している記録が「八戸藩日記」に見られる。そして、この年の六月に普請奉行が任命され、八月には立柱式がなされ、九月に上棟式だつたらしく、豈山寺で棟札の祈禱がなされている。この棟札は今も保存されている。この時の普請によつて、神明宮は現在の場所に遷座する。

この地になつてからも、二〇年毎の式年遷宮の慣習が続けられていた。現在の社殿は慶応二年（一八六六）に建てられたもの。



写真40 神明宮

【氏子町内】

上組町・常番町・新荒町・荒町・徒士町・上徒士町・本徒士町・町組町・稻荷町・本鍛治町・廿六日町・廿三日町

【三社大祭関係の神社の日程】

七月二〇日頃 道具出し

七月二四日頃 山車のお祓い

山車組の代表参拝。山車のお祓いをして、お札を渡し、祭りの無事を祈る。受け取つたお札は山車に貼る。売市の山車だけは、行つてお祓いをすることが慣例になつてゐる。

七月三一日

午後八時三〇分 前夜祭・遷靈祭

総代・山車組代表など参列し、祭典を行い、祭りの無事を祈る。前夜祭終了後、本殿の灯りを消し、宮司が神輿に御神体を移す。おこもりはなし。

八月一日

午後一時 神幸発輿祭

祭典の後、神輿を幣殿から外に出す。

午後二時三〇分

行列を整え、市庁へ向う。その際、神輿の前で大神樂（廿六日町）、神樂（笛の沢）を「今年もお供させて頂きます」という意を込めて奉納する。

午後三時

神明宮・龍神社・新羅神社の順で、市庁前から行列出発。附祭の各山車組はすでに市庁前で待機しており、各神社の行列の後をつく（行列順序・附祭については第五章二・三参照）。

午後六時 休輿祭

祭典を行い、神輿を幣殿に納め、解散。

八月二日 正式参拝

正式参拝といつて、三社の代表（宮司とは限らない）がそれぞれの神社を参拝し、玉串を供える。

靄神社、新羅神社のような大祭はなし。

八月三日

午後一時三〇分 還幸発輿祭

祭典の後、神輿を幣殿から外に出す。

（次 第）

号鼓→修祓→宮司一拝→献饌→神殿を開く→宮司祝詞奏上→宮司玉串拝礼

→総代玉串拝礼→供奉者玉串拝礼→山車組代表玉串拝礼→徹饌→宮司一拝→

号鼓

午後二時三〇分

行列を整えて、長者山のふもとに出発。

午後三時

長者山のふもとから、行列出発。附祭の各山車組はすでに長者山のふもとで待機しており、各神社の行列の後をつく。

午後五時 還御祭

神輿が還り次第、三一日と同じ様式で、御神体を社殿に移す。

八月六日頃

午後六時三〇分 直会

長者公民館で、祭り関係者が集まり、簡単な飲食。

【神輿渡御】

現在では、三社の神輿は行列後にまたそれぞれの神社に還つて納められるが、

写真四一 奉納される神樂舞
(平成十一年八月一日)



写真四二 境内に飾られた行列用具
(平成十一年八月一日)



元来、靄神社の神輿は新羅神社に二晩留まり、それから靄神社に還っていた。

靄神社を発ち長者山に到着した神輿は、御旅所と呼ばれるところに納められた。そして、靄神社の御神体は新羅神社社殿に納められ、二社の御神体で祭礼が行われていた。お還りの際には、還御祭の後、靄神社の御神体が神輿に移され、靄神社に還った。

この神輿渡御が行われなくなつたのは、明治二十九年に日清戦争の戦勝記念に新羅神社と神明宮の神輿が参加するようになり、三社の神輿がそろつて行列に参加するようになつてからであると伝えられている。

（古里 淳・佐々木 勝江）

第五章

八戸三社大祭の組織と活動

一・三社大祭の運営組織と運行

書記が兼任)で構成されている。運行委員の役割分担は次のとおりに規定されている。

協賛組織 三社大祭の行列の基本構成は、「神明宮」、「電神社」、「新羅神社」の三社からなるが、祭りを運営するための組織として「八戸三社大祭協賛会」が設立されており、さらに「はちのへ山車振興会」、「山車運行委員」等が協賛会をサポートする形となつてている。

他に後援団体として、「株式会社東日本旅客鉄道」、「日本交通公社」と各報道機関等が名を連ねている。

八戸三社大祭協賛会 前述の協賛会は、昭和五一年に設立されている。その目的は「長年培われてきた郷土の民俗行事である八戸三社大祭を協賛支援し、地域経済の発展に寄与すること」を掲げている。

組織構成は、会長一名（八戸観光協会会长が兼任）、副会長五名（八戸観光協会副会長が兼任）とはちのへ山車振興会会长の役職がある。会長は八戸三社大祭山車審査委員を選考し委嘱する行為も行う。事務局は八戸観光協会に置かれている。その下部組織として、総務部会、行事宣伝部会、運行部会、山車部会、山車審査を行う審査部会、監事の役職がある。

そのうち、運行部会と山車部会、審査部会には山車振興会代表が一部加わることとなつていて、この「はちのへ山車振興会」とは、会長一名の下に、各山車組の代表から組織された副会長、理事、監事、書記を持つ団体であり、各町の山車組の意見を三社大祭全体に反映して集約させる機能を持つといえよう。

運行 例年七月三一日の「前夜祭」から、「オトオリ（お通り）」、「ナカビ（中日）」、「オカエリ（お還り）」と八月三日までの四日間、八戸市内は大規模な交通規制がかけられ、大通りを中心に山車合同運行がある。

七月三一日は、「前夜祭」として午後六時から八時まで市内の八日町から三町、十三日町、廿三日町にかけて山車が運行される。この日は山車の予備審査が行われ、市民の最大の関心事は、当年の「最優秀賞」をどこの山車組が受賞するのかになる。

山車運行委員 また他にも、三社大祭の行列全体の運行を取りまとめる「山車運行委員」がある。運行総責任者一名（八戸観光協会会长が兼任）、山車運行委員長一名（山車振興会代表が兼任）、山車運行副委員長三名（山車振興会

書記が兼任）で構成されている。運行委員の役割分担は次のとおりに規定され

(1) 運行総責任者は、行列全体を統括し、運行時間に配慮しつつ、運行が整然と行われるよう山車運行委員長・神社と連携を取ること。

(2) 山車運行委員長は山車の運行を統括し、各班長を通じて整然と運行されるように監督する。

(3) 副委員長は委員長を補佐し、委員長の命を各班長に伝達すると共に、前夜祭・各合同運行における山車進入・出発・解散時の統制に任ずる。

(4) 班長は上記の命を受け、それぞれの受持ちの山車組又は前後の山車組との間隔を適正に保ち、整然と運行されるよう常に配慮する。

(5) 運行委員は班長の命を受け、それぞれの山車組の運行に責任を持つこと。

(6) お祭りハムクラブ（アマチュア無線）は、緊急時の連絡にあたるとともに、行列全体の運行統制にあたる。

このように、山車の集合場所と時刻、運行全体の管理調整と交通規制を主に担当している。以上の団体の協力を得て、平成十二年度には合計二六台の山車が三社大祭の行列に参加した。

前を出発し、三日町、荒町、交通部前、上組町、長者三丁目、長者小前、長者

一丁目、鍛冶町、長横町へと運行する。近年、この日に北海道室蘭市から「よさこいソーラン」の団体を招き、繁華街を練り歩くイベントも行われた。

翌二日は「中日」と呼ばれる。午後二時から長者山新羅神社で、文政一〇年（一八二七）に始まつたとされる加賀美流騎馬打毬（かがみりゆうきばだきゆう・県無形民俗文化財）と徒打毬（かちだきゅう）が行われ、多くの見学者で賑わう。

社では鎧や武具の虫干しも行われる。その後、午後六時に山車だけの合同運行が市庁前を出発し、八日町、十八日町、十一日町、六日町、十六日町、廿六日町、町組町、荒町、廿三日町、十三日町、三日町へと進む。この日は夜間運行となり各山車は搭載した照明装置で艶やかにライトアップしながらの運

行となる。一方、市公会堂前で、午前中から夜にかけてイベント「音と光のお

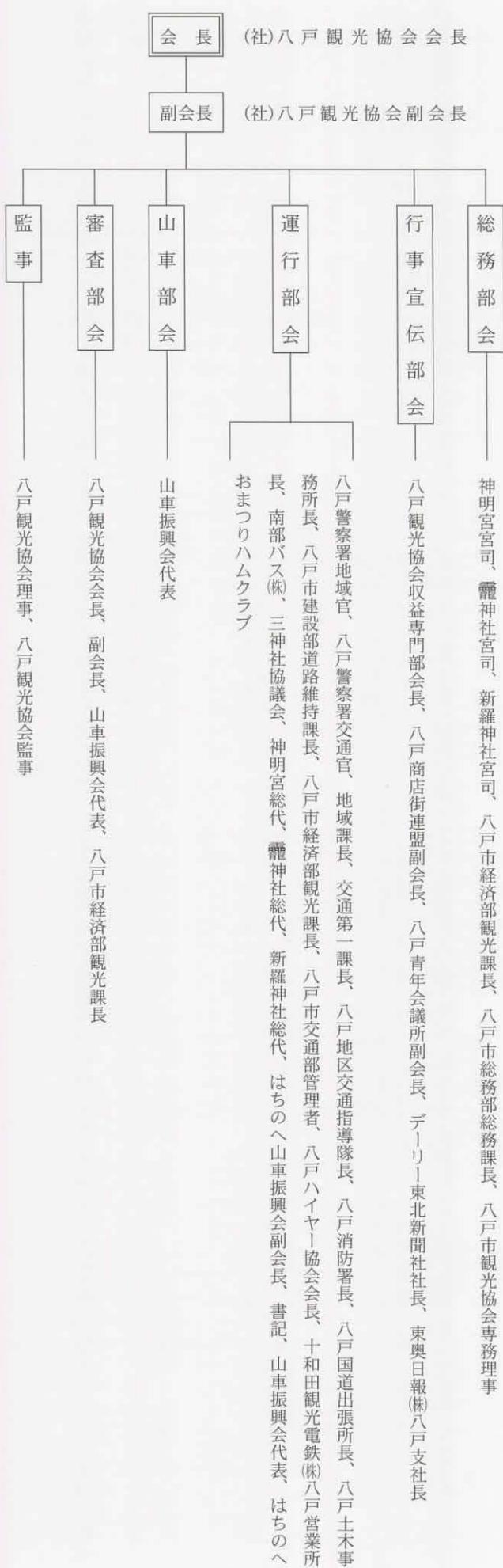
祭り広場」が開催されている。

最終日の三日は「お還り」といわれ、午後三時、鍛冶町の長者山下から御輿と山車の合同運行が出発し、六日町、十一日町、柏崎新町（柏崎一・二・三・四丁目）、みちのく銀行前、下組町（柏崎四・五丁目）、塩町（柏崎一・四丁目）、廿八日町（柏崎一丁目）、八日町へと進む。

運行の中でも「お通り」と「お還り」の御輿行列には、武者押し、旗差物、稚児行列が練り歩き、それに神楽、獅子舞、虎舞が付随する。その後ろをツケマツリ（附祭）として各山車組が行列を組むことになる。

「お通り」の御輿と山車行列の順序は、神明宮御輿・廿六日町・新荒町・上

八戸三社大祭協賛会の組織



組町・新組町・堺市・吉田産業の各山車組が続き、靄神社御輿・淀・下大工

町・朔日町・内丸・新井田・塩町・城下・十一日町・青山会・柏崎新町・下組町の各山車組と虎舞が続く。そして新羅神社と八坂神社御輿と旗差物・稚児行列・打毬馬乗や文政八年（一八二四）に始まつたとされる武者押・徒打毬等の

後に、長横町・六日町・類家・十六日町・鍛冶町・虎舞・八戸市職員互助会・吹上・八戸共作連・糠塚の各山車組が続く。

「お還り」は神明宮、新羅神社、靄神社の順となるが、当日の運行状況により集合場所へ到着した順にあることがある。これらの行列全体の長さは五キロを越えるという。

運行前の各山車組の出発地点であるが、「前夜祭」の日は自分の組の山車小屋から、「お通り」と「中日」は市庁舎前から、お還りは長者山下からの出発となる。また、前述したように各日とも全体の開始時間が設定されているが、各山車組はその時刻に間に合わせるよう、数時間前には自分の組の場所に集合し、揃いの浴衣を着て、山車を移動し合同運行の隊列へ加わっていく。

なお、雨天により合同運行が中止となる際には、「お通り」と「お還り」は翌日に順延されるが、「前夜祭」と「中日」は順延しないことになつており、中止宣言は、運行開始時間の三時間前に行われる規定がある。

現在のこののような山車運行は、全日ともに午後八時頃の解散まで続き、期間中は県内外の観光客の賑わいだけでなく、報道機関の取材も活発に行われ、繁華街

では実況中継席を設けて山車運行のテレビ放映や、商業用ビデオ収録、販売用記念写真撮影も行われ、祭りの後の商店街の目玉商品となる。また他にも、七月下旬から八月中旬に八戸駅前の八戸地域地場産業振興センターに模型山車が展示され、祭りに花を添えている。

（小山 隆秀）

二・八戸三社大祭の行列編成

八戸三社大祭の行列編成の歴史については、第二章二と同章四に詳述されているので、ここでは、現在の行列について平成一〇年の「お通り」の観察結果を中心に報告し（写真については、平成一〇～十三年度のものを取り混ぜて使用している）、あわせて現在の行列編成の特徴やその成立時期などについて検討してみたい。

（二）現在の行列編成について

現在の八戸三社大祭の行列は、**靄神社**、**新羅神社**、**神明宮**を単位としており、神社ごとに特徴ある練り物や山車を従えて市街地を練り歩いている。八月一日のお通りは**神明宮**→**靄神社**→**新羅神社**、八月三日のお環りは**神明宮**→**新羅神社**→**靄神社**と順番が決められており、最後尾を華屋台で閉めている。お通り・お還りともに神社で編成する出し物の行列の編成は基本的に同じである。八月二日の中日は神社の行列や華屋台は出ないことになつており、山車のみが運行される。各神社の行列構成は次の通りである。

三社先駆 （ 靄神社 ・ 新羅神社 ・ 神明宮 の社名入り櫻をかけた袴姿の侍）三名	←	神明宮行列
廿六日町大神楽 （大人と子供で神楽一組となり二頭で舞う。リヤカー引き		
一名 太鼓一名・笛一名・手平鉢一名）計八名		
猿田彦 （猿田彦装束・帶刀で鉢をもつ姿）一名		
八戸三社大祭協賛会長 （騎馬の袴装束、臣下一名、馬方一名）計三名		
八戸市長 （騎馬で袴装束、臣下一名、馬方一名）計二名		
随身 （立傘持ち、槍持ち、挟箱持ち、床机持ち いざれも奴装束）計四名		
前駆 （袴装束）計二名		
大麻司神職 （お通り一潮山神社神職 お還り一櫛引八幡宮宮司 騎馬で狩衣		

装束・立烏帽子、馬方二名）計三名

御神号旗（白張装束）計二名

真榦（白張装束）計二名

廿三日町敬神会旗（白張装束）計二名

袴 着 計二名

子供袴着 計十一名

袴 着 三名

巫女（巫女装束の女子をリヤカーに乗せ、車引き、傘持ちで一組になる。合

計一〇 巫女は各自雅楽の楽器を持つ。巫女役割 第一 御多福 第二 小笛 第三 太鼓 第四 笙 第五 琵琶 第六 小琴 第七 大琴 第八 鼓 第九 鐘 第十 太鼓）計三〇名

向鶴旗（白張装束三名 交替要員三名）計六名

神樂（笛ノ沢神楽、旗持ち一名 獅子頭四名 手平鉢二名 笛一名）計八名

日月旗（白張装束）計二名

袴 着 一名

初穂箱（白張装束）計四名

袴 着 一名

副斎主（襷宜 騎馬で衣冠单装束、立烏帽子 馬方二名）計二名

御神馬（子馬に幣束を着ける 馬引き女子児童）二名

御神馬（子馬 背には何も上げていない 馬引き大人と男児）二名

四神旗（白張装束 青龍・朱雀・白虎・玄武）計四名

袴 着 五名

袴 着 二名

紫翳（白張装束）二名

御神輿（白張装束）十二名

写真四三 三社先駆（平成十三年お還り）



写真四五 神明宮隨身（平成十三年お還り）



写真四四 廿六日町大神楽（平成十三年お通り）



写真四六 子供袴着の行列（平成十一年お通り）



写真四七 巫女行列（平成十一年お通り）



写真四八 笹ノ沢神樂



写真四九 神明宮斎主



菅 翳（白張装束）二名

袴 着 三名

斎 主（宮司—中居靖夫 騎馬で衣冠單、冠に垂纓付き 馬方一名）計二名

後駆袴着 二名

附 祭 山車振興会長→廿六日町→新荒町→上組町→根城新組町→売市→吉田

産業グループ（山車行列の順番は固定されており、新参加は後ろに付く）

神明宮の行列につく廿六日町の大神樂は、三社大祭参加当初から続いているものと伝えられている。代表者は地元であるが、八幡方面から来た人もメンバーに入っている。

神明宮の行列を特色付けているのは巫女行列であるが、祭りが三社になる時点で廿三日町の有志が七五三の道具を用意しお供をしたことに始まると伝えられている。

子供袴着も他の神社行列には見られないものであるが、行列への参加は巫女行列よりは新しく、戦後のことである。現在巫女行列や子供袴行列に加わっているのは主に廿三日町やこの町内にゆかりのある家の子女で、原則として小学生となっている。

神明宮の行列に加わる神樂は、現在は笛ノ沢の神樂組であるが、かつては常番町の玉置権現の神樂組が参加していた。しかし昭和四〇年代になつて常番町の神樂組のメンバーが揃わなくなり、笛ノ沢神樂が参加するようになつたものである。

袴着は、氏子総代や廿三日町敬神会のメンバーが中心となつていて、氏子で信仰の厚い人や子供の頃この神社の行列の加わったことがある人なども加わることがある。

靈神社行列

露払旗（饅頭傘に黒麻着物の装束）計二名

獅子大神樂（新井田重地の大神樂 獅子二頭で舞う 支配人二 笛二名 手

平鉢三 リヤカ一引き一名 太鼓一名 計十三名

猿田彦（猿田彦装束 床机持ち一直垂装束）二名

大麻神職（小田八幡宮神官—狩衣装束 車押しへ鳥帽子に白張四名）計五名

湊虎舞（旗持ち二 ヒヨツトコ二 虎五四 相子一五 笛十二 リヤカ一引

き二 手平鉢四 太鼓二 控え数名 基本的に浴衣姿 計約四〇名

御 椅（鳥帽子に白張装束）四名

日月旗（饅頭傘に黒麻の着物）二名

御神馬（馬の背に金幣を飾る 鳥帽子に白張装束）二名

大広間太鼓（鳥帽子に白張装束）計三名

法靈神樂（法螺貝一 旗持ち一 幣係一 神樂約二四 太鼓一 手平鉢三

獅子頭を載せたりヤカ一引き一 支配人二）計三五名

奉納旗（饅頭傘に黒麻の着物）計五名

白熊毛御長柄槍（饅頭傘に黒麻の着物）計七名

新井田虎舞（ヒヨツトコ二 虎四 相子五 手平鉢三 笛八 太鼓二 リヤ

力一引き二 控え数名）計約四〇名

御初穂箱（リヤカ一に載せ御初穂箱を運ぶ 鳥帽子に白張装束）一名

副斎主（神職は袍 車押しは鳥帽子に白張装束四）計五名

御 鉾（車押しは鳥帽子に白張装束）計四名

法靈大明神旗（饅頭傘に黒麻の着物）二名

唐 櫃（鳥帽子に白張装束）二名

長 刀（鳥帽子に白張装束）二名

槍持ち（鳥帽子に白張装束）二名

挾箱（鳥帽子に白張装束）二名

隨神（弓・刀持ちの武士装束）二名

袴着（一文字傘に袴）二名

赤白旗（饅頭傘に黒麻の着物）二名

御神輿（鳥帽子に白張装束の馬引き）二名

赤白旗（饅頭傘に黒麻の着物）二名

行列世話役（十一日町消防団員 消防制服）一名

氏子総代（一文字傘に袴装束）八名

斎主（神職は袍 車押しは鳥帽子に白張装束四）計五

左比代虎舞（旗持二 ヒヨツトコー大人二・子供一 虎五 相子十一 手平鉦

五 太鼓二 箕十二 リヤカー引き二 控え数名）計約六〇名

附祭

（お通り）朔日町→塩町→青山会→柏崎新町→内丸親附祭睦会→城下

↓下組町→淀→新井田附祭親睦会→十一日町龍組→下大工町（山車の

並ぶ順番は五月の神楽祭のときに山車代表者による抽選で決定される。お通りとお還りでは山車の並ぶ順序が逆になる）

靈神社の行列の特徴は、法螺貝や神楽に代表される山伏的行列の雰囲気あり、お通りやお還りで行われる一斉歯打ちは、八戸三社大祭の一つの風物詩となっている。

靈神社には三社大祭が近くなると、市内はもとより岩手県久慈市、八戸、三戸郡階上町などから多くの権現さま（八戸では獅子頭を権現さまと呼んでいる）が持ち込まれ、祭りでは、先頭から二～三頭の靈神社所有のものを除き、この個人が持ち込んだ権現さまが法靈神楽組の一斉歯打ちなどに使用されている。

このように権現さまを祭りに参加させることを「アソバセル」と呼んでいるが、靈神社に持ち込まれる権現さまはかなりの数に達するため、かつてはお通りでアソバセルことができなかつたものはリヤカーに載せて歩き、お還りの際にお通り

写真五〇 法靈神樂の一斉歯打ち（平成十一年お通り）

写真五一 権現様を載せた車（平成一〇年お通り）



写真五一 神興（平成十一年お通り）



写真五二 左比代虎舞（平成十三年お還り）



写真五四 御榾（平成十一年お遷り）



写真五五 奉納旗と白熊毛御長柄槍（平成十一年お通り）



新羅神社行列

露払旗（二対 烏帽子に白張）二名

警備担当（消防制服）一名

袴着一名

大麻司神職（尻内の白山神社神職—狩衣 車引き—烏帽子に白張二）計三名
中居林大神楽（支配人三 獅子大人一子供一 太鼓引き—大人二子供二 太鼓
一 笛三 手平鉦二）計一五名

赤白旗（烏帽子に白張）二名

御神号旗（烏帽子に白張 木枠に立て二名で持つ 八坂・新羅・金毘羅・桜山）

計八名

日月旗（烏帽子に白張 木枠に立てて二名で持つ）四名

干支旗（烏帽子に白張）十二名 *平成一〇年には行列中に見らない

十六日町虎舞（支配人三 旗持ち一 虎四頭 子供の虎一頭 相子子供九 ヒ
ヨトコ一 太鼓引き一 笛三 手平鉦三 支配人二 提灯持ち

（一）計三五名

五色榶（二対 烏帽子に白張 刀と鏡を飾る）二名

真榶（二対 木枠に立て二名で持つ 烏帽子に白張）四名

袴着一名

初穂箱（烏帽子に白張 二名一組で控えが二人）計四名

祓主（權禰宜 車引き一烏帽子に白張二）計三名

御神馬（馬引き一烏帽子に白張 大人一子供二）二名

副祭主（副祭主の衣装一袍 車引き一烏帽子に白張二）計三名

袴着一名

御榾・御鉢・御槍・御兜（烏帽子に白張）計四名

御神輿支配人（袴着）四名

法靈神樂による一斉歯打ちは、災いを払う意味があり、かつては三日町・荒町・平中などの大きな角（辻）を曲がる際に行われていたが、現在は權現さまを神社に預けた家や氏子総代の家などの要望によりかなり数多く行われるようになっている。

靈神社のもう一つの特徴は、神社行列のなかに湊・左比代・新井田の三組もの虎舞が加わっていることである。これらの虎舞組の参加は古いことではないが、湊虎舞や左比代虎舞は、小中野見番屋台が靈神社の行列に参加していたことにちなんでこの神社に属するようになったといわれており、また、新井田虎舞については、近世の八戸の城下町が形成される際、新井田の商人が八日町から廿八日町にかけての現在の靈神社の氏子区域に移住した歴史にちなんだいる。

御神輿（神輿引き一〇名 後ろで押す人二名） 計十二名

御神輿支配人（袴着）四名

斎主（宮司一袍を着て騎馬）一名

傘持ち・槍持ち・長刀持ち・兜持ち（烏帽子に白張）四名

御供頭（御供頭の衣装—直垂 車引き—烏帽子に白張二）計三名

袴着一名

徒打毬（向陵高校生徒 看板持ち一 打毬生徒一〇）計十一名

袴着一名

打毬馬乗（先頭は一文字傘に袴、他は打毬の装束、赤組一・白組二）計五名

武者押（陣笠を被つた太鼓持ち二 陣羽織装束の武者二 甲冑姿の槍持ち八

甲冑姿の鉄砲持ち六 甲冑姿の騎馬武者大人五 甲冑姿の騎馬武者子供一 馬引き六）計三〇名

附 祭 吹上→糠塚→長横町山車組親睦会→六日町→類家→十六日町→鍛冶町→八戸市職員互助会（虎舞付き）→八戸共作連（新羅神社に付く山車は、行列の順番が決まつており、それが毎年順送りされている。）

華屋台（踊り手八 交替で二名が踊る 運転手一 屋台引き約四〇）計約五〇名

押乙名（一文字傘に袴着一 傘持ち一烏帽子に白張二）計二名

押御旗（新羅神社旗二一烏帽子に白張）計二名

後押え（一文字傘に袴着の騎馬一 馬引き二 挟箱一烏帽子に白張二）計四名

他に行列の世話や馬糞回収に携わる人が相当数いる。

新羅神社は甲斐源氏の祖新羅三郎義光を祭神としていることから、その行列には武家の要素が強く現れており、斎主の後ろに付く打毬馬乗や武者押、騎馬武者はこの神社行列の特徴となっている。さらに、副斎主の後に付く御楯・御鉢・御槍・御兜のお供も他の神社では見られないものである。

行列の中に、中居林大神楽と十六日町虎舞の二つの芸能が加わっているが、中居林大神楽は明治二十五年にはお祭りに既に参加しており（本書191ページ参照）、祭りが三社になつて間もなく新羅神社の行列に参加した古い伝統を有している。

花屋台の運営は、社団法人八戸観光協会に事務局を置く八戸三社大祭華屋台運営委員会が中心となつており、実際の運行には商工会議所青年部のメンバーや舞踏関係各流派の代表による八戸三社大祭華屋台実行委員らが関わっている。



写真五七 中居林大神楽（一）



写真五七 中居林大神楽（二）

写真五八 十六日町虎舞



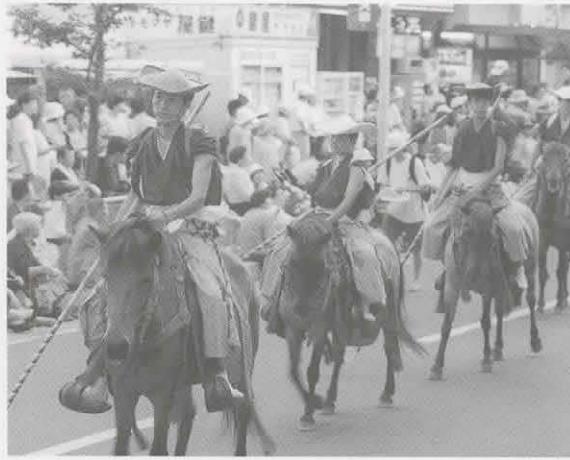
写真六〇 徒打毬



写真五九 千支旗



写真六一 打毬馬乗



(二) 現在の行列編成の特徴とその成立時期

図一〇九～図一二は、平成一〇年のお通りに基づき八戸三社大祭の行列編成を図化したものである。この図が示すように八戸三社大祭の行列は、神明宮・鼈神社・新羅神社の三社が単位となり、それぞれ大麻神職・副斎主・祭主が行列の要となつて、前後に氏子をはじめとする人たちによる特徴ある行列や民俗芸能・山車が付く点で基本構成が共通している。

その中で、各神社はそれぞれの祭神や歴史などに基づき個性ある行列・出し物を有しており、神明宮は巫女行列、鼈神社は神楽の行列、新羅神社は打毬馬乗りや武者行列などにそれぞれの特徴が見られる。そして各神社行列の後ろには山車の行列が続き、八戸三社大祭の最後尾には華屋台が付く。

なお、山車組がどこの神社の行列に所属し祭りに参加するかは、神社の氏子範囲が基になって決定されており（図九）。この氏子範囲は、明治期以降に消防屯所が建てられる過程で、それが目安となつて次第に定まつていったと伝えら



写真62 武者押



写真63 華屋台

れている。三社の氏子範囲は基本的に重複することはない。

次に現在の行列編成が完成した時期について龍神社に保存されている行列帳と新聞記事をもとに検討してみた。

江戸時代の法靈御神事行列は、八戸藩の有力武士が先頭集団を勤め、その後に法靈大明神の行列が続き、さらに常泉院が付き、最後が虎舞や出し、踊り子などを含む御町行列で閉める四部から編成されており、この形は明治二年まで続いていた（本書189ページ明治二年行列帳参照）。したがって、現在の行列編成が完成したのはその後のことと考えられる。

大沢多門が跡乗を勤めた明治二五年の「三社御祭礼行列帳」（本書191ページ）では、三社が祭りに参加しているにも関わらず、旧山車や附祭が法靈神社の行列にのみ付いており、まだこの時点では法靈神社中心の祭礼の雰囲気がかなり強いものであつたとみなされる。

現在の八戸三社大祭と基本的に同じ編成が資料で確認できるのは、大正二年九月四日の「奥南新報」（本書201ページ）誌上であり、三社毎にそれぞれの氏子町内の山車が付き最後尾を華屋台で占めている。もつともこれはあくまでも資料として確認できた年のことであり、実際にはもう少し古い時期にこの行列編成が成立していた可能性も考えられる。

現在の八戸三社大祭の行列編成が完成したのは、明治二六年以降、大正二年以前の間と考えられるが、この間の史資料が欠落しているため詳細に年代を絞り込むことは現状ではできないようである。

（三）ツケマツリの呼称

現在、八戸では、山車のことをツケマツリ（附祭）と呼んでいる。この言葉には、ときに華屋台も含んで使用されるはあるが、神樂・虎舞や祭りに付く踊りなどの芸能までを指すものではなく、この地方独特の使われ方がなされている。

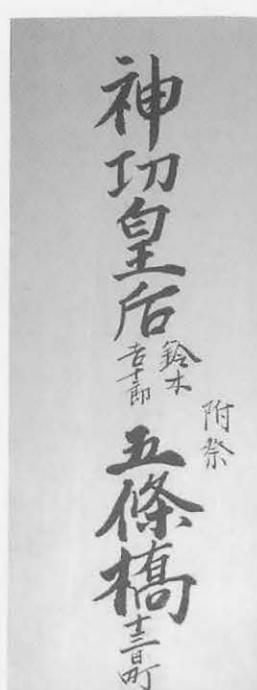
ツケマツリという用語の初出は明治二五年の「三社御祭礼行列帳」のなかにみられるが（写真六五）、この行列帳では「神皇皇后」や「恵比寿」「草刈山路」など江戸時代から引き続き祭りに出ていた古い人形山車に対し、第九章で植木氏が指摘しているように明治になつて新たに登場した「作り山」の山車を指して「附祭」としている。このような用語の使い方は大正二年九月四日付の「奥南新報」でも確認される。

このことから、「作り山」の山車のみを指して附祭と呼ぶ用語は、古い人形山車と作り山が同時に運行された明治期に起源をもち、それが作り山だけが運行されるようになつた大正後期以降においてもこの地方で使い続けられ現在に至つていると考えることができるのではなかろうか。

写真六四 明治二五年 三社御祭礼行列帳（表紙）



写真六五 明治二五年 三社御祭礼行列帳（内容）



図九 三社の氏子エリアと山車組町内



(四) 記年銘ある祭礼用具について
八戸三社大祭の神社行列には祭りの編成過程を知るうえで重要な紀年名(年号)のある祭礼用具が使用されている。

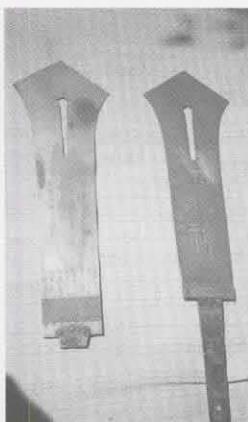
法靈大明神の輿渡御が最初に行われたのは享保六年(一七二一)のことであるが、それを伝える鉾先が靄神社に伝わっている(写真六六左)。この鉾は長さ六七センチ、幅二三センチの青銅製で、「奉納宝劍一振 靄神 享保六辛丑七月吉日 稲垣彦右衛門」以下数名の名前が刻まれている。残念ながら、この鉾先是大きすぎて風圧を強く受け、鉾の付け根の部分が折れて修理されており、奉納者全ての名前を確認することはできない。享保六年六月十九日の「八戸藩目付所日記」の「法靈御旅行列次第」に「六鉾別当上下三人」と記されていることから、この鉾先は最初の輿渡御から使用され続けられたものであることはほぼ間違いないであろう。

なお、現在はこの鉾先に替わるものとして、明治二五年に製作された同形のもの(写真六六右)が使用されている。

靄神社の坂本榮治宮司によれば、紀年名はないものの神輿も享保六年当時のものをそのまま使い続けてきているとのことであり、また、延享四年(一七四七)の「法靈御神事行列」にある御広間太鼓や天保四年の「法靈御神事行列」にある白熊毛御長柄槍は現在も同社に伝えられており、白熊毛御長柄槍は今も祭りに使用されている。

写真六六 享保六年銘(左)と明治二五年銘(右)のある鉾先

写真六七 享保六年銘鉾先拡大写真



写真七〇 千支旗鉾先（征清記念 種市良一）



写真七一 千支旗鉾先（帝国万歳 前八戸
藩大参事太田廣城 明治二九年八月）



写真七二 御神号旗



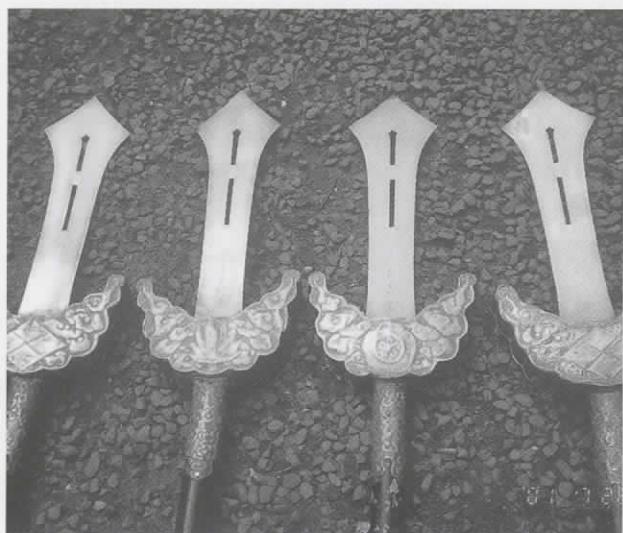
写真七三 伝露払旗



写真七五 伝露払旗鉾先拡大（奉納京寺町松原南
西本政次郎 明治二九年八月吉日）



写真七四 御神号旗鉾先



明治二九年八月十五日の「東奥日報」には、「日清戦争勝利祝賀祭として、祭旗・祭輿二台購入、祭りを四日間開催、一関以北青森迄の鉄道賃金を五日間位半減せられんことを鉄道会社へ請求 祭事世話人大沢多門」とある。

新羅神社の干支旗・御神号旗などはこのとき新調されたものが使い続けられている。

干支旗は旗そのもののがかなり古く、傷みが激しい状態であるが、先端の鉾の部分に寄進者の氏名などが彫り込まれている。

征清記念祭 種市良一（背面）明治廿九年七月

帝国萬歳 前八戸藩大参事 太田廣城 明治廿九年八月

（背面）儒家 栄内松男 階上村長 木幡茂周

帝国萬歳 元八戸藩士族 久保 節 明治廿九年八月

帝国萬歳 書家 河野元重 同 石橋孝基行

（背面）画家 石橋忠央 同 石橋石溪

帝国萬歳 前八戸藩少参事後三戸郡長 岩泉正意 明治廿八年

従七位三戸郡長 井上跳蛙

帝国萬歳 南部依美 南部元吉 明治廿九年八月

帝国萬歳 牛馬改良率先者 福田祐寛 明治廿九年八月

帝国萬歳 旅館 若松與市 工事請負 近藤元太郎

帝国萬歳 元八戸藩士族 永田年九（凡か？）

三日町 江口梅太郎

帝国萬歳 前横濱燈臺局正六位少書記官 船越寛

帝国萬歳 東京呉服商 長井九朗左衛門

千支旗にみられる寄進者は当時の八戸を代表する政治家や経済人・文化人などであり、祭礼用具の新調が大沢多聞により推し進められたことが同氏が祭事総世話人になつていていることからうかがわれる。

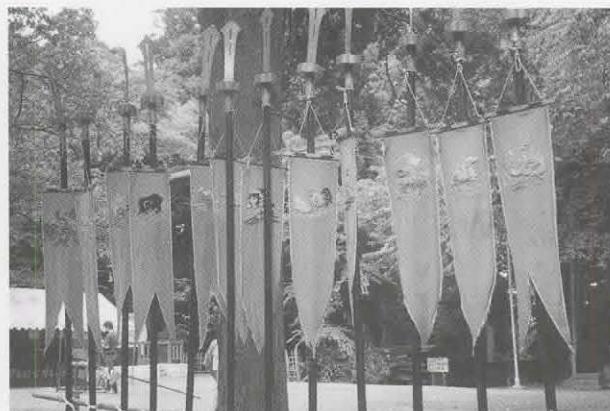


写真68 干支旗

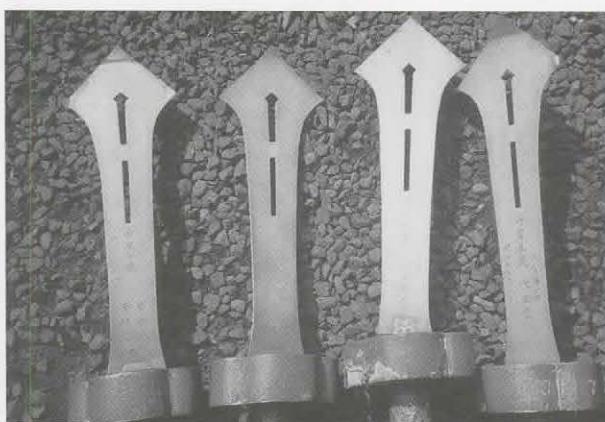


写真69 干支旗鉾先拡大写真

また、かつて新羅神社の露払旗に使用された一対の旗も同社に伝えられるが、この旗の先端に付く鉾にも「奉納 京寺町松原南 西本政次郎 明治廿九年八月吉」の銘が掘り込まれている。

さらに、「新羅神社」「金毘羅神社」「八坂神社（背面に小野寺利助の名あり）」の三本の社号旗も年号は刻まれていないものの、鉾の装具デザインが干支旗に類似していることから明治二九年に購入されたものと推定される。

このように新羅神社では、明治二九年の日清戦争戦勝を記念して多数新調されたものが使われ続いていることが紀年銘ある旗の内容から知ることができる。神明宮については、紀年銘ある祭礼用具はみられなかつたが、神輿について

は明治二九年に購入されたものとのことであり、新羅神社の神輿も同様である。

（工藤 竹久）

图10 神明宫行列

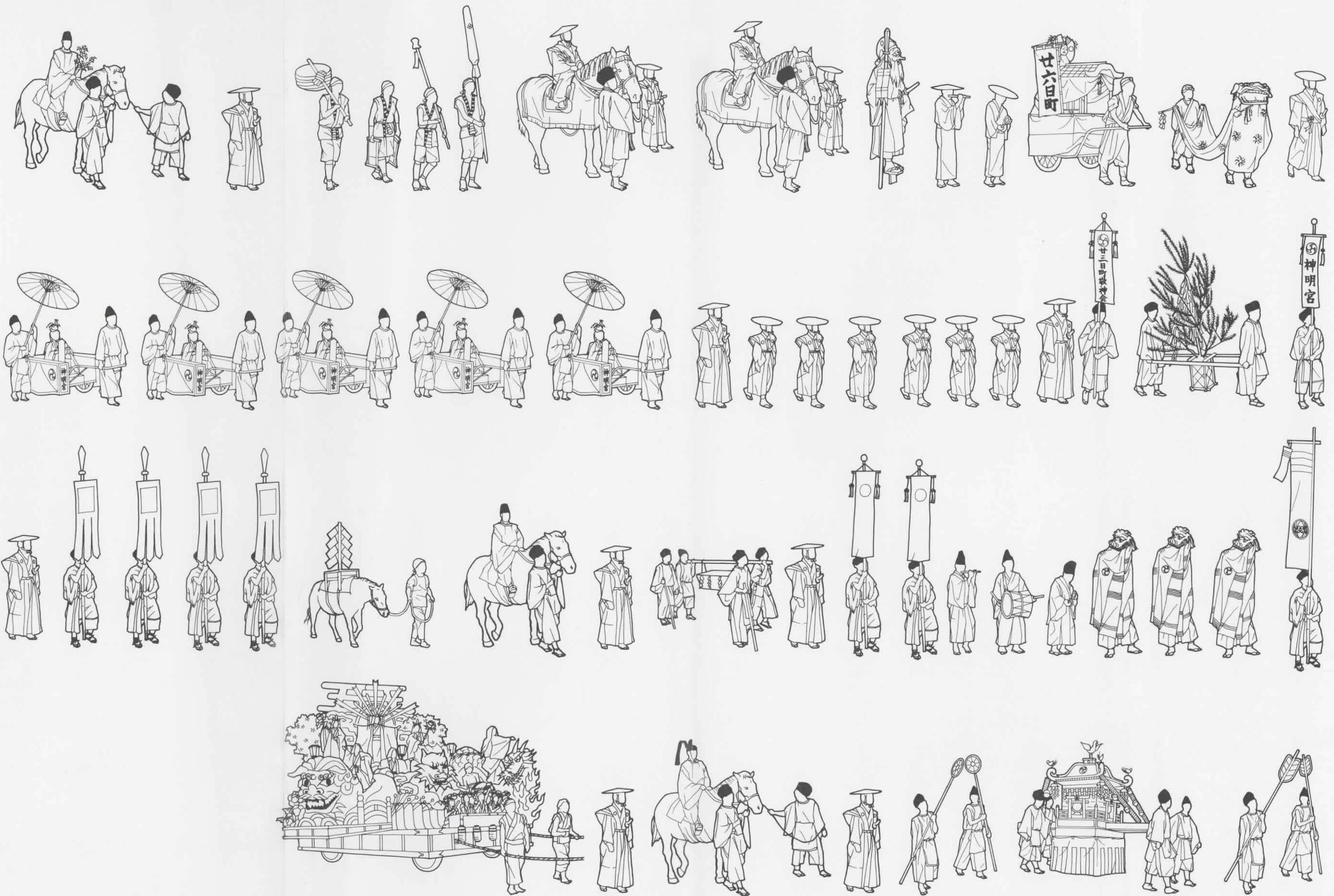


図11 霊神社行列

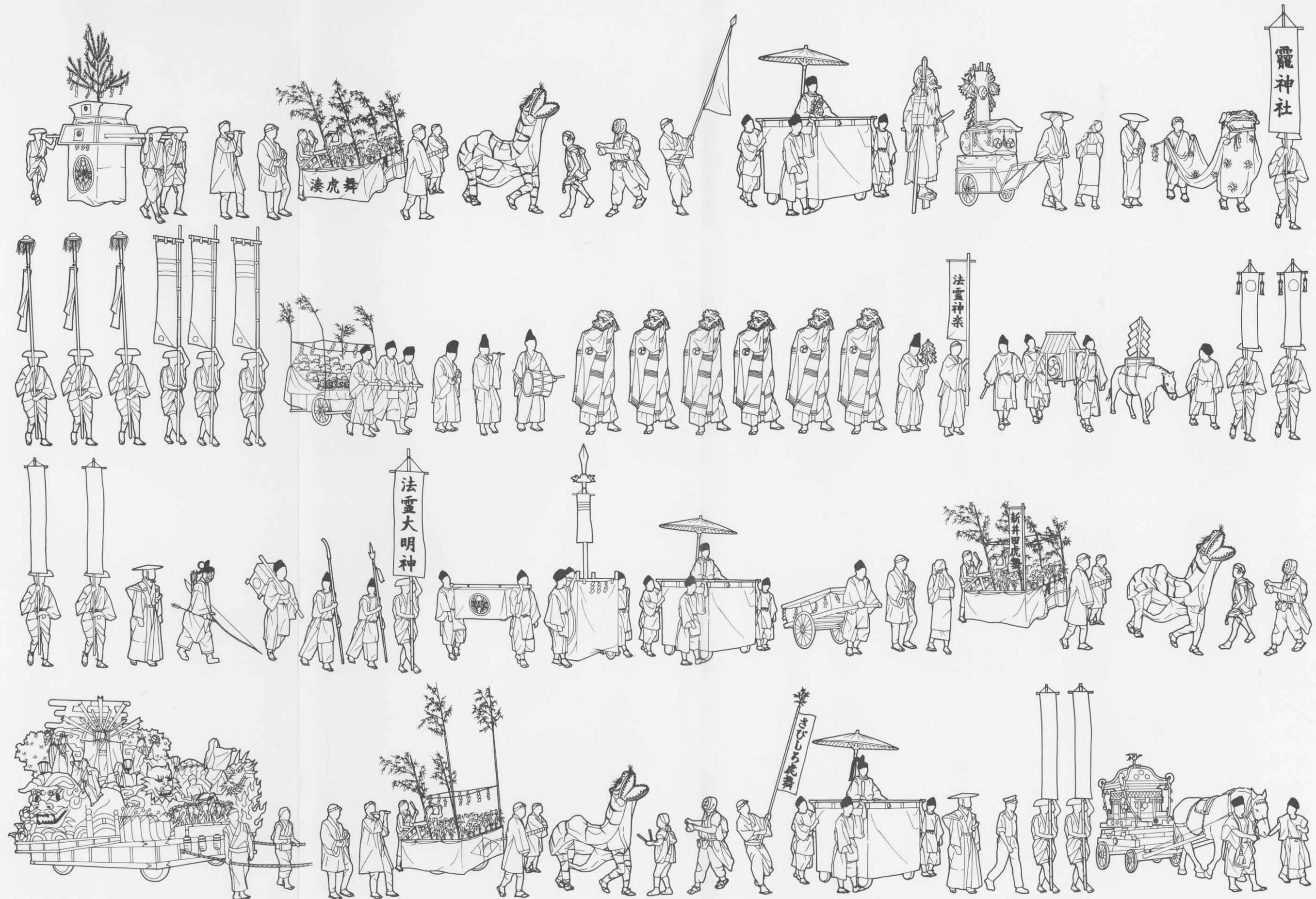
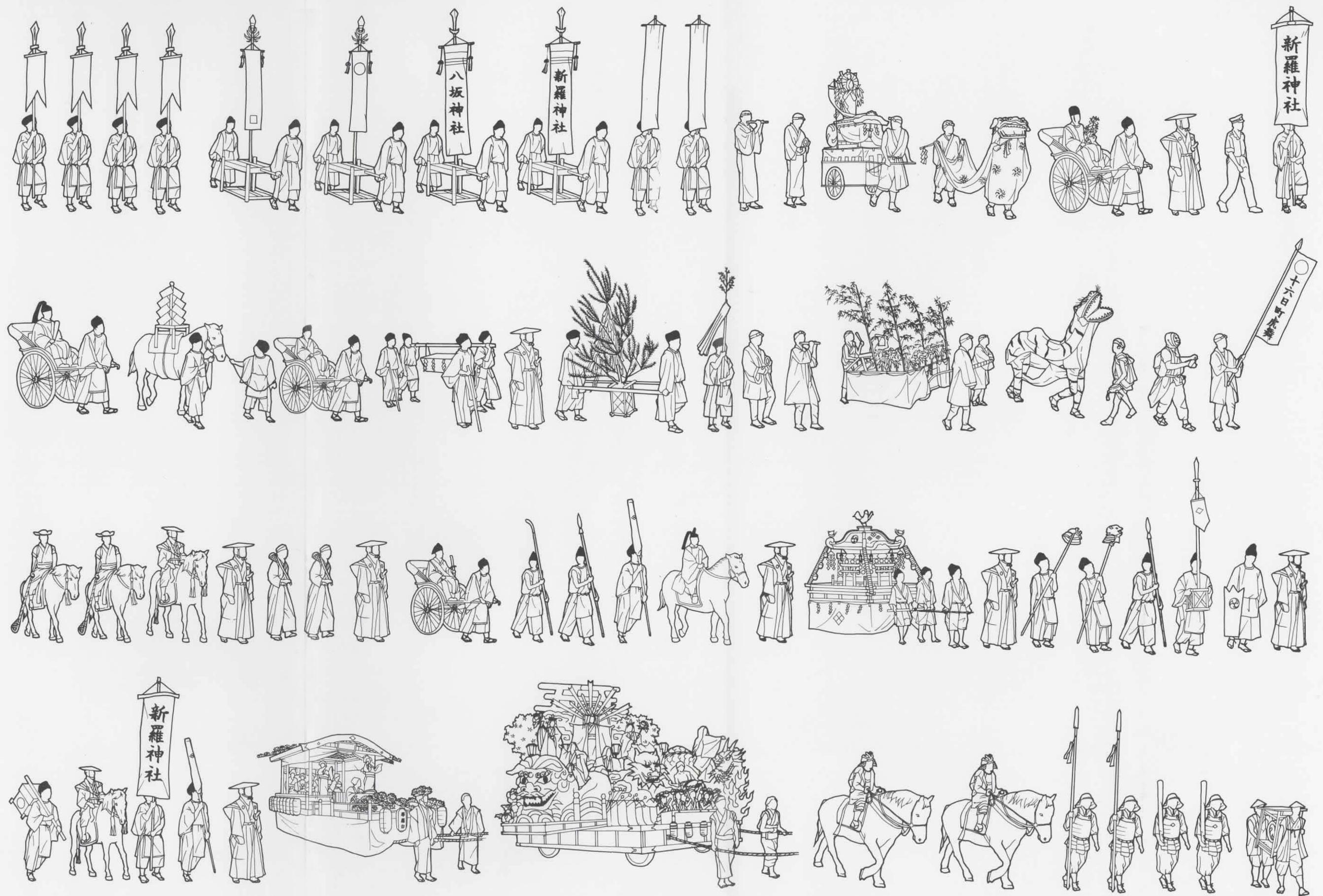


図12 新羅神社行列



三 各山車組について

(一) 神明宮

① 廿六日町山車組

地域の概況と山車組の沿革 廿六日町山車組は消防団組織である二番組が母胎となつて組織された団体である。近年では消防団のなり手が少なくなつたことから、廿六日町、本鍛冶町などの町内会や長者学区の住民約六〇世帯程度が中心となつて参加している。

山車運行組織とその役割 委員長一名、副委員長一名、実行委員長一名をはじめ、企画、製作、運行の責任者を各一名ずつ置いて、大祭に備えている。かつての組織は消防団組織が中心となつていたことから、「小頭」という役職にいた者が責任者となつて、山車の運行・製作全般にわたつて統率していた。

山車の製作 大祭が終了するたびに、カサヌギ(笠ぬぎ)と称して慰労会を催し、次の年の山車の題材について話し合い、翌年の四、五月頃までに決定する。数年前に用いた題材を再び用いる場合もあるといい、その後まもなく製作を開始する。昔は山車の題材については、他町の者に話さないものだつたといふ。

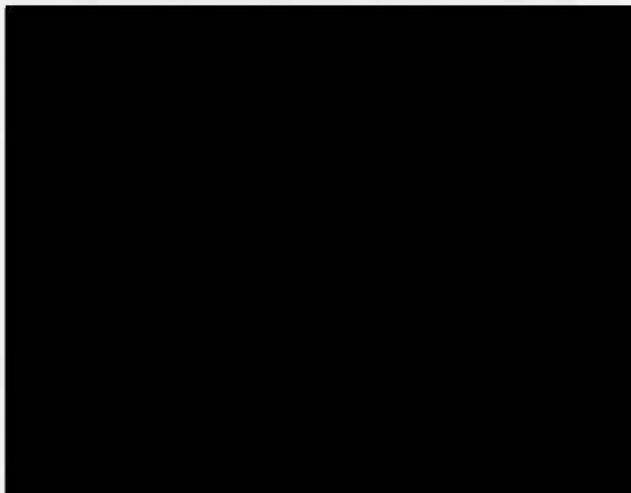
製作に入る前には、製作責任者のほかに有志一〇名ほどであつて、神事を催した。これをチヨウナダテ(手斧立て)といふ。町内の有志が参加し、神事が済み次第、お酒を飲んだ。別名、仕事始めともいつた。

実際の製作には、製作責任者のほかに有志一〇名ほどであつて、五月末から製作を開始する。細かな細工は屯所で作り、大祭の直前に神明宮に山車小屋をかけて組み立ててある。昔、町内に本職の大工がいて、大祭が近くなると、祭り大工となつて山車の製作にあたつていた。

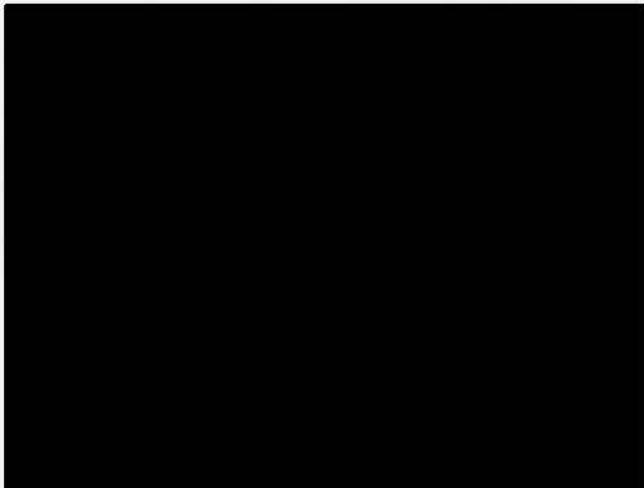
写真七六 小栗判官(昭和二年)

写真七七 凱旋桃太郎(昭和五年)

写真七八 勢獅子(昭和一〇年)



写真八一 歌舞伎舞踊六歌仙容彩(平成二年)



写真八一 同見返し



今日、町内に人形師がないことから、古い人形を東京方面に送つて塗りを依頼している。また、かつて人形は、藁で肉付けして作つたが、発泡スチロールや綿などで簡単に加工できるので、山車組の者でも作れるようになつた。

祭りの実際

かつては、せつかく作つた山車が夜中に壊されることもあつたため、山車小屋に泊まりこんで山車の番をしたこともあつた。

山車の運行の際には、委員長などの役員をはじめ、大太鼓、小太鼓、木遣り、手小舞、山車の引き子などが行列を構成している。廿六日町は神明宮の氏子にあたり、同社のツケマツリ(附祭)としては、最も早く(明治三九年)参加したといわれている。神明宮のツケマツリは、参加した順序が行列の順序となつてゐるという。

囃子は、大太鼓一名、小太鼓五名、笛六十五名で構成され、町内が主体となつて興味のある者や、友人・縁故を誘つて編成している。

門付けは、通り・お還りの経路を中心に回り、祝儀があがれば声の良い者が唄を返している。

山車の貸し付けは、三沢市、五戸町、十和田市、岩手県普代村などというよう、これまでにつき合いのあつた団体に貸してきた。山車の製作中に訪ねてきて、飾り付けの様子を見ながら、山車の貸し借りの相談をするという。岩手県普代村に貸し出したのを最後に、年内の山車の貸し付けを終え、ある程度まで解体したのち、山車小屋まで運んでもらう。

大祭が終わつて、翌日(八月四日)にカサヌギ(笠ぬぎ)と称する慰労会が行われる。山車の製作に関わった者や、引き子とその親などがその席に集まる。

記録類

『はちのへ町内風土記』データー東北社(昭和四三年)、『廿六日町山車組参加百周年記念誌』廿六日町山車組参加百周年記念誌編集委員会平成八年

(大村 達郎)

② 新荒町附祭若者連

祭りの実際 山車の運行の際には、委員長などの役員をはじめ、大太鼓、小太鼓、木遣り、手小舞、山車の引き子などが行列を組んでいる。

地域の概況と山車組の沿革 新荒町をはじめ、荒町、稻荷町、上徒士町、常番町、町組町などの町内会所属の住民が参加している。

山車運行組織とその役割 委員長一名、副委員長一名、実行委員長一名、製作・企画・運行の責任者を各一名ずつ置いている。

山車の製作 前年の山車製作時に、翌年の山車の題材についての話が出ることがあり、様々なアイディアをこの頃から練っているという。この後、山車の題材案を三～四つほど示し、製作にあたる者の間で多数決で決めている。山車の趣向は武者ものが中心である。

山車の製作には二〇名ほどであたっており、五月末から七月末の約二か月をあてている。

太鼓、木遣り、手小舞、山車の引き子などが行列を組んでいる。
囃子は、大太鼓一名、小太鼓五名、笛一〇名で構成している。町内の者が中心となっているが、他町の者でも参加できるようにしている。囃子の指導は、経験のある者が行っている。

三沢市、十和田市などに山車の貸し付けを行っている。

記録類 特になし。

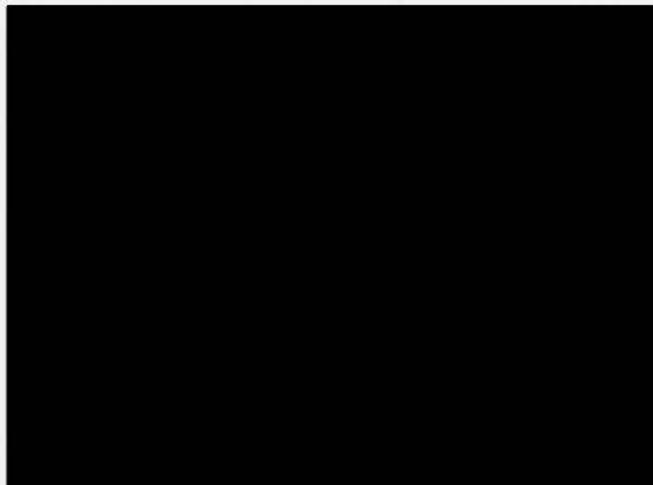
(大村 達郎)



写真八三 宮本武蔵と塙原朴伝との鍋蓋試合（昭和六年）



写真八四 手鞠獅子（昭和三〇年）



写真八六 かぐや姫（平成八年）

③ 上組町附祭

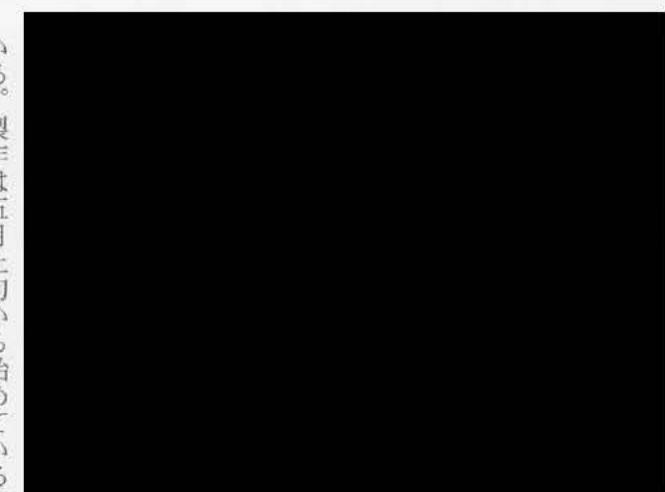
地域の概況と山車組の沿革 戦前の上組町地域は、旧市街への玄関口として住民も多くいたへん賑わっていたというが、昭和三〇年代後半より個人商店や事業所が林立しはじめ、今日では市街の一角を占めるに至っている。

現在の山車の運行には、上組町をはじめ、藤子・藤子新町、枡形、大杉平、休場、二ツ屋、根城一丁目、根城二丁目などの町内会所属の住民が参加している。

山車運行組織とその役割 委員長一名、副委員長一名、製作・企画・運行の各責任者を各一名ずつ置いている。

山車の製作 山車の題材は、製作部長が案を出して、役員の間で決定して

写真八七 大黒様(昭和三〇年)



写真九〇 織田信長桶狭間の戦い(平成二〇年)



いる。製作は五月上旬から始めているが、最初は七名前後で、のちには十二〜十三名ほどであったので、本格的な製作は上組町稻荷神社に山車小屋をかけてからである。

山車は台車を除いて、ほとんどが毎回新しく製作している。材料や人形が足りない場合には、他の山車組から貸し借りをしながら進めている。

祭りの実際 山車の運行の際には、委員長などの役員をはじめ、大太鼓、小太鼓、木遣り、手小舞、山車の引き子などが行列を組んでいる。

囃子は、大太鼓一名、小太鼓二五名(控えを含む)、笛二〇名から構成されている。町内自前で編成しており、昔から町内で囃子を続けている者が指導者となつて、上組町稻荷神社で練習している。

記録類 特になし。

(大村 達郎)

④ 根城新組町附祭

地域の概況と山車組の沿革

根城は八戸市中央部西方、馬淵川沿いに位置する。地域内には中世期の八戸南部氏の居館跡があり、付近には中世期から近世期にわたる史跡が点在する。近代には、農村地帯となっていたといい、第二次世界大戦後からは急速に住宅街へと変貌していった。

現在は、馬淵川を渡る根城大橋と東北自動車道の八戸インター・ジャンクションに近い交通の要所として、また、法務局や裁判所が集まる八戸市の司法センター地域として、多くの世帯数を抱えている。

当地区は「根城新組町」の名称で、昭和三一年から山車を製作・運行しているという。現在、参加者は根城一丁目から八丁目を中心として、東根城、新組町、桜木町、鹿島町、南鹿島、白山などの地域から参集してきている。

山車運行組織とその役割 現在、山車組は、委員長一名、副委員長五名、製作責任者一名、運行責任者一名、会計一名からなる。消防第九分団三班も山車運行に協力しており、新組の「新」を入れてた縷や衣装を着て参加している。

山車の製作

二月か三月頃に委員長が、糠塚の山車委員長下館政光氏と相談して、お互いの山車組のテーマが重複しないように、当年の山車の題材を決定する。その後委員長が製作の指揮をとることになる。

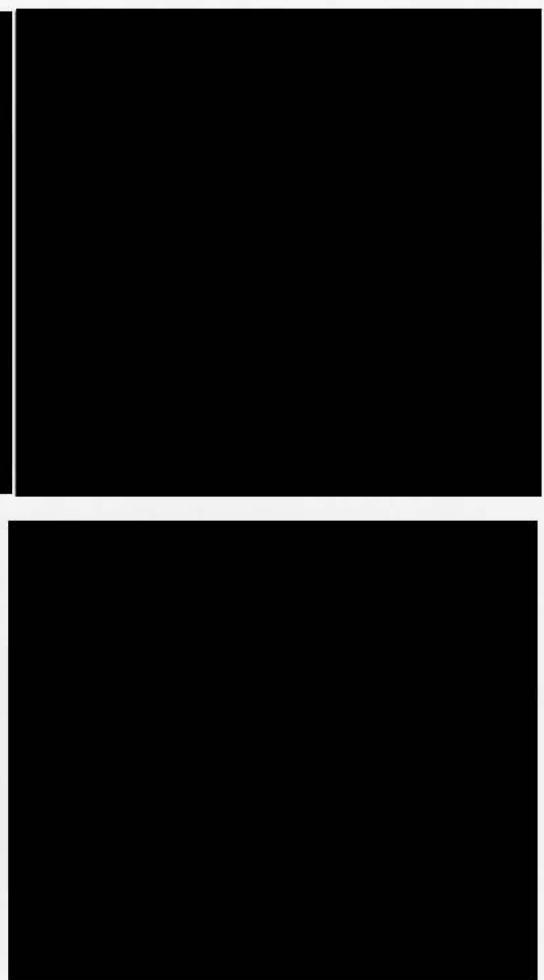
五月中旬から製作作業が始まる。山車の土台は山車小屋で、人形や飾りは消防の屯所で製作している。製作作業には常時二、四〇名が参加しているという。

当地区は「武者物」を得意とし、近年はとりわけ、地元根城の歴史にまつわる題材を多く取り上げている。平成十一年度は「南部師行家臣 豪勇 西沢民部行広」で見返しは「師行戦勝祈願」であつた。

山車は祭の規格どおりの大きさで、仕掛けは油圧式でセリアガリ（昇降）、テンカイ（展開）、ヒキダシ（引き出し）の種類がある。

人形の顔などの部品は、前年から保存しておく、なるべく再利用している。

写真九四 馬の殿様・南部通信獎勵・加賀美流馬術(平成一〇年)



しかし、衣装は東京の業者にその都度発注しているという。

祭り終了後、山車は県内の三沢市、百石町、上北町に貸し出しており、貸し代は次年度の山車製作の重要な資金源となっている。

祭りの実際 運行は委員長、副委員長、運行責任者、大太鼓一名と交代員六名、小太鼓五名と交代員十五名、笛十名、木遣り、手小舞、引き子の総勢約一五〇名で構成される。

囃子として、大太鼓一名が山車の正面横に、小太鼓五名が正面に乗つて演奏する。山車の前を笛が歩き、引き子が行列を組んで練り歩く。

門付けは主に当町内を回るが、市内の売市方面や繁華街にも行くことがある。

記録類 特になし

(小山 隆秀)

⑤ 売市附祭

地域の概況と山車組の沿革 戦前の売市地区は、二〇数軒の農業中心の集落であったというが、現在は八戸市中央部西方に位置し、根城地区に隣接する。地域内に小・中学校や長根スケートリンク、長根総合運動公園を含み、馬淵川を渡る大橋が通じて、交通の要所として多くの世帯数を抱える住宅地域となっている。

現在、「売市」または「売市附祭」の名称で山車を運行している。運行には地区内の熊野堂、西売市、南売市、売市、長根などの地域や市内全域から参加者が集まっている。

昭和三三年頃から山車運行を始めたといわれ、当時、山車運行をやめていた市内の廿八日町から、太鼓や山車の台車を譲り受けてきて、町の消防団のOB

である元老サマや有志が運行の中心になつて始めたという。

最初は、人形が一、二体しか載っていない小型の山車であつたというが、昭和六〇年代から地域の若者の参加で山車の大型化が進み、平成元年からは最優秀賞などの受賞が続くようになったという。

山車運行には消防団の協力があり、九年ほど前までは、消防団部長が山車委員長を兼務していた時期もあつたという。そのためか現在、山車運行の集会所として消防九分団二班の屯所を使つてている。しかし、昔は別の土地に屯所があり、小物はその屯所で作つたものだともいう。

山車運行組織とその役割 現在、「売市附祭」として運行に参加している。組織は、三年任期の委員長一名、副委員長三名の他に、山車の構想・下絵製作を担当する制作責任者一名、八戸市観光協会から委嘱される運行責任者一名の役職で構成されている。委員長の選出は、三名の副委員長の中から旧委員長が一名を指名して選ぶ。

山車の製作 毎年四月に夏坂和良氏を招聘して当年の山車製作を行う。そ

の後五月の連休にはメンバーの顔合わせを行い、元老サマにも出席してもらう。

それから山車小屋のコヤカケ（小屋掛け）を行う。山車の土台を保管場所から町内の山車小屋へと移動させる。まず、チヨウナダテ（手斧立て）を行い、お神酒を上げて台車をお祓いして当年の山車製作・運行の安全を祈願してから、製作作業に入るという。

この頃にはすでに、夏坂氏によって当年の山車の下絵「エガミ（絵紙）」が完成しており、町内の人にもお披露目するという。その題材に応じて、前年度の他町の山車飾りを参考に、今年流用できる小物、飾りを借りてくる。

かつての当町の山車は、廿六日町山車組に始まる故村井治兵衛氏の作風を残す造りであつたといわれる。

⑥ 吉田産業グループ



地域の概況と山車組の沿革 八戸市内の企業「YS吉田産業グループ」が、その社員や関係者を募り、自社の山車を「吉田産業グループ」の名で運行している。この会社では、平成元年に市内に自社ビルを建設しており、そのイメージアップのため、平成二年から山車を製作して運行したことが始まりとされる。いわゆる企業や任意団体で山車組を組織する「企業山車」の代表例である。

かつてはこのような企業山車として三菱製紙や丸光、デーリー東北、日商月金会などの有名な山車が参加していた。しかし現在の企業山車は、当組のみであり、それに準じた団体として八戸市職員互助会、青山会、八戸共作連などがある。

山車運行組織とその役割 役職として、山車責任者一名、山車製作責任者一名、運行委員一名が設けられている。また、山車運行委員の中に運行部会が設けられ、引き子管理、交通整理、仕掛け、運転者の役割分担があり、総勢参加者は約一五〇名となる。

山車の製作 山車の題材は山車製作責任者が構想を立て、四月頃に実行委員会で決定するという。

山車製作作業は五月上旬から始まる。製作指導は山車製作責任者が行い、一日平均五名が作業にあたる。作業場所は市内廿三日町二三番地の山車小屋と、会社の倉庫を利用する。作業は夜間、午後八時から午前〇時まで行うが、期限が迫れば徹夜になることもあるという。

人形は、毎年再利用するが、その年の題材に合わせて人形師に表情を変えてもらうか、東京の業者に発注する。人形衣装は花巻市の業者に発注している。

祭りの実際 祭り終了後は市外の三戸市、七戸町、上北町、十和田市へ貸し出している。とくに岩手県久慈市は昔からのつき合いで、毎年のように貸し出すという。九月末にはこれらの貸し出しもすべて終了となり、山車を解体して保管場所に収納し、来年度に備える。

記録類 特になし

(小山 隆秀)

写真九九 天照大神と七福神(平成二年)



写真一〇〇 大国主命(平成九年)



いため、製作や運行などのあらゆる面で試行錯誤をしながら参加しているという。

門付けは、とくに行つていないという。

記録類 特になし

(小山 隆秀)

(二) 霸神社

① 朔日町附祭

山車の大きさは祭の規定どおりの幅四・五メートル、高さ四・五メートル、奥行き一〇・〇メートル。仕掛けを開ければ幅八・二メートル、高さ六・五メートル、奥行き一〇・四メートルになるという。動力は人力である。

当組は、神話、伝説、古典ものが得意であり、なるべく綺麗で楽しい山車作りを心掛けている。

山車解体後、人形は保存し、再利用できない部品だけ廃棄し、山車を他地域へ貸し出すことはしないという。

山車運行組織とその役割 朔日町附祭（「朔日町附祭若者連中」「マツリグミ」とも）は、朔日町、岩泉町などの町内会所属の住民が中心となっている。

責任者一名、運営委員三名を置いており、うち責任者は一、二年交代で任期は任意とされている。その他に婦人部が食事作りや飾り付けを行っている。

町内の賑わいに反して、住民が減少していることから、山車の引き子を町内から募ることは難しくなつており、これを補うために新聞広告や看板を出したたり、町外へ転出した者に声をかけて募つている。

山車の製作 朔日町附祭の山車の趣向は、鬼もの・化け物もの・珍奇な動

物を取り扱つたものが多く、これが特色となつてゐる。また「ヤマ山車」「欄干」を設けるのが基本形といわれてゐる。これらの題材を決定するには、朔日町在住の有志が前年の大祭のときから題材を話し合う機会を設け、原画を描いて内容の良いものを選んでいるといふ。

山車の製作は五月二〇日過ぎに始めるといふ。朔日町町内の駐車場（平成十一年度調査時）に山車小屋をかけ、製作にあたつてゐる。

山車は、その年の題材に応じて新しく製作してゐる。ただし人形の頭など一部の材料については、紙粘土などで製作したり、以前使用したものを探しておいたり、題材に応じて色を塗り直して使用してゐる。かつては京都の人形師が作った木製の人形を購入してきて使用したこともあるといふ。

山車の台車は、かつては馬車を利用してゐたが、今日では三トン車のシャーシを転用し、電動ワインチなどを本体に組み込んでゐる。

三〇年ほど前に類家山車組がバッタリ（昇降の一種）を考案し、受賞したところから、各ツケマツリ（附祭）が競つて真似をしたり、新たな工夫を凝らすようになつた。それ以来、仕掛けには、近年の八戸三社大祭で典型的なセリアガリ（昇降）、テンカイ（展開）、ヒキダシ（引き出し）が備えられるようになった。

祭りの実際 山車の運行の際には、山車の周囲に交通整理を担当する者が配置されており、前後左右に各一名ずつが置かれている。この他に、旗、ジャガラ、提灯持ちなどの役もある。

大祭の運営に要する資金を得るために門付けを行つてゐる。門付けの要員にはオンドトリ（音頭とり）をはじめ、札配りをする者、祝儀集めをする者などが、一〇名程度の班を三つつくり、木遣りをあげながら各町内を回る。朔日町附祭では、根城小学校付近、湊橋付近、柏崎地区を中心に行つてゐるといふ。

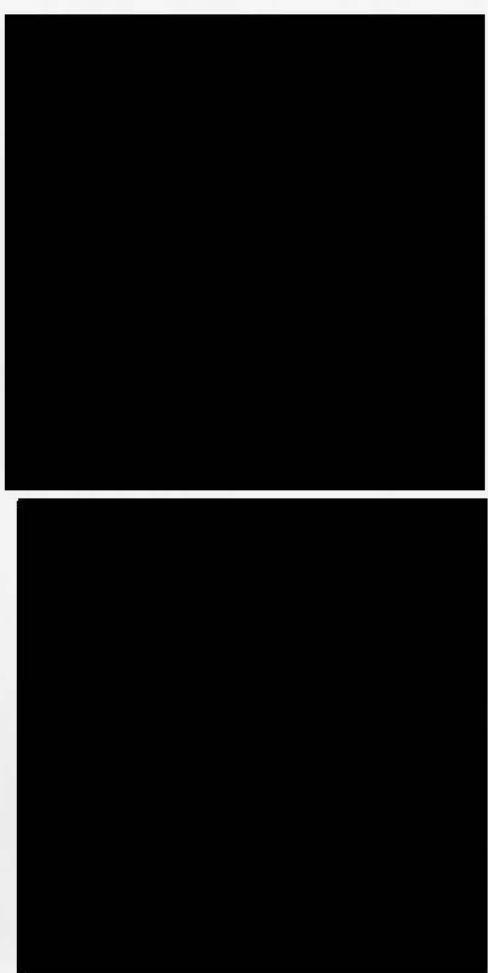
囃子は、大太鼓、小太鼓、笛から構成されているが、近年自前の編成が難しくなつてゐるといふ。練習は大祭の一か月前から山車小屋の前や屯所などで行

つており、苅田享典氏が指導してゐる。行列を組む際には、山車上に大太鼓一名、小太鼓五名、山車の前に笛十二名で編成してゐる。かつては笛の上手な者が選ばれて山車の上に乗せられることもあったといふ。囃子の曲目には、山車

写真一〇三 道成寺の鐘（平成二二年）



写真一〇四 同見返し 安珍清姫昇天



が動くときの囃子と休むときのヤスミダイコ（休み太鼓）の二通りがある。ヤスミダイコは、ダンナサマと呼ばれる家や河内屋（八戸酒類）の前などで振る舞いがあつたりするので、山車を止める際に演じたものという。

大祭終了後には、他の市町村で開催される祭りに山車を貸し出している。貸し出し先は、三沢市や上北町、七戸町、百石町などである。これらの地域の関係者は、山車を製作しているさなかにもやつて来て、貸し借りの交渉をしていくという。この際に飾りについての注文があるといい、朔日町附祭では移動の便を考えて飾りを少し減らして貸している。このときに得られる山車貸し付け金は翌年の大祭や山車製作に不可欠な運営資金となっている。

記録類 古館光治「ホイドブクロ—八戸三社大祭を門付けから覗いて見て—」（『青森県の民俗』創刊号 青森県民俗の会 平成十三年）

② 淀町山車組

（大村 達郎）



写真一〇七 津用法師と鰯大漁の場（平成三年）



写真一〇八 南部七踊りと七福神（平成一〇年）

山車運行組織とその役割 淀町山車組は、町内会長から委員長を出してい るほか、副委員長、実行委員長、製作責任者、企画部長、運行責任者などを決めている。

山車の製作 前年の大祭が終了して間もないころから翌年の題材を考えはじめ、二月に役員会を開き、四月末までに決定している。山車の製作には、四月の半ばより一〇～二〇名ほどであたつている。

山車の趣向は「祝いもの」を特色としているが、製作した小物はほとんど残

すようにしているという。

祭りの実際 山車の運行の際には、委員長などの役員をはじめ、大太鼓、小太鼓、木遣り、手小舞、山車の引き子などが行列を組んでいる。

囃子は、大太鼓十五名、小太鼓四五名、笛二〇名（いずれも控え含む）で構成しており、昔から町内で囃子をやっている者や、木村氏が指導をしている。

門付けは、山車を運行する地域を中心に、根城→石堂→新井田→下組町の付近を回っている。

大祭終了後には、三沢市や七戸町、上北町、岩手県久慈市に貸し出していたが、平成十一年度から貸し出しの際の人手不足からやめてしまったという。

記録類 『はちのへ町内風土記』 デーリー東北社 昭和四二年

（大村 達郎）

③ 下組町山車組

地域の概況と山車組の沿革 下組町山車（「義勇組山車組」とも）の山車の運行には、下組町をはじめ、青葉町、江陽一丁目、江陽二丁目、小中野一丁目、小中野二丁目、緑町などの町内会所属の住民が参加している。

この山車組は、もともと消防団組織である「義勇組」に参加していた若者たちが中心となっていたものであつたといわれている。

山車運行組織とその役割 町内会会長を会長とし、副会長（山車統括部長）とともに下組町山車組の運営をとりまとめており、この下に若者連や婦人部、子ども会が置かれている。

山車の製作 山車の趣向は、若者連に所属する者が皆で協議して決めていくといい、元老の指導のもと、若者連・婦人部が参加している。下組町山車組の趣向はとくに定めたものはないというが、他の山車組からの評判として、「波」をあしらつたものが多いといわれている。

小物関係は担当者が自宅で三、四か月ほどかけて製作しているほか、婦人部をあしらつたものが多いといわれている。



は町内に所在する苅田会館で製作にあたり、山車小屋がかかると本格的な組み立てがはじまる。

祭りの実際 山車の運行の際には、町内会長などの役員をはじめ、若者連に所属する者約四〇名、町内や青葉町や江陽地区などから募った子ども会約一〇〇名ほどで行列を構成している。

囃子は、大太鼓、小太鼓、笛から構成されている。若者連の男性二名・女性二名が指導している。

門付けは、旧市内全般を三～四班が回るようにしている。

記録類 特になし。

(4) 内丸附祭親睦会

地域の概況と山車組の沿革 内丸地区は、戦前から戦後にかけて、第一～

第五八幡町を名乗つており、各町会ごとに青年会が個別に所在していたという。戦後の混乱が治まらない昭和二五年に、地域の発展と交流親善を図るため、八幡町各町会の若者たちによつて「八幡町連合青年会」が結成された。町会の運営や、町内の清掃・各種行事を行うなかで、山車を作つて三社大祭に参加しようという機運が高まり、人形や衣装を塩町附祭などから借りながら製作にあつたといふ。昭和三三年頃に町名を八幡町から、現在の「内丸」へと改めた。

山車の製作組織は、昭和四六年頃に内丸附祭親睦会に引き継がれ、今日に至つては、同会に参加しているのは、現在の名称で、第一内丸、第二内丸、第三内丸、第四内丸、第五内丸などの各町会である。

山車運行組織とその役割 内丸附祭親睦会は、内丸町内在住者が主体であるが、他地域に転出した者や、親戚、友人仲間などが加わつて山車の製作・運行にあたつている。役職には会長一名、製作部長一名、副製作部長二名をはじめ、会計、運行委員長、衣装係などが各一名ずつ置かれている。

山車の製作 現在、下絵の製作は、五、六年ほど前に世代交代ということから、若い世代から選出された者三名があたつてはいる。四月中旬までに山車の題材を決定する。

内丸では「武者もの」を得意としていたが、ここ数年は山車の趣向を限定することのないようにしてはいるといふ。下絵ができたら先輩たちにお披露目をする。五月第日曜日を目途にコヤビラキ（小屋開き）をしている。製作は月単位・十日単位の目標を立てながら進めている。一日一日の作業が終了するたびに打ち合せを行い、途中経過を確認するようにしてはいる。

山車の可動する飾りに特別な名称はないが、いわゆる展開する仕掛けを「前の回転」「前の開き」と呼んではいる。

祭りの実際 製作中の山車を見に来る者があり、大祭終了後の山車の貸し

付けの予約をしていく。貸し出しは一年ごとに約束を交わすものであるが、三沢市や岩手県久慈市にはよく貸し出している。貸し出しが終了すると、山車は解体されて小屋に収納される。反省会は大祭終了後すぐ行われるわけではなく、山車が貸し出しから戻つてくる十月に開いてはいる。

記録類 『平成十一年八戸三社大祭 内丸附祭親睦会結成五〇年記念誌』自刊 平成十一年

（大村 達郎）

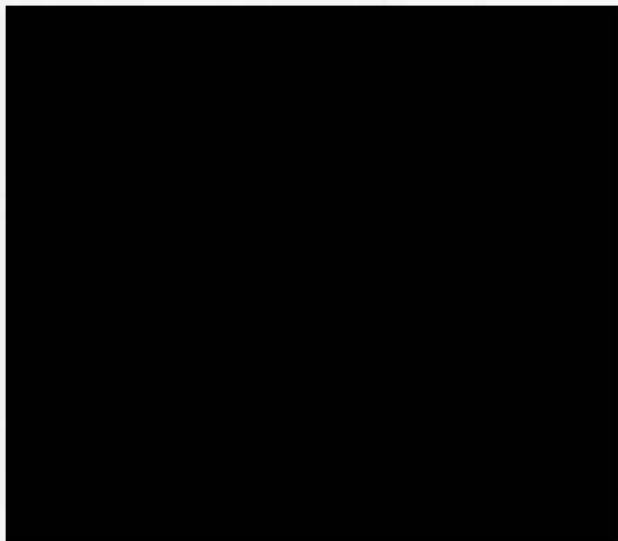


写真113 児島高徳(昭和14年)

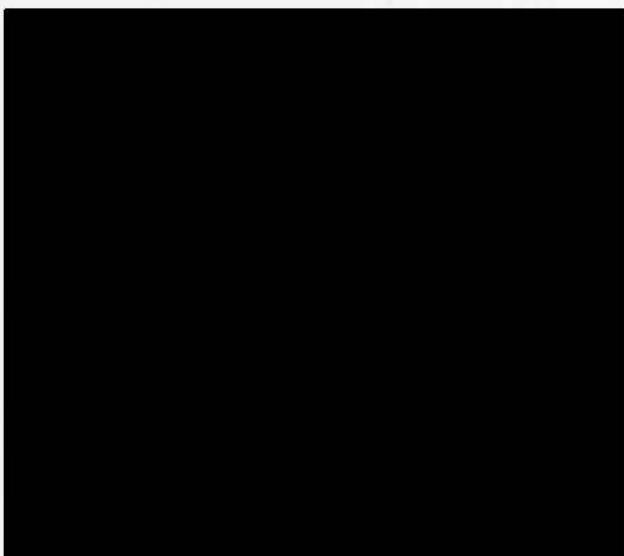
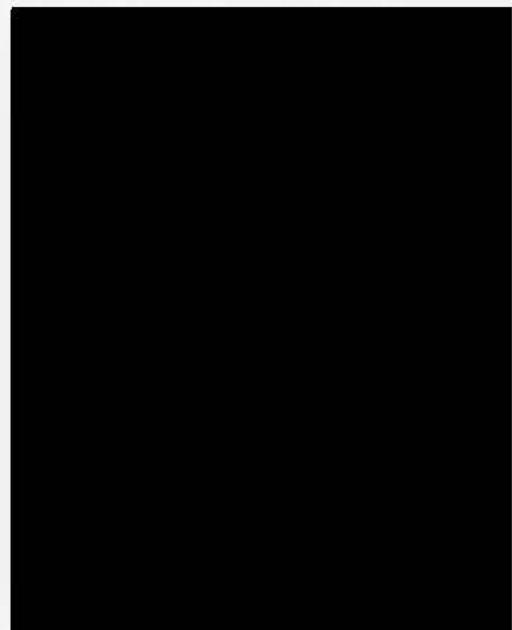


写真114 安珍清姫(昭和31年)



写真118 京劇 百花公主（平成10年）



⑤ 新井田附祭親睦会

写真一一 宝船に七福神（平成五年）

地域の概況と山車組の沿革 昭和五三年に発足した団体である。

山車運行組織とその役割 会長一名、総務財政副会長一名、製作副会長一名、会計一名の下に、製作部長、総務部長、囃子指導部長、交通安全対策部長、子ども安全部長を置いている。

運行の際には、会長、副会長、大太鼓、小太鼓、手小舞、木遣り、引き子の、総勢二二〇名から構成されている。

山車の製作・解体 山車の題材は、二～三月頃に製作部会で案を練り、四～五月の総会で決定する。構成が決まり次第、製作を開始している。製作にあたっては、製作部長が中心となり、一〇～二〇名ほどが従事している。



山車の趣向は、ここ数年「祝いもの」を作っているが、以前は「武者もの」であった。

人形の顔などは東京方面から購入している。人形の顔や体、衣装など、再利用できるものはバラバラにして保管している。

祭りの実際 囃子は町内自前の編成を基本としており、出身者などにも声を掛けている。大太鼓一〇名、小太鼓五〇名、笛二〇名（いずれも控え含む）から構成されている。囃子指導部長や経験者が練習指導をしている。

記録類 特になし。

（大村 達郎）

⑥ 城下附祭実行委員会

写真一二三 七福神（昭和五〇年）

地域の概況と山車組の沿革　城下附祭実行委員会（「城下附祭山車組」とも）は、城下一丁目町会、城下二丁目町会、城下三丁目町会、城下四丁目町会で山車組を構成している。当初、この山車組は城下四丁目町会のみで発足したが、昭和四九年一月に当地区を学区とする八戸小学校が火災によって焼失したため、小学校の再建と地区の発展を願つて一～三丁目の町会がこれに加わり、昭和五〇年に結成されたものという。

山車運行組織とその役割　四人の町会長が実行委員となり、うち一人を実行委員長として選出している。また、山車（運行）責任者と製作責任者を一名ずつ置いている。その他に山車人形の衣装の準備や、山車製作・大祭の際の食事作りを婦人部が行っている。山車の製作が佳境に入ると、城寿会という老人会組織の人々も花飾りの手伝いなどを行つている。

山車の製作・解体

製作責任者が題材の原案を考え、直接作業にあたる者たちとともにスケッチを見ながら決定していく。かつては他の団体と題材が重なることがあつても、それをよしとする風潮があつたという。製作指導は製作責任者が行い、山車組の有志とともに製作にあたる。

山車の製作は山車小屋で行う。近年、山車小屋の仮設場所を確保することが困難になつており、毎年のように場所を替えているといふ。

城下の山車の装飾や趣向には、とくに決まったものがないといい、その年の題材に応じて新しく製作しているといふ。ただし人形の頭などについては、以前使用したものを使つておき、題材に応じて選び、色の塗り替えを行つて使用している。その一方で、人形の衣装などは東京方面に発注して購入している

写真一二五 逃かなる原始七福神と伝来変貌（平成四年）



写真一二六 南部俵つみ（平成十年）



という。華美な装飾を施したものが入手でき、費用も安価で済むためという。

山車の仕掛けは、近年の八戸三社大祭では主流を占める四種（セリアガリ、テンカイ、ヒキダシ、オキアガリ）が備えられており、城下では「オキアガリ」を、バツタンコと呼んでいる。

祭りの実際 ツケマツリ（附祭）の先頭にジャガラを持った女性を二名立てているが、この役は着物を着付け島田彌を結つて着飾るため、人々の注目を浴びることから人気のある役となっている。

ツケマツリの運営資金を得る手段の一つに「門付け」がある。門付けには、オンドトリ（音頭とり）をはじめ、札配りをする者、祝儀集めをする者などがあり、一〇人程度のグループを三組作り、木遣りをあげながら各町内を廻っている。門付けの音頭には家・屋敷を褒める唄があり、「〇〇様のお座敷は……」という具合に木遣りをやると、ご祝儀がはずむ場合があると。いう。城下附祭の門付けの範囲は、長横町などの繁華街や、沼館、江陽、根城、売市、柏崎、塩町、内丸（一部）にまで及んでいる。

囃子は、大太鼓・小太鼓・笛から構成されている。かつて囃子を習得するには見様見真似であつたというが、現在は、大祭の一か月前から地元の公民館で練習を行つて、特定の指導者がいるわけではなく、経験者が未経験者や経験の浅い者たちを指導して習得しているという。囃子の笛には、山車が動く際に演奏される曲と、ヤスミバヤシ（休み囃子）の二とおりがある。

三社大祭が終了すると、他の市町村で開催される祭りに山車を貸し出す。これによりに得られる山車の貸し付金は、山車組にとって次年度の祭りや山車製作に欠かせない運営資金となつていている。城下では、十和田市や七戸町、百石町などに貸しているという。

記録類 特になし。

⑦ 柏崎新町附祭

地域の概況と山車組の沿革 柏崎新町附祭には、柏崎三丁目、柏崎四丁目、柏崎五丁目、柏崎六丁目などに居住する住民が参加している。

山車運行組織とその役割 製作責任者と運行責任者のみを置いている。山車の製作及び運行は有志によつて支えられていることから、他の役職は設けていないという。山車の運行の際には、大勢の引き子とともに、運行責任者、交通整理などが行列を構成している。

山車の製作・解体 山車の題材は、有志の間で話し合いが持たれ、製作責任者が決定する。一部の小物については、業者へ発注することもあるが、原案のイメージと異なることもあるという。柏崎新町附祭の趣向は童話をモチーフとしたものが多いという。

五月中旬に小屋がけをし、六～七月の二か月間で山車を完成させるよう作業を進めている。かつては大祭が終了したのちに壊して燃やしたという。今は土台と人形の頭・小物を残しておき再利用している。

山車の仕掛けには、セリアガリ、テンカイ、ヒキダシがある。山車の土台にはエンジンが積まれており、参加人数が少ないので早い時期から導入したといふ。

祭りの実際 山車の運行の際には、多数の引き子を要する。男は浴衣に足袋・草履姿、女性は浴衣に赤い腰巻、子どもたちは揃いの法被にたすきを掛け

（大村 達郎）

て行列に加わっている。

囃子は、大太鼓一名、小太鼓五名、笛（六穴六本調子）十一名から構成される。太鼓は山車の前に乗り、笛は山車の前行列を組む。

門付けは、市内全域にわたって回るようにしている。顔見知りがいるところでは祝儀がはずむが、山車組を持つ町内からはあまりもらえないという。

大祭終了後、岩手県野田、十和田市相坂、七戸町、百石町の順に山車を貸し出している。貸し出す際には、移動に邪魔にならないよう飾りを少なめに手直ししているという。

記録類 特になし

（大村 達郎）

⑧ 下大工町附祭組

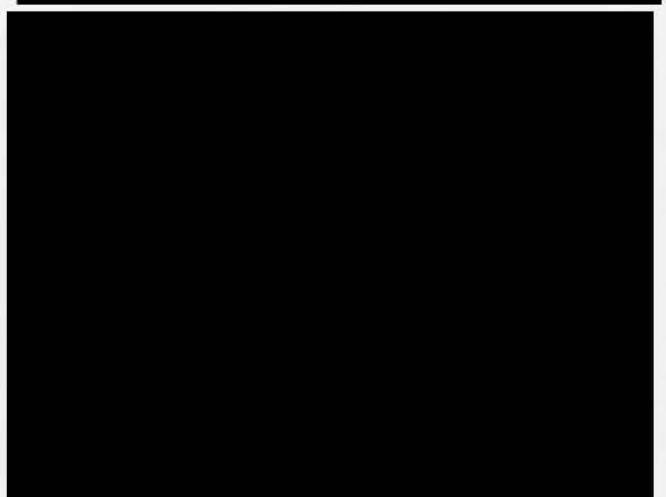
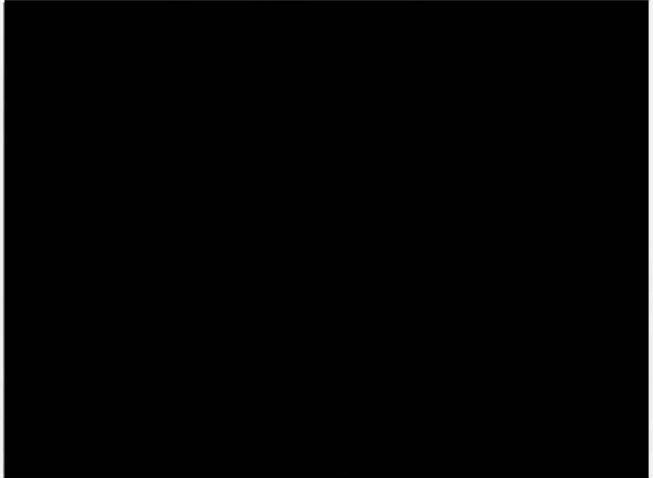
写真一三〇 足柄山の金太郎（平成一〇年）
地域の概況と山車組の沿革 下大工町、若葉町などの町内会をはじめ、類家や青葉などの地域の住民が参加している。

山車運行組織とその役割 親方一名、補佐役親方三名、製作責任者のほか、年輩者を相談役として置いている。

山車の運行の際には、運行責任者、旗持ち、手小舞、引き子、木遣り、笛、小太鼓、大太鼓の順で並ぶ。

山車の製作 山車の題材は、まず製作責任者が考え、後に役員で検討して決定する。例年三～四月までには決めるようにしているという。五月下旬から製作を始め、大祭直前になると徹夜になることが多い。

古くは、山車名人と呼ばれる村井四郎氏に頼んで製作していたが、近年は若



写真一三三 永平寺開祖道元禪師(昭和三七年)



写真131 大黒様 (昭和2年)



写真132 天人お国 (昭和33年)

写真一三五 児雷也 (平成十二年)



写真一三六 同見返し



山車の小物等はそれぞれ取つておき、題材に合わせて使用するようにしている。ほとんどが自主製作であるが、各山車組どうしで人形などの貸し借りをすることがある。

山車の運行の際には、運行責任者をはじめ、旗持ち、手小舞、山車の引き子、木遣り、笛、小太鼓、大太鼓の順で行列を構成している。大祭では、男は消防の組に由来する三組紋の入った浴衣を着、子どもは揃いの半被を着ている。

囃子は、大太鼓一名、小太鼓五名、笛四〇名からなり、太鼓などは叩けるものが多いている。太鼓は山車の前に乗り、笛は山車の前に行列を組んで歩く。町内に住んでいる者だけでは構成できないことから、市内の広い地域の子どもたちが多く参加するよう働きかけているという。練習は町内の駐車場で行つており、経験者がそうでない者を指導する形で進めている。

門付けは、町内、及び学区内、山車組のある町内を回つてている。

(大村
達郎)

⑨ 十一日町龍組

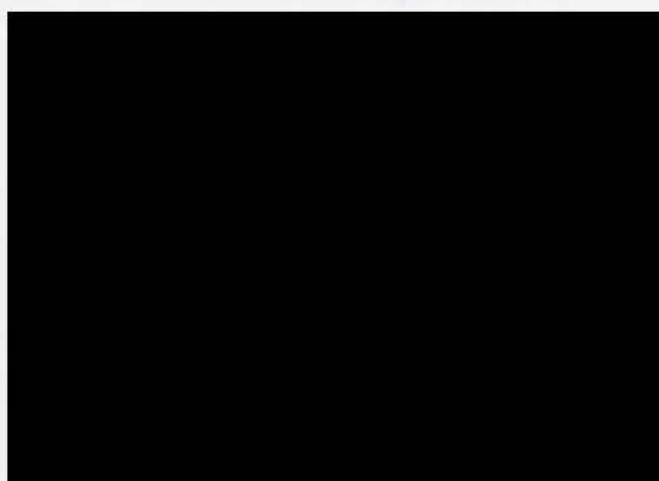
地域の概況と山車組の沿革　十一日町をはじめ、若葉町、十八日町などの町内会所属の住民が参加している。龍組は明治時代創設の消防組の名である。今日では十一日町内会と龍組は同じ組織となってしまっている。

山車運行組織とその役割　相談役や顧問のもとに、山車責任者兼製作責任者一名、運行責任者一名、お囃子責任者一名を置いている。山車が運行する際には、運行責任者一名・山車統率者六名、引き子など、総勢二〇〇名から構成される。

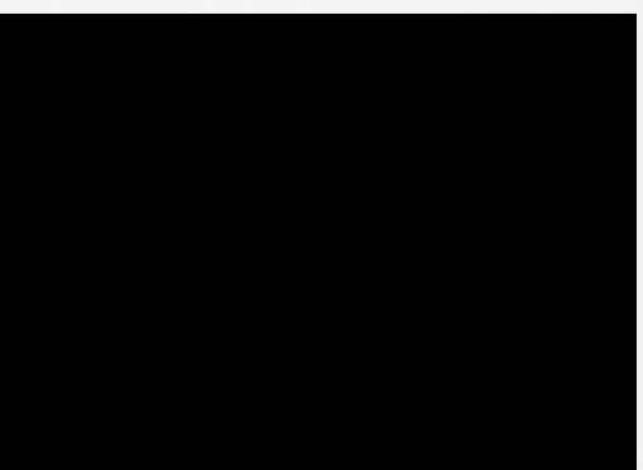
山車の製作　山車の題材は、一月に山車製作会議を開き決定していく。山

車は毎年自主製作で、諏訪の山車小屋、十一日町屯所などで行つてている。製作

写真一二七 天竺徳兵衛（昭和二九年）



は五月月中旬から始め、大祭直前までである。仕掛けには昇降、回転、開示などがある。



写真一四〇 風流才女紫式部（平成一〇年）

祭りの実際　囃子は太太鼓一名、小太鼓五名、笛（六穴六本調子）から構成される。太鼓は山車の前に乗り、笛は山車の前行列を組んでいる。囃子の練習は大祭の一か月前から屯所で行つており、指導は経験者が当たつている。

門付けは市街中心部を回つている。

三沢市、上北町、十和田市、岩手県久慈市などに山車を貸し出しており、この際に得られる貸付金は、山車製作に不可欠な資金源となつていて。

記録類

『十一日町龍組 八戸三社大祭山車参加一〇〇回記念』　自刊　平成一〇年

（大村
達郎）

写真一四一 大楠公（昭和十一年）

写真一四二 怪猫佐賀の夜桜（昭和二十五年）

地域の概況と山車組の沿革　塩町は、国道四五号線と同三四〇号線の交差点近くに位置し、明治時代には馬車屋や農業を営む者が多く居住したと伝えられ、大正時代より住宅地として急速に変貌を遂げた地域である。

塩町には、山車組、消防団組織（和合組）、えんぶり組、町内会の四組織があり、勇み肌の若衆やダンナ衆が多かつたことで著名であつた。

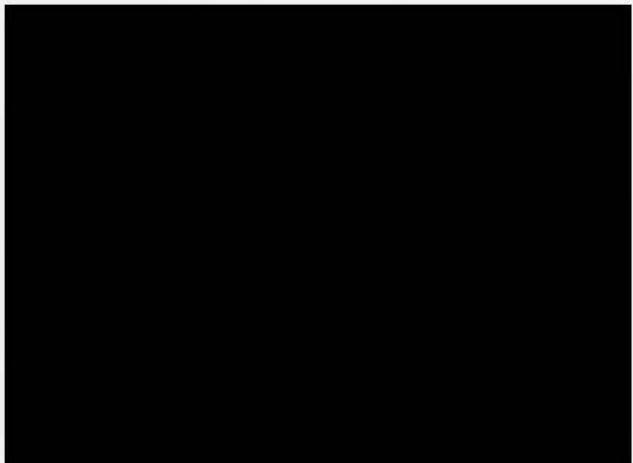
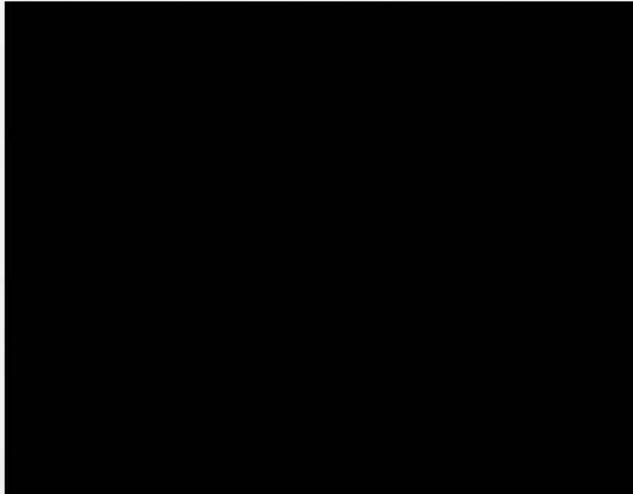
塩町でのツケマツリ（附祭）は大正時代末から始まつたものといわれている。現在の山車の運行には、塩町の住民が中心となつて参加している。

山車運行組織とその役割　塩町御祭組（「塩町山車組」とも）は、かつての消防団組織（「和合組」）の流れを汲む「塩町若者組」が中心となつてゐる。和合組の名は、和吉・三新の両者が手押しポンプを町会に送つたことに始まるといい、町会運営の中心を担つていた消防団組織の結束の強さをうかがい知ることのできるエピソードである。山車組の役員には、製作責任者一名、その他の責任者として四～六名を置いており、任期は四年である。

山車の製作・解体　よい山車を作るには四～五ヶ月の準備期間を要するといい、前年のうちに翌年の題材を考え、五月ごろには決定し製作にあたる。

全て手作りで、人形の顔なども型に入れて作つてゐる。会長である田村安博氏は大工仕事の心得があり、平成一〇年には人形を十七体も作つた。以前は東京方面から職人が三名ほど來たこともあるが、現在は自主制作が主流であるといふ。

山車の製作は山車小屋で行つてゐる。靈神社の総代を務めるダンナサマ（河内屋）の地所を二五年前から山車小屋の用地として借りてゐる。



写真一四五 歌舞伎舞踊花競姫姿舞踊 平成十二年)

写真一四六 同 見返し 無島えびす大黒



とりたてて教えていないが、子どもどうしで経験者がそうでない者を教える形で進めている。

門付けは、参加町内の周辺のみに限り行っている。責任者がホドブクロ（祝儀入れ）を持ち、一グループ一〇名ほどで三～五班が回っている。祝儀がたくさんになると木遣り唄を歌う。

山車の貸し出しを行っており、三沢市、岩手県野田、五戸町、七戸町、百石町、岩手県久慈市、岩手県軽米町、岩手県普代村などに及んでいる。三〇年来のつき合いであり、運送は片道のみで後は次々に運んでもらう。近年、祭りの開催日が各地とも週末に固まる傾向があるといい、多くの地域に貸し出しができなくなつてきていている。

記録類 『はちのへ町内風土記』 デーリー東北社 昭和四三年

(大村 達郎)

⑪ 青山会

塩町御祭組の山車の趣向は「波山車」が基本であるという。また一見してわかりやすい構図を常に心掛けているという。

山車の仕掛けには、セリアガリ、テンカイ、ヒキダシの仕組みがある。

かつて山車の解体にあたつては全てをバラバラに壊して処分したが、材料費のみで大きな負担になり、一度使つたものを再利用するようになつたといふ。また他町と交換したり、貸し借りもしている。

祭りの実際 ツケマツリ（附祭）に参加する子どもは、張り紙などで募集している。

囃子は、大太鼓一名、小太鼓五名、笛（六穴六本調子）数名から構成されている。太鼓は山車の前に乗り、それ以外は山車の前行列を組んで歩いている。囃子の練習は、山車組では山車の製作に忙しく、指導する余裕がないことから、

山車運行組織とその役割 役員は会長一名、副会長二名、製作責任者一名、運行責任者一名からなる。

山車組の沿革 青山会は、正式には「青少年の山車を制作運行する会」といい、昭和四五～五二年にかけて山車を製作・運行していた青年会議所に、昭和五三年から八戸市青少年サークルが加わつて、合同で山車を製作・運行するようになった団体である。他の山車組が町会組織を基盤に山車組を構成しているのに対し、一つの事業所が中心となつて実際の山車の製作・運行に携わつており、今日の企業参加の先駆けとして注目される。

山車組の目印として、昭和五六頃から副会長である末林氏の提案で「御所車」の紋を浴衣に入れるようになった。

山車の製作 若者中心で題材を決め、経験者の人たちから承認を得るようしている。青山会では、山車の趣向に、歌舞伎もの（新歌舞伎）や中国もの、武者ものなどに様々な趣向を採用している。

実際の製作は、五月の連休が明けてから始めるが、一日に七、八名ほどが出ている。追い込み時期には十五名ほどで製作している。小物や人形など再利用できるものは保管しておくが、その他は毎年新しく作っている。また必要に応じて、他の山車組と貸し借りもしている。人形の顔や衣装などは、地元で製作するよりは東京方面から購入してくるところが多く、この方が安価ですむという。

山車は規格に合わせて製作しており、仕掛けにはセリアガリ、テンカイ、ヒ

キダシの仕組みがある。いずれもとくに決まつた呼称はないという。

祭りの実際 山車の運行の際には、会長などの委員をはじめ、大太鼓、小太鼓、木遣り、手小舞、山車の引き子などが行列を構成している。

門付けは、江陽や石堂、下長などを中心に回っている。

囃子は、大太鼓一名、小太鼓二名、笛二〇名から構成される。青山会有志が中心となつていて、縁故のある人や町内、沼館一・三丁目からも募つていている。太鼓は山車の正面に配置し、それ以外は山車の前に行列を組ませている。囃子の練習は山車小屋で行い、先輩から習つていている。

記録類

「デーリー東北（新聞）」昭和五三年八月二二日付

デーリー東北社

（大村 達郎）

（三）新羅神社

① 糸塚附祭組

地域の概況と山車組の沿革 糸塚は八戸市中央部南方に位置し、地域内に長者山新羅神社が鎮座している。また、小学校、県立高校、市立図書館などの公共施設のを抱え、その長者山小丘陵の周囲には寺院街が形成されており、盆地には賑わいを見せる。国道沿いに住宅街が広がり、多くの世帯数を持つ。

糸塚には東糸塚、西糸塚、南糸塚、北糸塚の四つの地区が含まれ、現在、この四つの地区が協力し、一つの「糸塚」（または、「糸塚附祭組」）を形成している。

現在、山車組メンバーは三〇名弱である。この参加者の多くは町内の親の代からの参加者であり、現在も地域の子どもの代へと継承されているという。その他に他地区から、友人をつてに自由参加もあるという。

山車運行を始めた時期は定かではないが、新聞記事などには昭和三五年から当町の山車運行が記載され始めている。当初は消防の旧「義勵組」が、山車行列の取り締まりとして参加していたという。

この義勵組は藩政時代から活躍している有名な消防組の一つだという。現在の義勵組は、山車運行のOBとして元老サンと呼ばれ、えんぶりのメンバーでもあるという。

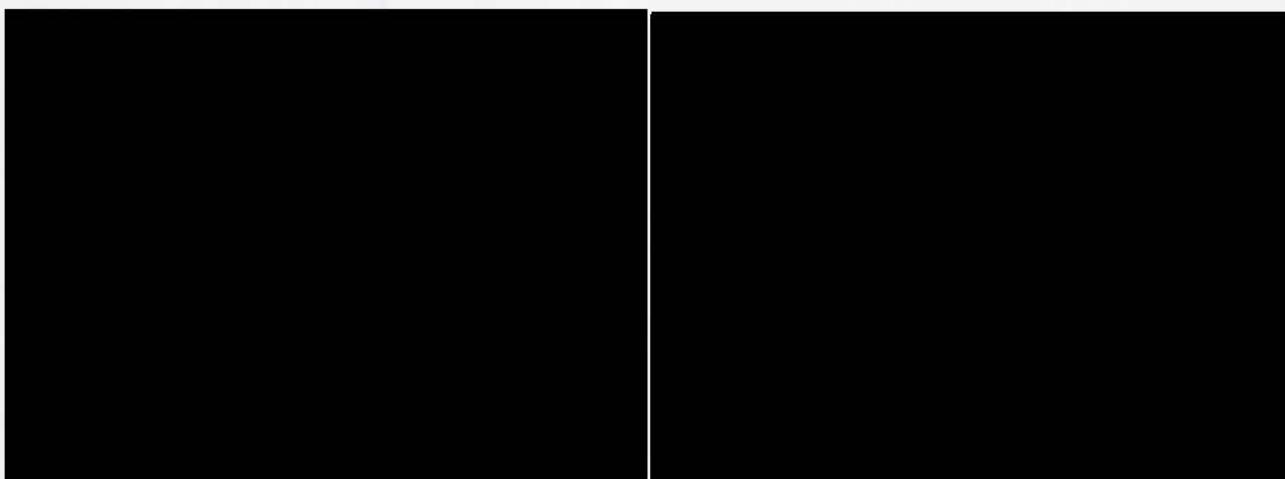
現在は祭りと消防団の直接のつながりはないが、消防一分団三班の屯所が、人形の作業小屋として使われている。

山車運行組織とその役割 「糠塚附祭組」として委員長一名、副委員長四名、書記一名、会計一名、製作委員長一名、副製作委員長一名、運行委員長一名、運行副委員長数名、運行委員二名、歴代の委員長が就任する顧問十名からなる。

各役職はおよそ任期二年であるが、本人の意思で継続される。引退した元老が、祭り自体に参加することはないという。

山車の製作 山車の題材は、前年度末の会議で製作委員長が発案する。その際には、元老となっている前製作委員長に相談しながら、過去の題材と重複しないよう真新しい題材を考えるという。

四月から五月に山車の構想を製作委員長が決定して下絵を発表する。ここ一〇年間の下絵は下館正光氏に依頼しているという。その後すぐ、製作作業が五月から七月にかけて山車小屋や屯所で始まる。製作委員長が約二〇名を指導す



写真

五一 加賀美流附伝

八戸騎馬打毬（平成元年）



るという。

まず山車小屋での土台の鉄骨部分の補強作業が始まり、屯所では飾りの彫刻や人形の製作が並行して始まる。土台は、ほぼ自主製作であるが、人形の着物は東京の業者に発注している。また飾りの一部は、他の山車組と部品を貸し借りしている。

山車の大きさは八戸市の規格通りで、油圧式シリンドラーを備えてセリアガリ（昇降）、テンカイ（展開）、ヒキダシ（引き出し）の機能を持つ。

祭りの実際　囃子は常時二〇名おり、山車上の正面横に大太鼓一名、正面に小太鼓五名、山車前を笛十名が歩く。囃子の練習は屯所で行い、お囃子部長が指導している。

門付けは市内の糠塚、板橋、長者などを歩いており、山車と離れて歩くといふ。三社大祭終了後、山車は毎年、県内の十和田市、百石町へと貸し出し、平成十二年から三沢市などにも有料で貸し出している。

その貸し出しから返却されてきた後、十月頃に山車を解体するという。

記録類　特になし

（小山 隆秀）

山車組運行組織とその役割　町内会とは別組織の「十六日町」（または「十六日町附祭」）がある。山車組委員会がその中核となり、委員長、会計、監査の役と、囃子の指導者、運行委員で構成されている。任期はとくに無く、現委員長は十年間継続しているという。

山車の製作　制作責任者を含めて約二〇名で制作している。平成十一年度は制作責任者が新しく交代し、題材は「竹取物語 十五夜の迎え」、見返しは「竹取物語 五人の皇子と姫」である。

山車は毎年、土台から新しく製作している。飾りは平成十一年に導入したウインチでセリアガリ、テンカイ、ヒキダシ機能も備えている。しかし、現在も

② 十六日町附祭

地域の概況と山車組の沿革　十六日町は市の中央部に位置する商業地域であり、多くの店舗が軒を並べる八戸のメインストリートに位置する。

現在、地域は商業都市化が激しく、当地域に居住する世帯数も激減しており一〇〇軒に満たないという。しかし、藩政時代には、畠屋、大工、桶屋などの多くの職人が住む町で、多くの物資とともに馬喰が集まり、市が立ち、馬喰町とも呼ばれたという。

新聞記事などによる当町の山車運行の初出記録は明治二九年である。昭和一〇年代の運行中断を経て、同二三年の再開以降欠かさず運行しているといふ。かつて、この町の山車運行には消防組「義組」が関係してきたという。これは明治初期に、赤穂の義士討ち入りにちなんで「義」の名をもらつて、成立した組だといい、現在そのOBは「義友会」を結成している。現在の山車運行に参加する町は、ほぼ当町内の人々に限られている。

なお土台は人力で引いているが、非常に重くて取り回しが利かないため、若者から動力エンジン導入を希望する声がある。

昔は山車の搭載人形数が少なく、大きな人形が一、二体だけで、人形の体には藁や綿を詰めて、筋肉まで表現したものだという。動物は竹で作つたものだといわれる。現在の山車は見栄えを考えて、搭載する人形は小型で数が増え、約二七体載せている。人形や飾りはすべて発泡スチロール製で、手軽に熱線でカットや加工がしやすいという。しかし近年再び、人形の大型化の傾向が見られるという。

また、昔の山車制作作業には若者や子供どもたちも参加しており、彼らが直接製作現場に触れて実体験しながら、制作方法を覚える機会があつたものだという。例えば、紙貼りにもコツがあるという。きちんと貼れば空気が入らず剥がれにくく、色もきれいに塗りやすいものだという。紙は、下の部分から上方へ貼つてゆくと、継ぎ目に埃がたまりにくいものだという。しかし、そのような技術やコツを伝承する場が無くなつたという。

昔の制作場所は、消防屯所の二階にあり、そこで人形を作つた。現在は市内諏訪の検診センター（学校用地）にコヤガケ（小屋掛け）する。そのためか近年、小屋付近の小中野地区在住の子どもたちが運行に参加してくれるようになつたという。六月にコヤガケが始まり、チョウナダテ（手斧立て）をやつて、祭りの準備が始まる。

人形は、かつて町内に住んでいた人の倉庫を二か所借りて、解体してシートに包んで保管しているものを再利用している。しかしその保管場所も、諸般の事情から点々と移つているという。

祭りの実際 運行日の参加者は、当町内在住の人が四、五名、転出している人やその知人、自由参加の人を入れた約二〇名の大人に、約一五〇名の子どもが参加する。

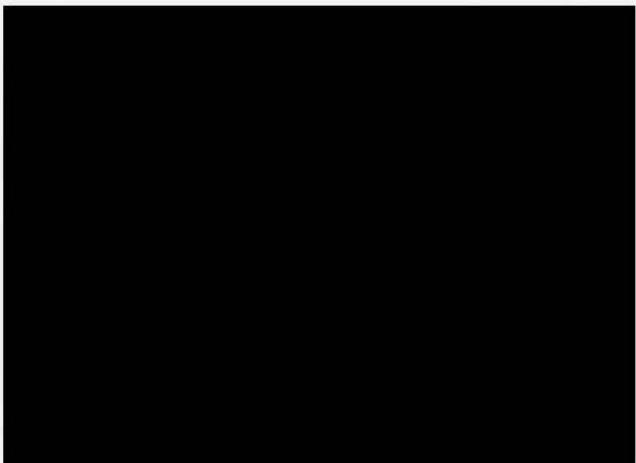
写真一五三 鎌倉三代記（昭和八年）



写真一五五 かぐや姫満月への旅立ち（平成二年）



写真一五六 同見返し 龍の玉を取りに行く貴公子



大人の衣装として、消防団OBの会である「義友会」の長半纏を着たり、昔は刺し子も着たという。子どもの衣装として、半纏と山車組で制作した花笠を貸し出して着せている。参加する子どもの名簿を作成することはないが、全体の九割は他町の子どもであるという。その子どもたちにはお菓子、弁当を支給している。

行列は、先頭が旗持ちで、二名のジャガラ持ちが後に続く。囃子方は山車上に大太鼓一名、小太鼓五名が乗る。山車前を笛が歩くが、本来、笛は二名だけが山車に乗るものだという。これらの囃子方は、他町の女子学生も多く参加しており、「行列の真ん中で笛を吹きたい」と参加して来るのだという。

囃子の練習は近くの天聖寺で一か月近くを行い、予行練習として祭り一〇日前の七夕期間に、市内の大型スーパー・マーケット前のイベントに参加する。

門付けは八戸市内全域へ、一班十名で三班が展開する。班員には中・高生もあり、オンドトリ（音頭取り）、祝儀袋持ちなどの役割がある。祝儀額はさまざまで、あらかじめ包んで用意し待っている人もいる。御祝儀をもらうと門付けの紙を渡すが、一、〇〇〇円以上の祝儀があがれば唄をやる。

製作・運行にかかる予算項目として、町内の寄付、市からの補助金、門付け、展示費、貸し出し費があるという。

また、運行には「十六日虎舞」が参加する。虎舞は、戦前は消防団「義組」が中心となつて舞っていた。消防団の衰退により、その役目は町内会へ、そして現在は市内の鳥谷部町へと任されている。

山車は祭りの他にも、お盆中に市内の大型店前に展示したり、祭り終了後には岩手県大野村、野田村へ一回約二五〇三〇万円で貸し出す。貸し出す際は手間を省くため、先方から山車を取りにきてもらうという。

③ 長横町山車組

地域の概況と山車組の沿革　長横町は八戸市中央部に位置し、朔日町に接する商業地域である。大正末期から飲食店が並び始めたとされ、昭和三〇年代には八戸有数の歓楽街となり、夜間は多くの客で賑わう町となつた。現在も一大歓楽街であるが夜間の賑やかさとは対照的に、町内に居住者はほとんどいなといいう。

山車の運行の開始は新しく、当町生まれの長横町商店街副会長十日市雅一氏が中心となつて、昭和六〇年頃に始めたといいう。

当町は昔から子どもが少なく山車運行も無かつたといいう。そのため山車運行に参加したい十日市氏は、幼い頃から母方の実家のある本鍛冶丁の山車運行に参加していた。

同氏は成人してからち、長横町商店街活性化のためにも山車を作ろうと奮発し、昭和六〇年当時、既に山車運行をやめていた小中野大町二丁目から、三年契約で山車を借りてきたといいう。

それから、部品を組み替えて、飾りを増やして改造したその山車で、三社大祭に参加したのだといいう。

当初は三年間運行したらやめる話であつたが、運行開始五年目には製作に今井信明氏を招いて最優秀賞を受賞し、平成二年度には天覧記念の栄誉を受け、三沢漁港に展示された。そのまま参加が続いて現在に至つている。

そのため、当町の山車運行のスタイルには、かつて十日市氏が参加していた本鍛冶丁の山車運行のイメージが投影されているといいう。しかし現在、その原型となつた本鍛冶丁は山車運行をやめており、当時の本鍛冶丁山車組関係者は、

長横町山車組を見て、昔を懷かしむといいう。

山車運行組織とその役割 現在、十日市氏が先頭となつて、新聞広告などで自由参加者を募り「長横町山車組親睦会」(または「長横町附祭山車組親睦会」)の名で山車を製作・運行している。組織は、山車組会長一名、山車組副会長二名、運行責任者一名、制作部長一名、制作副部長二名、総務(副会長兼任)一名、会計(商店街副会長と兼任)からなる。

忙しい運行現場では、十日市氏が一人でメガホンを首にかけ、山車のハンドルを握つて声を張りあげて、運行指揮、山車運転手、オンドトリ(音頭取り)のすべてをやることもあるという。

運行に参加する町は長横町を中心に、市内の長苗代、岬台、内矢沢、南類家、吹上、白銀、朔日町、長者、沢里や、市外の百石町からも集まる。商店街のお客や知人、友人などを通じて集まつてくるのだという。

また他にも、自らの町内に山車が無い人々や、他町の山車参加人数制限から漏れた人からも参加希望がある。現在、その中でかつて参加していた小・中学生が、そのまま山車制作・運行の継承者として成長してきているという。

費用は、市からの補助金の他に、商店街や個人からの寄付でまかなつてある。

門付けは、一班三、四名で五班分結成され、尻内や小中野などの市内全域へ展開する。玄関先で節の中にその家の屋号を入れて歌うという。これらの門付けの太鼓、笛のオンドトリ(音頭取り)も十日市氏が指導したものである。門付けには山車は連れていかないという。

山車の製作 山車の構想は前年の十二月には決定しているという。翌年三、四月に製作スタッフが町内の顔合わせでお披露目をする。

当町の山車は当初の十年間は「七福神」をモチーフとしていたが、近年は「中国もの」が多い。現在の山車の構想は今井信明氏と土田誠氏が中心となり、参加から十五年間連続して受賞を果たしてきたという。しかし、平成十二年度

は初めて受賞を逃した。そのショックから、平成十三年度から制作部長として夏坂和良氏を招き、すべての山車作り計画を刷新し直すのだという。

製作作業は、五月の連休明けから始まる。山車小屋の場所は、長横町、若葉町と変遷し、現在は南類家に落ち着いている。

まず有志の参加者十四、五名の人員配置と、部品の調整から始まる。作業は七月から佳境に入り、夕方六時から深夜二時まで行い、小屋に泊まり込む人もいるという。特に祭り直前の二〇日間は作業量が多くてきつく、朝四時まで働くという。

六月からお囃子やオンドトリ(音頭取り)の練習が始まり、十日市氏の経営する店舗の前で、氏自らが指導している。主に小・中学生が集まつてくるという。普通はお囃子を始めると自然と子どもたちが集まつてきて囃子の練習が始まり、そのまま山車小屋製作作業の手伝いに連れていくものだというが、当町では山車小屋が遠く、手伝いに連れてはいけないという。

かつて八戸の各町では、山車小屋にはよそ者を入れず、飾り類を他町に貸すくらいなら燃やしてしまえ、というほど、町どうしの部品などの貸し借りはなかつたものだという。しかし、現在は山車の大型化に伴い予算負担も増加しているため、お互いの貸し借りも増えて組どうしで支え合っている状態だという。しかし一方では、町どうしの飾りの貸し借りによつて、三社大祭全体の山車飾りの質が低下したのでは、という声もあるという。

また、近年ますます人形の衣装も豪華になつてゐるという。本町の人形衣装は実際の人間が着用できるほどリアルな作りにしているという。そのため衣装の発注先も、地元八戸市内の業者から、製作費の安い東京都台東区蔵前の業者へと変化しつつある。

祭りの実際 お囃子は男性が大太鼓を一つ、小学生が五つの小太鼓を叩く。

笛は山車前を二〇名の女子高校生が練り歩いている。

山車はリフト機能を搭載しており、昇降機能を持つ。なるべく大通りや要所では仕掛けを展開して観客に見せるようになっているが、祭り行列全体の進行速度の管理上、あまりゆっくり展開してはいられないという。

しかし、沿道の客から、仕掛けを開いて見せてくれと声がかかり、お花をあげてくれる人もいる。その際には、「台組みの親方」（会長）の合図で展開させて見せることがあるという。

運行の他にも、平成十一年から八月一日、二日の夜に、当町の商店街を中心となつて「長横町お祭り広場」に山車を展示し、ライトアップしてバックにお囃子を演奏し、ビアガーデンを開いている。

山車は県内外へ貸し出している。山車の市外への貸し出しは、一般に山車が破損したりするケースが多いとされ、愛着の強い自分の町の山車だけに、非常に気を遣うという。そのため、大きな飾りを外したりして、簡略なスタイルにしてから貸し出すのが通例であるといわれるが、当町は積極的に外部へ貸し出している。

まず毎年、北海道苫小牧市の「湊まつりポートカーニバル」に山車を貸し出しているという。苫小牧市は八戸市と友好都市関係を結んでおり、長横町の入賞歴の多さから、苫小牧側から当町へ貸し出しの申し込みがあつたのだという。

力一二バルの祭日は八月の第一土・日曜日である。山車は十五トンもの重量があるため、苫小牧「ナラサキスタッフス株式会社」の砂利運搬フェリーで、八戸埠頭から毎年八月四日前後に海路で輸送している。また、お囃子人員として、長横町山車組から自由参加で子どもたちを派遣している。これらの必要経費、旅費もすべて苫小牧側が負担している。

年によって、三社大祭と苫小牧の祭日が重なるときは、前もつて長横町の製作委員が二、三日間で出張指導し、苫小牧で独自に山車を製作することになる。

写真一五七 天長地久七福神（平成二年）



写真一五八 新西遊記（平成一〇年）



既に苫小牧専用の台車部分は現地で準備されているため、製作は上部の飾り部分だけで済むという。

また、一度だけ十月頃に秋田県能代市にも貸し出されたことがある。苫小牧経由で海路フェリーで運んだという。それは東北地方の祭を集合させた「お名残フェア」という祭で、八戸三社大祭の代表として青森ねぶたや秋田の竿灯とともに参加したものである。

他にも、最優秀賞を受賞した年には大阪府の「大阪御堂筋パレード」にも招待されて参加している。

記録類 特になし

（小山 隆秀）

④ 六日町附祭若者連

地域の概況と山車組の沿革 市の中央部に位置する六日町は、大正期から鮮魚店が多く存在したことから、通称「魚町（さかなまち）」（または「肴町」）と呼ばれる。そのため昔から山車の題材も、魚や海に関連のあるものを作るといい、故村井治兵衛氏の作風の流れを汲む山車だという。

現在、当町域は急速に都市化が進み、商業地となり、雑居ビルが増えて八戸市のメインストリートとなり、居住人口が激減し、世帯数は五〇に満たないという。

このように町内世帯数の激減から、現在の山車の製作・運行は、「肴町若者連」を中心に六日町町内会の協力も得る他にも、当町からの転出者がいる近隣の口一丁（鷹匠小路）から縁故者、友人、自由参加者などを集めて「六日町附祭若者連」（または「六日町」）の名で山車を運行している。

また、当町の山車は明治期以前から運行していたといい、明治三五年から新聞記事などに山車運行が記載され始める。大正十三年の大火や、昭和一〇年代の戦時中に、一時中断したことがあるという。

山車運行組織とその役割 現在、当町には山車運行の中核となる消防団が存在しない。しかし、かつて祭り期間中だけ、当町に近接する鍛冶丁の屯所から消防団員一名が何らかの仕事で派遣されていたことがあるらしいという。

運行は、若者を中心に祭時期だけ活動する「肴町若者連」を中心、町内会が協力した「六日町」（または「六日町山車組」）という組織で山車を製作・運行している。

この若者連は昔から有志の集まりで、親から子へと世代交代しながらも継続している。

当町は新羅神社の氏子としてツケマツリ（附祭）に参加するが、「神明サンは一番偉い神様なので必ず行列の先頭に立つものだ」という人もいるという。

山車組の役職として、顧問、責任者、二名の副責任者、総務委員長、副総務委員長、会計、製作委員長、副製作委員長、運行責任者がある。

山車の製作 四月初めに若者連二〇名が、ホテルや居酒屋で集まり、会食しながら今年の山車の題材を話し合う。

五月頃、全体会議を開き、製作委員長が山車の題材を発案して決定する。昔から、魚町と呼ばれるため、必ず魚や海に関連した「波山車」や「岩山車」にするという。平成十一年度は「鮫ヶ浦に吉兆」で見返しはクジラと鰐をあしらつたものである。鯨は昔の作り方で竹細工を骨組にしていているという。しかし、近年は「歌舞伎もの」が流行しているという。

五月下旬には、町内にある山車小屋の「小屋掛け」を行う。その後、六月一日頃に「チヨウナダテ（手斧立て）」を行う。まず小屋に、山車のベースとなる「シタダイ（下台）」（または「ヤタイ（屋台）」とも呼ぶ）を入れて、長者山新羅神社の宮司を呼んで安全祈願を行い、直会をする。その後、自主製作作業が六月から七月にかけて行われる。製作作業には、約二〇名が参加する。昔から当組の山車の特徴である、波しうきや魚の飾りを使い、海に関係するものに仕上げていく。

山車の大きさは、幅四・五メートル、長さ十一メートル、高さ四・五メートルのはちのへ山車振興会の規格どおりであり、油圧式のセリアガリ、テンカイ、ヒキダン機能を開ければ幅六メートル、長さ十一メートル、高さ六・五メートルとなる。

人形や小物は、当町に屯所が無いため、山車小屋で製作する。人形の一部は首（頭部）を交換しながら他町会と貸し借りする。塗装作業にスプレー方式が

写真一五九 浦島太郎（昭和二五年）



写真一六〇 源為朝（昭和二八年）



写真一六一 娘道成寺（昭和三〇年）



写真一六六 鮫ヶ浦に吉兆（平成十一年）



なかつた時代には、絵の具を口に含んで直に「フーッ」と吹いて色付けしたも

のだという。

⑤ 類家山車組

祭りの実際 運行は責任者、副責任者と大太鼓五名、小太鼓一五名、笛一〇名、木遣り、手子舞、引き子の総勢一五〇名である。浴衣にも看町の特徴である魚と波しぶきの模様をあしらう。

大太鼓は山車中央に、小太鼓は大太鼓の左右に二、三名が乗る。笛は山車前方を歩く。囃子方は町内自前の編成で、山車小屋で若者が中心となつて練習している。

門付けは、市内の生鮮食品市場「八食センター」から尻内、国道四五線を通つて新井田へと、山車と離れてワゴン車三台で回るという。

祭り終了後の八月中、山車は県内方々に貸し出される。八月十一日頃には、市内の八食センターに貸し出し、その後十六日の晩に手直しを入れ、次は十八日から二〇日頃にかけて三沢市に貸し出す。二二日の早朝五時頃に当町に山車が帰つてくることになる。

貸し出しが終われば、山車を市内売市の山車の保管場所へ持っていく。八月

下旬から九月初めの日曜日を利用して、その場所で山車を解体し、再利用可能な部品はシートで梱包して、人形部品とともに保管するという。

そして九月中旬にカサヌギ（笠ぬぎ）があり、三、四〇名が集まり反省・慰労会となる。十二月には会費制の忘年会があり、その場で来年の山車の題材を話し合うという。

山車の製作 山車製作の組織には、会長一名と約五名の幹部がいる。祭り時期が近付くと協力者が増えるという。

山車の題材は、会長が案を提示し、幹部に相談しながら四月頃には決定する。平成十一年度は「長篠の合戦」で、見返しは織田信長、豊臣秀吉、徳川家康のホトトギスにまつわる句であった。

製作場所として、市内南類家一丁目一番の土地にコヤガケ（小屋掛け）して、土台部分を製作している。人形や小物は類家町民会館で製作する。五月から七月にかけて、午後八時から一〇時頃まで製作作業をする。しかし、付近は住宅地域のため夜間の作業時間は限られてしまうという。土曜日曜は朝から作業を

地域の概況と山車組の沿革

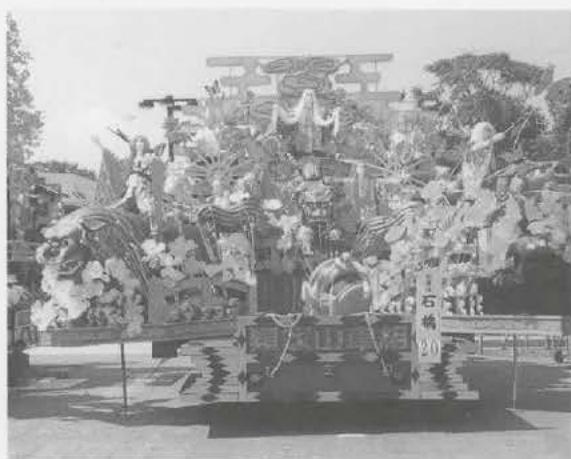
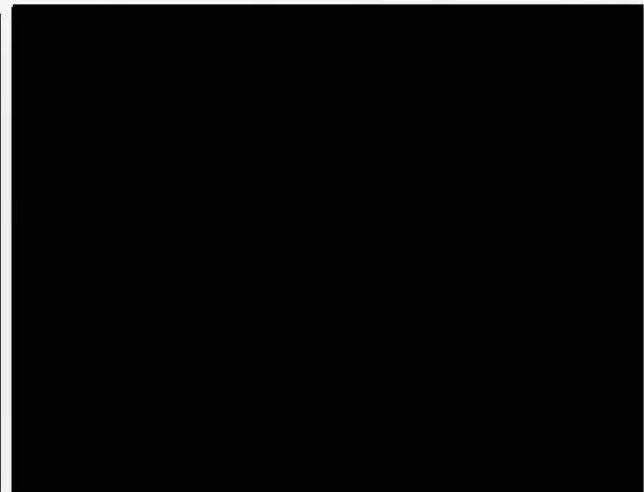
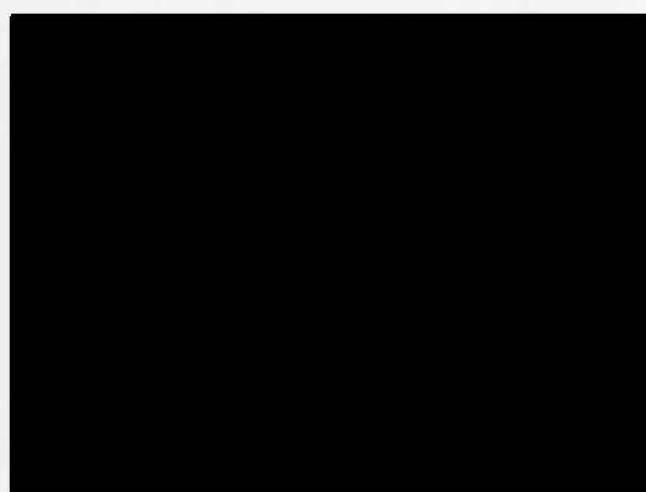
類家は八戸市中央部東南に位置する。当地区は大正十三年に市営住宅が建設されるまで畠地が広がり、菊の栽培が盛んな地域であったという。現在は市の繁華街である長横町に隣接しながらも、国道四五号線沿いに商業地を含む住宅街が広がり、世帯数は一〇〇〇を超えるという。

新聞記事による山車運行の初出記録は昭和二七年である。現在の運行に参加する地区は、市内の類家一丁目から五丁目、南類家一丁目から三丁目であるといふ。

している。

土台となる台車は毎年再利用しているが、山車飾りは毎年新しく作り直す。人形の一部や馬の人形は買つてきたり、再利用したり、他の山車組と貸し借りたりして揃えるが、他の飾り付けは町内での自主製作である。装飾の趣向は、ここ数年は「武者物」、「昔話物」になつてているが、各山車組の様子も見ながら重複しないように検討して決めている。これらの飾りは油圧式でセリアガリ、カイテン（回転）はしないがテンカイ機能を付けている。

山車の大きさは市役所の規格に合わせるが、若干規格より小さめに作つているという。昔は小さい山車同士が道ですれ違うこともあつたというが、現在の大型化した山車では無理であろうという。



写真一七二
歌舞伎 石橋(平成一二年)

祭りの実際

行列は、先頭が旗持ちで続いて、手小舞、引き子、木遣り、笛、小太鼓、大太鼓が並ぶ。引き子の衣装は、大人が「るいけ」と名の入った浴衣で、子供は半纏、役員は浴衣の上に半纏を着る。

お囃子は、山車上の前部中央に大太鼓一名、山車上先端部に五連結の小太鼓五名が山車に乗り、笛六、七名ほどがいる。交代員として大太鼓に約十四名、小太鼓には約三五名、笛には約九名がいる。昔は笛も山車の上に三名ほど乗つたものだという。楽器は町内で揃えており、借用はしない。昔、これらの囃子は、山車を早く進める際にテンポを早めたり、他町組の山車とすれ違う際に互いに競い合つたりしたものだという。

現在囃子の練習は、先輩の長老格が指導者となつて、近くの広沢寺の駐車場で行う。

門付けは、町内を中心に八戸市内を広範囲に行なつてゐる。山車から離れて木遣りだけで行うこともあるという。木遣りは先輩方から会長が習い、会長が若い人たちに教えてゐる。

記録類　類家山車組・類家山車保存会　『類家山車組 四〇年のあゆみ』
平成三年

(小山 隆秀)

綱で引く山車が参加したのは明治二十六年が始まりで、鍛冶町の「仁木弾正のネズミ退治」がでた。それまで行列に人夫として出ていた鍛冶町の若者たちが、世の中が開けるのに従い具足をつけることを嫌い、揃いのユカタに豆しばりの手拭姿でフ工、タイコの拍子づきの山車を引いたがこのイキな姿が人気を呼び各町内で競つてまねるようになつた。この時の山車は近藤初代八戸市長の父君でヨロイ師をしていた近藤虎太郎氏が作つたが、八戸まつりの山車製作技術はこの人に始まる。当時の山車の特徴は、「岩」と「波」にあり、高さ、を競いあつた。(同著『八戸ふるさと物語』ホテルサンルート六頁一九九三年三月)

しかし近代における当町の山車運行の初出記録は、新聞記事などでは明治四年となつてゐる。他にも町内には当町の大正期の山車の写真が残るといふ。かつて山車の製作・運行は、明治五年の番組制による消防「鍛冶丁四番組」

⑥ 鍛冶丁

地域の概況と山車組の沿革　鍛冶丁(または「鍛冶町」)は八戸市中央部に位置し、長者山新羅神社と繁華街である十六日町に近接する地域である。

現在の町内会は大正十一年に発足したという。「丁」の字は侍の町を意味しており、元来、当町も「鍛冶丁」と表記するものだという。当地域は久慈街道沿いにあり、昭和初期まで、岩手県からの八戸への諸物資の玄関口として栄えた。現在は世帯数一〇〇前後を抱える商業地区となつてゐる。

当町の山車は、氏子である新羅神社の「別当サン」からの当町への割り当てで、大祭行列の鉄砲隊を依頼されたのが始まりだという。しかし、その鉄砲隊の古びた衣装を着るのを若者が嫌がり、代わりに山車を出したのが起源だとう。このエピソードは当時の他町の山車組にも影響を及ぼした事件だつたようで、岩岡三夫氏の記録に次のように登場する。

— 107 —

「二分団二班」が主体となつて行つていた。消防は二〇歳で団員となり、班長、

小頭（こがしら）、組頭（くみとう）と昇任する。それらの役職は人柄や人望で選任されていたという。

今も町内には、この旧消防団に四〇年間所属した元老サマがあり、昭和一、三〇年代まで祭りに参加していた。

現在、これらの消防団は役職を変更しており、小頭は部長へ、組頭は団長へと改称しているが、組織の機能的な命令系統はそのまま山車運行組織にも応用できるため、祭りにとつて必要不可欠な組織となつた。

山車運行組織とその役割 「鍛治町」（または「鍛治丁山車組」）として、

鍛治丁在住の「鍛治丁若者連」十二名を中心、転出した人や、自由参加の人を合わせて大人三〇名が参加する。

若者連から、山車の構想を行う製作部長と運行部長が選出される。兼任もあるという。また小・中学生が一〇〇名ほど参加し、婦人部もおにぎりを作るなどして協力している。

かつては警察から運行許可をもらうため、山車の大きさなど町内ごとに届け出した時代もあるという。

山車の製作

正月の町内の集まりでその年の山車のテーマを話し合う。当町の山車のテーマにとくにしきたりはないという。当町はかつて、人形作りの名人といわれた故村井勇蔵氏を産んだ町であり、現在の作風もその一族であつた故村井治兵衛氏の流れを汲むといわれている。

三月に山車全体の寸法取りをして、四月には題材の下絵を決定し、役員で予算案を決議し、総会で寄付を募る。平成十一年度は「招運祈願祝いの舞」で見返しは「江戸の神楽」であった。ここ二〇年の下絵は若者連の下崎雅之氏が担

当している。

五月に、町内にある山車小屋のチヨウナダテ（手斧立て）とメンバーの顔合わせを行い、六月第一日曜日に小屋掛けをして作業が始まる。

まず解体して保存していた山車の土台「下台（シタダイ）」を小屋に搬入して組み立てる。屯所では、人形や小物、電気関係の作業が始まっている。山車の飾りは自主製作で毎年新しく作るが、人形の首などは使い回している。七月末までが製作期間である。鍛治丁在住の十二名の「鍛治丁若者連」が中心に、約三〇名ほど集まつて作業する。

昔は子どもたちにも手伝わせたものだが、今は学校の夏休み開始から祭りまでの期間が一週間ほどしかなく、なかなか参加してくれないという。

以前は、製作場所として鍛治丁町内の屯所「に組」に山車小屋があつたが、夜間十時まで作業し、祭り直前に明け方三時頃まで作業しており、近所から騒音の苦情があつた。そこで平成十一年から離れた市内諏訪の学校建設予定地の空地へ山車小屋を移転した。

山車の仕かけは油圧式ジャッックでセリアガリ、手動でテンカイとヒキダシの機能を持ち、エンジン、発動機を搭載している。現在の山車は審査制度を意識して、人形の目線配置や鮮やかな配色の工夫、山車の大型化が進み、その変貌振りが大きいという。

昔、波しぶきの表現は、竹ひごで広げただけの作りであり、少ない費用で済んだものだという。また山車人形についても、顔を桐の木で作り、体は垂木を十文字に組んだものに藁で肉付けしたり、竹の骨組みに新聞紙を貼つて固めた等身大の「張り子」であった。それに人形用の特別な裁断をした着物を着せたものだという。

以前、市内某小学校の仮装大会へその山車人形の衣装を貸してくれとお願いされたことがある。人間が着ることはできない特別な作りだと、断つたという。

現在の人形は大通りでの見栄えを意識して、小型化し、搭載する数も何十本と増えた。しかしそのためか、逆に狭い通りでは、人形どうし込み合つてゴチャゴチャと見えるという。

昔から山車を担いだことはなかつたというが、その山車もかつては、京都の祇園祭の山車に似た、木製の御所車の馬車を利用した大きな木製四輪の車であった。そのために舗装していない道では車輪がガタガタと揺れたものだという。やがて鉄道関係の企業を持つ町内から順に、車輪にトラックのゴムタイヤを導入する山車が出始めたという。鍛治丁はそのゴムタイヤの導入が遅れたという。

また、山車上の明かりも、昔のローソクや提灯、カーバイトなどのガス燈の使用から、現在のバッテリー式に変化して、昔の山車の容貌が大きく変わった

という。

祭りの実際 大太鼓一名、小太鼓五名が山車前部に乗り、笛が山車前を歩く。小太鼓と笛の楽曲は一パタンしかないが、大太鼓は三パタンの打ち方があり、好みで組み合わせる。その大太鼓に合わせて笛、小太鼓も変化するという。囃子方の指導は鍛治丁在住の三名である。学校の夏休みが始まる七月第一土曜日から練習を始める。

衣装として大人は「鍛治丁若者連」、子どもは「鍛治丁子供連」の半纏を着る。子どもは小・中学生が多く、高校生になると参加が減るという。

門付けで、山車のオンドアゲ（音頭上げ）をやると祝儀をいただく。しかし終戦の昭和二〇年には門付けは休止しており、翌年から復活したという。

当町のオンドアゲには由来があるという。鍛治丁消防纏持ちの初代、大友長兵衛は江戸生まれで、奴振りを伝えた人だといわれている。そのため当町のオンドアゲには「メデタ、メデタの若松様よ」「江戸で生まれて神田で育つ、今や鍛治丁の纏持ち」という文句の入ったオンドアゲである。この唄は大正期生まれの父親

写真一七六 蕪島大明神由来記（平成一〇年）



の代から教わったという。また、このオンドは市内三日町の若松旅館では必ずあげろといわれている。それには次のような理由があるという。

明治三〇年頃、若松旅館のダンナが、朔日町の消防一番組の小頭を務めていた頃のことである。そのダンナが鍛冶丁近隣の火事のとき、当町を助けてくれたことがあるのだという。そのお礼として今でも若松旅館からは祝儀はいただかず、敬意を表してオンドアゲをするのだという。

県内の他市町村へ山車を貸し出すことも貴重な収入源である。祭り終了後、三沢市から始まって七戸町、十和田市、百石町の順で山車を貸している。受け渡し方法は先方から取りにくるか、こちらから届けるのかは交渉で決めている。

記録類 特になし

(小山 隆秀)

⑦ 八戸市職員互助会

山車組の沿革 職員互助会が「八戸市職員互助会」の名で山車組を組織している。互助会は、八戸市長を会長として、八戸市職員と八戸広域市町村圏事務組合、八戸圏域水道企業団の職員などで構成されており、職員とその家族の相互救済および福利増進を目的とする団体である。

市役所内での当会の窓口は、市人事課研修厚生班が担当しており、ここに互助会事務局を設けている。これを基盤に職員の有志が中核となつて、勤務終了後にボランティアで山車の製作・運行を行つていている。

昭和四七年頃に山車運行が始められたといい、「鎮西八郎為朝」の題材を作り、当時初参加で秀作を受賞したという。平成十三年度には山車参加三〇周年を迎える。

山車組運行組織とその役割 市職員互助会の山車運行であるため、参加者は職員とその家族に限られることになるが、市主催の交流事業などでは様々な方面からの参加も受け付けている。しかし、山車製作・運行などのすべての経費は、互助会と役所内だけで募られた寄付金のみで運営している。

役職として、運行委員長一名、運行副委員長一名、運行責任者二名、山車製作者約四〇名、衣装製作者四名がある。

山車の製作 山車企画・製作担当の類家敦氏が中心となつていて、山車のテーマには歌舞伎ものが多いという。平成十一年度の題材は「西遊記」で見返しは「えんぶり」である。作風は類家孝氏の流れを汲むという。

平成七年から、三社大祭の山車として、初めて分解式の構造を導入した。これは当時、シンガポールへ海外遠征するため、あらかじめ山車製作前から、解体・分解・再利用の利便性を狙つて設計したものである。その後も、コンテナやトラック輸送が可能なこの分解式構造をそのまま採用している。

山車の大きさは四・四メートル×四・五メートルで、空気圧で仕掛けを展開すれば八メートルになる。

すべて自主製作であるが、人形の顔だけは、趣向に合わせた塗り直しを東京の業者に外注したりする。

祭り終了後に山車を貸し出すことはなく、すぐに解体し、人形の首、骨組み、衣装、彫り物は残して再利用し、あとは小屋に収納しておく。部品は他の山車組に貸し出すこともあるというが、互助会が他の組から部品を借りてくることはないという。

製作場所は、市役所付近の番丁R R駐車場の山車小屋である。この小屋の一部は通年設置されており、飾りなどの保管場所でもある。

連休明けには、山車の構想が練られて、六月第一週に山車小屋全体を建て上げ、

中旬から製作作業がスタートする。勤務終了後から夜九時まで製作作業を行う。作業は一日一〇名から二〇名で、一日三、四時間行う。七月中旬になれば一日の作業時間は六、七時間になり、深夜にまで及ぶという。

祭りの実際 祭りには、前夜祭の七月三一日から八月一日のお通り、八月二日の中日、八月三日のお環りと続けて参加し、八月八日夕方のカサヌギ（笠ぬぎ）で終了となる。

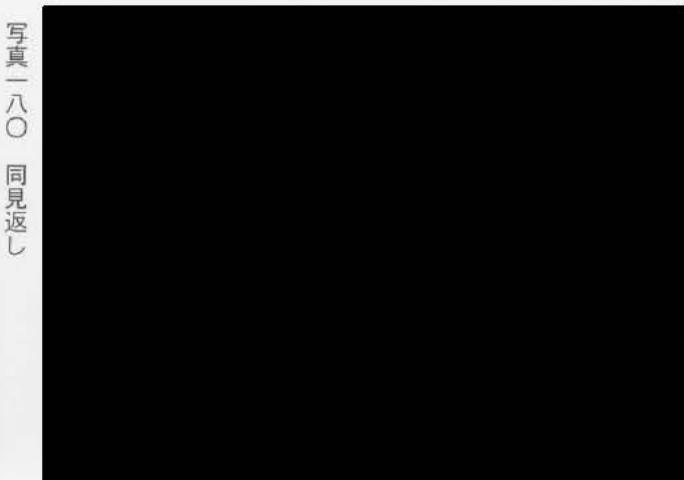
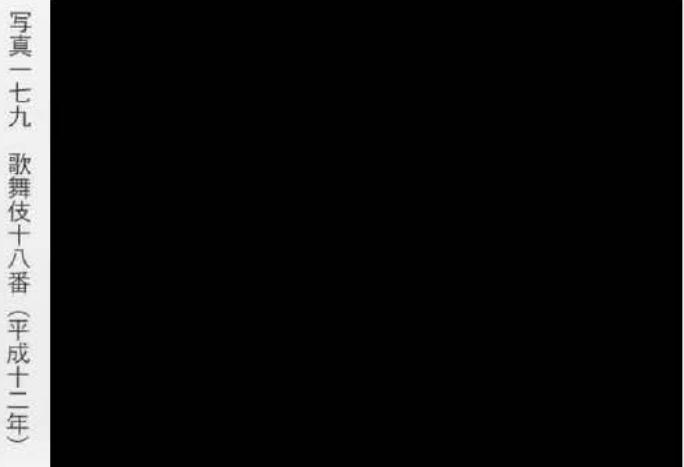
集合場所は、山車小屋または、市庁前で、前夜祭と中日は夕方五時頃に集合して六時から運行を始め、夜八時には解散する。お通りとお還りは日中に集合し、午後三時頃から運行を開始し、夜八時頃の解散となる。

平成一〇年度の参加者数は、市職員の子供から大人までお通りに二三三名、中日に一九四名、御還りに一六三名の参加があった。

囃し方は自前の編成で、大太鼓一名が山車の前横に、小太鼓五名が山車正面に乗り、笛が山車前を歩く。市職員三、五名が指導者となつて市役所本館前で七月中練習する。門付けはやらない。

運行日には、大太鼓と笛の要員として約六〇名、小太鼓要員として約三〇名、木遣り二名、手小舞二名、虎舞三二名が参加する。行列に参加する際には、なるべく互助会指定の浴衣の着用を勧めており、子供の引率でも私服姿を禁じている。

平成七年には、「シンガポール独立三十周年記念イベント」で初めて海外のシンガポールで山車運行を行つた。他にも国内では、平成九年には京都市「京都まつり」、平成一〇年には東京ドーム「青森県文化観光立県イベント」で山車を行つていている。



写真一七八 歌舞伎十八番（平成十二年）



写真一八〇 同見返し

⑧ 吹上山車組

地域の概況と山車組の沿革　吹上は八戸市中央部南端にあり、長者山新羅神社の東南部に接する。もとは中居林字外中居と呼ばれた土地で、別名「仲町」ともいわれ、昭和初期に八戸市に合併してから「吹上」と呼ばれるようになつたという。第二次大戦後まで農村地帯であったが、八戸市街地に近いために早くから宅地化が進み、現在、住宅街が展開し多くの世帯数を抱える。

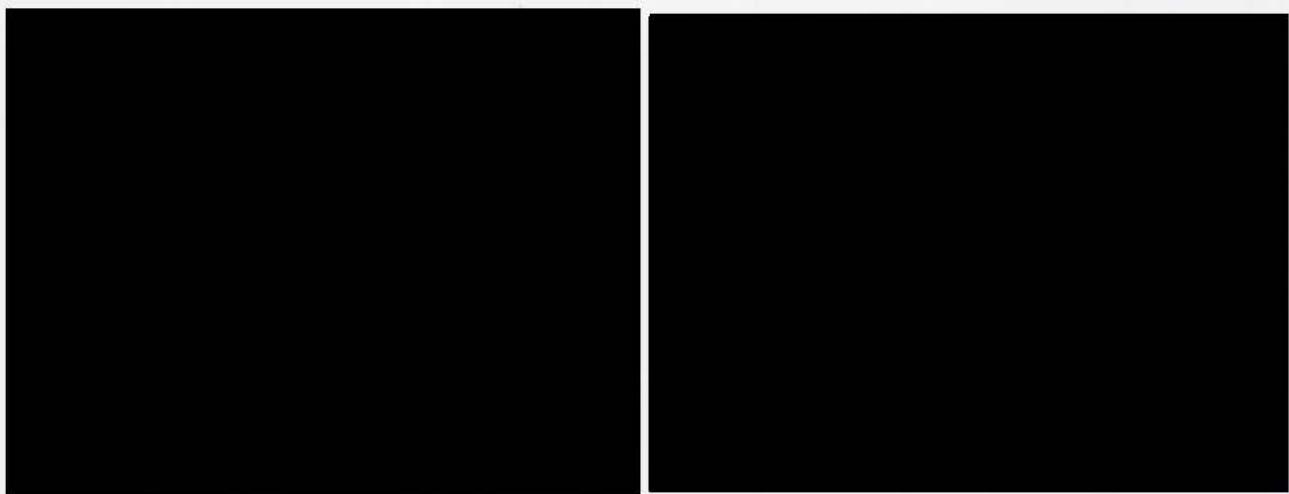
当区域では、大正期に消防組「わ組」が成立し、現在の消防団第二分団第三班となっており山車運行に協力していたという。当町の山車運行の新聞記事などによる初出は、大正一〇年頃である。

現在の山車運行には市内の月丘町、長者町、元町、館越、田向、松富町、仲町、積善町、高園町、栄町、春日町、類家南団地から参加者が集まっている。

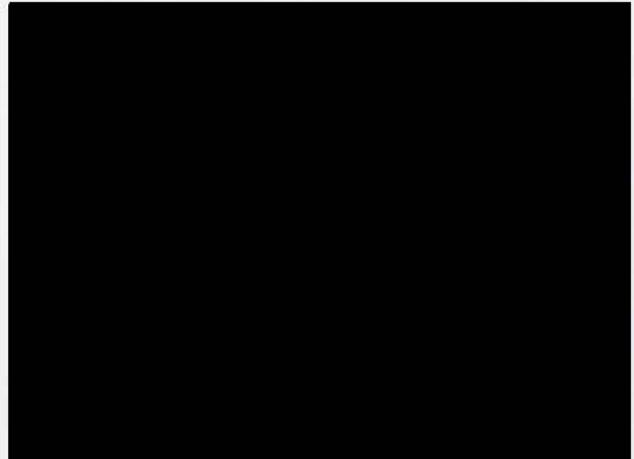
山車運行組織とその役割　「吹上」（または「吹上山車組」）として委員長一名、副委員長二名があり、その下に製作部長と運行委員長、運行副委員長、相談役数名がいる。

山車の製作　毎年正月に製作スタッフが新年会を開き、その場で今年の山車の題材が決定するという。平成十一年度は「源平合戦 一ノ谷奇襲 源義経」、見返しは「亡靈知盛」である。昔は武者物が多く、人形の表現に工夫をしたものだという。その後、四月にコヤガケ（小屋掛け）し、五月から製作に入る。製作場所として市内の南類家に山車小屋があり、吹上の屯所で人形作りをしている。

製作指導には、製作部長と製作副部長があたり、平日は五、六名、日曜は一〇名が作業する。七月の祭り直前には作業者が二、三〇名に増えるという。



写真一八四 八戸が生んだ歌舞伎の星
市川笑也スーパー歌舞伎（平成九年）



山車はほとんどが自主製作であるが、紋章等の高度な細工が必要な箇所は、八戸市内の業者に発注している。山車の部品は、一部使い回ししており、予算に余裕があれば新規に部品を購入したりしているが、他の山車組との部品の貸し借りもしている。

土台には、発電機を搭載し、セリアガリ、テンカイ、ヒキダシの機能を付けている。山車全体の大きさは「はちのへ山車振興会」の規定どおりである。

八戸の三社大祭終了後、山車を県内の十和田市、百石町、下田町、岩手県久慈市に有料で貸し出し、十月に解体作業を行う。

祭りの実際 運行の衣装は二種類あるという。囃子として町内から集まつた人たちが、山車上の正面に大太鼓一人と小太鼓五名が乗り、山車の前を笛十名と引き子が歩く。

また交代員が大太鼓九名、小太鼓二五名、笛二〇名がいるという。囃子の練習は吹上の屯所で行っている。

門付けは、七月に吹上小学校学区内を回るという。

記録類

特になし。

山車運行組織とその役割 「八戸共作連」として会長、副会長、製作責任者、運行責任者の役職がある。共作連は会員制で年会費、賛助会員年会費などで運営している団体である。

運行は、会長、副会長、大太鼓、小太鼓、引き子で行う。引き子には近隣の三戸町、福地村、南郷村、階上町などからも参加者が集まるという。

山車の製作と運行の際、メンバーに一切の飲酒を禁止している。

山車の製作

「八戸山車製作研究会」と学校の保護者と教員が協力して製作している。四月頃、子どもたちの中から当年の企画が持ちあがる。

運行二か月前には、山車小屋を「工房くるみの里」の敷地内に掛ける。製作作業は、市内の身障者会長の指導の下で六名ぐらいであたり、六、七月から始まる。協議会関係者の他にもボランティアが参加して、作業時間は、午後六時から一〇時までかかるという。

⑨ 八戸共作連

地域の概況と山車組の沿革 八戸市内の身障者授産施設で組織している八戸市小規模作業所連絡協議会の会長泉山彰氏の働きかけで、市内十二か所の小規模作業所所員や福祉施設、養護学校教員と関係者からボランティアを募り、平成五年から山車運行を始めた。

当時、開始にあたっては、新羅神社、神明宮、靈神社からなる三社協議会に参加を申請して承諾を得た後、夏坂和良氏や吹上山車組、八戸山車製作研究会などの協力も得て、新羅神社のツケマツリ（附祭）として参加したという。

事務局を、市内田向間ノ田の身障者小規模福祉作業所「工房くるみの里」に置いている。

写真一八五 恵比寿・大黒大漁の場（平成五年）



写真一八六 孫悟空（平成一〇年）

すべて自主製作であるが、毎年、青森県立第二養護学校の協力も得ている。製作場所は、山車小屋の他に市内の養護施設や学校を借りている。

山車は、一トン車を土台として改造したもので、幅四・五メートル、長さ五・五メートル、高さ四・五メートルの大きさで、仕掛けを展開して高さ六メートルとなる。仕掛けは人力で動き、オキアガリ機能のみを持つ。

作風は運行開始時から、大正から昭和二〇年代にかけて流行った型式で、二重の欄干を設けた「高欄山車」のタイプを製作している。欄干の軒花には生徒の夢を短冊で飾り付けたりしている。

祭り終了後の九月には、養護施設などで公開し、十月に山車を解体している。人形、着物の一部は倉庫に保管して再利用しているという。

祭りの実際 祭りの行列には、会長、副会長と引き子が続く。参加者は、

県内の三戸町、福地村、南郷村、階上町などから人が集まり、総勢一〇〇名が乗り、行列を作る。

そのうち囃子として山車上の正面横に大太鼓一名、正面に小太鼓五名が乗り、山車前を歩く笛の計二〇名が参加する。

囃子の練習は山車小屋で、高校生二名と大人一名が指導している。

門付けは、とくに範囲は決めてないが市内を数箇所回る程度だという。

記録類 特になし。

（小山 隆秀）

写真一八七 山車組浴衣（二）



吉田産業



廿六日町



新荒町



朔日町



新荒町



塩町



上組町



青山会



根城新組



柏崎新町



壳市





十一日町



内丸



下大工町



城下



吹上



下組町



糠塚



淀



長横町



新井田



写真一八九 山車組浴衣（三）



八戸共作連



六日町



類家



十六日町



鍛冶町



職員互助会



四、三社大祭の山車類型

八戸三社大祭の山車には、岩山車・波山車・高欄山車・建物山車の四類型があるとされている。この山車類型は、製作される山車の主題によって分類されるのではなく、主題を効果的に演出するための情景や装飾に基づいて設定されているところに特徴がみられる。

八戸三社大祭の山車類型が紹介されたのは意外に新しく昭和五三年のことである（正部家一九七八）。また、近年では図入りでこの類型が解説され、内容を理解するうえで好資料となっている（夏坂一九九九）。

ここでは、正部家・夏坂両氏の解説に準拠しながら各類型の内容を具体的に紹介するとともに山車類型の流行変遷などについても検討を加えてみた。

（一）山車類型の紹介

【高欄山車】赤い欄干で四方を囲み人形を飾つたもので、軒花を挿し大きな牡丹の花などにぎやかに飾り立てられた花車で、踊りの一場面が表現されたものが多い。一段低い太鼓の部分にも欄干が取り付けられているので二重欄干になつてている。

写真一九〇は、二重欄干構造の山車で、弁財天・毘沙門天・大黒天が扇子を広げ踊る格好を示している。七福神の背後には屏風様のつい立が置かれ、つい立の後ろは桜の花が飾られている。

写真一九一は、二重欄干の上に曾我兄弟を載せたもので、後ろには松の木が配置され、脇には軒花が並べられている。

【建物山車】大きな門や城の一部分を、山車の上に載せたもの。小型の建物が借景となつていて、大型の建物が載せられているものがある。

写真一九二は大江山の酒呑童子と呼ばれる鬼を渡辺綱が退治する場面を建物の上に再現したもので、建物の後方には雲が描き出されている。

写真一九三は江戸の火消しを題材としたもので、台車に建物を斜めに載せ火消しの場面を広く見せるユニークな構成を示している。

【岩山車】小山のような黒い岩を主体にしたもの。岩には松や紅葉などが飾られ、松には藤の花が絡んだりしている。高い岩からシブキを上げて落下する滝があつたり、出しものの内容によつては、冬景色などもある。

写真一九四是依籐太が百足に向かつて弓を引く場面で、その間には天女が座っている。大きな岩の上には紅葉、岩の間には滝の水しぶきがあしらわれている。

写真一九五は岩から流れ落ちる滝を背景にお不動様と脇士を見上げるようになしらわれている。岩の上には松、山車の舞台基底部には水しぶきがあしらわれている。岩から滝が流れおちる構図はこれまで八戸三社大祭に何度も登場している。

【波山車】海上を表現したもので、波や波シブキが舟を取り巻いている。竹に銀紙を巻き付けて、その先に銀の玉を付けた細い棒が、ふんだんに使われる。舟山車とも呼ばれる。

写真一九六は鮫の上に海彦が立ちその周りを波と波シブキが取り巻いているもので、舟が載せられている訳ではないが、波山車に分類される。

写真一九七は鎮西八郎為朝が舟の中央に据えられており、周囲には大きな波が配置されているもので、波山車の典型的な構図を示している。

（二）山車類型の流行変遷

図十三は現存する山車の写真を基に、上記の類型の出現件数を七期に便宜的に区分し調べたものである。この図は基本的には各年を単位として分類作成したものであるが、戦前については山車の写真が少ないので、大正九年から昭和十四年までの二一枚の写真を一括して類型調べをおこなった。

八戸三社大祭の山車は単純に四類型に集約されるものではなく複数類型を融

写真一九〇 高欄山車（一）



（七福神、昭和30年 下組町）

写真一九一 建物山車（一）



（渡部綱、昭和31年 十一日町）

合したものやどの類型にも属さないようなものも存在するが、昭和四〇年代までは類型の典型的なものが多くみられ、平成に入つてからの中ものを除くと概ねこの類型を適用して分類することができる。

【高欄山車の変遷】 戦前において最も普遍的な山車類型であつたが、昭和三〇年代の後半から急激に衰退していった。現在は八戸共作連がこの山車類型にこだわり製作を続けている。

現在は、「桃太郎」「恵比寿様」のような岩山車や波山車で表現されることが多い名題も戦前は高欄山車で製作されている。

【建物山車の変遷】 戦前は比較的小さな建物や門をの借景とするものが作られており、高欄山車に次いで多くみられた。昭和三〇年代の後半には一旦あまり流行しなくなるが、昭和四〇年代の半ばから大きな建物を表現するものに変化し多く採用されるようになる。

特に仕掛けを取り付けた類家や塩町などが最優秀賞を獲得することにより昭和六〇年代以降ますます盛行し現在に至つている。

【岩山車の変遷】 昭和三〇年代に高欄山車と交替するようになり、「川中島の合戦」を初めとする武者物、「俵藤太むかで退治」をはじめとする伝説、「やまたの大蛇」をはじめとする神話などあらゆるテーマが岩山車で作られる。岩山車は昭和四〇年代には一旦衰退するが、昭和五〇年代には再び流行する。現在はあまりみられなくなっている。

【波山車の変遷】 「壇ノ浦合戦」「錨（亡靈）知盛」「浦島太郎」など海に

関係した題名の山車に多く見られ、水産業が盛んな八戸らしい山車類型である。しかし、この類型は戦前にはわずかしかみられず、比較的新しくなつてから流行した山車類型であると考えられる。波山車は昭和三〇年代のなかば過ぎから定着した形となり、他を凌駕する形で爆発的に流行することはなかつたが、現在まで連綿と続いている。

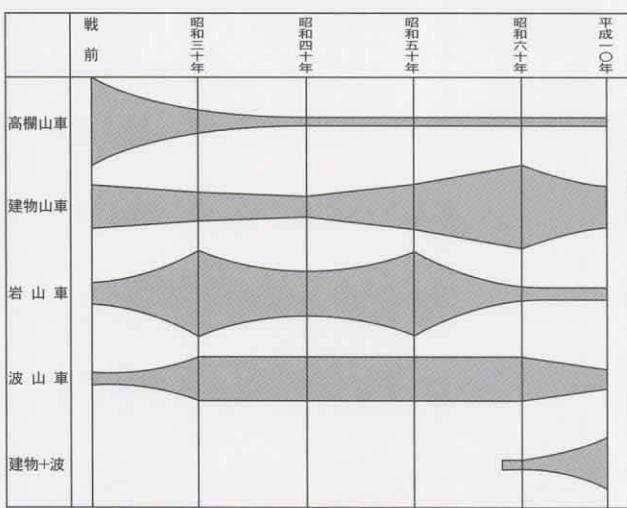


図14 山車類型の流行変化概念

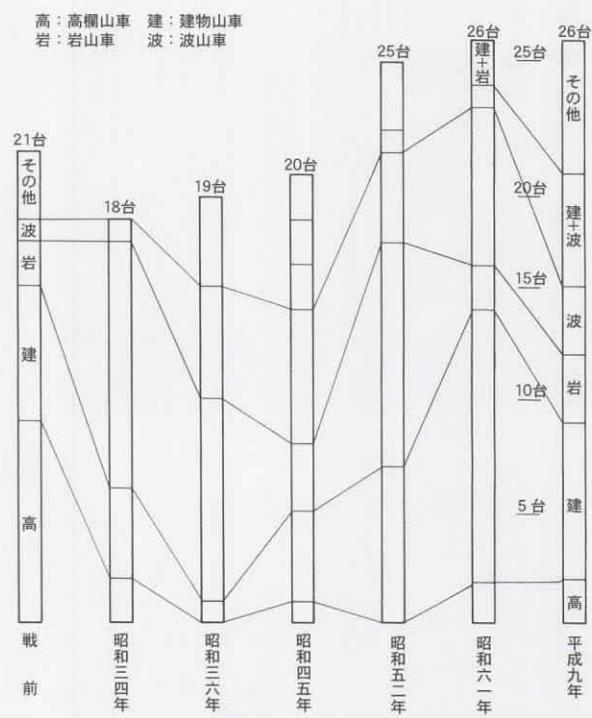


図13 年代毎山車類型調べ

(三) 近年の山車に見られる変化

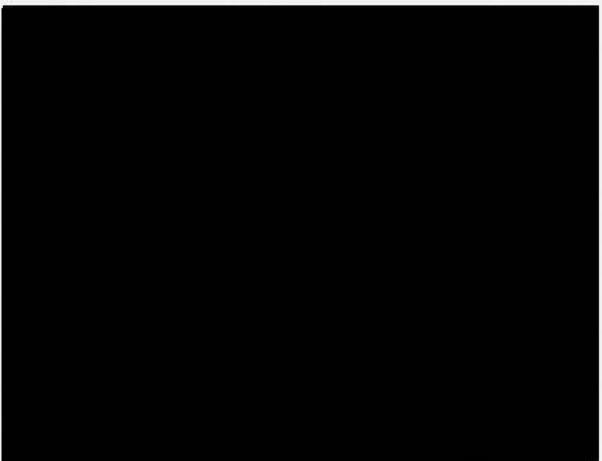
現在の八戸三社大祭の山車は八戸共作連を除きすべて動力による仕掛けが付けられており、動力仕掛けが題名の構成を考える際の大きな要素となっている。

この仕掛けは当初手動であつたものがやがて動力に変化したものであり、その主な経緯は次の通りである。

昭和四六年　類家の「赤穂浪士討入」(写真一九八)に六〇度回転する山車が現れる(手動)。

昭和五一年　塩町の「連獅子」(写真一九九)で前方部左右に展開装置、後方部左右に引き出しの仕掛けが採用される(手動)。

昭和六二年　吹上の「八戸三社大祭縁起　三社祭神と野村軍記・大沢多門」(写真二〇〇)で前方部左右展開・後方部左右引き出しのほかに中央部が動力によりせり上がる仕掛けが始めて登場する。



写真二〇一　建物と波の融合山車



(十和田湖伝説、平成元年　柏崎新町)

八戸三社大祭の動力仕掛けは中央脇左右の「展開」、中央から後方の人形などを動力で上下させる「せり上がり」、後方脇の左右の「引き出し」後方引き出しの上に付く花などを手動で起こす「起き上がり」の四動作が可動仕掛けの基本となつてている。

図十五は現在の動力の仕掛けの基本的部分を示したもので、その仕様は次の通りである。

駆動部　リフト・ユニットのマスト・油圧シリンダー・ワインチの種類がある。
動力部　油圧コンプレサ・エアコンプレサ・電気式モーターの種類がある。

なお、駆動部は山車一台につき一か所がほとんどであるが、ワイヤー等を利

用して作動箇所を増やしている。

また、装置は車等に取り付けられているものを再利用している。
仕掛けの昇降操作は、運転席後部から行う場合と前方部に操作スイッチを伸ばして行う場合がある。

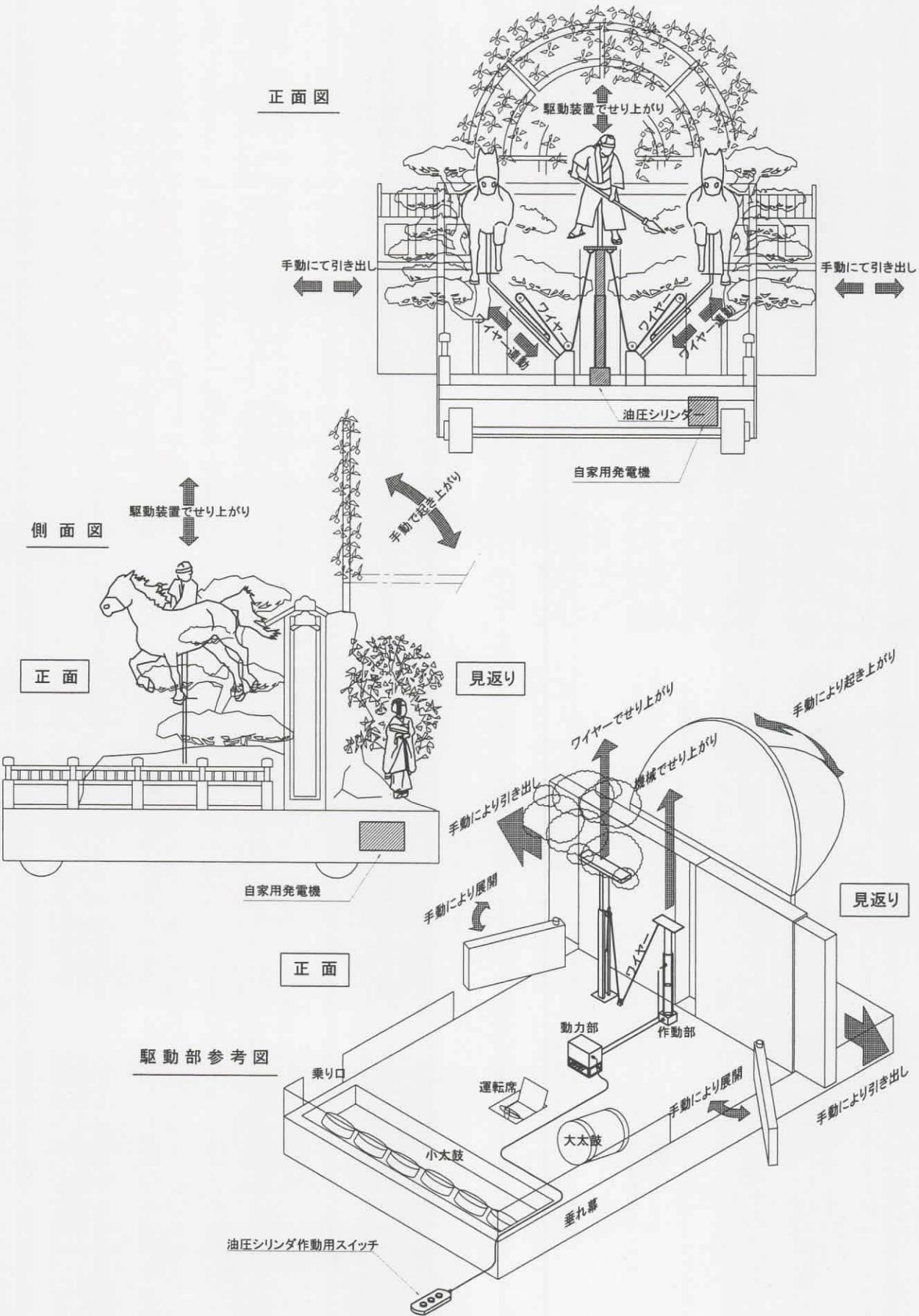


図15 八戸三社大祭の動力仕掛け

八戸三社大祭の山車は昭和五〇年代に入り急激に大型化したが、この大型化は建物山車を中心みられ、その多くが動力仕掛けを導入していった。そして、平成になると大型化による空きスペースを埋めるため建物と波などの類型融合がみられたり（写真二〇一）、出し物が一場面のみでなくいくつかの場面から構成されたものなどが見られるようになり現在に至っている。

「はちのへ山車振興会」は現在山車の大きさを幅四・五メートル、高さ四・五メートル、長さ十一メートル以内と規定しているものの、仕掛けの展開値までは規定していないため、仕掛けを伸ばした時の高さが一〇メートルを超えるものが多くなっている（図十六）。

動力の導入と山車の大型化は、豪華絢爛を競い現在では数十体もの人形を載せた華やかなものが多くなっているが、それを動かす動力仕掛けが基本的に一種類に限定されているため斉一性の強い造形に収斂している点が現在の山車の特徴となっている。

従つて、八戸三社大祭の山車の現状について、伝統を重視した見方をすれば「建物山車」全盛期と位置づけることが可能であるが、動力仕掛けの影響を強く評価し新しい動向に注目するなら「動力仕掛け人形揃い山車」という新類型として捉えることも可能であろう。

（四）高欄・建物・岩・波山車以前の山車

八戸三社大祭の現存する山車の写真で最古のものは大正時代のものであり、それ以前の山車の内容を具体的に知ることができる資料は極めて乏しい。そのなかで岩岡三夫氏による昭和三一年八月三一日の「デーリー東北」の新聞記事には（注）明治期の山車の様子に関する貴重な記述や山車の類型概念の先駆けを思わせる内容もみられるので以下にそれを紹介しておきたい。

明治年間の山車 綱で引く山車が参加したのは明治二六年が始まりで、鍛冶町の「仁木彈正のネズミ退治」がでた。それまで行列に人夫としてで



図16 八犬伝（平成12年 内丸 仕掛けを上げた時の
高さ12m）

ていた鍛冶町の若者たちが、世の中が開けるのに従い具足をつけることを嫌い、揃いのユカタに豆しばりの手拭姿でフ工、タイコの拍子づきの山車を引いたが、このイキな姿が人気を呼び各町内で競つてまねるようになつた。——中略——当時の山車の特徴は“岩”と“波”にあり“高”さを競いあつた。いまの山車の二倍から三倍もある三〇尺ぐらいの高さのハリボテの岩を作り、その上へ人形を上げ横と後ろの三方へは滝を落し水玉と波を巻きあげた。あまりの大きさに行列に加わらない前に横倒しになつたり、また倒れるのを防ぐため車の両脇へ重りの砂ダララを数俵くくりつけたという話も残つてゐる。

現在の山車 明治三四年電灯がつき電線が張られるようになつて山車の運行が非常に難しくなつた。初めは高さを調節するトリックを考えたり“シモク”といつて電線をあげる竹ざおを用いたりしたが、山車はおの

ずっと低くなり小型になつてきた。岩と波はだんだん姿を消し、かわりに朱塗りのランカンが用いられるようになつた。また淋しくなつた裏側を生かすためにも人形をつけ、ふりかえつても山車をみられるような方法も案出した。これが見返しである。

八戸三社大祭の山車に関する最古の山車写真は、高澤写真館が撮影した「大正六年度久川義和会 山車」とされている(写真二〇二)。高澤写真館は明治に創業された八戸市内の写真館の老舗で、当時は市内鷹匠小路にあつたが、その後十八日町に移転し、現在は店を構えていない。

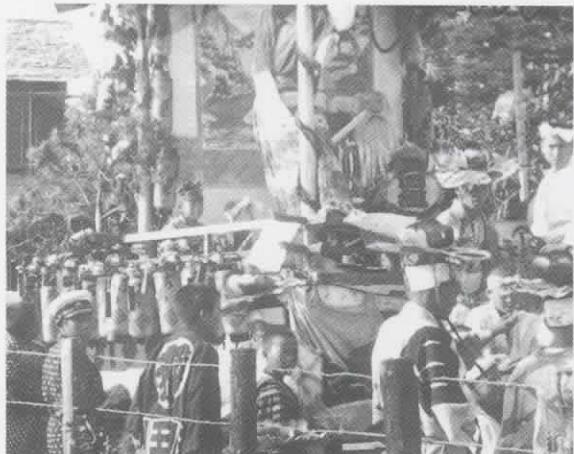
この写真は、高くそびえた岩の上に一体の人形と雲が載つていて岩岡氏が解説した明治時の特徴を残している。従つて、「大正時代に製作された復古調の山車」として位置付けられるのではないかと考えられる。

大正六年八月三一日の東奥日報には廿六日町(新田義貞の武勇)高さ十三尺巾一〇尺と山車の大きさに注目して特に寸法まで記載した記事があることから、この久川義和会山車を指しているのではないかと考えられる。しかし「久川義和会」は消防団の組名と思われるが、廿六日町は当時「二番組」であり符号しない点もあり、今後さらに検討する必要が残されている。

大正六年よりさらに古いのではないかと考えられる山車写真が中里進氏が長年収集したものの中にある(写真二〇三)。写真の右側に屋形の形をした山車の中に一体の翁が置かれ、背後にはタペストリーと考えられる飾り布が掛けられ、山車の回りには欄干がめぐらされている。この山車の構造は基本的に靈神社に保存されている太公望や武田信玄と同じであり、江戸時代から続く山車形態の影響を強く残す山車の写真である。

写真二〇二 久川義和会山車(大正六年)

写真二〇三 明治～大正期と考えられる山車



(注)この記事は、昭和六三年に「八戸ふるさと物語」の第一話として岩岡二夫氏の名前で株式会社ホテルサンルートから出版されている。

参考文献

正部家種康「八戸三社大祭とつけ祭りへ下▽」『デーリー東北新聞』昭和五三年八月二〇日

夏坂和良『二十一世紀祭組山車製作フォーラム』同実行委員会 平成十一年

本稿作成にあたり、夏坂和良氏から八戸三社大祭の山車に関し多くのご教示をいたいた。そのなかで八戸の山車の製作に大きな影響を与えた表彰制度や

(工藤竹久)

五 三社大祭のお囃子

三社大祭の山車運行のお囃子に使用される樂器は、大太鼓一個（鉦太鼓）、小太鼓五鼓（猿樂太鼓）、それに篠竹の笛（六孔）である。

大太鼓は山車台上の前部に置いて、打ちやすいようにやや斜めにし、一人の打ち手が太めのすりこぎ状の桴を両手に持つて、立つたまま大きく振りあげるようにながら、威勢のよい片面打ちをする。打つ人は、以前は全部若い男性であつたが、最近は若い女性も打つようになつた。

小太鼓五個は大太鼓の前に、並べて木枠にはめて固定したものを置き、少女達が一人一個ずつ、片面をほぼ同じような二拍子の強弱で打つ。

笛は、本来は山車の台上で一人か二人、大太鼓の傍らに腰をおろして吹くのを基本としたが、最近は笛を吹く人数が多くなり、台上の他に、山車の前の二本の引き綱の間に入つて、大勢で歩きながら吹くようになつた。この笛の音階の高さの基準は五号か六号で、二人以上で吹くときは、どちらかに揃えないと、不協和になつて乱れた音になつてしまふ。

こうして演奏しながら山車が進行するときのお囃子を「通り拍子」といつている。「お通り」も「お還り」もどちらも同じ「通り拍子」で、大体一パターン二～三分ぐらいの繰返しである。坂道をあがるときとか何か急ぐときは速くなり、また、ゆっくり進むときはやや遅くなる。

休むときの合囃のお囃子は、小太鼓だけの少しリズムの違つた「休み太鼓」となり、山車小屋へ出入りするときとか木遣り音頭をかける前も小太鼓だけを打つ。

笛は、最初「ピーツ」と一きわ高い音を長く伸ばし、それからメロディーが展開していく。途中、息の吹き込みの強弱によって、同じ「ラ」なら「ラ」の音に一オクターブの差が出るなど、技巧的である。

指の運指は六孔全孔使用であるが、八戸近辺でだいたい同じメロディーのものは多少の変化はあるものの、名川町、五戸町、軽米町、百石町、下田町、三沢市などであり、三沢市は戦後八戸から習つたと聞いている。各町内の山車は、行列以外に自分たちの町内の家々を廻つて「ご祝儀」を述べる。ご祝儀をたくさん戴くと、声の良い人が扇を口元にかざして「木遣り音頭」というのをやり、歌詞は次のとおりである。

〔イヤーアレヨイワーサノーヨーイコラセー〕

〔ハアーヨイワエー 今年は世が世で三社のまつりー ヨーイコラノセー 田は万作ハー エー浜は大漁ヨオハーエー〕

〔めでためでたの若松様ヨー 枝も栄える 葉もしげるウー 商店に対しても（一礼）〕

〔丸に二の字のアエー この家の印 寄せくるお客様 福の神〕

これが、五戸まつりでは沖揚げ音頭となり、三戸まつりでは豊年山車運行音頭となる。三戸のおまつりのお囃子は、八戸のとは大分雰囲気も違つており、笛も必ずしも全孔使用でない。それに三味線もつくし、どちらかと言えば古風である。「お通り」と「お還り」ではメロディーも違つてきており、「お通り」はゆっくりで、筆者の感じとしては名川町の「サギリ（商宮律）」と似て莊重であるのに対し、「お還り」は八戸三社大祭のお囃子に似て比較的軽快である。八戸と三戸の距離はそう遠くないが、同じ南部藩でも盛岡領と八戸領との違いもあり、三戸は小京都とも呼ばれ、祭り全体の趣も違つてきている。

八戸の「お通り」のメロディーは、篠笛の奏法からいえば、近代的で明るく、わりに新しい時点で生まれてきたのではないかと考えられている。ところで、田子町から二戸市へと岩手県北のお囃子になると、笛はつかず、

八戸三社大祭 お囃子（笛）

昭和40年頃 類家 高屋敷さん奏

J=100

② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫

②へもどる

太鼓だけの拍子になつてしまふ。二戸市（福岡・金田一）、一戸町などの山車の太鼓は鎌太鼓ではなく、締め太鼓を全く縦に、しかも山車の後ろに向かって二人で向かい合つて打つているのを見た。

それでは、八戸三社大祭のお囃子はどこから生まれたのだろうか。そのルーツは分からぬにしても、八戸の比較的新しい感覚で創りあげた部分もあるだろうと思う。ただ、筆者が戦後間もなく笛吹きの人から聞いた話では、笛は岩手県花巻市の祭り囃子と似ていて、そこから伝わったのだといつてはいたが、眞偽のほどは分からぬ。また、盛岡八幡宮のお祭りの山車のお囃子も八戸のとよく似ている。ただ、盛岡にはチンチンと銅拍子が入るところが違つてゐるが、盛岡も八戸もともに同じ南部藩の兄弟のようなもので、その辺にもどうやらつながりがあるのかとも思われる。

最後に、蛇足ではあるが付け加えたいことは、芸能というものも人間がやるものだから、長い間には少しずつ変わつていくことである。そのようにして伝承していくものであろうが、本来六孔である筈のものが七孔の笛に代用されたり、鉦太鼓の代わりに締め太鼓を用い、或いはその反対であつたり、太鼓の位置が変わつたりして、さまざまである。必ずしもよいことではないが、風土的なこと、経済的な面もあり、大目に見なければならないところもあると考えられる。

（阿部 達）

六、三社大祭と華屋台

華屋台は神社の神輿行列やツケマツリ（附祭）の行列などの最後尾に付き添つて、様々な音曲や舞踊を披露しており、これを観覧する観客たちによつて八戸三社大祭の独特的な印象をもつて語られてきているところである。

そこで本節では、今日にいたるまでの経緯について実際に華舞台に上がつて踊りや謡いを披露していた見番芸妓のうち、仙松、蝶子、豆三、廣香の御四方から当時の思い出話を語つてもらい、それらの事柄をここに整理し、補節の意味も含めて、往時の八戸三社大祭と華屋台の風景について報告することとした。

見番芸妓　八戸の芸妓には、「一本の姉さん」と呼ばれる「見番」と、その見習いにあたる「半玉」の別があつたが、すでに戦後には「半玉」はいなかつたといわれている。「一本の姉さん」になる際には先輩格の姉さんと旅館の女将、警察官が立ち会いのもと、三味線の試験を受け、また「半玉」になるには踊りと三味線の試験を受けたものという。これらの試験に合格すれば、警察官から鑑札をもらうことができ、お座敷に出ることができたという。

人によって違いはあるが、三味線や踊りを習い始めたのは七歳頃からで、だいたい数えで十五、六歳頃から半玉を経て、見番になつたという。戦時中、特に昭和十九年には柳界が停止されてからは、それぞれ挺身体に加わつて軍需工場に通つていたという。

戦前には一〇〇名余りもいた芸妓が、戦後には三〇数名ほどとなつた。しかし、戦後の混乱期にもかかわらず、多くの漁師や船主などがお座敷を訪れ、町は活気に溢れていたという。その時の様子を「戦後間もない頃に旧市内の人々が打つ（お金を払う）のと、漁師が打つとのでは違つた（漁師は羽振りが良か

つた」と回想する者も多い。

昭和一〇年代の華屋台

華屋台は、正式には「見番屋台」といい、小中野

の見番芸妓が屋台に上がつたものであつた。戦後に華屋台が出たのは、昭和二四、五年頃のことと、お通り・中日・お還りの三日間は一日中屋台の上で踊り、こうしたことの一〇年ほど続けたという。当時大祭に参加された見番芸妓たちの話によれば、午前十一時に小中野を発ち、ツケマツリ（附祭）のあとに付き従いながら旧市街を経て、夜中の十二時に小中野の山手料理屋前まで運行したもので、やはりどうしても体力がもたなかつたものという。しかしながら、大祭が始まる直前に、島田髪を整え、衣装を身につけて、ナリモノ（鳴り物）が家の近くに来たことを確認すると、自然と気持ちが落ち着くといい、帯をボンと叩いて気持ちを入れてから大祭に赴いたものという。

見番屋台の上では、三味線四名、大太鼓一名、太鼓二名、鼓二名、大皮一名の、計一〇名がナリモノ（鳴り物）を担当し、邦樂・常盤津・端唄・清元のイイトコロ（口説）などを一人踊りや二人踊りで演じた。とくにお通りの際の踊りや謡いは普段演じないものが多く、事前に揃うように練習をした。また、舗装の少ない、細かな路地を回ることが多かつたため、屋台上で踊るのは大変だつたという。

見番屋台は、男の人が十四、五名ほどで引いていくもので、回り舞台の構造を持ったものであつた。多くの祝儀が上がつた際には、回り舞台をその家の方に向かって、様々な踊り謡いを披露したものという。

大祭期間中にいくらお座敷に呼ばれても、大祭の屋台に上がるこことを優先しなければならなかつたため、お座敷には行くことができず、芸妓たちは経済的に苦しくなつたといい、また、新たに見番となる者もなかつたため、昭和三〇年代半ばになつて、八戸三社大祭から華屋台は失われることとなつた。

写真一〇四 昭和二七年 華屋台



写真一〇七 平成一二年 華屋台



華屋台の復活

三社大祭の附祭の最後尾に付き従い、祭りの終了を告げる役割を果たしていた華屋台がないことを惜しむ声が人々の間から高まり、河内屋（八戸酒類）が新たに山車（屋台）をあげた（買つた）ことから、昭和四一～四三年の三年間に限つて華屋台が復活した。この時屋台に上がつたのは先に見番として参加した芸妓たちであつた。また、のちに何度か復活を試みたことがあつたが、いずれも長く続くことは無かつた。

華屋台の現在

河内屋（八戸酒類）の倉庫に長く保管されてきた華屋台が再び注目され、八戸三社大祭協賛会や八戸市観光協会、河内屋の三者による復活に向けての働きかけから、華屋台の本体に補修が施され、回り舞台は失われたものの、平成九年よりツケマツリ（附祭）の最後尾を飾ることとなつた。

現在の華屋台は華屋台実行委員会が中心となつて、小中野俱楽部・NTT東日本八戸支店などの有志が盛り立てて、西川流・花柳流・若柳流・泉流・藤間流の日本舞踊の師匠筋の方々が参加しているものである。

参考資料 『読売新聞』青森版 平成九年七月六日付 読売新聞社青森支局

（大村 達郎）

七、町内会と消防組織

現在の八戸三社大祭のツケマツリ（附祭）は各町内を基本単位として行われているが、かつてはこれに消防の組織が大きく関わっていた。

消防組は、明治五年に仁・義・禮・知・信組をもつて組織され、その後八戸消防九組の番組制から部制へと移行し、昭和四年に発足した八戸市消防組の組織は現在の組織の直接的な骨格となっている（表三）。

明治四四年九月四日の「はちのへ新聞」には、「市中の賑ひ 各町共に昼は造花を飾り夜は軒提灯を点燈したるに本年は又電燈も出来たる事とて其の眺めも一入に各消防屯所にては昼は組旗優勝旗纏を飾り立て又各商店にては何れもは趣向を凝らして昼夜店飾りをなしたる・・・」とあり、屯所が三社大祭を行う

表三 消防組名称の変遷

屯所町名		明治五年	明治六年	大正八年	昭和四年	昭和二六年
新 売 塩 町	新 売 塩 町	廿六日町	廿六日町	廿六日町	第一部二号	昭和二六年
組 上 棚 町	組 上 棚 町	廿八日町	廿八日町	廿八日町	第二部一号	昭和二六年
荒 町	荒 町	大工町	大工町	大工町	第三部二号	昭和二六年
(南) 吹 上 町	(南) 吹 上 町	下町	下町	下町	第一部一号	昭和二六年
荒 町	荒 町	大町	大町	大町	第二部二号	昭和二六年
新 町	新 町	下町	下町	下町	第三部二号	昭和二六年
班 班	班 班	三班	三班	三班	第一分团一班	第一分团一班
班 班	班 班	三班	三班	三班	第二分团二班	第二分团二班
班 班	班 班	三班	三班	三班	第三分团二班	第三分团二班
班 班	班 班	一班	一班	一班	第一分团一班	第一分团一班
組 組	組 組	組 組	組 組	組 組	組 組	組 組
合 組	和 組	元 組	元 組	元 組	義 組	義 組
組 組	組 組	若 組	若 組	若 組	若 組	若 組
組 組	組 組	義 動 組	義 動 組	義 動 組	義 動 組	義 動 組
組 組	組 組	仁 組	仁 組	仁 組	仁 組	仁 組

・消防九組

うえで重要な拠点となつていていたことを伝えている。

消防組織と三社大祭の関係について北村吉心は昭和二五年九月一日の「デーリー東北」で「明治二三年に国会開設という大慶事がおこつたので八戸文化の大先輩大沢多門先生が肝いりとなり八戸を三分して居る三社の氏子総代を鞭撻してまず祭禮を盛んにして・・・然るに在来の立派な山車は経費の関係上行列に加わりかねる様になつたので消防組や肴町の若衆連中の大奮發で馬車に速成の屋台を構えてこれに各意匠を凝らした人形を据付け、そして木遣り拍子でもつて賑やかに市中をねり回るようになつて今日に及んでいる」と、消防組が山車製作に関わるようになつた経過を具体的に述べている。

さらに、昭和三六年八月二一日の「デーリー東北」には「B町内はことしつけ祭りをだすかどうかについて議論をたたかわした。（中略）これまでB町内のつけ祭り企画、運営、会計などだし製作に関するすべては町内にある消防分団が中心となつて行い、消防の小頭（部長）が総責任者となつていて。このため町内会では表面的にはノータッチの形だつたが・・・」とあり、三社大祭において消防団が大きな役割を果たしていたことを雄弁に伝えている。

かつて山車の製作は、消防屯所の近くに掛けられた小屋で行われることが多く、人形などの縫い物や小物・お囃子・木遣りの練習は消防屯所で行われた。お祭りでは消防の刺し子を着て参加する姿が普通に見られた。町内の祭りに関する重要な事柄の決定は、消防組の部長や班長経験者が就任するゲンロウ（元老）と呼ばれる消防組の指導者に伺いを立ててから進められたという。立派に完成した山車には消防組の名前が入った旗が飾られることが常であつた。町内が一丸となつて取り組んだお祭り関係者が揃つて撮る晴れの写真も屯所の前が多くあつた。ゲンロウ達は山車の行列のなかで、綱を引かずに市内の有力者にあいさつをしながら悠然と歩いた。

これらは、三社大祭のなかで消防組が大きな役割を果たしていたことを伝え

るものであり、山車組の総責任者は町内会長であつたが、消防組はその実働部隊として実質的に機能していたといえよう。

今日のように中学校区に一館の割合で公民館が建設される以前においては、消防屯所は単に消防活動を行うためだけのものではなく、町内の寄り合いが頻繁に開かれ地域のコミュニティの中心となる重要な場所になっていた。

とくに、消防活動は体力のある若者が現場の第一線で活躍する性格をもつており、若いエネルギーのガス抜き効果も兼ねる祭りは早くから消防団と深いつながりをもつて行われてきたのである。

しかし、昭和四〇年代以降になると市中心部に大型商店が林立するようになり、古い商家や町屋が減少したことに伴い、若い消防団員も減少しツケマツリの運営主体は基本的に町内会が担うようになり、祭りの中に占める消防組の影響力は急速に弱まつていったようである。

さらに平成に入つてからは消防屯所近くに山車小屋を構えていた鍛冶丁・十六日町・新荒町・十一日町・吹上・下大工町（廿八日町の屯所を使用）が、広い空き地を求めて周辺に移転した。市の中心部にあるこれらの山車組が使用していた土地は、アパートや有料駐車場の適地でもあり、所有者が代替わりし資産活用を優先しなければならないなどの事情によりコヤガケ（小屋掛け）が不可能になつた事例が多い。

さらに近年の動力仕掛け導入に伴い、山車製作に溶接機械や裁断機・コンプレッサーなどが用いられ、騒音発生の問題を抱えたことも、民家の少ない空き地に山車製作の拠点を移す要因となつていて（図十七）。

それでも現在、靈神社と新羅神社の行列には消防関係者が若干名参加しており、消防屯所近くに山車小屋を掛け屯所で小物を製作する伝統的な方には、廿六日町・糠塚・新組町が保つている。



写真211 お通り観覧風景（平成12年）

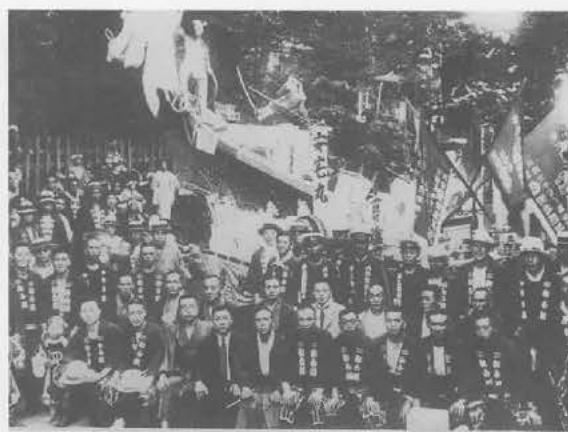
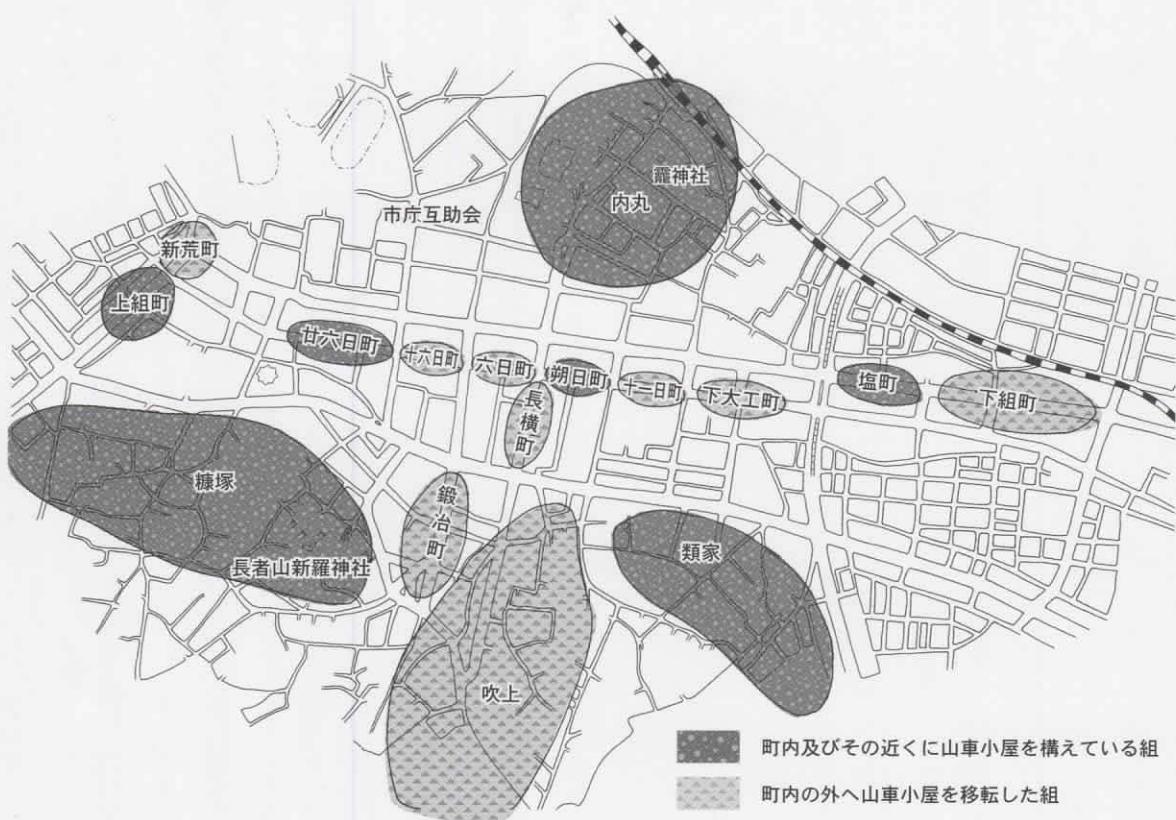


写真209 消防組の名前（和合組）が入った半纏を纏う塙町の山車組（昭和8年）



写真210 屯所でのお囃子練習風景（平成11年 廿六日町）

図十七 三社周辺の町内と山車小屋の位置(平成十一年)



子の練習を行つてゐる山車組は鍛冶丁・下大工町・吹上・十一日町・塩町など多くあり、かつて消防組織が深く関わつていた頃の伝統は変容しながら八戸三社大祭のなかに息づいてゐる。

なお、屯所内での行われる縫い物や休憩時に振舞われる炊き出しご飯は町内の婦人部が担当する仕事であり、山車小屋が離れた場所に移つても屯所はこのような人たちが最も利用しやすい場所として三社大祭を支える町内の貴重な施設となつてゐる。

(工藤 竹久)

八、失われた山車組

三節では、今日活動を続いている山車組について取りあげてたが、これまでの八戸三社大祭の長い歴史のうえで、失われていった山車組も少なくない。詳細は付章の「八戸三社大祭参加山車組一覧」を参照されたい。人々に記憶されている団体の中から一例として、廿八日町の山車組の活動について示しておく。

新聞記事によれば、廿八日町は、明治三五年、四〇年、大正八～十一年、大正十五年～昭和十一年、昭和二～三～二年（うち昭和三～四年は参加不詳）というように、断続的に山車を出していたことが知られている。町内会を基盤としながら山車の製作・運行にあたっていたツケマツリ（附祭）の活動について、幼少のころから関わってきた蛭子長太郎氏から聞き取りした事柄を整理しておきたい。

仕事はお祭り（三社大祭）やえんぶりのときしか休めないものだといった。だから祭りの時期が来るのをとても楽しみにしていた。えんぶりは戦時中の火災で道具が焼けてしまったので、それ以来やつていらない。

当時、廿八日町には一〇〇軒程度の住民がいた。町内会長が製作・運行の中心となっていた。門付けは大通り（旧市街の山車運行経路）を中心に回つていた。山車が市街を回るのは夜の八時ごろまでで、引き子はたくさんいた。

廿八日町の山車の趣向は、「武者もの」を得意としていた。山車の製作には、特別に職人を頼むことはなく、一〇～三〇代の人たちが中心となつて作つていた。また子供たちが製作に加わっていた。町内に大工がいて、金をとらずに製作を手伝ってくれた。バナナの籠に紙を貼つて岩を作つたりした。製作は廿八日町内の屯所で行つた。足りない材料があれば、他町から借りてくることもあつた。人形は一体しかなく、上方の方で作つてもらつたものと伝えられていた。山車は毎回、作つては壊し作つては壊しするものだつた。しかし、人形は何度も利用した。

囃子の構成は、大太鼓、笛、小太鼓だつた。囃子には、山車が動いていると止まつているときのヤスミダイコ（休み太鼓）の二とおりがあつた。太鼓叩きは女はやらないものといつた。大太鼓を叩く人がいなくなつてしまつたのが、山車を出さなくなつた主な理由の一つ。

サークスや見せ物小屋、出店が小屋をかけていて、大祭の行列が終われば、それを見に行く楽しみがあつた。また町内に戻れば演芸大会が行われていた。大祭が終了すると、片付けを終えてから「千秋楽」という、慰労を目的とした会を催した。

大通りには、ノキバナヂョウチン（軒花提灯）が飾り付けられていた。

華屋台が通りかかると、人々からオハナ（ご祝儀）が出され、回り舞台をその家の方に向け、踊りや謡いを披露していた。

第六章

八戸三社大祭と芸能

はじめに

三社大祭とは、法靈社（現・靈神社）、神明宮と新羅神社の三社の合同の大祭であるが、もともとは法靈社一社のみの祭礼であった。そして、この法靈社の祭礼すなわち法靈祭礼が基となつて、二社、三社となり、今日の三社大祭に及んでいるのである。そして八戸三社大祭には欠かせない神樂、虎舞とともにこの法靈祭礼と関係がある。

一・神 樂

八戸の神樂には、厳密に言えば大神樂と山伏神樂の二系統があるが、ここでは山伏神樂に限定して論を進めたい。

山伏神樂とはかつて山伏修驗者が布教宣伝のため始めた芸能で、八戸では「ごんげんさま」と親しまれ崇められている獅子頭を奉じ、家内安全、身体健全、商売繁盛、大漁力作などを祈願する「權現舞」をはじめ三〇に及ぶ演目をもつて、今日でも行われている。

『八戸南部史稿』の寛文六年（一六六六）の記述から法靈とは山伏修驗者の名前であつたことが知られる。

「又曰く往昔八戸城地に三崎大明神と称する上下柏崎蛍崎の（此三崎は現今の城地を蛍崎と称し、上下柏崎は四ツ谷付近の地なりと云う）鎮守ありしが、時に（年代不詳）近郷に法靈と称する修驗者ありて、年々五穀成就又は請雨請晴等諸般の祈祷に其効驗顯著にして諸人の信望深厚なりしが、或年数日の旱天に農民の怨苦するを慰み、請雨の祈祷に丹誠を抽てしも何とかしけん一滴の雨なく、炎天益募り田畠日を逐て亀裂し、諸作毛已に枯死せんとして人民の怨嗟聞くに耐えかね、一大決心を以て自己の一身を犠牲に供して諸人の難苦を救わ

ると三崎社内の池中に投身したるに、忽然として雲を起し、大雨沛然として篠を突くが如く。数日降り止まず、終に五穀豊熟して諸民鼓腹の秋を迎ひたりよりて、その靈を三崎社に合祀して法靈明神と崇めたり。」

そして、法靈が没した七月十九日を記念の日として、以後ずっと祭祀を続け、さらに八戸藩主南部直房公の母の信仰も厚かつたために、法靈祭礼は藩の庇護を受け、なお盛んになつてきたのである。同時にその内容も山伏カラの強いものとなり、山伏神樂も「獅子權現」などという名で法靈祭礼に参加してきた。藩でもこの神樂には一目置き、法靈社の神樂はいわば八戸藩の神樂とも言うべき存在となり、毎年藩内のどこかの神樂が法靈社を訪れては奉納してきたのである。

この山伏神樂は、東北では早池峯山麓の山伏神樂、陸中海岸の「三拍子」と呼ばれるもの、山形、秋田両県にまたがる「ひやま」「番樂」、さらに「下北の能舞」とかなり広範囲にわたつていて。その他、旧南部藩域の岩手県北から八戸市、三戸郡、上北郡、十和田市、三沢市と広く散在しているが、盛岡領域と八戸領域の神樂では多少ニュアンスが異なつていて。

八戸の神樂には、大きく分けて次の二系統があるといわれている。

すなわち岩手県九戸郡江刺家の神樂を師匠として伝承されてきた「江刺家手」と岩手県二戸郡一戸町中山の神樂を師匠として伝えられてきた「中山手」である。

八戸藩の守護神であつた法靈社には、「法靈神樂」と呼ばれる「江刺家手」の神樂が伝えられている。ここには古くから神樂が奉納され、古い獅子頭・面なども保存されており、八戸藩の方々に散在していた山伏が、法靈社を拠り所として集合して、ご祈祷の神樂をしていたことが知られている。従つて戦前ま

で、法靈社直属というまとまつた神樂集団はなかつた。昭和に入つてからは、中野（南郷村）とか大仏から来て、ご祈祷などのつとめを果たしていた。

戦後は、三浦康平氏を始めとする地元の青年会の人たちが中心となり、鮫町双子石在住の西館亥之助氏を法靈社に招いて法靈神樂として伝承されたのである。西館氏は、岩手県輕米町の出身で、氏は九戸村江刺家の人たちとも一緒に神樂をやつたといふ。この時は、十数人が「江刺家手」と称される舞い方や太鼓の奏法を伝授された。笛は大仏の山本初太郎氏から習つたといふ。

西館氏から伝授を受けた双子石や小中野の神樂は、今はやつておらず、「江刺家手」の伝統を守つているのはここだけである。

法靈社の本来の祭典は、旧七月十九日より三日間（現在は八月廿一日より三日間）となつてゐるが、同社では、特に伝習を記念して毎年六月十五日・十六日を『法靈神樂祭』として祭典を行い、神樂を奉納している。

この時は、同じ江刺家手である小中野・双子石の人たちも何人か集まり、また同社に奉納されている獅子頭も十数頭に及ぶ。

演目は『法靈神樂満十周年昭和三十四年六月十六日・坂本与志也述』によれば、次の通りである。

○権現舞・ご祝い・翁舞・三番叟・山の神・八幡舞・墓獅子・般若経・花舞・鐘巻・恵比寿舞・竜天・小獅子・盆舞・杵舞・注連切・剣舞・三本剣・五本剣・風しよう荒神・屋島・のだこ舞（若子）・しゆうどれ・天の岩戸開・そめこ獅子・きり獅子（権現舞）根っこ切り・栗蒔舞・薬師舞・蒼前舞・虎の口・機織り・傘松（狂言）・桜子（女舞・ばちとり）・三方荒神・五方荒神・小僧舞・三人小僧・五人小僧・大江山

ただし、「屋島」以下の演目は、西館氏より正式には伝授されていないものである。

現在の三社大祭の行列には、八戸市内丸の法靈社、尻内町の矢沢大仏の神樂

などが参加し、要所要所で見事な「一斉歎打ち」を見せてくれている。

その他、法靈社の神樂は神社で、矢沢の神樂は櫛引八幡宮で、白銀四頭権現は三嶋神社で、また浜市川の神樂は地元の白鬚神社でというように地元の産土神の祭典にも参加して舞を披露している。

鮫の神樂はお盆に墓で「墓獅子」を行つてゐるが、これは神仏混淆の名残で、現在は鮫だけのようであるが、昔はどこの神樂でも行つていた。

二 虎 舞

虎舞が法靈祭の神輿渡御に参加したのはかなり古くからである。『八戸藩御勘定所日記』の文政三年（一八二〇）七月十二日頃には次の記録が認められる。

一、法靈御神事之節湊小宿子共とも並鮫虎舞御供被仰付仕度金両所江三貫文宛両浦役之内々御成下御代官江申達

とある。これが現在のところ最も古い記録で、少なくとも百八十年前から鮫の虎舞が参加していくことになる。

現在は湊柳町、十六日町、左比代、新井田、それに八戸市職員互助会に虎舞があるが、柳町は鮫から習つたといい、十六日町・左比代はその柳町から習つ

写真二一五 法靈神樂「山の神」平成十三年

法靈大權現



たという。三社大祭の行列には、これら五つの虎舞が参加している。

虎舞は、ささらを持った少年が虎の先導役としてつき、その他に「ひよつとこ面」をつけた「おかしご」と呼ぶ道化役が面白おかしく立ち廻り、観客を笑わせる。少年はささらを摺りながら虎の前に立ちはだかり、虎を誘導するしさをする。そして、虎の背を跳ねたり上ったりする。しまいには虎も立ち上り、少年は虎の肩の上に上がつたりするが、とうとう虎は少年に折伏されておとなしくなるのである。

この他に、鮫の神楽には「朝鮮國加藤清正虎狩」という演目があり、その中にも虎舞がある。そして、この虎はあとで清正に退治されてしまう。

さて、昔は鮫にだけあつた虎舞は一体どこから来たのだろうか。虎舞といえども、岩手県の釜石の虎舞が有名であるが、その他にわりと太平洋沿岸部に多い。虎は日本には住んでおらず、インドやマレーシアなどに多い猛獣である。にも係わらず、日本に虎舞がある。虎舞のようなぬいぐるみですっぽり頭から足の先まで覆つてしまふ芸能は東南アジアのジャワ・スマトラ島などに多いといわれており、この芸能は南方系ではないかとも考えられる。

また他県の虎舞には「火伏せ」、つまり火事を押さえる防火鎮火の力を持つといわれるところがある。三陸地方の太平洋沿岸部はリアス式で山が海に迫り、その狭い土地に人が住み、一旦火事になれば、海からの強い風にあおられて一村全滅の憂目に合うことが多い。従つて、火に対する恐れが内陸部の人々に比べて大きく、そのため、沿岸部にこの虎舞が多いのではないかと考えられる。

さらに、一部では虎舞の代わりに獅子頭を使って「ごんげんさま」と同じような身体強健、頭が良くなるようにと願つて頭を噛んでもらう風景も三社大祭で見られる。

さて、『御勘定所日記』には、鮫虎舞と法靈祭礼に関連する記事がよく出ているので、二、三紹介する。



写真二一六 ヒョウツト
(左比代虎舞 平成十三年お通り)



写真二一七 虎(左)
(左比代虎舞 平成十二年お通り)

「文政三年（一八二〇）七月廿一日」の頁に「一、鮫村虎舞之者共寄進と心得十ヶ年法靈御供被仰付尤當年及十ヶ年之旨申渡」とある。これは、八戸藩から鮫の虎舞に対し、法靈通輿に一〇年間お供をするように申し渡したもので、十年毎に更新されており、ずっとお供していたことが載っている。さらに化粧料として三貫文戴いたことも書かれている。しかし長い間には、人が揃わなかつたり虎が破損するなどの出来事も起こっている。

文政八年、「一、虎舞不人数二而茂不苦候問罷可申事」とあり、人数が揃わなくてもよいから参加して欲しいと申し伝えられている。

また、「天保五年（一八三四）の七月十九日」には、鮫村虎舞の世話人から次のような意味のことが述べられている。「先年も法靈祭礼にお供させてもらつて有難いことであり、その上、十貫文のお金も頂戴したが、昨年秋は遺作（不作）で飯台も高くなり物入りとなつた。ついては、申し訳ないが、白米一俵戴きた

写真二一八 太鼓と手平鉦・笛（後方）
(平成十三年お通り)



写真二一〇 八戸市庁虎舞
(平成十三年お通り)



写真二一九 湊虎舞 (平成十三年お通り)



写真二二一 八戸市庁虎舞のお囃子
(平成十三年お通り)



くお願い申し上げます。」というのであつた。それに対して藩では、白米でなく玄米を上げると書かれている。

ずっと下つて「嘉永二年（一八四九）」になると、世話人から諸道具が古くなつたのでと修繕代を請求された。については次のように上げると書かれてある。

一、金壺分

虎頭手入

但張替並もん拵絵の具代

一、銭三貫文五百文

上二

一、銭一貫五百文

細布三反

一、銭六貫五百文

右染賃

但他車四ツ

虎乗車

一、金武歩

太鼓武ツ

但張替

右之通

このように鮫の虎舞は、祭礼を通して八戸藩とも深い相互関係にあつたといえる。

そして『御用人日記』「天保三年（一八三二）七月廿二日」には次の記述があり、八戸藩主も虎舞をご覧になつていたことがうかがわれる。

一、雅樂様御棧敷前二而虎舞被遊御覽候ニ付金百疋並御酒五升被成下候處此度掛候義

（阿部 達）

三・騎馬打毬・徒打毬

八戸三社大祭の中日は長者山新羅神社の大祭にあたつており、神社では八戸南部家の御当主はじめ氏子総代らの臨席のもと祭典がとりおこなわれる。

この祭典の後、桜馬場で加賀美流騎馬打毬と徒打毬が行なわれている。騎馬打毬と徒打毬の協議内容については、岩岡豊麻著『打毬のしおり』昭和五四年に詳しく述べておこなわれた。以下は同書からの抜粋である。

(一) 騎馬打毬

白方、赤方それぞれ四騎づつ、白方は白い笠（端反り笠）に白だすき、赤方は赤い笠に赤だすき。何れも馬上豊かに水色の素袍と鹿の皮で作つた「むかばき」、紺色の足袋に草履をはき、七尺五寸（約二・二七メートル）の毬杖を持つた八名の騎士が、地上に並べてある白赤それぞれ四つのボールを味方の毬門（ゴール）へ投げ入れる。白が入れば太鼓が「ドン」赤が入れば鐘が「ガン」境内一ぱいに鳴り渡る。味方の四つのボールを早くゴールした方が勝ちとなる。その瞬間、勝ったチームは素早く毬杖を高く上げながら勇ましく中門から凱旋し、勝どきをあげる。同時に勝つた方の太鼓か鐘が華々しく打たれ境内にこだまする。勇ましい武士による騎馬打毬のクライマックスである。普通三回戦か四回戦まで行われる。

一回戦終了毎に勝つたチームは表彰され、「白扇一対」が授与されるが、最終戦である「勝負切り」になると、赤方は白方の馬出門から、白方は赤方の馬出門から競技場に入場し、追留の幣の（シユートライン）の前で交叉しての目当の幣（エンドライン）に整列する（乗違いといふ）。

この最終戦で勝つたチームは前回と同様に中門から凱旋し、勝ちどきをあげ、表彰されるが、負けたチームは笠を脱ぎ、たすきをはずし、下馬して馬をひいて歩いて自分のチームの馬出門から引き上げるのである。武士の勝負の厳しさ

に胸を打たれる。

この騎馬打毬は一見、競技規則は簡単なようであるが、実際には武士道を背景とした目に見えない厳格な規定が伴い古式豊かな勇壮な競技である。

① 役員の構成とその主な任務

役員は「櫓」と称する白方赤方それぞれの建物の中にいて、白方は白の、赤方は赤の鳥帽子、直垂、袴、白足袋の服装をして、白方は白方の赤方は赤方の、つまり、自分のチームの審判を担当する。

見定奉行（主審）競技を運営管理する。

シユートされたボールを判定する。

見定奉行を補佐する。

相図方に太鼓、鐘および拍子木を打つことを指示する。

相図方（太鼓鐘員） 毬奉行の指示によつて太鼓、鐘および拍子木を打つ。

勝幣振（毬係） 勝ったチームの幣を振り、これを中門に立てる。童が行

い櫓の前にいる。

勝つたチームの幣を振り、これを中門に立てる。童が行い櫓の前にいる。

打毬日記をつける。

（記録員） ボールを拾う。

毬杖を騎士に渡す。（腰かけ）等を運ぶ。

書記
介添

（補助員） ボールを拾う。

② 騎士
仮屋奉行（技術総務） 競技場、用具、馬の割当、馬装、番組編成等の責任者。

白方、赤方それぞれ笠（端反り笠）にたすきをかけ、水色の「素袍」と鹿の皮で造つた「行膝」をはき、紺足袋に草履、それに七尺五寸（約二・二七メートル）の毬杖を持つてゐる。白方と赤方の色わけは笠とたすきで識別している。先頭の騎士を「端毬」と言い、二回戦には最後になり、二番目の騎士が先頭となつて端毬が交替される。三回戦には三番目が、四回戦には四番目がそれぞれ

写真二二二 入場する見定奉行・毬奉行・打毬騎士等



写真二二六 勝どきをあげる打毬騎士
(平成十二年)



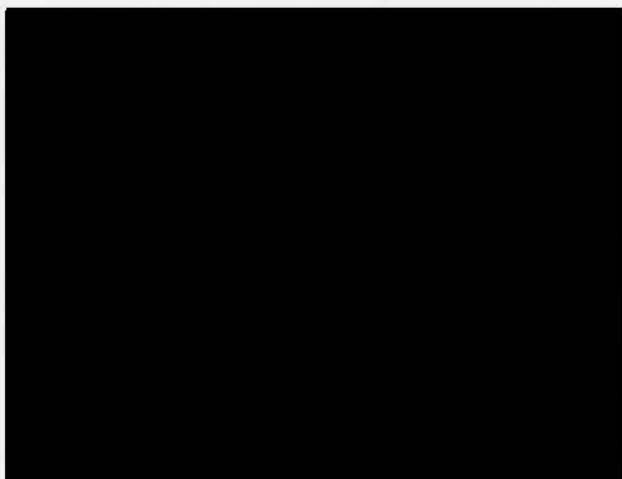
写真二二三 競技中の打毬騎士
(平成十二年)



写真二二七 勝者への表彰
(平成十二年)



写真二二四 退場する敗者
(平成十二年)



写真二二五 毬童子
(平成十二年)



写真二二九 徒打毬②
(平成十二年)



四、その他の芸能

八戸藩目付所日記の享保六年（一七二一）の記録を見れば、当時の行列は現在と大分違つていたことがわかる。

法灵御旅行烈次第

- | | |
|-----------|--------------------------------------|
| 一 御幡拾壱本 | 二 獅子權現 |
| 三 法螺式人 | 四 太鼓笛 |
| 五 手平可年二ツ | 六 御鉢別當上下三人 |
| 七 神前湯立 | 八 参錢箱 |
| 九 五龍御幡三本 | 十 御輿 |
| 十一 龍頭御幡三本 | |
| 十二 常泉院騎馬 | 山伏五人内壱人法螺壱人太刀持
同壱人金剛杖持外二草履取長刀狹箱長柄 |

十三 笠鉢太神樂 一 踊子牀机持

一 役者 一 笠鉢 一 乙名 一 押上下拾五人

この記録からは、行列の雰囲気が、山伏カラーラの非常に強いものであつたことが伺われる。常泉院というのは八戸藩山伏の総祿、今の言葉で言えば元締めのようなものである。この中で目につくのは獅子舞、笠鉢、大神樂、踊子（商宮律）で、獅子舞というのは山伏神樂のことであり、笠鉢は祭りの飾り物の一つで、大きな傘の上に鉢・長刀などを取り付けたもの、「踊子」とは「しゃぎり」の踊り子のことである。

沼館愛三氏は『八戸郷土史』の中で「しゃぎり」を次のように紹介している。
「八戸藩目付所日記の享保六年（一七二一）の記録を見れば、当時の行列は現在と大分違つていたことがわかる。

弟並両婦人が此踊を観たのに始まる。此の時家老湊市郎右衛門、煙山七郎

兵衛が陪席し、踊子に赤飯を給うたのに始まり、其後これは恒例となつた。 笹の葉踊は古来法靈大祭日たる七月十九日八戸地主の女兒と商家の女兒とを二行に組み、左の唱歌にふしをつけて一枚の笹の葉を振つて舞踊するのである。後年地主の子女は出さず、豪商の女兒のみとなり、笹の葉に代えて金短冊をつけた桜の造花を以てした。各盛衰を競い、三味線、太鼓、鉦横笛を奏し、之を操るものは商家より出て各一定の紋付、帷子麻上下を着用し、頭に一文字形の管笠を頂き、毎年法靈通輿に供奉して長者山及法靈社にて舞い踊つたもので地の豪華版であった。之れを商宮律と称したのであつたが、明治時代に至り自然に廃止となつた。此の踊も根城時代の遺物で、最初は根城の旧臣旧商に依つて行われたもので、城中に於て踊つたのは入部後四年目の寛文七年であつた。明和四年より長者山天王堂の拝殿に於て商宮律踊子の練習を大々的に行つた。其の発起は当地の酒屋共でそれが明治維新迄及んだ。

商宮律の唱歌

年を得て咲く桜花 流れも清き花をすくはん
時を得て咲く桜花 流れも清き花をすくはん
折を得て咲く桜花 流れも清き花をすくはん

なお、現在、名川町で見られる「しゃぎり」は、上下姿の男の人たちにより、笛太鼓、三味線、鉦が三人ずつ横に並んで演奏しながら、町の通りを静かに行進するものである（写真二二六）。

第十八図は、八戸三社大祭に参加した芸能を新聞記事などから拾い出したものである。八戸三社大祭の民俗芸能が、かつての八戸藩域を単位とするも

写真二二六 名川まつりの商宮津
(平成十三年)



写真二二七 名川まつりの願人踊
(平成十二年)



写真二二八 八戸三社大祭の行列を練り歩く階上町平内の鶴舞 (昭和四〇年頃)

のであることをよく示している。しかしながら、これらの中には江戸時代以来現在まで連綿として参加しているものもあるが、既に参加を取り止めたものも多い。

「駒踊り」「鶴舞（けいばい）」が八戸三社大祭に参加していたことは衆知の事実であり、戦前は「願人踊り」も参加していた。

平成の初め、南部町誌編纂に伴う、民俗芸能の調査の一環として、願人踊りを調べたので、その概要を紹介する。

先ず最初に故佐々木喜松氏（明治三二年生）と沢口たま氏（明治三七年生）の二人によって、歌だけを歌つてもらつた。
佐々木喜松氏が歌つた歌詞は次の通り。

アラヤートコセー ヨイワイナーア

コレワインセー

アリヤヤーレサンノ セーナ

お寺さんのなあ どちらエーおいでヨイヨイ 檜家へわし一人

さアても気になる袈裟袋

数珠を手にかけ 南無ハラタンのトラヤーヤーとお経を読むエーナー
ナントそうぞエ南無ハーエー

伊勢はなア津で持つ 津は伊勢で持つ ナーヨイヨイヨイ

尾張名古屋はヤンデー城で持つ

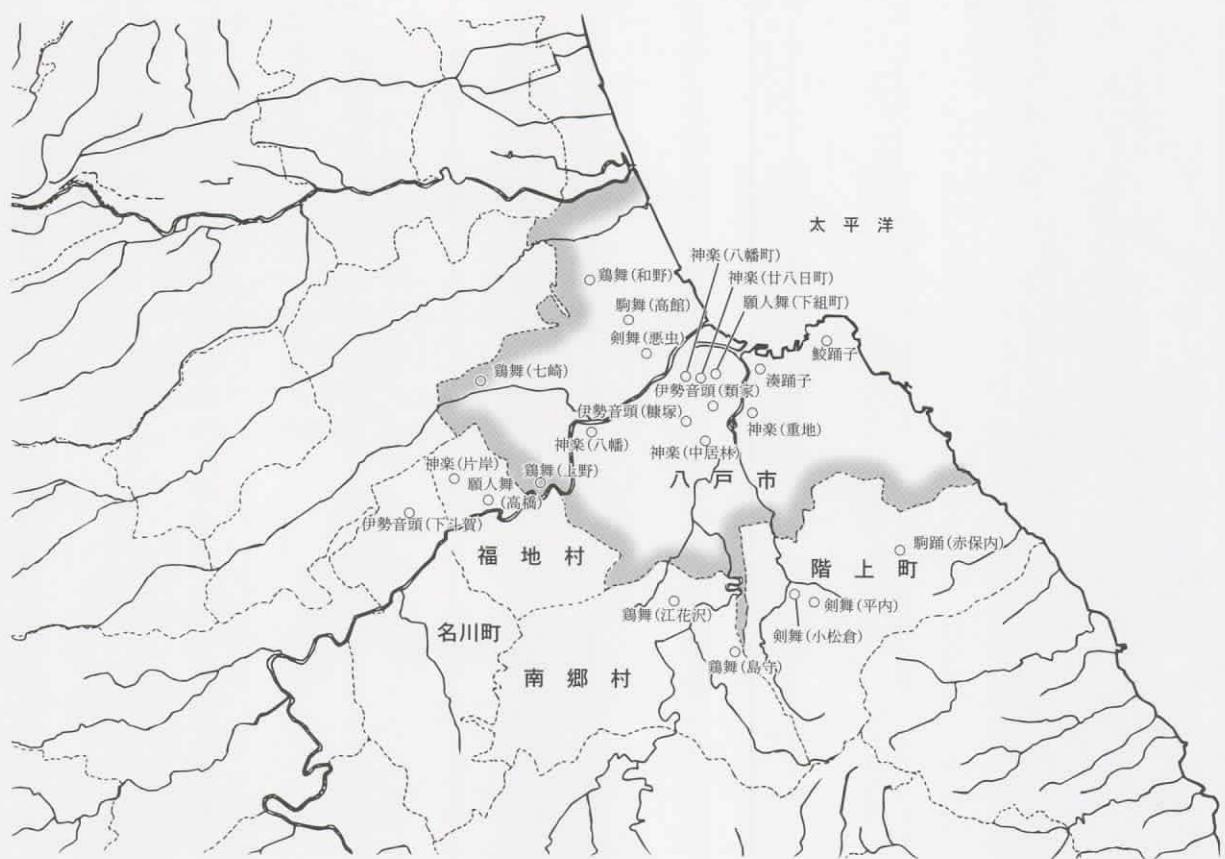
（一部）

この歌詞は伊勢音頭であり、その内容は願人が白衣に黒の袈裟衣をつけて踊るものである。

ところが、今度は実際に舞台で芸能大会に踊られた時の歌（倉石村の民謡歌手の手倉森勝利氏による）を聞くと、

図十八 八戸三社大祭に参加した民俗芸能（明治～昭和初期）

※虎舞除く



南部ナアー恐山なあ、恐（おそろ）しうて、こわいなあ

賽の河原ヤーナ ヤンデ地獄谷

アリヤ ヤートコセー ヨイヤナー

アリヤリヤンセー コレヨイワイノセ アリヤヤーンサノセエー

盆のみそはぎナア ヤンレ 我が親だアリヤヤートコセー

ヨイヤナー アリヤリヤンセー コレワイノセ アリヤヤンサノセエー

わたしなアー 大安寺になア 願かけてみたなア

恐山帰りはナーヤンレ 晴れ晴れとオー

（一部）

というものであり、明らかに恐山信仰が入っている。沢口たま、石ヶ守あさ
両氏の踊りを見ると、片足を上げて、その膝のあたりをポンと叩く所作があり、
これが願人踊りの特色らしい。両氏は踊りは隣の名川町剣吉（けんよし）から
習つたと言つている。

昭和三〇年代に私は中居林えんぶり組の病院訪問の舞台で「伊勢音頭」とい
う演目の踊りを見たが、白衣の黒袴姿の明らかに願人踊りであった。

昭和六二年頃、秋田県八郎潟町一日市の願人踊りが、テレビで放映されたの
を見たことがあるが、この願人踊りは全国的なものであろう。

願人踊りは、現在は名川町、三戸町、南部町、倉石村などに行けば見ること
ができる。

（阿部 達）

第七章

八戸三社大祭の山車の造形

八戸三社大祭を特徴づけるのは人目をひく圧倒的な山車が数多く参加する点であろう。祭りの観客は各町内が、毎年工夫をこらす山車の題材に興味と関心を寄せ、その見事な表現に酔うのである。祭礼に登場する山車の造形の意味するところにはさまざまな記号が交錯し、互いに響きあつて多様な意味世界を構築する①。それを読みとくことはかなり困難であるが、ここではその糸口の幾つかを提示してみたい。

本章では八戸三社大祭における山車の造形について、最初にその歴史的展開における意義を第二、三章の分析をもとに確認し、次に現在の山車の題材決定のプロセスとその特徴を第五章の調査成果をもとに概観する。続いて付章に掲げた「八戸三社大祭参加山車組名題一覧」から八戸の風土に関連するものを取り上げて、その意義を考察する。最後に昭和期の地元新聞の記事をもとに三社大祭とそれに関連する世相についても考えてみたい。

一・山車の変容とその意味

八戸三社大祭の山車は近世期の記録類には「出し」と表記されている。それらを祭りに参加させたのは各町内の有力商人であつた。また幕末期の記録には「出し」の名称として古典や芝居あるいは説話などの登場人物の名が記載されている。このことはそうした人物を模した人形が「出し」の中心であつたことを示しているものと考えられる。また西町屋文書によれば、こうした「出し」は「持ち人足」によつて担がれていたことが判明する。このようにみてくると近世期における法靈大明神の祭礼は今日の三社大祭とはかなり趣の異なつたものであつたことがわかるだろう。

さらに注意しなくてはならないのは、こうした記録類によると、祭礼に際して藩の側から「出し」や「踊子」を出すことを督励したり、逆に制限したりす

る場合があつたことである。天明五年（一七八五）には前々年以来の不作に抗するかのように、賑わしく行うようとの指導があつたり、天保九年（一八三八）の藩主夫人の死去に際しては、不作であつたこともあいまつて「出し屋形」は銘々の自宅前に据え置く形式で祭礼が行われたりしている。つまり、近世の八戸の祭礼は藩の指導と差配のもとに行われていたのであり、藩権力の意向が反映される部分が少なくなかつたことが確認できる②。

明治以降、藩が消滅すると、当然祭礼も様変わりしていく。明治一七年には新羅神社が祭礼に加わるようになり、さらに明治二二年までには神明社も参加していわゆる「三社大祭」の三社が揃うようになった。「出し」そのものはあまり大きな変化はその頃まではなかつたようであるが、明治の中頃になると大きく変化していつたらしい。それは従来は有力町人などの分限者の資力による部分が「出し」の参加については大きかつたのに対しても、この頃から町ごとに趣向をこらして山車が参加するようになつていつたことに顕著に表れている。

明治半ばから大正にかけては、近世以来の古い「出し」が徐々に山車に入れ替わっていく期間であつたように考えられる。特に古い「出し」が退場していくのは大正一三年の八戸大火が大きな契機となつたらしい③。

こうして八戸三社大祭の軌跡を振り返つてみると、その中核である山車については、有力商人などの関与する人形中心の「出し」から明治半ばに町民中心の、趣向をこらした物語を表現する風流山車へと変化したことが確認できる。ここに現代に至るまで続く八戸三社大祭の基本的な枠組みの成立を見ることができるのでないだろうか。近代の民衆の生活感覚に根ざした祭礼の基盤が明治半ばにほぼ完成し、これ以降、八戸三社大祭が八戸の町の成熟を反映する祭礼として展開していくことになるのである④。

二 題材決定のプロセスと特徴

豪華絢爛かつ創意工夫に満ちた三社大祭の山車は、その歴史的性質からは八戸の町の成熟をよく示しているものであることを以上で確認した。本節ではこうした山車の題材決定のプロセスと注目すべき特徴を各町内会に関する調査から抜き出し、要約してみよう⑤。

三社大祭では山車を製作、運行する主体は、市内の各団体であり、その単位は職業集団の場合もあるが、多くは町内会である。そして山車の運行全体を附祭と称して、その細部に至るまで様々な過程を住民相互の知恵によりながら、問題解決し、運営していくのである。

山車の題材は、前年の祭りが終わった時点で検討が始められ、正月などの行事を機会に町内での話し合いが行われて、題材が決定される。町内会や運行主体のメンバー構成や歴史的な経緯や伝統、メンバーの意向等のさまざまな要因によつて題材は選択されていく。少なくとも山車小屋が設置されて製作の具体的な作業が開始される四、五月にはその年の題材は決定しており、題材をより巧みに印象づける工夫や飾りの準備などが進められていく。題材の内容としては武者物が比較的よく好まれ、得意とする町内会が多い。他にも、鬼・化け物・珍奇な動物を得意とする朝日町や、祝い物をよく作る淀町、七福神にこだわつて一〇年製作し、その後は中国物を作つている長横町などが特徴的である。

こうした山車の題材については、かつては他の町の者には話さない、従つて、重なつてもかまわない、という競争意識があつたが、近年では、話し合いや情報交換によつて重複しないように心がける場合も多くなってきたとされる。こうした競争意識はかつては山車小屋に他の町の者を入れない、とか、飾りを貸し出すくらいなら燃やしてしまう、あるいは小さな山車を「二ボシ山車」と呼ぶといった強烈な言動にもなつて表れていた。現在では第八章でふれるような

近隣の祭礼行事に八戸の各町内の山車が貸し出されることが多くなり、それによつて新しい文化圏が形成されつつあると判断されることを考え併せると、こうした意識の記憶は貴重である。なお、平成五年から参加し始めた新しい運営団体である八戸共作連が、伝統的な高欄山車タイプの山車を製作していることも、祭礼行事における伝統志向の問題として注目に値するものであろう。

山車の趣向としては山車に乗せられた人形や情景の動きも重要である。三社大祭に見られる仕掛けは、「せり上がり」「展開」「引き出し」「起き上がり」に集約されるようである。人形や背景が、昇降あるいは展開して情景に動きを与える場合、山車の進行の途中で左右に飾りを広げて情景を拡大して印象づける場合などがある。いずれも油圧式のポンプなどを用いて滑らかな動きができるようにしていて、近代に入つてからの新しい演出であることは言うまでもない。こうした動きによつて山車を強く印象づけ、祭りを盛り上げていく努力が積み重ねられていることも趣向をめぐる工夫として注意が必要であろう。

三 題材にみる八戸の風土

山車の題材について、八戸という都市の祭礼という視点から若干の検討を加えておこう。ここでの記述は付章の「八戸三社大祭参加山車組名題一覧」もあわせて参照していただきたい。

六日町が通称、肴町といふことから、その附祭が、波山車で魚や海に関する題材を選ぶという伝統を持つていてことや下大工町や塩町でも附祭は、波山車を基本としてきたことなどは、海に面し、漁業をはじめ海に向けてひらかれてきた土地だけに、充分に首肯できる伝統である。付章の「八戸三社大祭参加山車組名題一覧」で明らかにできた山車の中でも、海に関する題材はかなりの数にのぼる。昭和以降に限定しても「恵比須（鯛釣）」「浦島太郎（竜宮城）」「錨



廿六日町の「歌舞伎舞踊六歌容彩」平成11年



(仕掛けを広げた時)



八戸市職員互助会「歌舞伎十八番のうち不動」平成12年



(仕掛けを広げた時)

図19 八戸三社大祭の動力仕掛け

知盛（知盛亡靈）などは繰り返し取り上げられている。これらは親しみやすく馴染みやすい題材であるとともに、縁起の良さ、昔話に材をとつた分かりやすさ、武者物や英雄物とも通じるといった扱いやしさ等が、繰り返し登場していく理由として考えられるだろう。しかし、それは題材としての卓抜さであるとともに、山車が八戸の人々によつて作られ、八戸の人々によつて鑑賞されるものであることを考えた時、海にまつわり、海をめぐるさまざまな想いを凝縮させていくことに気づかされる。

題材は近年ではあまり連續したり、重なつたりすることを避けるようになつてきていることを考えると、これだけの集中は八戸の人々の集合的な意識を表象しているとさえ言えるのではないだろうか。賑やかに大通りを運行していく海を題材にした山車は、八戸の人々の生活の記憶を刺激し、自己の歩みを大祭の度に想起させる隠れた役目も担つていているのである。

こうした八戸の風土にまつわる山車の題材として、さまざまな郷土の伝承が取り上げられていることにも注意しておきたい。昭和以降の題材で繰り返し取り上げられている郷土の伝承としては「八の太郎（と南祖坊、辰子姫）」が目立つ存在である。これは十和田湖にまつわるもので、奥淨瑠璃の「十和田山由来記」などの文芸作品にもなっている^⑥が、おそらく八戸とその近郊の村々でもさまざまな伝説が語り伝えられていたであろう。他にも「十二支と守本尊」は、生まれ年の十二支によつて個人の守護神仏が決まつてゐるという、北奥羽地方に頗著な民俗信仰^⑦を題材としたものであろうし、「亀遊山・浮木寺由来」も八戸の有名な伝説^⑧を山車に取り入れたものであろう。

したものと思われる。そうした意味で、「法靈權現」や「三社大祭縁起」といった祭礼に直接関わつてくる題材の趣向は、三社大祭そのものの歴史を語り、そのアイデンティティを観客の眼前に提出し、確認させるものであつたかもしない。



写真229 八戸三社大祭の題材に頻出する「錨知盛」
(平成12年吹上山車組)

これらの趣向を取り込んだ山車は動く郷土史ともいうことができる存在であつただろう。祭りの晴れやかな気持ちのなかで、祖父母が孫たちに、年長者が年少者へ、それぞの内容を語つてきかせるきっかけとなつたり、あるいはことさら言葉にしなくとも、それらを胸中に懐かしく想起する呼び水として機能

四 昭和史にみる三社大祭—地元新聞の報道から—

八戸三社大祭には、第六章にまとめられたような種々の芸能が、行列に古くから参加し、あたかもこの地方の芸能博覧会のような様相を帯びるが、それ以外にも三社大祭にはさまざまな世相が反映され、影響を与えていた。ここでは第三章で取り上げた時期以降の昭和期の地元新聞の記事から三社大祭をめぐる世相を、いくつか読みとり、山車祭礼が八戸という地域社会のなかでどのような位置を占めているかを考えていくこととする。

山車祭礼は、その華やかさに大きな特徴があることから、神事の側面が軽視されイベント色が強まつてしていく傾向が常にある。こうした危惧は戦前にも既に一部の識者の間ではあつたようで『奥南新報』昭和八年九月一日には「御神輿様を拝め」という主張が載せられている。その冒頭に三社大祭には「御神輿様の通りがかつた箇所は万波の打寄せる渚の如く拍手の響か打ち続いたものだが……」⑨とあつて、御輿の本来の意義である祭神の巡行が、この当時の八戸では、かつては明瞭に意識されていたことが記憶されており、イベント化に抗する主張を支えているのである。これが戦後の『デーリー東北』昭和三六年八月二一日の記事では、ある町内の幹部の発言として「だしあはおみこしのお供だ」という考え方をもうこの辺で改めてもらいましょう。……どつちに人が多く出るかひとつやつてみましようか」という鼻息の荒い様子が報じられている。祭礼の本の中核である御輿とそれに付き従う筈のだし（附祭）との立場の逆転がここで見いだせる。こうした発言が飛び出す背景には当時のさまざまな事情があつたものと思われ、一概に敬神の念の軽重と結びつけることには慎重でなければならぬが、多少の振り戻しや立場による志向のあるものの、ある面で古い伝統を誇る三社大祭もイベント化の途を辿つてきていることは否定できないようである。

祭りは本来、聖なるもので、日常の俗的な世相とは没交渉のものであるように思われるが、現実は必ずしもそうではなく、三社大祭も例外ではない。戦前の『奥南新報』昭和一一年九月一日では「街頭の其処此處に千人針を乞ふ人々のあつた」ことを伝えている。こうした多くの人々の協力を必要とする共同祈願のためには人出の多い祭礼という機会を利用しようとしたのであろう。戦後は意外な面で生活の変化が祭礼の執行に影響を与えていた。『デーリー東北』昭和三四年八月二十五日には御輿渡御の供奉者が履くワラジが不足して困り切っている、という記事がある。「……約三百九十五足が必要だ」という。八方手を尽くして探し集めたが二百三十足しか見つからなかつた。まだ期日もあることだし、残りを新しく作つてもらおうと懇請したら「一升つけてもらつても引きあわぬ」とアッサリ断られ、ついに断念してしまつたという。……四百足たらずのワラジが見つからないとは八戸市も変わつたものだと慨嘆しきり。その年以降のわらじに関する記事が見いだせないために現在に至るまで、どのような経緯があったかは不明だが、逆に現在では、かつては八戸近郊で、四〇〇足ものワラジを、それほど以前から心がけなくとも揃えることができたらしいことに驚きを感じるのではないだろうか。

祭りの担い手、参加者にも変化が見られ、子供たちの占める比重が増してきていることも新聞記事からうかがうことができる。『デーリー東北』昭和三一年九月二日には「戦前は男の子しかお祭りに加わらなかつたが、戦後は男女同権になつて女の子も山車を引き賑やかになつた。山車を出すのは町内の「若者連」ということになつていて、最近は子供中心の考え方になつてきていた。昔は大人たちの飲み食いに多く費用が使われたがだんだん子供たちのベントウやオヤツに費用をかけるようになり、余れば町内運動会の費用にしたり野球の用具を買つたりする町内もある」と、この当時の変化を的確にとらえている。こうした子供重視が山車の造形や趣向にも影響を与えていったであろうし、祭礼に

対する意識もこうした点から変化していったのではないだろうか。

以上、ここでは昭和期の地元の新聞記事の中から、山車行列や山車の造形の変化及び変容につながつたであろうと思われる記事を紹介した。近代以降の祭礼の変遷はこうした当時の世相にも注意を向けながら叙述されるべきであろう。紙数の関係もあり、ここで提示したのはごく僅かに過ぎないが、その有用性は示すことができたのではないだろうか。

章化したことを明記しておく。

⑤ 本節の記述は本報告書第五章の内容のなかから、ここで問題意識に関するものを抽出したものである。

⑥ 奥淨瑠璃「十和田山由来記」については『青森県史 民俗編 資料 南部』(二〇〇一年、青森県)、七六七一七八〇頁等を参照。

⑦ この信仰については小池淳一「イチダイ様信仰の生成」(弘前大学国史研究)一〇二号、一九九七年)を参照。

⑧ この伝説の八戸市内における様相については音喜多富寿「浮木寺縁起と亀の浮木」(同『音喜多富寿隨筆集』、一九六七年、津軽書房)等を参照。

⑨ 以下、新聞の引用にあたつては仮名遣いはもとのままでし、漢字は現行のものに改めた。

(小池 淳一)

本章では山車の造形の歴史的な変遷、題材決定の現状、題材の種類、周辺の世相にまつわる問題などを視点として、それぞれの意義や研究上の課題を探つてみた。ここで登録した視点を出発点として、さらに南部地方を代表する山車祭礼としての三社大祭を調査、分析していくことが必要であろう。ここでは三力年にわたる八戸三社大祭民俗文化財調査の成果の一端として、なるべく問題の所在を示し、今後の調査研究に資するであろう視点を紹介するようにつとめたのである。

注

- ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨
- ① そうした視点にたつた華麗な成果が郡司正勝『風流の図像誌』、一九八七年、三省堂)である。
- ② 以上の記述は本報告書第二章に基づき、注目すべき要点のみを示したものである。具体的な史料と詳細については第二章を参照されたい。
- ③ 以上の記述は本報告書第三章に基づき、大まかに要約したものである。具体的な史料と詳細については第三章を参照されたい。
- ④ こうした見解は執筆者個人のものというより、八戸三社大祭民俗文化財調査に携わったメンバーの成果報告と意見交換の中からたち上がりつてきたものである。ここではこうした見解を特に植木行宣先生の御示唆のもとに文

第八章

南部地方の山車祭りと八戸三社大祭

岩手県北部から青森県南にかけてのいわゆる南部地方には、八戸三社大祭に限らず、山車の参加、随行を特色の一つとする祭礼行事が広く分布し、盛んに行われている。これらの祭礼は近年、社会の変動や参加住民の生活環境の変化などによつて民俗的な祭礼行事というよりも夏から秋にかけての地域イベントという色彩が濃厚になつてゐるものも少くないが、地域社会における祭りへの期待と主要な要素とを現代的に表現するものとして注目すべき点が多い。

ここでは八戸三社大祭をそうした南部地方のさまざまな祭礼と関連づけてとらえ、そこから南部地方における三社大祭の位置について考えてみたい。

本章では最初に南部地方の山車祭礼行事を概観し、その歴史と近年の山車運行の様相を述べる。次に特徴的な祭礼とその要素について幾つか触れてみたい。そして最後に八戸三社大祭に登場した山車が近隣の山車祭礼に貸し出され、転用されていくことを指摘し、八戸三社大祭を中心とする風流山車の交流圏の存在とその意義について述べてみたい。

一・南部地方における山車祭礼の概観

法靈權現を中心とした信仰を核とした祭礼が、八戸藩や城下町八戸の有力町人、さらには各町内の熱烈な参加によつて支えられながら成長し、一部に「日本一の山車祭り」と称される今日の八戸三社大祭の活況を呈する背景には、近世期からの長い歴史があつた。本報告書に主要な関連史料が集成されたように、残存している史料も偏りはあるものの、少なくはなく、近世の都市祭礼として位置づける研究も公にされている①。しかし、南部地方の山車祭礼の多くは残存している史料が乏しく、その歴史を具体的に描けるものは少ない。



写真230 弁財天人形（三戸町 松尾千代志氏蔵）

そうしたなかでも三戸町の三戸神宮の祭礼は、文政九年（一八二六）の行列の次第が残つており、「屋台」が九台、それぞれ人夫がついて参加していたことが知られる。人夫がかつぐ形式で祭礼に華を添えていたものが、明治期になると、現在のような山車が行列に加わるようになつたと推測されている②。また、町内には幕末から明治初期に当地に流入し、祭礼に用いられたと思われる大黒天や弁財天の人形が残されており③、これらを必要とする華やかな行列が藩政期に行われていたことを裏付ける。

五戸町の五戸祭は八戸にならつて三社大祭と称することもあつたが、五戸の場合の三社とは、稻荷神社、神明宮、八幡宮であつた。文化年間に京都に出むき、神輿を購入し、その際に京都の祇園祭をならつた形式になつたものと推測されている④。「附祭り」として山車が加わつたのは明治以降で、三〇年代の写真記録があるという⑤。三戸と同様に近世期には屋台やそれに類するものが祭礼に参加していたかもしぬれない。

八戸からはやや離れるが、海上交通の要衝として栄えた野辺地町の祇園祭りも、天明八年（一八三七）の記録があり、そこに「祇園囃子」と記されていることから、今日のような祇園系の囃子^⑥を演奏することを中心とした屋台か山車のようなものが参加していた可能性がある。また、一戸町の小倉家には大坂天神祭のお迎え人形が、祭礼に用いられたとの伝承とともに残されていて^⑦、やはり近世期にこの地域でも人形を核とした祭礼が執行されていたことを示唆する。

以上は近世期から山車や屋台といった祭礼を華やかに特徴づける要素が、祭りの際の行列に付け加わっていた可能性を持つ場合である。南部地方の有力な神社の多くの草創は、近世あるいは中世に遡るとされており、その各地の祭礼に山車や屋台が加わっていた可能性は否定できない。しかし、こうした風流は祭礼の際の御輿そのものの渡御と比べれば、必要不可欠といったわけではないので、神社や祭礼そのものの開始時期と同じようには判断できない。また、一時は山車などが加わっていても、社会情勢の変化などによって加わらなくなつたりする場合も考えられる。近世期に八戸三社大祭と比べると規模などの面では異なるものの、風流山車を許容する祭礼が幾つか南部地方にはみられたことをここでは確認するにとどめたい。

次に現在（平成一〇年）の祭日にそつて、南部地方で行われる祭礼とイベントを概観してみよう。この地方で最も早く例祭が行われるのは、六ヶ所村泊の諏訪神社の例大祭で、七月十七日が前夜祭で、十八日から二〇日まで、山車一台が加わった祭礼が行われる。続いて八月一～三日の八戸三社大祭、十七～三九日の野辺地祇園まつり、十九日の新郷村戸来三嶽神社大祭、二〇～二三日の三沢まつりがあり、岩手県野田村でも二三日～二六日に野田觀光まつりが行われる。二七日～三〇日にかけては上北町の上北秋祭りで、重なつて二八日～三〇日は五戸まつりである。

九月になると一層、秋祭りは集中して行われるようになつている。九月三日～六日の七戸秋祭り、四日から六日の岩手県二戸市の二戸祭り、五日～六日の日程が六戸秋祭りである。八日～一〇日は名川秋祭り、一〇日から十三日が十和田市秋祭り、十二日～十五日は岩手県淨法寺町の神明社例大祭である。また、十三日～十五日には三戸三社大祭、重なつて十四～十五日は福地村の苦米地まつり、十四日～十六日は八戸に近接する百石町の百石まつりが行われる。なお、同じ日程で岩手県の輕米町の輕米秋祭りも行われる。十六日～十九日は同じ岩手県の久慈市の久慈秋祭りで、最後に二二日～二十四日、秋分の日をはさんで下田町の下田祭りが行われた^⑧。

これらの祭礼、イベントは期日が重なり、また微妙にずれながら北奥羽の夏から秋の村や町を彩るものであるが、その多くに風流山車が登場し、祭りの雰囲気を盛り上げていることは注意しなくてはならないだろう。これらは先にも述べたように地域のイベントであるとともに、それぞれの地域の有力神社の祭礼を母胎としていることが多く、神社の祭礼から発展し、地域社会の年中行事へと展開してきている。そのため地域のさまざまな条件や歴史を反映し、独特の祭礼として存在それ自体が文化財としての意義を持つ場合が少なくないことは銘記しておかねばならないだろう。こうした性格の変化は祭りが行われる日程に最もよく反映されており、住民の参加、觀光客の便宜などさまざまな事情を考慮し、八戸三社大祭をはじめ、多くの祭礼が祭日を変えて行われる場合が目立つていている。

二、南部地方の山車祭礼の特徴

祭礼はその活気を担う風流山車に、特徴が集中することは南部地方に限つたことではなく、日本各地の祭りに共通することである。その山車も曳山や山鉾

さらには屋台なども含めるならば極めて多様で、簡単に論じられるものではない。ここではそうした山車の人形と囃子に注目して南部地方の山車祭礼の特徴についてみておこう。

八戸三社大祭の山車は、人形を数多く用い、人々によく知られた説話や歴史上の事件の一場面を巧みに構成している点に特徴がある。近世に用いられたとされる人形も幾つか残されていて、人形が山車の構成要素として重視されたことは一種の伝統であつたと考えられる。ただし、こうした山車に用いられたと考えられる人形は八戸にのみ残存するのではなく、盛岡の秋祭りの山車にもみられるし、さらに一戸町、三戸町において幕末期の人形が保存されていることは先述した通りである。さらに五戸町でも町の大家が飾り人形や家宝を祭りの際に店先に飾る習慣があつたという^⑨から、必ずしも山車や屋台に乗せるとは限らず、縁側や店先で人々が鑑賞することで祭礼の雰囲気を盛り上げる場合も八戸をはじめ各地にあつたらしい。

さらに五戸町では同町浅水で頭が二尺もある大きな人形を作る彫刻師がいて、五戸祭りに用いられる人形と盛岡の人形とはよく似ている、という証言もある。また、町内で京人形を買ってくれたものを見て研究したとも言われている^⑩。こうした人形を作成するには高いレベルの技術が必要であり、南部地方のなかでは作ることができず、遠く上方に発注したり、あるいは上方で技術を習得してきた人形師によって特別に製作されることも多かつたと思われる。いわば、人形をどのように作り、組み合わせて山車の上にどういった情景を作り出すかは、特殊な技術の上に成り立つ創造的な営為なのである。そしてその営為の根源に京都や大坂をはじめとする上方、あるいは盛岡との交流があつことは、こうした祭礼の要素の歴史を考え、さらに祭礼全体の系譜を考える上でも重要な問題ということができよう。

囃子そのものについては民俗音楽的なアプローチが必須であり、その点から

の考究が今後、必要となるという指摘だけにとどめざるを得ない^⑪。ただし、山車の形状との関わりから興味深い点を述べておく。同じ南部地方でも現在は秋田県となっている鹿角市の花輪ばやしは「日本一の祭りばやし」を称するところもあるように、一二の曲目を優雅に、あるいは激しく演奏するところにその特徴がみられる。この花輪ばやしに用いられる屋台は豪華なものではあるものの、俗に「腰抜け屋台」と呼ばれ、中に入った演奏者は歩いて屋台の移動についていく形式をとっている。かつては本屋台や飾り山車も出ていたというから、はやしの演奏に重点をおいて毎年行われているうちに山車の形式が淘汰されいつたという見方も可能であろう^⑫。囃子は山車の形態にも影響を与えるのである。

青森県内で興味深いのは十和田市の秋祭りに見られる「太鼓車」である。これは山車に続いて祭りの行列に加わっているもので、山車の多くが後述するよう八戸三社大祭の山車を借りて

運行しているのに対し、この太鼓車は各町内会で制作している。人形等で構成される物語的な情景は本来の山車に任せ、囃子の部分は新たに屋台状のものを作り、そこには人々を乗せるように工夫されている。この太鼓車には、製作に一定の技術を要する人形山車に加えて、地元町内会によつて囃子演奏の場を共同で作り上げる、という意義が認められるだろ



写真231 十和田秋祭りの「太鼓車」

成、旋律や曲目でとらえるとともに、祭礼行列のなかで視覚的あるいは物理的にどのような位置を占めているかにも注意する必要があるのでないだろうか。

三・八戸型風流山車文化圏の存在と意義

南部地方の祭礼行事の特質が風流山車にみられることはこれまでも注意されてきた。これらを総称して「南部山車祭」と呼ぶこともある^⑬ほどで、祭礼本来の意味からは「附祭り」であり、御輿に従う行列の中のさまざまな要素と同等の価値を持つ筈であるが、華やかさと毎年さまざまな趣向がこらされるという点で山車が最も期待と注目を浴びる存在であると言えよう。

八戸をはじめとする北奥羽地方の風流山車を比較検討すると、現在では、大きく二つの類型に分けることができる。一つは八戸三社大祭にみられる形式のもので、比較的、人形などを乗せる位置が低く、数多くの人形を用いて複雑な情景を作り上げ、さらに躍動感や場面の展開を強調するために人形や舞台部分が電動式になつていている。これにより祭礼の観客から見た場合、迫力のある運行が可能となるのである。また、運行する側にとって、こうして見せ場を演出することで、それぞれの山車の造形をさらに強くアピールすることができるのである。

もう一つは盛岡八幡宮の祭礼などに見られる、比較的、山車の高い位置に大きめの人形を据え、紅白の牡丹などの造花で飾り立てられるものである。人形をメインにしていて人形山車の系譜に属し、全国的な山車や鉢の分布及び歴史的な資料からは、こちらの方が伝統的なものと判断できよう^⑭。

両者は他にも太鼓の位置が、八戸型のものは山車の前面に据えられる傾向があるのに対しても、盛岡型は後方に置かれることが多い等の違いが見られる。太鼓の位置は、他の笛などの楽器を演奏する人々の配置や山車の視覚に訴える要

素と囃子の聴覚に訴える要素との絡み合いにも影響を与えているものと推測される。こうした人形を核とする風流の発想は同じであるものの、山車全体の構成に違いを見出すことができる点は、北奥羽の祭礼行事を考えしていく上で重要なことと言えよう。

そうした八戸型と盛岡型の山車の現状での分布を図二〇に示してみると、興味深い問題を見出すことができる。盛岡型の山車が岩手県北に広く分布しているのに対して、八戸型の山車の分布は岩手県の太平洋沿岸部に見られ、県境をこえて、普代村、久慈市、軽米町にまでのびている。これは近世以来のこの地方の中核的な「都市」とその商業圏に重ねて理解することができ、それぞれのマチの文化とそれを支える「在」もしくはムラという大まかな構図を想定することもできそうだ。

これを具体的に裏付けるのが、山車の流通の問題である。八戸型の山車が用いられる各市町村には、八戸の三社大祭が終了すると市内の各町がその年に製作した山車をそれぞれ、近隣の市町村に貸し出しているのである。借り出した側は、八戸の趣向を生かしたり、若干の変更を行つたり、あるいは一部を流用するなどしてそれぞれの山車として活用していく。

このことを八戸の側、特に山車を製作、運行する各町内会からみておこう^⑮。三沢市へは根城新組町、吉田産業グループ、六日町、上組町、内丸などが山車の貸し出しを行つており、上北町へは根城新組町、売市などが、十和田市には吉田産業グループ、鍛治丁、吹上、上組町などが貸し出しを行つている。興味深いのはこうした山車の貸し借りの関係は、原則として一年ごとの契約であるものの。売市と岩手県久慈市、内丸と同じく久慈市、三沢市などのように長い期間にわたって貸借関係が成立して、実質的には固定していく場合もあることである。これは上組町のように小さめの山車であるために、道の狭い町村での運行に適しているといった極めて具体的な理由もある一方で、地域相互のさま

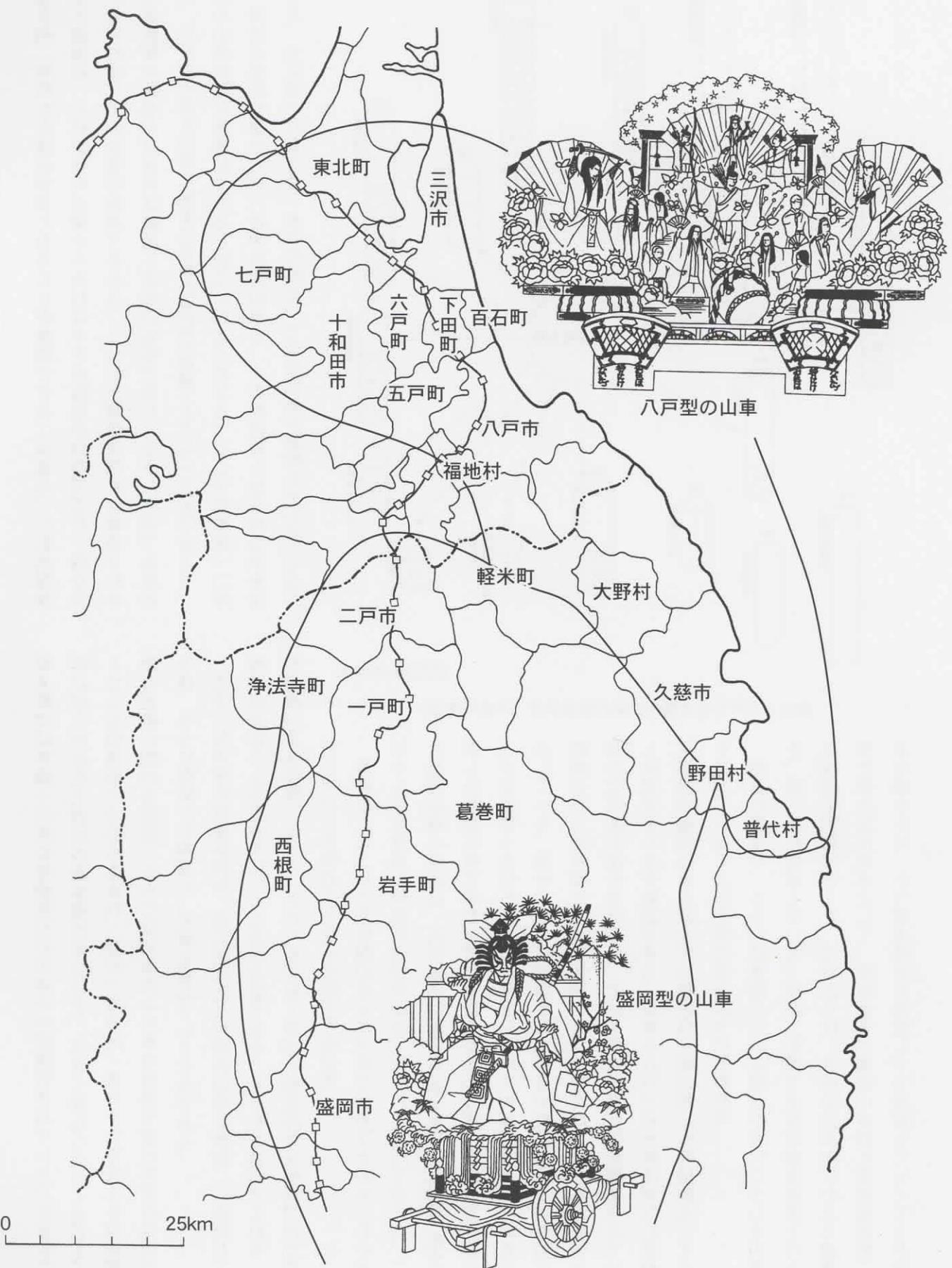


図20 八戸型と盛岡型の山車分布

ざまな人的、物的な交流が背景にあることが推測できる。つまり、三社大祭後の山車の流通は、八戸の各町の側からみればマチの活気の利用であろう。こうした関係は祭礼に象徴され、借り出す側からすればマチの活気の利用であろう。こうした関係は祭礼に象徴される

ような価値観の共有がなければ継続しえないものであり、そうした点で山車の流通は、八戸型の祭礼山車に顕著に表れた文化の流通ともいうことができよう。

以上の山車流通を整理してみると図21のようになる。ここでは平成一二年度に、周辺の祭礼行事に八戸三社大祭の山車が、どの程度貸し出されたかを示してみた。先に述べたように、長年にわたって貸借関係が継続している一方で、

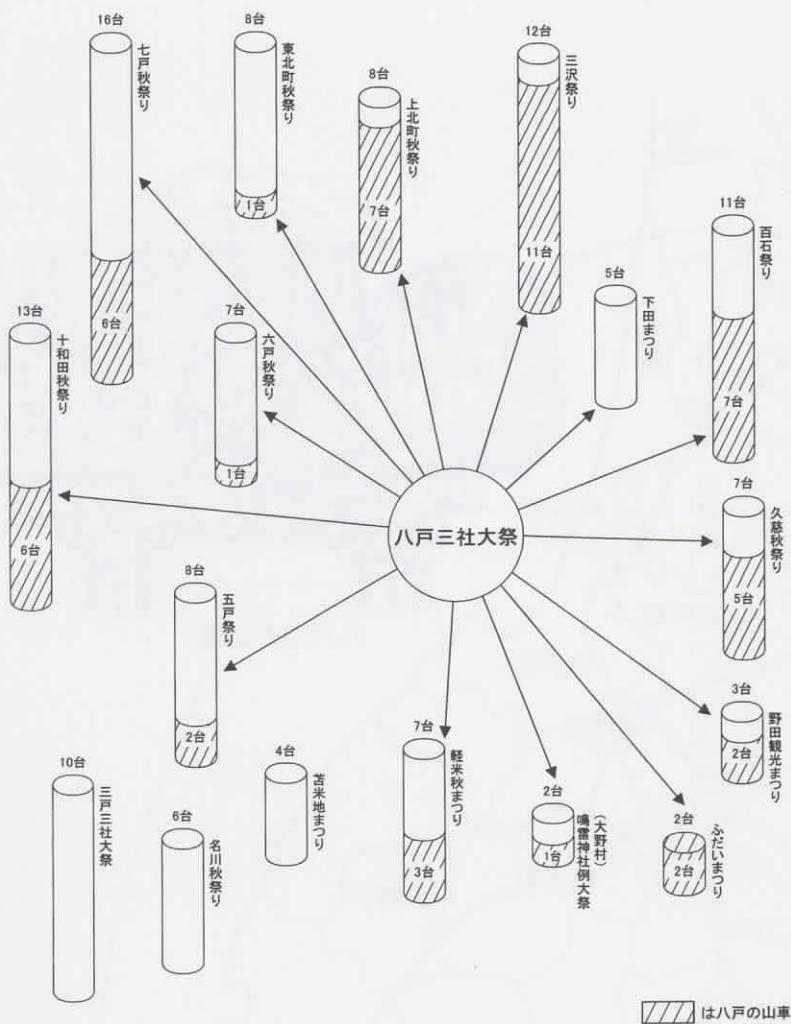


図21 八戸三社大祭の山車の流通状況（平成12年度）

軽米町では平成一〇年には盛岡型の山車のみが運行されていたのに対しても翌々年には八戸から三台の山車を借用するなど、大きく変化していく場合もある。こうした関係がいつから生まれ、拡がったのか、またそれを支える情報網や実際の運搬に関わる問題、さらには具体的な山車の利用や意匠変更の様相などは今後、さらに徹底して調査し、考察を重ねていくべきである。

こうした山車の流通状況は、先に述べた八戸型の山車を許容し、活用していく地域の文化としてとらえていくことが可能である。こうした意味でこれを「八戸型風流山車文化圏」として、八戸三社大祭と周辺の祭礼行事を関連づけながら研究していく出発点とすることができよう¹⁶⁾。

最後に、こうした文化圏の設定が可能であることから、その意義とどのような見通しが現時点で可能か、について述べておこう。こうした風流山車の流通は、八戸型の山車が日本列島上の祭礼文化史上は、新しい類型に属するものであるにもかかわらず、南部地方においては大きな影響力を持ち、さらに発展していく可能性を持つていることを示している。現時点までに確認されている史資料が乏しいために、時間軸に沿った考察は今後の課題とせざるを得ないが、八戸を核として新たな祭礼文化が形成され、それが周辺の祭礼に影響を与えていることは現状から充分確認できる。つまり八戸三社大祭は東北に伝播した祇園系の風流山車を核とする都市祭礼¹⁷⁾の新しい発信源としての意義を持つっていることが主張できるようと思われる。

期日が重なり、あるいは連続している場合が多いこうした山車祭礼を、限られた地域とはいえ、僅か三年間で充分な調査研究を行うことは極めて困難であった。これからは、今回の三カ年にわたる調査の成果を新たな出発点として、南部地方の風流山車祭礼を地域社会ごとにより細やかに、かつ歴史性をも考慮しつつ検討していくことが望まれ

よう。そうした作業の上に北奥羽地方、あるいは交流が予想される北陸^⑯あるいは京都の祭礼^⑰との説得力のある比較研究が可能になることをここでは強調しておきたい。

江刺家均「南部山車祭の系譜」（『アミューズ』、一九九六・九七年連載）を参照。

なお、本章は八戸三社大祭民俗文化財調査事務局による基礎資料に基づく部

分が多大であること、かつ、その整理にも迅速に対応された成果であることを明記し、その中心となつた工藤竹久氏の尽力に謝意を表したい。

注

- ① 高牧實「第五章 城下町八戸における祭礼」（同『近世の都市と祭礼』、二〇〇〇年、吉川弘文館）
 - ② 『三戸町史（中巻）』（一九九七年、三戸町）、一九二一—一九三頁。
 - ③ 八戸三社大祭民俗文化財調査による実地調査。二〇〇〇年八月。
 - ④ 『五戸町誌（中巻）』、一九六七年、五戸町、五九一頁。
 - ⑤ 三浦栄一『流れる五戸川 続⑧』（一九九七年、自刊）、一五〇頁。
 - ⑥ 野辺地の祇園囃子については『民俗芸能研究の周辺——青森県三八・上北地方』（一九九九年、青森県教育委員会）、一二一一三頁を参照。
 - ⑦ 前掲注3と同じ。
 - ⑧ これらは八戸三社大祭民俗文化財調査における各市町村に対するアンケート調査等による成果である。関係者の御協力に謝意を表する。
 - ⑨ 前掲注4、五九四頁。
 - ⑩ 前掲注5、一六五頁。
 - ⑪ 祭礼における囃子を重視した調査報告として関東地方のものであるが『堤崎の祭りばやし』（二〇〇一年、埼玉県上尾市教育委員会）を挙げておく。
 - ⑫ 花輪ばやしについては小田切雅人『花輪ばやし探訪』（一九九三年、おだぎり通信出版事業部）に詳しい。
- （小池 淳一）

（13）江刺家均「南部山車祭の系譜」（『アミューズ』、一九九六・九七年連載）を参照。

（14）全国的な風流山車とその祭礼の様式については植木行宣『山・鉾・屋台の祭り——風流の開花』（二〇〇一年、白水社）及び本報告書第九章を参照。

（15）山車（附祭）の詳細については本報告書第五章を参照。以下の記述は、そこでの記述と重複する部分がある。

（16）こうした風流祭礼の伝承圏については、福間裕爾「都鄙連続論」の可能性——北部九州の山笠分布を中心に——（『福岡市博物館紀要』二、一九九二年）、宇野通『加能越の曳山祭』（一九九七年、能登印刷出版部）等が参考になる。

（17）各地の都市祭礼の様相については、『祭礼・山車・風流——近世都市祭礼の文化史』（一九九五年、四日市市立博物館）等を参照。

（18）北陸地方の風流山車とその周辺の様相については『おまつり おはやしおどり——若狭の祭礼・山車・風流』（一九九八年、福井県立若狭歴史民俗資料館）が参考するのに便利である。

（19）京都の祇園祭に関する研究は数多く存在するが、ここでは現代的な視点に基づいた谷直樹・増井正哉編『まち祇園祭すまい』（一九九四年、思文閣出版）を挙げておく。

第九章

八戸三社大祭の位相

一・三社大祭の特色

曳山祭りとしての八戸三社大祭の特色はすでにいろいろ述べられているが、整理すればおよそ次のようにまとめられる。

1. 曳山が巨大であること
2. 毎年新しい趣向の作り物を飾る曳山であること
3. 作り物が表裏二景から成ること
4. 表の作り物が上下左右に動的変化を見せること
5. 岩組などの山の造形を骨格とすること
6. 曳山のほかに練物（虎舞）の要素を残すこと

ここに見える6以外の特色は「作り山」が共有する特色である。作り山とは全国に展開する山・鉾・屋台にみる一類型であり、「人形その他で故事伝説・物語等の一情景を表現する山」をいい、山形を骨格とする造形に特色をもち、祭りの度に趣向を凝らして製作し終われば直ちに破却するのを原則とする山である①。「山車」と称する当大祭の曳山は、まさにその作り山の流れに立つ代表的伝承にほかならない。

この作り山の特色は風流^{ふりゆう}から受け継いだ特色である。風流とは歴史的な用語で、その語義は時代とともに変遷し一樣ではない。それについては岡崎義恵氏の詳細な研究によられたいが②、風流は「ふうりゅう」とよみ、もとは雅やかなもの、風情あるものの意であった。それが趣向を凝らし意匠をつくすことから、それを特色とする作り物や装飾の意に転じ、ついには「ふりゅう」とよんでもつぱら集団的な踊りを意味するものとなつた。

風流は大きく作り物の風流から風流囃子物へ変化したといえるが、作り物の

風流は、歌合せなど王朝貴族の遊興の場において和漢の古事や詩歌の心を趣向とする細工物として発展し、その一方で、加茂祭りなど祭りの場において牛車や衣裳を彩る装飾品へと展開した。そこでは物合せが端的に示すように競合の心が強く流れしており、そこで凝らされる趣向は豪華華麗を競うばかりではなく、相手の意表をついてあつと言わせる奇抜さへと傾いていった。過差^{かさ}や婆沙羅^{ばさら}への動きである。中世における連歌・闘茶の賭物や酒宴の器物にみられる風流は、そうした風流を受け継ぐものであつた。

しかし、歌合せ・物合せから連歌・茶の湯への流れは、等質性の高い限られた人々の世界にとどまりサロン的な遊びの域を出なかつた。それを大衆の世界に引き出したのが祭りにおける作り物の風流である。風流はそこで祭りに集う群衆の目を意識した見せる行為となつて、豪華でかつ人目を驚かす異相異風の作り物へと大きく展開するとともに、作り物とそれを囃す行為との一体化をもたらした。そこに生まれたのが風流囃子物である。こうした風流囃子物について、『邦訳日葡辞書』は「Furiyu（風流）…さまざまな扮装をして道化を演ずる踊り。あるいは、踊り一般をいうが、それは踊の中にはいつも趣のあることなどが含まれているからである」としている。作り物の風流が作り物など趣のある行為を指す概念に転じ、中世後期にはもつぱら風流囃子物すなわち踊りを意味するにいたつたのである。

京都の祇園祭りが山鉾の祭りへ発展した時代はいわば風流の世紀であつた。「趣のあること」を求めて止まぬ風流はそこで一つの美意識となつて広く大衆の生活に浸透し、やがて山・鉾・屋台を主役とする近世都市祭礼を生み出したのである。八戸三社大祭もその一つであるが、いまも山車の名題に冠せられる「風流」の字はその流れを伝えるものにほかならない。

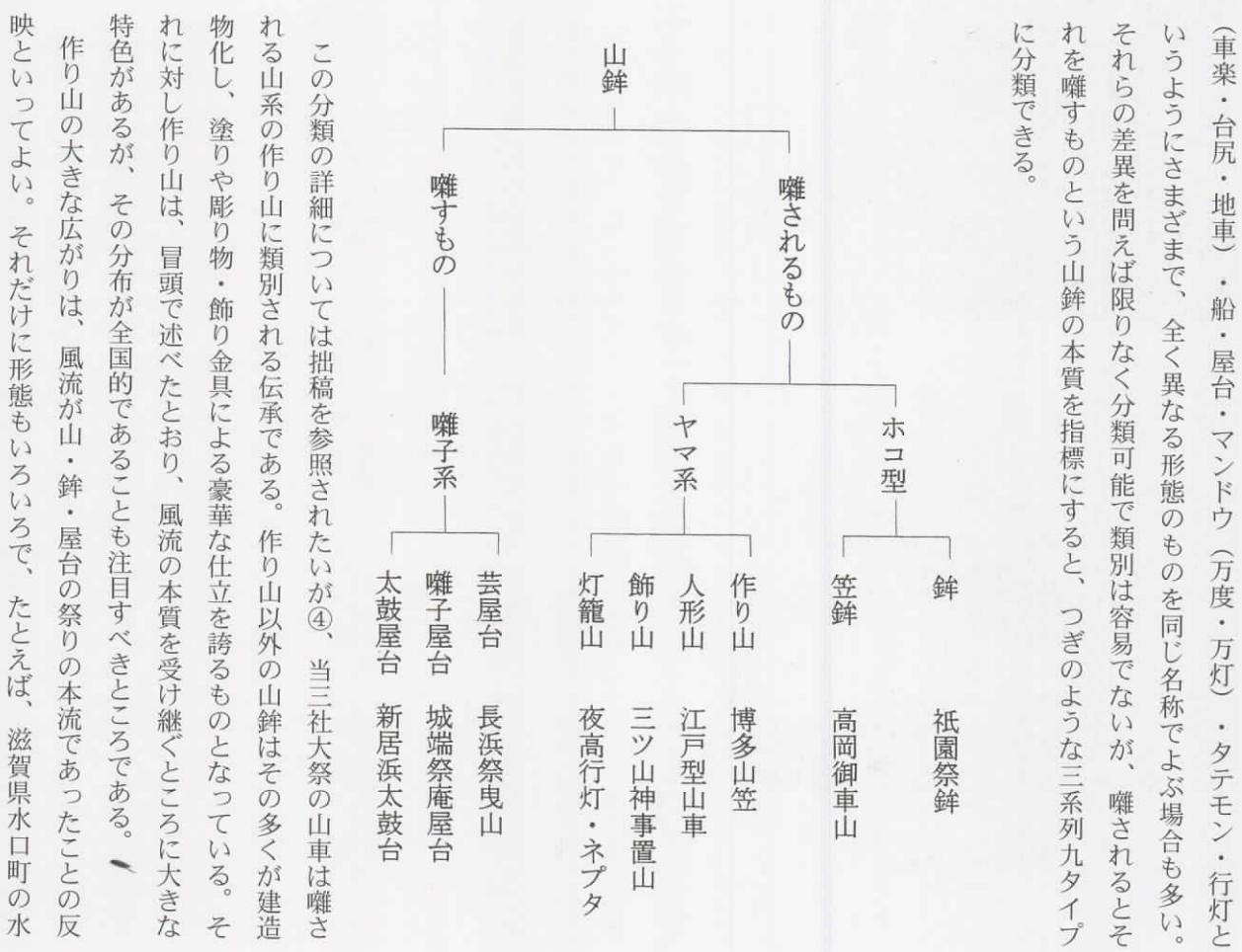
二、山鉾の類型と作り山のひろがり

山・鉾・屋台の祭りは、周知のように京都の祇園祭りにはじまる。その祇園祭りの母胎は鎌倉後期における風流であり、疫神を鎮め送る祭りとして発展した。そこで主役となつた山鉾は、王朝以来の作り物の風流の流れを受け継ぐところで完成した造形であり、その原型ができたのは十五世紀のころであった。

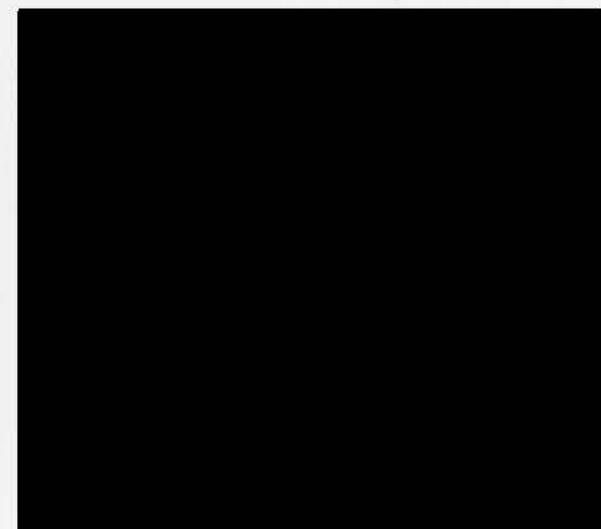
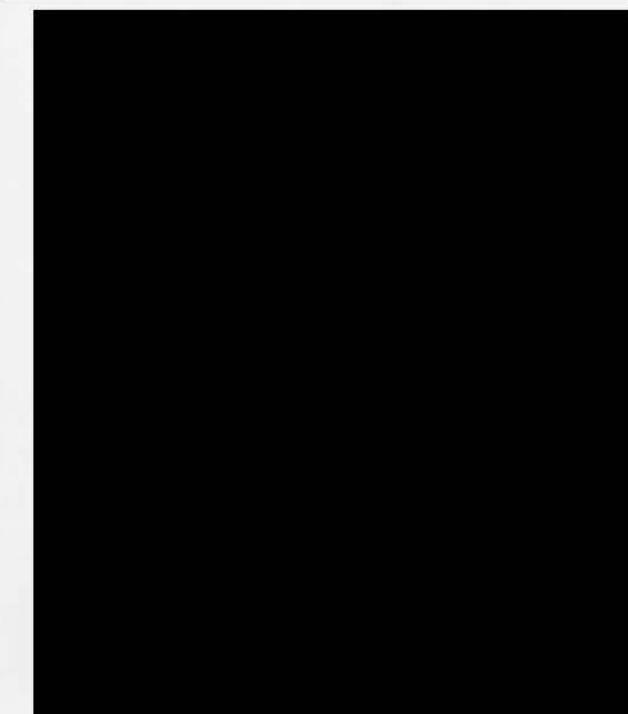
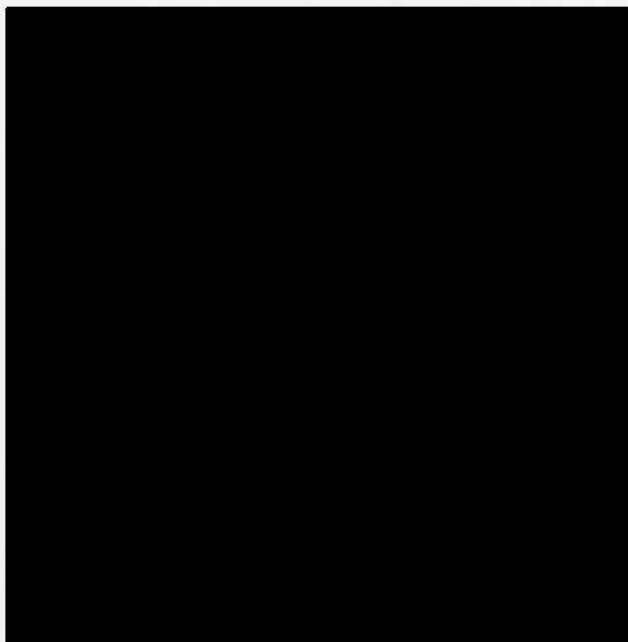
祇園祭りの山鉾はそれまで年々に趣向を競つてきたのであり、それが風流本来の面白さを捨てる代わりに山・鉾を豪華華麗に仕立てる方向を選んで固定するに至つたのである。流動から固定へのこの展開は、風流の本旨からすると後退というべきであろう。しかし、祭りを迎えて組み立て、終わつて解体する山鉾のあり方と、その装飾を取り替え自由な懸装品主体とする行き方にいまも風流の心を伝えているのである。

いわゆる山車祭りは祇園祭りにそのルーツを仰ぐものが多い。ところが造形面で直接の関係を示すものはごく一部に限られる。山車祭りのほとんどすべては、江戸時代に一斉成立をみた城下町をはじめとする近世都市を舞台に成立発展したものであり、その主要な山車祭りは等しく練物の祭りとしてはじまり、練物を構成する多様な出し物の一部を選択的に育てるところで山や屋台を生み出したのである。

練物とはさまざまな趣向の出し物による行列をいう。それは風流囃子物の近世版といつてよいものであり、練物を母胎とする山や屋台の登場は祇園祭山鉾の形成史を再現するかの感がある。関東一円に分布する江戸型山車、名古屋を中心とし広がる中京圏の名古屋型山車、北九州の山笠はその典型である③。



作り山の大きな広がりは、風流が山・鉾・屋台の祭りの本流であつたことの反映といつてよい。それだけに形態もいろいろで、たとえば、滋賀県水口町の水様であつて、名称についても、鉾・笠鉾・山(山車)・山笠・曳山・ダンジリ



口祭りや日野町の日野祭りでは社殿型の建造物を台車としその屋上に年々趣向の作り物を飾りつけるし、長野県穂高町の穂高祭りの場合は、四本柱の台車に生の雑木を編むように組みつけて船型を作り、その上に山形や人形を配置してある情景を表現する。能登には、船型の上に庇が張り出した岩窟状の山形をこしらえて人形等を飾る作り山が分布し、青柏祭のデカ山（石川県七尾市）の原型をうかがわせるとともに、穂高祭りのお船との親近性を示すのである（写真二三二）。変わったところでは、作り山の本質を巨大な山形に残してその前面に開閉する五段の雛壇を設け、背面では山形を舞台として人形カラクリを演じる日立風流物もある（茨城県日立市）（写真二三三）。

こうした作り山の本流は、ボデーを山の造形物すなわち山形とするものである。祇園祭りの山がその先駆であるが（写真二三四）、巨大な山形を共有する作り山が北九州と東北地方に集中的に分布しており、対極をなすようにそれぞれの文化圏をかたちづくっている。

北九州のそれは博多祇園山笠を中心とする山笠文化圏である。博多祇園山笠は博多の総鎮守である柳田神社の夏祭りの行事で、飾山笠十二本と昇山七本が出る。高さおよそ十五メートルという飾山が本来の形態を残すが既に置山となり、主役は疾走を見せ所とする昇山に変わっている。昇山は目的に応じて高さ四、五メートルほどになり、山形もそれと見えぬものに後退している。そこで、博多山笠の往事の形態をうかがわせる呼子町小友の山笠についてその様相を見ておこう。

小友の山笠は祇園祭りの行事で大小各一台が出る。小は子供用で大の三分の一くらいのものであるが、基本的形態は同一である。大山笠は高さ約十五メートル、重さ三トンという大きな昇山であり、頂から流れ落ちる滝で前後を分け、前後それぞれに人形や館の作り物を飾りつけて「巖流島の戦い」「風林火山」といった情景を表現する。その土台は四本柱を枠に組んで担い棒四本を通したもので、床を二段に張り、上段を太鼓と半鐘の囃子座とし、下段には重しの切石を

積む。その台の中央に芯柱を立て四隅に四本柱を立て添えて上端を一つに束ね、段々に井桁に組んで結束して骨格を作る。まさに山形でそれを「地山」という。地山の下部には籬を結い杉葉で囲い前後に幕を吊る。人形や館などの作り物は支え木の先に取り付け、支え木を四本柱に結びつけて固定し、地山を黒幕（張りぼて）で覆う。黒幕と滝が背景でそれが岩とも山とも見えるよう作られるのである。その地山の上から一・二段めの四隅に各一本の造花を枝垂れ状に垂らし、頂上には五色の幟が立てられる。幟は三歳の厄年の女性が奉納するものとされている。この山笠の前棒を担ぐ者を「前山」後棒を担ぐ者を「後山」とよび、各八人編成でどんどん交代しながら歩く。山笠の上部に張り綱八本が結ばれていて、それを四方八方から引き合つて山笠を倒れないように保持するその運行も見どころとなつてゐる（写真二三五、二三六）

博多山笠は中世後期にはじまつたと伝えられているが、山笠が小友のそれのようになつたのは江戸初期のことである⑤。それがついには九七力所に広がつて小異をみせつつ一大分布圏を構成しているのである⑥。

この山笠圏に対し、東北のいうならば風流山車文化圏はより広域で、伝承数もなお五〇力所をくだらぬものと推定され、廃れたものを加えればそれはさらに増えるであろう。秋田・青森・岩手の三県に多いが、山形・宮城・福島県にかけて分布し、茨城県の北部にもおよんでいる。

土崎神明社祭（秋田県秋田市）
角館祭り（角館町）

野辺地八幡神社祭（青森県野辺地町）
三戸三社大祭（三戸町）
一戸祭り（岩手県一戸市）
久慈秋祭り（久慈市）

花巻祭り（花巻市）
盛岡八幡宮祭（盛岡市）
室根大祭（室根村）
新庄祭り（山形県新庄市）
登米神社祭（宮城県登米町）
羽山神社祭（福島県梁川町）

これらに八戸三社大祭を加えたものが代表的な伝承であるが、山形の造形にしほると、土崎神明社祭や角館祭りなど日本海側のそれが古態を示す。

土崎神明社祭は久保田城下（秋田）の外港として栄えた土崎の総鎮守の「大祭」^{おおまつり}である⑦。例年二〇余の曳山が出るが、曳山は単層露天四輪式の作り山

である。四輪の台車の上に夫婦岩とよぶ黒木綿で覆つた二つ峰の山形を作り、

峰の間から滝を流し、松などの生木を用いて山らしく形をととのえる。山形には小ザルを二、三カ所、山の前面の化粧台上に大ザル一を設け、そのザルに人形等を配置して「風流○○○」と題する情景を表現する。ザルはつまり飾り物の台座である。山飾りの裾まわりには波形を並べ、ヤマツゲの枝をあしらつて

足下を隠す。簡単なものが山形の裏側にも作り物を飾り、それを「見返し」という。もとは高さを競い一〇メートルを越す大きな昇山であつたが、現在は総高五、六メートル、全長五・五から六・五メートルほどの規模となつていて（写真二三七）。小型化したこの曳山に対し、本来の形態を偲ばせる置山が神明社の境内や年番町の町内などに立てられる（ただし毎年ではない）。基本形態は曳山と同じだが、山形が高さ二〇メートルという大きさで中央を流れ落ちる滝が印象的なまさに山である（以下、仮に大山とよぶ。写真二三八）。置

山は山形の造形が人目をひく作り山で、高さ一〇メートル余もあつたという往事の昇山の姿を伝えるものである。現在の曳山は土崎のそれと同じく単層露天

四輪式の作り山であり、山形を本体とし前後を作り物で飾るという形態である。

背面はやはり「見返し」（送り人形とも）とよんでおり、同じ流れに立つことをうかがわせる（写真二三九）。

もちろん両伝承にも相違はある。しかしそれは、見返しの下に櫓を設けて囃子座とする土崎の曳山に対し、角館のそれが山形の下の狭小な空間を囃子座とし、前面に床を張りだし舞台とすることぐらいである。その形態は三戸三社大祭の曳山に通じるものだが、囃子のあり方は概してまちまちである。花巻祭りの場合は、大太鼓のみ曳山の後部に乗せて打ち手は歩行、小太鼓打ちは前方に列を作り曳山を先導するように練りつつ囃す形態である。鹿角市の花輪ばやしの屋台はそうした歩行囃子をそのまま底抜けの屋形に入れた形、水沢市の日高火防祭の囃子屋台は囃子方を雛壇式の屋台に乗せた形であり、火防祭のそれは

駒形神社大祭の大山に付いた囃子屋台から発展したと認められるものである。

三、人形山から風流山車へ

それはともかく、ここにみた風流山車の古態は山形に特色をもつ作り山であ

り、置山はその名残をとどめるものである。そうした大山は土崎、角館のほか、酒田市の山王社祭礼（写真二四〇）、秋田市の日吉・八幡神社祭礼、水沢市の駒形神社大祭、花巻市の鳥谷崎神社祭礼、仙台市の東照宮祭礼などでも主役の座を占めていた⑨。ところが野辺地から八戸・三戸と広がる風流山車は、小さくなつたとは伝えるものの、一〇メートルを越すような大山の痕跡はなく、山形が後退して人形等の飾り物が目立つ作り山となつていて（写真二四一）。それが地域的特色ともなつていて、それには何か理由があろう。実証は困難であるけれど、風流山車が主体となる祭りに変化したのが比較的に新しく、大山が小型化しはじめた時期であつたことによるものと考えてよいであろう。

風流山車が八戸三社大祭の主役となつたのは、靄神社（法靈大明神）の祭礼から新羅・神明社を合わせた三社祭に移行した明治二二（一八九〇）年以降のことである。

第二、三章で述べられているように、八戸御館神として創祀された法靈大明

神が城下町の氏神とも仰がれ、その祭礼が神輿が巡幸する御旅所祭りとなつたのは享保六年（一七二二）からである。その行列には当初から町人の出す笠鉾と踊子が随つていたが、小踊ともよばれた踊子は以前から町人に課されていた奉納芸であった⑩。いわゆる山車祭りへの発展はこの町の出し物（御町行列）にはじまつたものである。「出し」の名が史料にはじめて現れたのは二六年後の延享四年のことであるが（『法靈御神事行列』）、当時の「出し」がいかなるものであつたかは定かでない。出しとは本来鉾や笠鉾等の先端を飾る作り物の意であつた。後書に「出し」を出した人数が三〇人とあるから、その「出し」は有力町人三〇人が個人で出した出し物であり、一人で捧持する形態のもので、後の行列帳に記される笠鉾や幡がそれにつながるもののように考えられる（写真二四二）。しかしほどなく、その出しにえて人形を飾る屋台を出すものが現れた。藩の御用商人であつた西町屋では、天明三年（一七八三）に新たに三体の人形を飾る屋台を造り、従前の人形屋台と隔年に用いることにしたが、古屋台を借用して出る者もあつたというから、その頃には「出し」の多くが人形屋台に変化していたことが知られる。

御町行列はこのように一八世紀末頃から人形屋台（人形山）が主となり、文化政期（一八〇四～二九）には豪華な造りの人形を飾る屋台で賑わうものへと展開した。当時の屋台は単層吹抜屋形形式の昇山であつたが、天保年間（一八三〇～四三）には二輪の曳山も登場している。天保四年の「法靈御神事行列」帳によると、全十九の出し物のうち人形屋台が八台となつており、ほかに青龍刀を出しとするものが一台出ている。それが嘉永元年（一八四八）には、人形屋台が一〇台出て他の出し物とともに練物を構成していた（「嘉永元年申七月廿日法靈御神事行列」）。

出し人数

- | | |
|------------------|-----------------------|
| 1. 笠鉾（三日町） | 14. 真田左衛門佐（若狭屋・十一屋） |
| 2. 大神楽 | 15. 草刈山王（廿六日町・十六日町） |
| 3. 踊子 | 16. 大幡（寺横町・大工町） |
| 4. 笠鉾（八日町） | 17. 弁慶（能登屋・中居屋） |
| 5. 大幡（大坂屋） | 18. 大幡（古屋・廿六日町興七郎） |
| 6. 対幡（十一日町・下大工町） | 19. 獅子太神楽（廿六日町若者共） |
| 7. 青龍刀（朔日町） | 20. 神助皇后（みのや）武内宿祢（古屋） |
| 8. 信玄（河内屋） | 21. 劍御幣（くまのや） |
| 9. 太公望（近江屋） | 22. 猩々絆大幡（野田屋など五家） |
| 10. 関羽（種屋） | 23. 猩々絆大幡（大坂屋など四家） |
| 11. 式三番（板屋） | 24. 風流獅子（湊村） |
| 12. 僧正坊（石屋） | 25. 虎舞（鮫村） |
| 13. 金平（六日町） | 26. 風流踊子（鮫村） |

これが全二六番の出し物であり、笠鉾一本、大幡五流、幡一対、剣御幣一本、当初からの踊子や大神楽に、近在の村々や若者連中による芸能も加わるというバラエティに富む構成であった。そしてこの頃には、有力な町人が個人で出すものだけでなく、青龍刀や金平・草刈山王のように町組による出しや人形屋台も出るようになっていた。明治四年（一八七一）の史料には13、15に当たるそれが「町印」とも記されており、それがまさに町組のシンボルともなつていたことを明示するのである。

同類型の人形屋台は盛岡八幡宮祭礼でも町印となつていた。町印は鉾や笠鉾系の出し物であるのが一般的であり、江戸の天下祭りでは一本柱万度型とされるダシが町印となつていた。盛岡八幡宮祭でも練物の祭りの段階では出しをもつ鉾・笠鉾・幟・纏などが町印となつていた。ところが一本柱万度型に学んだ山車が主役となるなかで、それを囂す附祭的な存在であつた人形屋台が町印とされるにいたつたのである（写真二四二）。ここでも有力町人が個人で出す出し物が先行し、町組の出し物はかなり遅れて登場している。人形屋台が町印とな

つたのはまさにそのためといつてよいのである。ちなみに、童子が牛の背で笛を吹く像を飾つた草刈山王と同趣のものは各地で見られ、盛岡八幡宮祭礼でも

多賀屋甚助個人の出し物（「山路屋台」）や材木町の町印になつていた。

ここに盛行した人形屋台は盛岡八幡宮祭礼の町印と相通じるものであるが、町印としての人形屋台は一般町人の成長を映す動きであり、藩と特權的な有力町人の主導による祭りから町人主体の祭りへという大きな流れの現れにほかならなかつた。

靈神社の祭礼はこのように、いわば分限者の出す人形山に近在の諸芸能が付随する練物の祭りとして発展し、町組の成長とともに町をあげての三社大祭へと展開した。そこで祭りの主人公となつた町組による人々が自分たちの出し物として選びとつたものがほかならぬ風流山車だつたのである。

風流山車が従来の人形屋台にとつて代わつたのは明治も二〇年代の半ばであつた。

明治二三年の「三社神事祭礼諸用控」によると、この年、協議によつて祭りの「主務者」を「営業者」仲間の年番制から「各町惣代」に移行するよう決定されている。なにぶん不慣れということで即移行とはならなかつたが、同二五年の「三社御祭礼行列帳」には、人形山等の従来の出し物に混じつて、「附祭」と称する新たな出し物が登場している。その部分は、

惠比寿 大工町
同
松前鉄之助 鍛治町
岩清水八幡太郎 事務所
珊瑚樹 甘八日町
湊踊子 秋山連
草刈り山路 廿六日町
猩々絆旗 浦山

千成瓢箪猩々絆 浦山太郎兵五

神功皇后 鈴木吉十郎

五条橋 十三日町
附祭 虎舞 八日町笠鉾

四季芭砂ノ物 浦山政吉

と記されている。これをすなおに読めば、たとえば大工町の恵比寿は古屋淺十郎家人形山を町組が引き継いだものであり、八日町や三日町有志・鍛治町・廿八日町による四種の附祭はそれぞれの山に付く新たな出し物であつたこと、同じく浦山政吉の附祭四季芭砂ノ物、浦山太郎兵五の猩々絆の轍は十六日町・廿六日町の草刈山路、十三日町の五条橋は鈴木家の神功皇后にそれぞれ付する出し物すなわち附祭であつたと解釈されるであろう。附祭とは天下祭りにはじまる呼称であり、町印等の出しに屋台や踊りなどさまざまな出し物が随う練物をいつた。その附祭の名で新たな出し物である作り物が登場したのである。そのうちの珊瑚樹や砂の物はそれを具象した作り物、鞍馬山・五条橋は牛若丸に関わる物語の一場面を表現した作り山、岩清水八幡太郎もそれに類する作り山（義家石清水八幡宮で元服の場）と見て間違いあるまい。前年の祭りにもとづく記事かと思われる『風俗画報』（第四二号、明治二十五年）の紹介文には、従来の人形山十二のほかに、町々の「花車」「作り物」が出、一番・鍛治町は生人形を乗せた屋台と芸能、二番・朔日町は龍吐水で潮吹きをみせる大鯨の引き物、三番・廿六日町は美少年が演じる芸屋台、四番・湊新町は芸妓が演じる芸屋台であつたと記されている。この記事を裏付ける史料を欠くが、この時期が人形山から風流山車への大きな変わり目であつたことは確かである。

それからほぼ一〇年を経過した明治三四年の祭礼には、二十三日町の「素戔鳴尊の大蛇退治」以下十一台の山車が巡行している。それらはすべて町組によ

る新しい出し物であつて、人形山はその姿を消していた。人形山は大正期に一・二復活を見たけれど、この頃にはすでに風流山車が趣向を競う祭りへ転化していたのである。その転化には人形山を継承する道もあつた。しかし、町組による人々は固定した人形山ではなく、日本海沿いに流布した上方系の作り山、すなわち年々に趣向を競う風流山車への道を選んだのである。

風流山車は先に述べた「高欄山車」のほか、岩や山を土台とする「岩山車」、

波と船に特色を見せる「波山車」建物や門を特徴とする「建物山車」といったパターンがあつたという（本書 第五章四、三社大祭の山車類型参照）。電線がなかつた時代には高さを競い、時に六メートル余の山車も出たと伝えるが、それが横に大型化したのは昭和三〇年代以後のことである。その後は、同四六年に類家が回り舞台を導入して人気を博し、五一年には塩町がはじめて両側に張り出しを付けるなど、工夫を重ね、変化という動的要素を加味した現在型へ展開した。そしていま、人形の数が増加しつつあり、五〇体もの人形を使うものも現れている。そのためもあつてか、主役の人形を油圧式などで昇降させるのが流行っている。その一方では、竹を編んで骨格を作り和紙を張り重ねて彩色する本来の工法による人形が減少し、ほとんどが発泡スチロールを削り出した彫刻物になつていて、それらは確かに風流の心が息づいている証左といえようが、すべてがそれに習うため全体として山車の画一化が進んでいるのも事実である。その画一化にどう対処するか。人形山の復活も含めて、出し物の歴史を収斂する伝統性の恢復を視野に入れた取り組みがいまこそ必要であろう。

注

- ① 小著『山・鉢・屋台の祭り——風流の開花』（第七章 山・鉢・屋台のかたち、二〇〇一年、白水社）
② 『日本芸術思潮 第二卷上 風流の思想』、一九四七年、岩波書店。

③ 千代田区教育委員会『江戸型山車のゆくえ』（千代田区文化財調査報告書）、一九八〇年。江戸型山車は本書で特定された類型であり、その形態と広がりについての詳細な報告が載る。なお一九九九年に、本書を大幅に改訂した『続・江戸型山車のゆくえ』（千代田区文化財調査報告書十二）が刊行されている。

名古屋型山車については鬼頭秀明の『筒井町湯取車』など「名古屋市山車調査報告書」所載の一連の報告がある。

④ 注①。小著

⑤ 井上清三『どんたく山笠・放生会』一九八四年、葦書房。

⑥ 福間祐嗣『都鄙連続論』の可能性——北部九州の山笠分布を中心に——『福岡市博物館研究紀要』第二号、一九九二年。本稿において氏は山笠の現状をつぶさに述べ、その類型と分布圏、流布の要因を明らかにしている。

⑦ 秋田市教育委員会編『土崎神明社港祭り曳山行事』土崎神明社、平成五年。

⑧ 『角館祭りのやま行事調査報告書』角館町、平成九年。

⑨ 花巻祭りや仙台祭りでは、山形をボディーとしながら飾り物の屋形が肥大した形態の大山が顕著であつて、明治中期には花巻の「祭師」が仙台の豪商に招かれてその製作に当たつたこともある（注①参照）。その手の大山は盛岡八幡宮祭礼にも見られ、当三社大祭で「高欄山車」とよばれたタイプの山車はその系譜をひくものと考えられる。

なお、一戸の作り山（曳山）には台部分に笠状の形態を残すものがある。盛岡八幡宮祭の山車（一本柱万度型）と共通する特色であり、作り山の影響をうけた鉢系の出しもあつたことをうかがわせる。

⑩ 享保五年二月に、小踊は初心の「若輩者」を仕込んでやらせるのが大変なので来年から「練物」に変更したいと願い出たが認められなかつたとある（八戸藩目付所日記）享保年六月十九日条）。

第一〇章 八戸三社大祭 「史料」

御幣三本

九 五龍御幡二本 十 御輿

十一 龍頭御幡三本

十二 常泉院騎馬 山伏五人内壺人法螺壺人太刀持

同壺人金剛杖持外二草履取長刀挾箱長柄

十三 笠鉢太神樂 一 踊子牀机持

一 役者 一 笠鉢 一 乙名 一 押上下拾五人

七月十九日法靈御祭礼御旅所御入方之覺

一 阿可年もめん壺反 一 鏡壺面 一 帯壺筋

一 御鐘緒白もめん七尺五寸 一 扇子三本

一 三方式ツ 一 舞板五枚

一 ベ七色損不申候ハゝ圍置可申候

一 こさ壺枚但拝鋪候 一 とうめう水油

一 大方三帖 神前

右八幣白紙 一 東山十帖

法靈長者山二而八しやう志め金廻幣白紙

一 春木六拾本右両所二而入用御湯立

一 筵式拾枚同断 一 王らな王五拾尋

右同断

一 くゝ縄五拾尋右同断 一 釜株八本

右同断

一本け四本

右八両所二而入用但シ八しやう志め四方立株

一 釜火燒人足三人

右之通御座候

一 十九日於御旅所小踊三番廿一日

一 御帰社之節法靈二而三番為踊申度候

一 御山二而御輿御鎮座御普請之儀從 御前被成下度奉存候

一 茶屋見七商賣物為見物等御免被成下度事

一 小踊之儀此度茂仕上候様ニと被 仰付奉畏候乍恐小踊ハ毎年若輩者計ニ而相務申候ヘ八年々初心者かり申ニ付數日習仕御神事相勤申候依之御町之者

共殊外迷惑ニ奉存御輿之儀奉願上候ヘハ願之通被 仰付難有奉存候右申上

候通り此度小踊御免被成下奉存候左様ニ被成下候ハゝ御山御鎮座普請之儀

御町々可仕候小踊之代り練物仕上可申候右之通宜御披露奉頼上候以上

一 うしノ二月吉日 惣御町

一 庄屋甚兵衛殿 老共

一 同儀右工門殿

一 庄屋甚兵衛殿

一 於江戸表諸祭練物等御減少ニ付此方ニ而茂練物等之儀ハ無用仕様ニと被仰渡

一 明後十九日法靈御祭禮ニ付御徒目付大川義兵衛猪去源五郎警固被仰付

七月十七日 晴天

如例年法靈御祭長者山江御輿御旅出天氣能首尾能御入被遊

一 右ニ付例年之通御年寄中御役人中表御番頭并御番人御勝手当番切御吸物七

き者ん御酒為御祝儀被成下 法靈御輿当年始而長者山江御旅出ニ付戸來清三郎惣押跡乘被仰付

一 常泉院右ニ付御供被仰付

七月廿一日 晴

一 法靈御祭礼前後首尾能相濟

一 常泉院押戸来清三郎掛端平内御宮江相詰別當御供仕

一 御足輕三人御徒目付江御渡候様御目付中々月番御物頭江申達候由

延享四年七月五日 晴

一 法靈御神事二付來ル十九日々五日爰居御免

一 付長者山地藏堂之後場所願出願之通申渡ス

七月七日 晴

一 法靈御神 其節御供榮扇服中二付

一 名代大泉坊致御供候様寺社奉行申渡

夏

七月十二日 晴

一 御徒目付四人之處此度御神事御供式人八見

一 廻式人而本役老人茂殿中詰無之候間三人而

勤候様尤兩人者御供老人盤見廻右老人江御供

兩人之内合加り相勤候様申渡尤御神事御供者

一 平田庄作北田弥右衛門之由

一 兩人如例御役料之内願上彼成下

七月十五日 晴

一 岡本源右工門來十九日廿一日法靈神事二付大手御門警固申渡

一 松井九郎右工門法靈御神事二付御代參申渡

一 月番御物頭宗忠右工門江法靈御神事二付

一年之通御町堅辻々堅御足輕申渡

右之趣觸相出候

七月十七日 晴

一 宗忠右工門煙山小豐治太田八十助法靈御神事付

一 火廻被 仰付右三人御馬拝借願上被 仰付尤

忠右工門義御預馬有之候得共病馬之段申出小豐治持馬有之候得共此間痛所有之付右拝借願出ル

一 御徒目付例年式人宛御供并見廻り申渡候

不人數二付見廻り御供共二三人申渡因是

御足輕三人御徒目付江御渡候様御目付中々月番御物頭江申達候由

一 御新屋敷御棧敷前江堅御足輕前後江

式人申渡尤上番共差圖得候様申渡

一 御徒目付御神事二付不人數故遠藤多兵衛荒木田

武助御徒目付加番申渡

觸

博奕御停止之儀累年相觸候處猶又

此度被 仰付候間急度相守可申候別而

今度法靈神事之節子是又左様之儀

無之様相慎可申候尤御徒目付被差遣

若不法之者有之候ハゝ掲捕急度可被

仰付候此段召仕共ヘ毛可被申付候

右之趣今般被 仰出候此旨御心得可被成候以上

七月十五日 御目付

御家中

御新屋鋪御棧敷例年之通堅御足輕式人

相詰候儀杉澤和右工門江申達

前々之通御新屋敷 御両所様御棧敷付高

棧敷相扣候様口上觸指出ス

法靈御神事付御徒目付御供式人見廻式人被仰付候処不人數付御供見廻三人而相勤申様

立花新藏平田庄作北田弥右工門江被 仰付

例年之通法靈御通筋掃除觸相出入

明後十九日法靈神輿御通二付御祝儀

前々之通被成下

於長者山歌舞伎有之候二付前々之通

御目付ム老人宛相詰候様申渡

來十九日御神事二付御祝儀通輿以後

被成下二付廻状相出尤御年寄格御番頭

御用人大手詰御物頭御吟味御目付同格

御勘定頭御刀番御山目付其外御殿附

當番切御祝義被成下

一十九日 神輿御通之節例之通御年寄

御用人物御役人大手江相詰ル

一 御神事二付御町足輕不足之段御町

奉行申出本組江式人申渡

一 津村傳右工門南御門番十九日廿一日八式人宛

相詰看板羽織着用御門出入疑敷者

相改通不申様二申渡

七月十九日 晴

松井九郎右工門法靈江 御代參相勤御懸錢

老貫文右持御足輕老人

神輿 御通付如御吉例大手江御年寄中

御用人御勝手御役人御刀番漆澤惣十郎相詰

右為御祝儀御年寄中同格當番御番頭

御用人迄於御用之間御祝儀頂戴惣御役人

御目付格御刀番御山支配御側醫御本方迄

御目付所御吸物御酒強飯甘酒被成下

御側廻御廣間御勝手諸役所當番限尤

外側迄御祐筆下吟味御勘定所組頭まで

右御祝義被成下何茂麻上下着用

御神事二付御裏御門明御座敷番ム相詰ル

於類惠方御新屋敷江罷上り候付御裏御門

早朝ム明ル

法靈御通付諸役所忌服御改被 仰付

御神事付御足輕不足仕候付大手御土藏番

右三人通し番就仕出し被下

右付御常番五人町辻堅被 仰付

一 諸役所當番帰社前麻上下着用

一 帰社後何茂平服

七月廿一日 晴

法靈 神輿九ツ時 帰御

法靈帰社後平服而出座

一 諸役所當番帰社前麻上下着用

一 帰社後何茂平服

一 寺社奉行及川友右工門戸来又三郎法灵

御神奠無滯相濟候段申出

一 御徒目付平田庄作北田弥右工門法灵御神奠

無出入相濟候段訴出候段御目付中

申出尤大儀之段申渡候由

一 大手御門警固岡本源右工門江帰社

相濟候付引取可申旨差奉を以申遣

源右工門当席江罷出大儀之旨申渡

一 十三日迄芝居有之二付見廻立花新藏江

申合相勤候様今日三丁目兵藏江申渡

表書 卯五月廿二日 高 兵
(省 略)

一 為朝の像外鳴人
式人の人形右新規談
尤鈴木新五郎_{与申者江}

細工仕立相頼尤ミのやと
御相談之上_ニ野子義毎日之

様ニ右細工所江罷越氣ヲ付

御注文通り_タ人形大ぶりニ

出来候様仕組仕候左様

御含可被下置候尤出来

候者貴地下り船出候義音

滯船之義相頼可申候右之

思召_ニ而登り船每是悲

七月御祭礼間合申候様ニ

仕度候

(省 略)

六月十一日

高来兵助

石橋文蔵様

善兵衛様

孝蔵様

參人様

書状 西町屋文書①抜粋

(八戸市博物館所蔵)

書状 西町屋文書②抜粋

(八戸市博物館所蔵)

(省 略)

一 為朝人形之義別奉申上候通
御地下り船ニ少々出帆間合せ
積下し申度奉存候所細工念入
見積り_タ日數相懸り此度之

鶴巣丸_{江難積奉存候尤年來}

御用ひニ相成候人形之外故細工

仕様格別ニ念入申候ニ付工手間

相懸り申候何卒當御祭礼之

間ニ為合申度毎日／＼見舞

申候隨分手抜なく結構ニ出来

申候間其段宜御承引可被下候

外別条無御座大の行書状者

南光院様江直頼差下し申候

尚亦 殿様御下り之節

以書状可得貴意候已上

書状 西町屋文書③（八戸市博物館所蔵）

包紙

八戸

石橋文藏様

江戸

平安用書入

高木兵助

八月十八日大の内

七月廿一日出 入

表書

八月十八日大野ら入

高兵

出し人形之用

丹治船之西瓜之用

来ル廿三日 御殿様弥御下り二付

右御供之衆江相頼一翰啓上仕候

残暑未退候得共御家内様益

御捕御壯栄可被遊御座奉共北賀

當府野拙儀も無異儀罷有候然者

御尊父様愈御城ニ被為入遍く奉存候

別帝者差上ふ申候間其段宜敷

御申上可被下候御尊父様昨年

當府御逗留中西瓜御好物之

由承知罷有候ニ付此度丹治船江

積入差下し申候尤残暑嚴敷候時分二

も候故むれ損じ等儀如何しく

御座候得共無事着候者御用心
可被下候右箱江持用から笠

三本尤小振り之笠ニ御座候是者

御三人江傳言物ニ御座候御持傘ニ

可被成候外ニ籠菓子入壺箱右者

吉三郎方御地内中味痛ふ申様ニ

吉三郎方江右之御案内老人参り候

様ニ乍御面倒様御申越可被下候左候ハ、

同所内取人遣可申候御渡し被遣可

被下候扱亦兼而御注文被迎遣候

八郎為朝之出し人形并嶋人式人

追々御注文有之美宗様御相談之上

二而鈴木新五郎ト申人形師相撰

是迄申上候通右細工所江一日置ニ

見舞致見分仕候所存知之外

念入候細工仕方おそらく江戸ニモ

珍鋪上出来人形ニ御座候尤右仕立

様者別段小雛形相添是亦丹治船ヘ

積入申候間着岸之節御熟覽可

被下候右人形仕様寧町念ニ念ヲ入

候事故御元直段江多少之増金之儀

相願申候是者御勘弁被遣被下候而可

然旨奉存候間此段宜鋪御願申上候

一米之儀先狀ニ申上候得共猶亦申上候右

慥相達し入手仕候千万難有仕合奉存候

右代金外鋤代井戸輪具代金

余程之御預り金有之候當地何連江
成共御渡し方御座候者御差圖次第

御渡し可申上候其段左様御承引可

被下候先者右之段可得貴意如斯

御座候猶期追便可得貴意候謹言

高来兵助

七月廿一日認

石橋文藏様

善兵衛様

孝藏様

參人様

高来兵助

書状 西町屋文書(4)

(八戸市博物館所蔵)

尚々申上候未残暑茂強御座候間
隨分時候厭被為遊様乍恐奉存上候
未奉得拜顔候得共
一筆奉啓上候先以
残暑之砌二御座候処且八
御地御尊家様御揃被遊
益御機嫌能御座被遊
奉恐寿候然者此度者
当地室町式丁目美濃野
惣三郎様并二佐内町和泉野
兵助様以御世話ヲ其御地
御祭礼御人形細工之
御用向被仰付候段宜以
難有仕合奉存候且又
御人形出来上り日限等茂
段々延引二相成申候處
何共申訣茂無之仕合此段
御用捨之程奉願上候右
御人形細工中之当地
御兩家様ヨリ度々御出被
下隨分念入手抜等茂
無之様御差圖被成下候
（八戸市博物館所蔵）

尤下拙儀不勝之細工仕
家業ない多し居候之處右之
御用向被仰付外聞旁
難有仕合二奉存候隨分出情
仕細工等茂念入出来
致候心得^而罷在候処右之
仕念入出来奉指上候
御指圖二寄尚亦出情
仕念入出来奉指上候
御請仕取掛り申候処前書二
申上候通當地御両家様ヨリ
御差圖二寄弥以念入候ニ付
細工手間等茂多分相掛り
其外之諸色等茂直段登り
ふ斗右様之仕合二相成申候而
思召被遊候程茂歸ふ見
御増金御願申上候仕合必共
奉願上候金差詰り候而之
儀ニ御座候間此段幾意ニ茂
御承引之程奉願上候右様之
奉候左様ニ御承引被為遊可
被下候 已上

案堵仕難有奉存候右様
之儀申上候而者下拙積違等も
仕不心得之様ニ相当り何とも
尊前様方思召被遊候段も
恐入候得共何分右様之御用
向者当地^而も希之儀^而
被為思召被下置候様奉願上候
先者右之御願旁申上度
如此ニ御座候以上
恐惶謹言

願之通者中々此方^而も取計
出来ふ申候間下拙ヨリ書状^而
御願申上候様之任御差圖ニ
何共恐入候得共以愚礼右之段
奉御願申上候此段茂左様ニ
被為思召被下置候様奉願上候
先者右之御願旁申上度
如此ニ御座候以上
恐惶謹言

出来ふ申候間下拙ヨリ書状^而
御願申上候様之任御差圖ニ
何共恐入候得共以愚礼右之段
奉御願申上候此段茂左様ニ
被為思召被下置候様奉願上候
先者右之御願旁申上度
如此ニ御座候以上
恐惶謹言

七月廿四日 鈴木新五郎

石橋

□□御中
若旦那様

二啓申上候下拙名前之儀

昨年四月御用向積り書

上置候處此度相改龍雲斎

信直与相認木札相添差上

奉候左様ニ御承引被為遊可

被下候 已上

※木札の表に「人形細工人 東都於京橋鈴木町龍雲高

鈴木新五郎橋信匠」、裏に「龍雲斎鈴木信匠敬作」

とある（八戸市博物館所蔵）。

永歲覚日記

(西町屋文書 八戸市博物館所蔵)

明和六丑年より安永六酉年迄

石橋徳右衛門

員壽

(安永三午年)

証文

一人形組式ツ

指図形有り、遣人形ニハ無御座候、祭り飾り物也

此代銀三拾匁値

但し仮箱二入、孫一郎二申上候、

一七ツ入子 一組 但し曲物也右ノ所ニ而卒値

一作り花 式三百人分

右代金之当ニ金三歩御渡申上候、已上

午十月五日

広屋新助様

石橋徳右衛門

右之証文勘三郎取済

永歲覚日記

(西町屋文書 八戸市博物館所蔵)

安永六年三月および安永十年四月より天明五年迄

石橋徳右衛門

法靈御祭飾物仕出心得之事

一物屋職与して飾屋台仕出事未永ク勤候様、神慮すゝむべきの業珍重之至也、仍而麿略之軀あるべからず、年々手入修復又者年数之内作替等尤ニ候、仮そめならぬ事也、御役所支配より沙汰有を略

り仕生得堅キ事ニハ不可有候、數十年同じ物、曾て修復とても無之者不心得也、少分物入ヲ厭ふとの義、他事有べからず、強て左様之心得者吉凶事の基とぞ、飾物等出す福之取廻也、

當時家之面目、外聞ニも相叶本望也、喜び、すゝむべきの業なり、然とても世けん宜敷族のことく、金銀沢山ニ物入せん事は不相応、且ハ名聞強キニ当るべし、又参する所一度ニ物入多ク仕出し是に込リ、重而取替も苦勞ニ見得、緩してハ神前敬養の品といふも忘れ、自分慰草有やうども角もにして仕出之趣、初最杯之決定惜ならざる訳なり、他見外聞も量らず、彼是時行ふしの小うたに繰たるも等之後といふ思慮なきハ無下之事ぞ

一他人數度用イ来ル古屋台借りて、其儘役之心から仕出族も見得候、神前ニ対し如何恐入事ならずや、敬養之礼ニハ立かたく、家伝名を顯して恥辱とや、拙家ニハ屋台の貸借無用也

一金銀費を制するハ家業全ふせんかため、尤至極なり、然者日頃家内委細目利して、無下之費有まじきに、左ハなく有に任せて大余所之軀、年中過不足皆以是より起る。目前ニかかり費と覺なから、なおざりなるもあり、又目ニハ見得す積る費過半之事とハ夫もしらず、魚盞の不勘定ニ顕ル、苗代早竟 不用心といふ種を蒔たる物也、

自他家共ニ同前、おそろしき第一なり、三百六十日之昼夜是までハと能ゝ考へたきものぞ、祭飾手入之費誠ニ寸志とやいわん、不苦敷事也、

今度人形三ツ物台細工仕出し可申候、此度衣裳代斗、新規物入外にハなし、依之屋台 式ツ所持之訳、隔年ニ相用可然候、自他国之万人目覚之物數十年同じ物ハ人も見苦しかるへし

延享四年卯七月十九日 法靈御神事行列

(靈神社所藏)

露拂	御神幡	御神幡	清右衛門様 唱様 治兵衛様 檀兵衛様 伝右衛門様 辰右衛門様 儀助様 六郎様 忠五郎様 木工之進様 御廣間古鞍 寄進幡 獅子權現	法螺 上下着
露拂	御神幡	御神幡	山伏 太鞍 上下着 山伏 手平金山伏 上下着 御鉾 別当 草履取 龍頭御幡 乙名 同 同 白御幡 赤御幡 乙名 同 同 龍頭御幡	法螺 上下着
露拂	御神幡	御神幡	山伏 笛 上下着 山伏 手平金山伏 上下着 狹箱持 御幣三本 賽錢箱 龍頭御幡 乙名 同 同 白御幡 赤御幡 乙名 同 同 龍頭御幡	法螺 上下着
露拂	御神幡	御神幡	山伏 常泉院名代 大泉坊 太刀 法螺山伏 長刀 御町行列 狹箱持 篓鉢 太神樂 踊子 床机持 壱人立 役者 出し 篓鉢 乙名 同 同 同 同 龍頭御幡	法螺 上下着
露拂	御神幡	御神幡	山伏 法螺山伏 太刀 草履取 合羽持 篓鉢 太神樂 踊子 床机持 壱人立 役者 出し 篓鉢 乙名 同 同 同 同 龍頭御幡	法螺 上下着
御先供	御口取	御馬脇	御道具持 御道箱持 御合羽持 押	
御先供	御押奉行	御草履取		
御先供	御口取	御馬脇	同	
御先供			御長柄持	
十九日御旅所二而一	御神樂	御湯立	廿一日法靈二而一 花踊 三番 一 笛 十三日町横町 六兵衛 塩町七右衛門内 喜四郎 廿六日町 重助 一 三味線 六日町	
横町 左兵衛	十八日町	七十郎	三日町横町 庄助 一 音聲 十八日町 源太郎 廿六日町 左兵衛子 左太郎 廿八日町 孫右衛門内 小兵衛	
一 古鞍 鍛治町	三助	荒町半七内 繁助	六日町清藏子 重治 踊子 八日町治右衛門子 清八 廿八日町傳七孫 重太 十三日町右兵衛子 久治 十八日町吉右衛門子 福松	
十六日町横町忠五郎子	丹治	十三日町吉右衛門子	五郎治 三日町治兵衛子 豊治 六日町長九郎子 寅九郎 出し人数 荒町 義兵衛 廿三日町 忠三郎 同町 義兵衛 同町	
源十郎	同町	三右衛門	庄七 十三日町 権七 同町 又兵衛 同町 武兵衛 同町 九兵衛 同町 甚五右衛門 同町 源四郎 同町 茂兵衛 同町 孫兵衛 三日町 小	
右衛門	同町	長兵衛	同町 伊兵衛 同町 源五郎 同町 市太郎 同町 伊四郎 八日町 喜兵衛 同町 仁兵衛 同町 利三郎 十八日町 亦助 朔日町 津右衛門 六日町 清	
五郎	同町	又兵衛	同町 德右衛門 大工町 勘助 廿六日町 与五郎 筝鉢番 八日町 伊五郎 同町 孫兵衛 支配人 荒町 忠藏 十三日町 德兵衛 同町 忠兵衛 同町	
兵衛	大工町	宇兵衛		

此行列帳者法靈大明神御祭礼絵巻物編製調査之為メ御屋敷より押借仕書きしたるものに而此時代ニ書きたるものニハ御座なく候也

天保四年巳七月廿日 法靈御神事行列

(靈神社所藏)

露拂御幡

神樂獅子 御神 頭 立願御供子共 神輿臺 御神幡 九郎兵衛様 弥九郎様 馬之丞様 岩尾様 多膳様 半之丞様 辰右衛門様 多喜三郎様

露拂御幡

市太夫様	治部右衛門様	新兵衛様	松治郎様	六郎治様	文内様	傳五右衛門様	直衛様	庄左衛門	述人様	床太夫様	兵庫様	右兵衛様	御廣間太鼓
二番		法螺	山伏	太鼓	上下着	山伏	調拍子	山伏	上下着	御鋒	法善院名代	草履取	立傘
寄進幡	獅子権現	法螺	山伏	笛	上下着	山伏	調拍子	山伏	上下着	御鋒	成就院	合羽筆	神前湯立
重右衛門子	染吉	法螺	山伏	笛	上下着	山伏	調拍子	山伏	上下着	御鋒	成就院	白熊毛御長柄	同 同 同 同
一笛	惣門丁	藤吉	豊吉	栄松	廿三日町	廿三日町	廿三日町	廿三日町	廿三日町	若 黨	若 黨	赤御幡	賽錢箱
一音頭	八日町	金次郎	十八日町	久治	廿三日町	吉松	廿三日町	市太郎	廿三日町	御馬脇	御馬脇	花色御幡	白熊毛御長柄
一三味線	十八日町	金次郎	十八日町	覚藏	廿三日町	廿三日町	廿三日町	廿三日町	廿三日町	御口取	御口取	乙名 同 同 同	同 同 同
一太鼓	太鼓	鍛治丁	京七	惣門丁	小次郎	廿三日町	幸助	廿三日町	幸助	御馬脇	御馬脇	大神樂	五色御吹流
出し人数	大塚屋	市蔵	一	對幡	十一日町	下大工町	一	信玄	橋本八右衛門	御先供	御先供	青龍刀	五色御吹流
一青龍刀	青龍刀	朔日町	一	關羽	廿三日町	利藏	又次郎	廿三日町	廿三日町	御口取	御口取	廿六日町	馬之丞様
一式三番双	式三番双	十三日町	左藏	廿三日町	善八	一	金平	廿三日町	廿三日町	御床机持	御床机持	春松	半之丞様
一弁慶	弁慶	十三日町	善吉	八日町	与七	六日町		六日町	六日町	御長柄持	御長柄持	大江町	辰右衛門様
一草前山王	草前山王	廿六日町	十六日町	一	僧正坊	八日町		市十郎	市十郎	押	押	仁助	多喜三郎様
一大幡	大幡	寺横丁	大工町	一	虎舞	鮫村				押	押	大江町	多膳様
一風流踊子	風流踊子	鮫村	湊村	一									半之丞様
支配人	支配人	石橋善兵衛	美濃屋又次郎	同	御供馬五疋	荒町	八郎兵衛	同	傳右衛門	十一日町	嘉兵衛	三日町	辰右衛門様
										長左衛門			辰右衛門様
													多喜三郎様

嘉永元年申七月廿日 法靈御神事行列

(靈神社所藏)

獅々大神樂	上下着	御榼	御神馬	立願御供子共	神輿臺	御神幡	九郎太様	弥九郎様	八郎右衛門様	彈正様	勘太夫様	辰右衛門様	清太夫様	
露拂御幡														
市太夫様	斎宮様	藏人様	右門様	六太夫様	文内様	外記様	内記様	莊右衛門様	幸太郎様	吉治郎様	松之助様	陽之進様	健吾様	
太鼓	太鼓	太鼓	太鼓	太鼓	太鼓	太鼓	太鼓	太鼓	太鼓	太鼓	太鼓	太鼓	太鼓	
二番	法螺	山伏	太鞞	上下着	山伏	調拍子	山伏	上下着	先供	御鋒	長刀	法明院代	付僧	
寄進幡	獅々權現	山伏	笛	上下着	山伏	調拍子	山伏	上下着	先供	若黨	草履取	狹箱	御幣三本	
法螺														
白熊毛御長柄	同	同	同	同	拍子木	龍頭御幡	五色御吹流	乙名	同	同	花色御幡	白御幡	御奉納	
五色御吹流	上下着	龍頭御旗	以下常泉院行列	山伏	長刀	法明院	若黨	草履取	若黨	赤御幡	赤御幡	花色御幡	乙名	
青龍刀	出し	踊子	床机持	役者	拍子木	大幡	鮫踊子	出し	同	同	花色御幡	白御幡	御奉納	
五色御吹流	老人立	役者	御合羽簾	同	押	山伏	常泉院代	若黨	同	同	花色御幡	赤御幡	赤御幡	
御草履取	御道具持	御沓箱	御合羽簾	同	押	山伏	若黨	草履取	同	同	花色御幡	白御幡	御奉納	
御床机持	御長柄持	御合羽簾	同	押	山伏	長柄傘	対旗	若黨	同	同	花色御幡	赤御幡	赤御幡	
廿日御旅所	一	御神樂	一	御湯立	廿二日法靈	一	踊	三番	一	踊	石橋文藏子	兵吉	石橋源兵衛孫	
三春屋与惣治子	虎吉	一	笛	惣門丁	藤吉	廿三日町	豊吉	荒町	惣三郎	同丁	定吉	龟屋惣八子	友吉	石橋善兵衛孫
鍛治丁	福太郎	寺横丁	房吉	十八日町	大治郎	大工町	伊代吉	一	太鼓	六日町	勘治郎	龍治	十八日町久七	八日町
神楽	一	踊子役者	一	笠鉢	八日町	一	大幡	大塚屋	市兵衛	一	對幡	榮吉大工町	定五郎	出人數一
一	関羽	種屋	傳右衛門	一	式三番双	板屋	太郎兵衛	一	僧正坊	石屋	平七	金平	六日町	廿六日町
十六日町	一	大幡	寺横丁	大工町	一	弁慶	能登屋	長左衛門	中居屋	萬助	一	大幡古屋	吉助	廿六日町
のや	又治郎	武内宿祢	古屋	浅吉	一	剣御幣	くまのや	嘉八郎	一	猩々絆大幡堀流	野田屋	徳兵衛	種屋	笠鉢
同	壹流	大坂屋	市兵衛	古屋	清七	泉屋	吉兵衛	三春屋	新助	岩屋	傳右衛門	吉田屋	豊作	三日町
多藏	同	太夫様	一年番庄屋	松館安太郎	一	坂庄屋	亀岡惣八	一	押乙名	石橋源兵衛	河内屋	八郎兵衛	大塚屋	市兵衛
同	卯之助	同	与惣治	廿三日町	又治郎	廿六日町	与五郎	一	御輿乙名	三日町	吉重郎	三日町	半十郎	忠五郎
同	駒吉	同	代吉	同	藤十郎	同	巳之松	同	次郎兵衛	茂兵衛	三日町	喜四郎	一	獅々大神樂人數
同	岩松	同	支配人	石橋善兵衛	近江屋市太郎	種屋	傳右衛門	廿六日町	与六	同	丑松	同	吉松	廿六日町
同	利助	同	德之郎	甘	利助	廿三日	塙丁大工	吉重郎	塙丁大工	吉重郎	塙丁大工	塙丁大工	塙丁大工	利助

安政三年辰ノ七月廿日 法靈御神事行列帳

(富岡昭氏所藏)

露拂御幡 上下着 御榼 御神馬 立願御供子供 神輿臺 御神幡 九郎太様 松之助様 伊織様 弹正様 勘太夫様 虎之助様 清太夫様 市太夫様
露拂御幡 上下着

斎宮様 左膳様 右門様 六太夫様 文太夫様 帯刀様 内記様 莊右衛門様 幸太夫様 屯様 典膳様 陽之進様 兵部様 上下着

寄進幡 法螺 山伏 太鞆 上下着 山伏 調拍子 山伏 上下着 先供 榮松坊代 伴僧
法螺 山伏 太鞆 上下着 山伏 調拍子 山伏 上下着 先供 長刀 泰善坊 若黨 草履取 狹箱 合羽籠 神前湯立 御幣 賽錢箱 白熊毛御長柄

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 上下着 龍頭御旗 五色御吹流 乙名 同 同 花色御幡 白御幡 赤御幡
花色御幡 乙名 同 同 五色御吹流 龍頭御旗 以下常景院行列 山伏 常景院 騎馬 法螺 太刀持 草履取 鐣持 押子木支配人 御奉納 駕奉納

上下着 踊子 出し 大幡 出し 湊踊子 出し 鮫踊子 大幡 上下着 支配人 虎舞 笠鋒 押乙名 同 同 御先供 御口取

笠鋒 大神樂 青龍刀 出し 踊子 出し 大幡 出し 湊踊子 出し 鮫踊子 大幡 上下着 支配人 虎舞 笠鋒 押乙名 同 同 御先供 御口取

御馬脇 同 御草履取 御道具持 床机持 役者 押子木 支配人 虎舞 笠鋒 押乙名 同 同 御先供 御口取

押御町奉行 御狭箱 御沓箱 御合羽籠 同 押 床机持 役者 押子木 支配人 虎舞 笠鋒 押乙名 同 同 御先供 御口取

御馬脇 同 御草履取 御道具持 床机持 役者 押子木 支配人 虎舞 笠鋒 押乙名 同 同 御先供 御口取

押御町奉行 御狭箱 御沓箱 御合羽籠 同 押 床机持 役者 押子木 支配人 虎舞 笠鋒 押乙名 同 同 御先供 御口取

甘日御旅所 一 御神樂 一 御湯立 廿二日法靈 一 踊 三番 一 踊子 石橋源兵衛孫 定吉 石橋善兵衛孫 忠助 加賀屋徳次郎孫 仁助 一 笛 物門丁 藤吉 廿三日町 豊吉

荒町 定吉 総門丁 喜之助 下大工町 忠兵衛 一 音頭 鍛治丁 龍治 十六日町 久七 八日町 弥兵衛 同丁 鹿藏 一 三味線 十八日町 大次郎 大工町 伊代吉 長横丁 磯

吉 かち丁 宇十郎 八日町 幸吉 一 太鼓 六日町 勘次郎 大工町 吉六 鍛治丁 栄吉 大工町 定吉 出し人数 一 笠鋒 三日町 一 大神樂 一 踊子役者 一 笠鋒 八日

町 一 大幡 大塚屋 市兵衛 一 同 六日町 吉助 一 同 大工町 寺横丁 一 對幡 十一日町 下大工町 一 猪々絆大幡 板屋 太郎兵衛 一 青龍刀 朔日町 一 信玄公 河

内屋 八郎兵衛 一 太公望 近江屋 市太郎 一 神功皇后 武内宿祢 美濃屋宗七郎 一 恵比須 古屋浅十郎 一 布袋 石屋 平七 一 弁慶 三日町 長左衛門 十三日町 萬助

一 劍御弊 熊野屋 嘉八郎 一 金平 六日町 一 草刈山露 廿六日町 十六日町 一 獅々大神樂 廿六日町 若者共 一 猪々絆大幡 一流 野田屋 徳兵衛 十一屋 小兵衛 松

屋 長助 井筒屋 八郎兵衛 一 同 一流 美濃屋 市兵衛 古屋 清七 泉屋 吉兵衛 三春屋 新助 岩屋 徳兵衛 吉田屋 豊作 一 風流踊子 湊村 一 同 鮫村 一 虎舞 同

村 一 御年番御奉行 梶川十内様 一年番莊屋 米内源十郎 仮莊屋 石橋源兵衛 押乙名 石岡儀兵衛 八日町 八郎兵衛 十三日町 市兵衛 三日町 市太郎 十三日町 与惣治

古屋 浅吉 美濃屋 宗七郎 十一屋 小兵衛 廿六日町 与五郎 六日町 平七 一 御輿乙名 廿三日町 長治 同丁 与右衛門 同丁 茂兵衛 三日町 政吉 十三日町 茂兵衛 惣

門丁 德太郎 荒町 栄助 三日町 忠五郎 廿八日町 久平 同丁 巳之助 廿六日町 与七郎 塩丁 傳四郎 御町行列 一 笠鋒 三日町 一 神功皇后 美濃屋 一 青龍刀 朔

日町 一 猪々絆大幡 板屋 一 大幡 大塚屋 一 大神樂 一 信玄公 一 布袋 一 對幡 下大工町 一 大幡 大工町 一 踊子 一 シヤキリ 一 猪々絆幡 一 同 一 恵比寿 同

一 劍御弊 一 関羽 一 湊踊子 一 弁慶 一 金平 一 草刈山露 一 鮫踊子 一 太公望 一 大幡 六日町 吉助 一 虎舞 一 八日町笠鉢 廿二日御歸社 一 八日町笠鉢

一 青龍刀 一 大幡 吉助 一 太公望 一 草刈山露 一 大神樂 一 関羽 一 辨慶 一 猪々絆幡 一 同 一 布袋 一 大幡 大工町 一 信玄公 一 對幡 下大工町

衛 踊子 一 シヤキリ 一 劍御弊 一 猪々絆幡 板屋 一 鮫踊子 一 恵比寿 一 金平 一 湊踊子 一 神功皇后 一 大幡 一 虎舞 一 三日町笠鉢 ピ支配人 石橋善兵

明治二年巳七月廿日 法靈御神事行列帳

(靈神社所藏)

明治廿五年三社御祭禮行列帳

(南部家旧蔵本)

獅々大神樂	猿田彦命	宇豆賣命	神明神樂	同	神明祠掌騎馬	露拂	上下着	御櫛支配人	御広間太鼓支配人
塩湯神官	大麻神官	祓主神官	辛櫛	口附	御神馬	沓籠老人	同	神明祠掌騎馬	露拂
神三謙	紫波次郎	南部興道	南部正巳	津村朋正	中里幸隆	南部奥運	同	御供陳旗	船越鞠負
物持三人	御初穂	御寶物辛櫛	五色垂真榊	神輿支配人	同	御神号旗	同	井上尚保	山崎良甫
神樂師	三日町笠鋒	大神樂	旗	明治唱歌	世話係	上下着	猩々縫旗	白熊毛支配人	石井武親
松前鉄之助	岩清水八幡太郎	事務所	珊瑚樹	廿八日町	廿八日町	御鋒	上下着	浦山與兵工	煙山光博
神功皇后	鈴木吉十郎	五條橋十三日町	虎舞	八日町笠鋒	中居林太神樂	上下着	猩々縫旗	白熊御長柄	吉岡政世
跡乗	大澤多門	徒目附	附添	錦旗	新羅神社	御神輿	同	御神號	御広間太鼓
物持老人	物持老人	物持老人	附添	神号旗	新羅神社祠官騎馬	同	從者	錦旗	附添

明治廿三年庚寅八月 三社神事祭禮諸用控

(靈神社所藏)

木綿屋年番 村井清七

山田文次郎

明治廿三年改

三社御祭事木綿屋年番

山田文次郎 村井清七

明治廿三年七月廿六日

靈神社祠掌 坂本栄教氏 神明社祠掌 中居武次郎氏

右兩人より本年度御祭事営業者年番長者山新羅神社間の集会致候様

來リ二付年番兩人出席致候

小間物屋年番工藤傳三郎松本萬吉酒屋二ては年番未ダ相立不申ニ付石橋徳右

衛門代石橋兵作橋本八右衛門代橋本源蔵大久保平蔵代大久保多助中村萬十郎出席致候

一 神官兩人より本年御祭事之儀宜鋪御委託ニ被及候事

一 酒屋より一體御神事祭禮は三社合併の祭礼なれど右三社氏子惣代ニ於て可致盤至當日大駄の都合も宣敷相成可申事

一 木綿屋小間物屋年番に於ても酒屋の発言同意之事大沢多門氏居合神事

祭祀は市中賑ひの為なれば其主務者無之ては不叶尤其主務者たるや各町

惣代に可有之事

一 神官兩人より来ル廿八日三社氏子惣代并ニ酒屋木綿屋小間物屋年番中江

集会を願事

附タリ例年御祭事中事務委称たる河野市兵衛殿居合役割上下着及人夫手支旁々云々御祭事中事務所ニ於て甚不都合來スニ付市中各町惣代集会を

願事

一 酒屋にて年番両名相立集会江出席可為致事

一 来る廿八日集会には一献相役可申事

附タリ壱名十錢中りにして五十名都合之事

七月廿八日集会

一 神官

坂本栄教氏 中居武次郎氏

一 三社氏子惣代

一 酒屋年番 代理大久保平蔵 又代理大久保左助

一 木綿屋年番 山田文次郎 村井清七

一 小間物屋年番 工藤傳三郎 松本萬吉

一 各町惣代中右集会致候處

一 営業者惣代年番より氏子惣代に於て御祭事惣代可致は至當順序之事附タリ御祭有無可右決定可致事

一 氏子惣代中々数年来営業者年番にて致來リ候得ば本年改免て氏子惣代にて不馴の行事兎角勤り難く只御祭事にも不相成候にては如何に付是迄之通営業者年番へ御依頼之事

一 惣代集会人賛成之事

一 附タリ酒屋丈ヶハ未タ年番不取極ニ付年番代理人出席故聞置申丈の事

一 来る八月一日靈神社内え掛り神官及本年度の営業者年番并ニ昨年の営業者年番三社氏子惣代各社々壱式名召集会致萬端決定之招議可致筈に

候事

一 八月四日一昨二日集会可致之靈神官之都合に拠り相延し今日に至る事

一 霊神社祠掌 坂本栄教氏

一 集会人名

一 酒屋年番 橋本八右衛門代橋本源藏 中村萬十郎

昨年度年番 大久保徳次郎代

木綿屋言兎角今般更に分割之事申候ては右を引受同業者中へ相談致譯に

昨年度年番 泉山太三郎代泉山磯吉 伊東七六代伊東清作

欽庸三社氏子物代

三社氏子惣代出席不致候得共□□營業者年番にて取扱可致事に立至り候

得ば大凡本年度の予算取調可致事

一 昨明治廿二年度の實費高金貳百拾壹円拾錢一厘

當明治廿三年度之予算額金貳百七拾円

一 昨明治廿二年度に比較すれば大凡三割増之事

一 昨明治廿二年度寄金

金八拾円 木綿屋 出金

金六拾八円 酒や 九十錢 出金

金三拾八円 小間物や 八十錢 出金

金拾貳円 醬油屋

拾壹錢 穀物屋 引酒や 菓子や 寄附金

金貳円 御私邸 寄附金

金三円 第百五十銀行 寄附金

金貳円 階上銀行 寄附金

一 酒屋発言昨年度迄之割合にては木綿屋小間物屋へ比較すれば不相當二有

之候ば兎角出金致兼候予算額金十分にて其内貳分五りを出金致候へば至
當登心得候之事

木綿や小間物や然は其余りは如何致候哉

一 酒屋乃至予算額金何程にても十分に致し口二分五リ酒や杯五分木綿や

貳分五厘小間物や杯なれば至當に可有之事

木綿屋言兎角今般更に分割之事申候ては右を引受同業者中へ相談致譯に

不及候事予算額三割増之事なれば同業者中へ一応相談致見可申事

小間物屋茂同様之事

一 酒屋言頻ニ不當至當之論を發し木綿小間物屋と比較すれば如何にしても

不當に存じ候由至當の分割□りに改め申度昨年度之三割増にては如何し

ても出金致兼候事

一 木綿屋言酒屋方□迄に申候年番の拙者共専て可否言も如何に候得ば一應
同業者中へ相談致し見可申事乍併拙者共年番を離れて一人の同業者の資
格にて言時は決して分別ハ相成申間敷事昨年度へ三割増之事なれば
諸物価騰貴之時なれば否々乍らも承知可致心得那れ共同業者ニテハ右三
割増も如何可有之哉相談の上ならでは挨拶に及兼候事

一 小間物や言拙者の方にては分割は申すに不及三割増も如何可有之哉乍併

一 應同業者中へ相談致し見可申事八月五日前文相談致べきに付
同業者中へ廻章左に□□□御□□□□然ば本年度靈神社例祭ニ付御相
談申上度様御座候間今日午後一時村井清七宅へ御集会被成下度奉願上候
先是右申上度如斯ニ御座候

已上

廿三年八月五日 村井清七 山田文次郎
御祭事年番

小崎惣右衛門様 參兼候間宜しく登の口上なり

上野清吉様 代多吉殿出席

大岡長兵衛様 前同人送

吉田忠四郎様 代勝次郎殿來り

長谷善太郎様 手代衆出席

村井浅吉様	本人出席
泉山吉平様	代立つ吉殿出席
同御支店	同人
村井幸七郎様	代哲之助殿出席
藤井与惣治様	手代衆出席
富岡新太郎様	同断
浦山與兵衛様	重兵衛殿出席
加藤庄五郎様	手代衆出席
中村丈一郎様	参兼候間宜しくとの口上
其翌日本人來り三割増	御承知之事
村井亦八様	代善七殿出席
永嶋嘉八郎様	手代衆内へ戻り為申聞可申上候 内へ戻り 為申聞候處御祭事昨年も宜敷ければ並合通り出金可致
植村彦八様	候事昨年之通りなれば昨年分□出金致兼候と申来り然るに甲文返り掛立寄り確登為申聞處三割増御承知之事
富岡宇兵衛様	手代衆出席
泉山治三郎様	本人出席
安藤茂平様	代人出席
北水半十郎様	仁太郎殿出席
泉山太三郎様	手代衆出席
関野市十郎様	代人出席
同御支店様	同人
吉田三郎兵衛様	參兼候間宜敷との口上
高橋岩吉様	同断
内藤五兵衛様	福士久次郎殿頼み
福士久次郎様	甲文承り 尤内藤分共に來り
石橋安三郎様	聟殿出席 昨年度 □出金致兼候事
戸来金次郎様	甲文承り
伊藤七六様	同断 当之次第ふ用御任免可被成候
一 前廻章之人員集会致し前々之次第逐一ニ及御相談候事	
一 分割之儀一統不承知之事	
一 昨年度へ三割増之儀當時諸物価騰貴致出リ候得ば一統不承知之事	
但□諭之有方は銘々廻章之	
八月六日	
齋神社内之年番集会出席員左に	
酒屋年番	
石橋徳右衛門代石橋兵助 橋本八右衛門代橋本源藏 中村萬十郎	
木綿屋年番	
山田文次郎 村井清七代村井丈助	
小間物屋年番	
工藤傳三郎代松本萬吉	
右集会罷上	
木綿屋年番言昨五日四者一統集会相談致候處分割の儀は一統不承知之事	
予算額大凡昨年度へ三割増都合故右なれば不承知被致候事	
□中には右三割増をふ承知の方々茂有之候へ共□年番に於て如何様にも□連出金	
為致存寄候事	
小間物屋年番にても同□□申分候事	

酒屋共にては兎角先般申通り分割返しに致さざれば昨年の割合にてハ出金致兼候趣之事

何しても木綿屋小間物やへ比較すれば不當登見申候

□惣額之式分五厘外出金難致ニ付分割に致度趣左もなれば御祭事相停免候ても無余儀次第之趣之事

一右ノ様なる相談故に兎角不相調仍而営業者年番に於て御祭事事務取扱兼候趣

三社神官并ニ氏子惣代中へ相断可申事

一三社神官并ニ氏子惣代中へ銘々に相廻り候も不都合ニ付靈神社祠掌

一坂本栄教氏迄前文之次第御断可申上候事

一坂本栄教氏三八城社内に被為居候処工今日出席之人員參行同氏え相断申候並

二同氏□神官并ニ三社氏子惣代中へも坂本氏より御断被下度義申上候事

一八月十七日三社神官并ニ大沢多門氏より突然長者山新羅神社内え出席被下度義

申來りニ付出席致し候處営業者年番并ニ各町惣代集会に相成招議致候事

一本年御祭事有無如何と問有祭多數無祭少數にて多數ニ決し

一御祭事は是迄之通り営業者年番六名并各町より御祭事委員四名撰為

都合拾名ニテ右経費割賦法及惣躰之事故取極可申事

一今般更に各町惣代中ニ於て御祭事委員撰定ニ相成候ハバ営業者年番に於て茂

右年番を離れて御祭事委員の資格を以る斗申度事

一御祭事之委員更ニ拾名撰挙可致は至當に候得共今更右様に相亘り候ては不馴

の仁が被撰ばれ那るか又は時遅にも相成候得ば枉げて本年の年番六名に外四

名撰挙して拾名にして年番及委員兼務には被為執行被下度候事

一右承知致候事

一御祭事委員 営業者年番御祭事委員兼帶

一酒や 橋本八右衛門 中村萬次郎

一木綿屋 山田文次郎 村井清七
一小間物屋 工藤博三郎 松本萬吉

一委員 橋本丈助 安藤茂兵衛 関野幸次郎 泉山吉平
一右年番并ニ委員会 来ル八月廿日靈神社内ニ於て相開可申答之事

一八月廿日靈神社内江年番委員集合

一御祭事は當市街に於て可執行に候得ハバ當入費は八戸市街営業者にして営業税金五円以上納むる者へ賦課可致決定候事

一酒屋及烟草菓子其他國稅営業者江は地方費営業者へ比効して賦課可致決定之

一酒屋及烟草菓子其他國稅営業者江は地方費営業者へ比効して賦課可致決定之

一御神事役割及人夫は各町惣代に於て差支無之候様被差出候様決定の事

一是は過る十七日新羅神社内に於て各町惣代集会之節決定の事

一各町火防方より組ニ付世話人武名づつ被差出候様決定の事

一御祭事事務所は河野市兵衛宅を借受候儀決定之事

一御祭事役割諸般は河野市兵衛柴田萬吉へ依頼決定之事

一御祭事諸般の用途は営業者御祭事年番の委員及新撰委員右事務所へ惣詰相談

致候事

一御祭事入費賦課法

一先きに本年度予算高式百七拾円に相定め候得共猶充分の予算金高は先予算に式百円増加して式百九拾円とす

一右式百九拾円は五円以上営業納稅者及営業稅ニ就ての諸用は町會議にて営業

稅賦課帳に依て是を定め候事

一營業稅金壹円ニ付九錢都合とるなり

一酒屋及其他國稅営業者は地方稅営業者に比較して定格と相定め候事

一金錢出納は酒屋にて取扱可致候事

御祭事入費収入べ高金貳百九拾六円五十三錢

但當業税割及寄付金共

一
全支拂高 金貳百九拾貳円拾三錢五厘

差引て金四円三拾九錢五厘 繰越金

右酒屋にて預り置

右出納会計ハ酒屋

年番に於て取扱候事

右之通明治廿三年度に於て取扱候也

明治廿三年九月

明治廿三年度年番

村井清七

山田文次郎

明治廿四年度年番

村井幸七殿

富岡宇兵衛殿

明治四年靈神社御祭事二付
人足大略調書上帳（靈神社所藏）

七月 市長掛	一 地方小吏	一 獅子大神樂	一 露払御幡持	一 龍頭御幡二流	一 賽錢箱
人足二人	人足四人	人足五人	人足四人	人足四人	人足二十五人
雨具持四人	人足二十四人	上下着一人	雨具持一人	雨具持二人	雨具持二人
人足二十四人	上下着一人	人足四人	人足四人	人足四人	人足四人
上下着一人	雨具持一人	組小頭八人	雨具持一人	上下着二人	上下着二人
雨具持一人	人足八人	人足八人	雨具持一人	雨具持一人	雨具持一人
雨具持二人	組小頭八人	組小頭八人	雨具持一人	人足六人	人足六人
外二上下着二人	雨具持二人	人足六人	雨具持一人	人足六人	人足六人
雨具持一人	人足二人	人足六人	雨具持一人	上下着二人	上下着二人
人足一人	人足一人	人足六人	雨具持一人	雨具持一人	雨具持一人
雨具持二人	人足四人	人足七人	供廻り人足七人	人足六人	人足四人
人足四人	人足四人	雨具持一人	雨具持一人	人足六人	人足二十五人
上下着二人	雨具持一人	人足十人	上下着二人	人足六人	人足四人
雨具持一人	人足四人	人足十人	雨具持一人	上下着二人	上下着二人
人足十人	人足四人	人足十人	人足六人	雨具持一人	雨具持一人
雨具持共々	人足四人	人足十人	石橋源兵衛八	石橋文蔵八	石橋善兵衛八
上下着二人	雨具持一人	人足四人	貸人五人	貸人五人	藤井与惣治八
雨具持一人	人足四人	人足四人	石橋文蔵八	石橋善兵衛八	石橋善兵衛八
一 御鋒持	一 御神幡御手人	一 神輿台	一 御神輿支配人	一 五色吹流二流	一 赤御幡二流
一 御廣前太鼓	一 御神幡御手人	一 御神馬	一 坂本岩見	一 花色御幡二流	一 赤御幡二流
一 御鋒持	一 御神幡御手人	一 御神馬	一 御神輿支配人	一 五色吹流二流	一 赛錢箱
一 赤御幡二流	一 白御幡二流	一 大神樂	一 笠鉸	一 花色御幡	一 御輿持
同 同 同	同 同 同	同 同 同	同 同 同	同 同 同	同 同 同
藤井与惣治八	石橋文蔵八	石橋源兵衛八	石橋源兵衛八	石橋文蔵八	石橋善兵衛八
貸人五人	貸人五人	貸人五人	貸人五人	貸人五人	貸人五人
石橋善兵衛八	石橋文蔵八	石橋文蔵八	石橋文蔵八	石橋文蔵八	石橋文蔵八

一	一	一	一	一	一	一	一	同	同	一	一	一	一
幡	御幣	幡								出			
貸人五人										貸人五人			
大久保徳次郎へ										役者十六人			
貸人五人										貸人五人			
同										美濃屋			
商宮律										貸人二十四人			
										河内屋			
										貸人二十六人			
										近江屋			
										貸人二十二人			
										六日町 平七			
										貸人十二人			
										貸人九人			
										十三日町 馬助			
										三日町 長右衛門			
										貸人十人			
										十三日町 太郎兵衛			
										貸人九人			
										熊野屋 嘉八郎			
										荒町 清兵衛			
										十三日町 長助			
										貸人五人			
一	一	一	一	一	一	別二				古屋 新三郎			
御帰社御棧敷御用	幡建台控		御湯釜	御家中様御旗番	高祖神堂					貸人足十二人			
人足十二人			同釜附馬	人足二十四人	人足三十一人	人足二十八人				庄屋共			
			長持人足	昼夜三日	昼夜三日	昼夜三日				大部屋行			
			御輿賦人足	人足三人	人足五人	人足五人				御神馬中			
				昼夜	昼夜	昼夜				商宮律休所筵敷			
				十二人	二人	一疋				役所詰人足			
				十二人	二人	一疋				人足十人			
				人足十人						人足五人			
				人足十二人						人足二十五人			
										御徒目付添番人			
										雨具持二人			

福田余興惣吉

『風俗画報』第四二号 明治二十五年六月一〇日 東京東陽堂発行

編者云八戸町は舊藩南部氏城下の地にして町數四十、戸數二千、人口一万一千を有し盛岡青森六十里間の中央に位し隨て商業の中心力を握り港灣鉄道の便を控え繁華殷賑の小都會あり文政年間藩の大友野村軍記ある者時の明君に知られ弊政を改革し衰敗を興復して隆盛を極め富榮の小名中江戸にて一に小南部又相良と稱するに至る乃ち此地産土神ある靈神社並公園地長者山新羅神社藩祖等を莊巖にし爾來今日の大祭連綿たり祭禮の盛んたる長者山の賑ひたる蓋し奥羽中無比と云も過言にあらず眞に長者山の殷賑は以て八戸の繁昌をトすへく八戸の繁華は長者山一山三日間に亘すと謂也可あり

八戸の氏神靈神社祭禮ハ毎年舊暦七月二十日前十二時八幡町（舊二の丸）御出立町の南端長者山（昔より公園）に到り新羅神社（藩祖）に御中休間一日御逗輿翌廿三日御歸還と相成る其の始終の御行列は先つ第一番には靈神社と記したる金の縫附けの大旗二本に猿田彦命にて六尺有餘の大人物殊に高さ一尺計の一本歯の足駄を穿き頭には三尺程の鳥帽子を冠り赤顔隆鼻の面を被る見上るに殆ど一丈もありなん跡に二十人の面被り髪長神巫女之に續き大鼓、横笛の拍子あり次は大神樂一同揃の衣装にて數十人先に立たるは唐獅子の蝶々戯れ踊り次は竹藪に虎是亦數十人一同虎舞を書きたる彩色の衣裳にて挽き八つの大鼓四人の横笛三人の鉦の拍子騒がしきにつれ大の虎はうかれて竹林を躍り出ん様をあす次は「さんぎり」にて人数二十人紅唐染の上下を着け平笠を冠り腰に二本の大小（刀）を差挟み大鼓笛三味線等の打合せ静に歌唄ひ行く次には奉獻の旗三百本一本は二人にて持つ是亦黒布染の渝赤裳赤の脚半を付け青鞋をはき相互に鬨聲を揚げつゝ行く次には鉢山車十二本目抜々々の町々より出す物に

て第一番には兒島高徳櫻樹を削るの像、第二番は太公望の像、第三番は神功皇后の前に武内宿禰應神天皇を懷く像、第四番は鎮西八郎爲朝鬼に弓を引試みさするの像、第五番は草刈童牛背に笛吹く像、第六番は八幡太郎義家弓を抱へる像、第七番は布袋小兒の舞を見る像、第八番は惠美壽鯛を釣る像、第九番は鍾鳩赤鬼を捉挫しく像、第十番は小栗判官碁盤馬乗の像、第十一番加藤清正鎗を以て虎を突殺す像、等あり何れも皆三十人位の脇附にて此も一様に黒布染の衣裳に紅唐染の脚半黒の角鳥帽子を冠り順次に隊をあして進む次には金の千成瓢箪の大旗白縮緬へ金を以て神號を書したるもの之に續いて色々の旗凡二十本次に山伏種々の装束にて山伏舞をまひつゝ行くもおもしろしきには御神櫃を前に立て神主五人錦衣を纏ひ飾付の馬に跨り高鳥帽子を冠り整然たり次は御神旗並根越の大神を前にして御神輿あり金玉燐々として環ひ明鏡煌々として輝く輿丁白衣に黒鳥帽子五十人にて昇き奉る跡に御神物錦の袋入數種隨ふ次には被の小婦大凡三十名（八九歳より十四五歳まで）身には紫縮緬の振袖を纏ひ髪は結長にして行儀よく打揃へ其脇には各一人づゝの老少の婦女傘を持ち被婦の手を携え行く次には町々の好み花車或は作り物思ひ／＼に出す一番は（鍛冶町）屋臺の生人形にて其傍には種々の藝をなす二番は（朔日町）大きさ三十間の大鯨塙吹なりとて背より水（龍吐水）を噴き出しつゝ行く折しも炎暑のちれば尤思付きよし三番は（廿六日町）屋臺に十数人の美少年演劇あり四番は（湊新町）是亦大屋臺に多の藝妓演劇なり此を挽く牛二頭は満體飾付けたり又此牛をは十六七歳計の藝妓數十人洒落を風に装ひて挽きつゝ歩む其次に三味線、太鼓、笛、琴、月琴、胡弓の屋臺幾群とちく續て行く次には消防隊一二三四四五迄の番組各

七十人づゝ揃の半纏に鬱金の三尺をバメ鳴棒を曳き五間計りの長梯子を擔ひ岬
筒を挽き旗を建て纏を振ひ組頭五名の指揮ス隨ひ要所々々に梯子登をす次は
長柄の鎗五十本持手は各二人づゝ孰れも六尺と云大男一同黒布染の大振袖に大
鎗一本を腰挟み漆黒の大笠を戴き聲を揚て進み行く次には者頭とも思ほしき
か甲冑物具大將の出立にて一手の武者三十名づゝ率ひ悠然と馬に跨り旗を立て
鎗を持ちたる様元龜天正の軍士の風現に見る心地そする如此武者二十隊大鼓を
打ち鐘を鳴して勇み行く跡には菅笠を冠り上下を着し馬或は車にて多くの供を
連れ静々伴ふて行くは此れ是の大祭の行事なり之を最終の殿後とす已にして
行列の先手は長者山新羅堂前又達する又行列の終尾は未だ八幡町靈神社を繰出
しつゝあるも道理行列の長さは殆ど二十町程もあらんと云

扱又御旅所長者山には演劇あり舞踊あり打毬あり競馬あり擊劍角力あり生花陳
列、飾人形あり觀物興行數多にして夜又至れハ烟花数十本色篝火いろかがりびあり凡廿里四
方より集る見物人に山又山をちし其賑の盛んなる山も崩るゝ計りなり「さあか
ーるーさあかる長者の山今夜ばーかりー」の唄は青森、岩手、秋田、宮城の各
縣下に亘て唄ふところを以て視るも亦其盛大なるを知るに足らん

明治二十九年（一八九六）八月一五日『東奥日報』

八戸雷龍神社 大祭は毎年舊七月廿日より三日間の處本年は日清戰爭勝利祝賀祭を兼ね盛大なる祭典を執行せんとのより祭事總世話人大澤多門氏は遇般來京坂地方に趣き八戸商人の各取引店を誘導して種々の祭旗及神輿二臺を購求し尚ほ樺山大将にも面謁を得何か懇望せし由因て本年の祭日を舊曆七月廿日より二十三日迄四日間として一の關以北青森迄の鐵道賃金を五日間位半減にせられんことを鐵道會社へ請求中の由

明治二九年（一八九六）八月三〇日『東奥日報』

八戸の大祭典（延期） 八日町靈神社は例年の通り一昨日より四日間大祭典を施行するに付日本鐵道會社にては八戸驛より盛岡青森間入至る乗客の賃金を半額に減じ・・・風邪と降雨のため延期

明治二二三年（一九〇〇）八月一八日『東奥日報』

八戸三社の祭禮 八戸町新羅神社、靈神社、神明宮三社合併の例祭は毎年

陰曆七月廿日より三日間にして本年ハ傳染病発生の憂ひあるより警察署は之れ又許可を與へず爲めに各々宮祭となすことになれる由は既報せしが今其の概況を記さん去る十三日（陰曆七月十九日）の夜ハ前日までの大雷雨に引替晴天となりしにより各社の点燈は勿論毎戸球燈を点し各町の境即ち辻路又は思ひくの大燈籠と大旗を立て町内の路上には各々球燈を点し見物人雜踏して随分賑ひたり翌十四日ハ例祭通りの當日又は相當せしにより早朝より前夜の飾付に一層の盛觀を加え各町の旗竿又は悉く球燈を四方に吊し屋台ハ各々店頭に飾置し或る店頭口は活花數瓶と人形等を飾置したもの數軒口夜口入口口点

燈の際は恰も白晝の如く爲めに見物の雜踏云はん方なし翌十五日は例祭の中日相當したるにより各社又ハ神樂其他手踊あり參詣人は引も切らず殊に新羅神社々内即ち長者山にハ南部子爵出張打球数鞍の餘興ありて見物人ハ山をなせ口夜に入りては前夜より一層球燈を増加して各社には神樂手踊等ありて賑ひ更らス加はれり翌十六日は例祭の御還り當日に相當したるにより總粧飾口前日と大差なく尚ほ餘興等又至りても前日の如く其の賑合ひも前日に劣らさりき

明治四二年（一九〇九）八月一九日『奥南新報』

本年は電話開通の爲め高大の旗さし物及び屋台等は凡て改造するの必要あり旁々夫等の爲社務所は非常に多忙を極め居れり（奥南新報八、一九）

明治四二年（一九〇九）九月七日『奥南新報』

小中野藝者連の屋台手踊及び近年珍らしき劍舞ひ等にて見物の喝采を博したり（奥南新報九、七）

大正二年（一九一三）九月四日『奥南新報』

廿六日町大神樂、猿田彦の命、高館駒踊、日月の旗、神松、八乙女、御初穗、神馬、十二支鉢、神明宮神輿、社掌、廿六日町附祭花咲爺（老爺櫻樹に登り居る處）露拂、旗、獅々、神樂、大麻神職、神馬、徒士目付、廿八日町大々神樂、神職、舊藩士供陣旗十二本、白毛梢長柄槍十本、御初穗、眞榊、氏子総代、靈神社神輿、錦旗、社司、十一日町の旗、下大工町の旗、朔日町附祭（俵藤太秀郷平親王將門を斃す）十一日町附祭（那須の與一扇を射る）義勇奉公の旗、帝国萬歳の旗二本、山田氏坂の旗、日月の旗、氏子総代人、中

居林大神樂、錦旗四本、新羅神社靈旗、紅白絹旗、十二日町錦旗、眞榊、大麻神職、神樂、大劔鉾、十二支鉾、御初穂、神馬、副齋主、槍數本、神弓、神輿台、新羅神社神輿、神輿支配人、齋主、旗、國光宣揚旗四本、義勇奉公旗、武者行列武者十餘名、旗槍持三十餘名、虎舞、加賀平酒店の恵比壽山車、旗二本、鎮護國家大旗、十六日町の草刈童子山車、十六日町の附祭（牛若丸辨慶五條の橋の邂逅）裏面鯉の瀧登り、鍛冶町附祭（頬光大江山にて酒呑童子の在所を聞く）裏面舌切雀、六日町附祭（猩々の舞）裏面養老の瀧、小松倉の鶴舞、平内の鶴舞、悪蟲の鶴舞、小中野藝妓の花屋台、三日町の笠鉾、跡乗（以上）

大正十年（一九一二）九月一日『奥南新報』

本日から三日間

八戸大祭

八戸大祭は本日から三日間執行さるる筈□三社行列の勢揃は左の如く決定した附祭は新荒町と吹揚が殖えて昨年より二つ多いから一層景氣が引立つことであらう唯昨日の雨は今日になつて口れるかどうか甚だ心配であつたが天候さへ持直せば今日の晝は行列、明日は仲日で長者山に打毬が口り造花と軒堤燈に満市を飾つた中を附祭が音頭の聲を張り上げながら小中野鮫両見番の花屋臺と共に練り歩くだらうし明日三日は□□東宮殿下御歸朝奉祝の旗行列が朝の中に

市中を賑はし午後は八戸大祭の御歸りで同じく殷賑を極むるだらう

●神明宮 大神樂、猿田彦命、袴着、大麻司、祓主、神、神樂、袴着、神子十人、神馬、御初穂箱、四神鉾、神号旗、袴着、神輿、氏子総代袴着、臺持、齋主供、附祭廿六日町諫鼓ノ鶴、新荒町花川戸助六道行口場

●靈神社 露拂、同支配人、獅子大神樂、大麻神職、御神、同支配人、御神馬、廿八日町大神樂、神職、大廣間太鼓、里神樂、御供陳旗拾旋（中里幸隆山崎良甫吉岡政昌口弓也福田祐記川勝隆邑南部虎雄南部興寧島守定

信山田文次郎）、白熊毛御長柄拾本、同支配人、御初穂、御鉾、同支配人、神風、従神、御神輿、同臺持、同支配人、錦旗、社掌、同御供、十一日町旗、下大工町旗、義勇奉公旗山田氏坂旗、日月旗、氏子惣代、山車十一日町八幡太郎義家、鹽町奥州安達ヶ原三段目、廿八日町幡隨院長兵衛水野屋敷風呂口、下大工町岩美重太郎大蛇退治、小中野村花屋

●新羅神社 露拂御神号旗、中居林大神樂、帝國萬歳旗（橋貞）、錦旗（十三日町奉納）、赤白絹旗、五色眞榊、大麻司神職、全供三人立傘持長持鉾箱持、大神樂、御初穂箱、御神馬、御旗奉行神職、全供壹人十二支劔鉾、金刀比羅神社旗、新羅神社旗、八坂神社旗、副齋主神職、供三人、御楯、御鉾、御槍甲、御輿臺持、御神輿、全支配人、袴着二十人、齋主小幡茂周供七人（二人立傘槍長刀鉾箱草履取、八坂神社旗（六日町）、島守氏奉納旗、國光宣揚旗、武者押、天下太平旗（林）、帝國萬歳旗（林）、鎮護國家旗（能市）、萬尺快樂旗、虎舞、山車能市布袋、十六日町草刈山路、十六日町染川庄八龜退治、鍛冶町桃太郎勢揃、吹揚式三番、六日町勘進帳、湊踊子屋臺、三日町笠鉾、押乙名袴着二十人、押御神号旗、跡乗

昭和十四年（一九三九）九月四日『奥南新報』

豪華 三社大祭の賑はひ 武者押・旗・やり・等々

豪華・八戸の三社大祭の賑はひは連霸四年の豊作の景氣とともに晝夜の市中を煮え繰り返らせてゐる。初日から先づ天氣に恵まれ汗だくの暑さに水屋は繁昌する、興亞奉公日で酒なし日ではあつたけれど空き腹を癒やす近郷近在の人々で飲食店も大繁昌、湊街道の東京大相撲、鷹匠小路の大サーカスを始めとして興行は大入と云ふ戦捷と豊作の曲を奏でる景氣は素晴らしい。行列は午後四時頃八幡町靈神社を出發し豫定の道筋を練り歩いたが神明宮の巫女は今年は休んだけれど靈神社の武家の旗や鎗、新羅神社の武者押、果

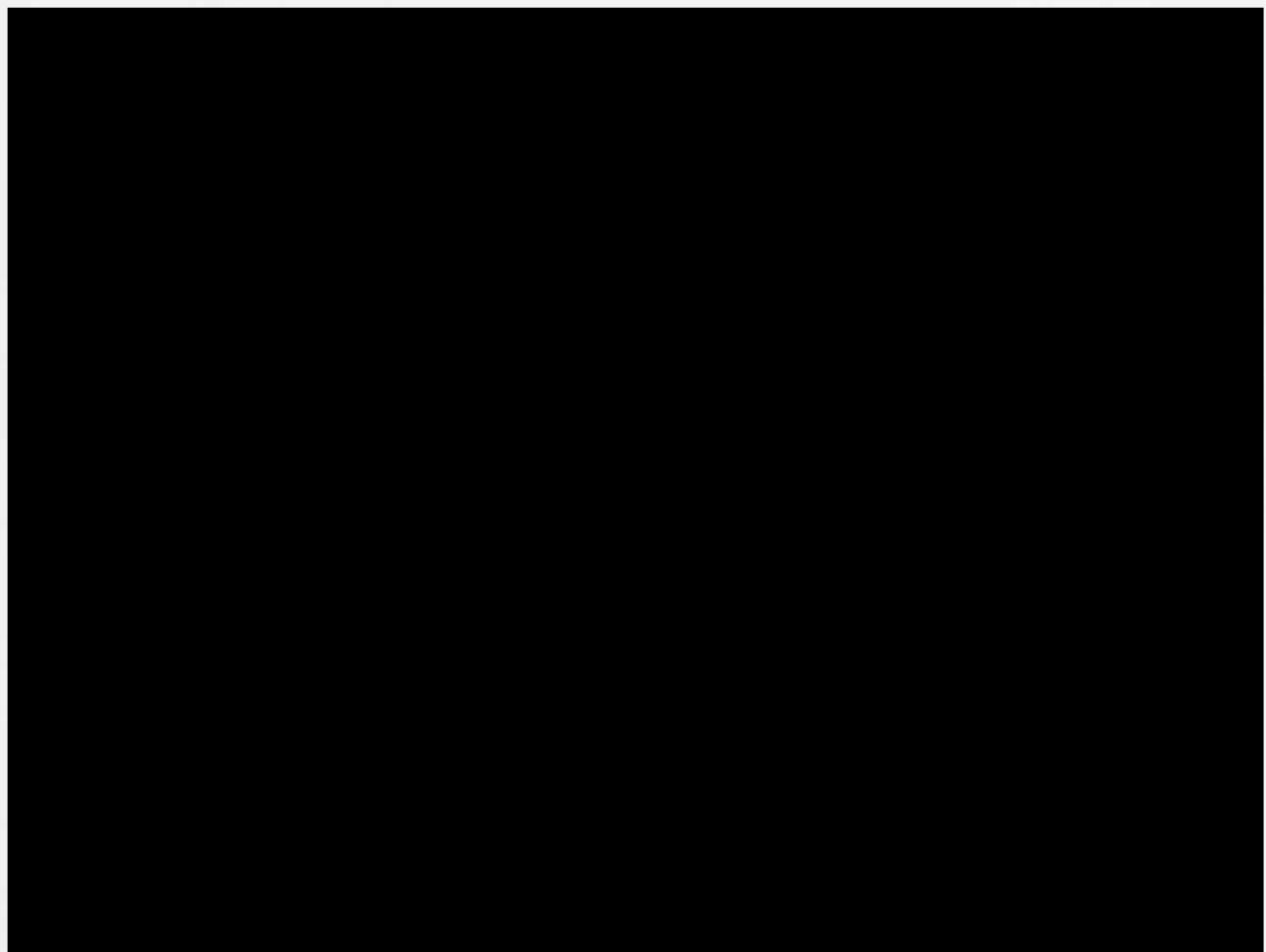
ては十六日町の虎舞近在の駒踊、藝妓屋臺、附祭は鹽町の四條畷、八幡町の小島高徳等時局柄建武の昔を偲ぶ人形を押し出すなど一段と氣勢が添えられた

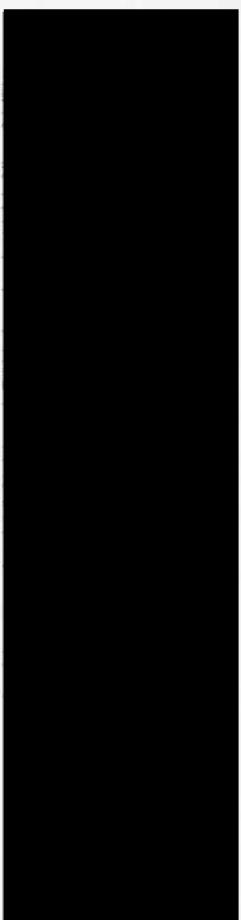
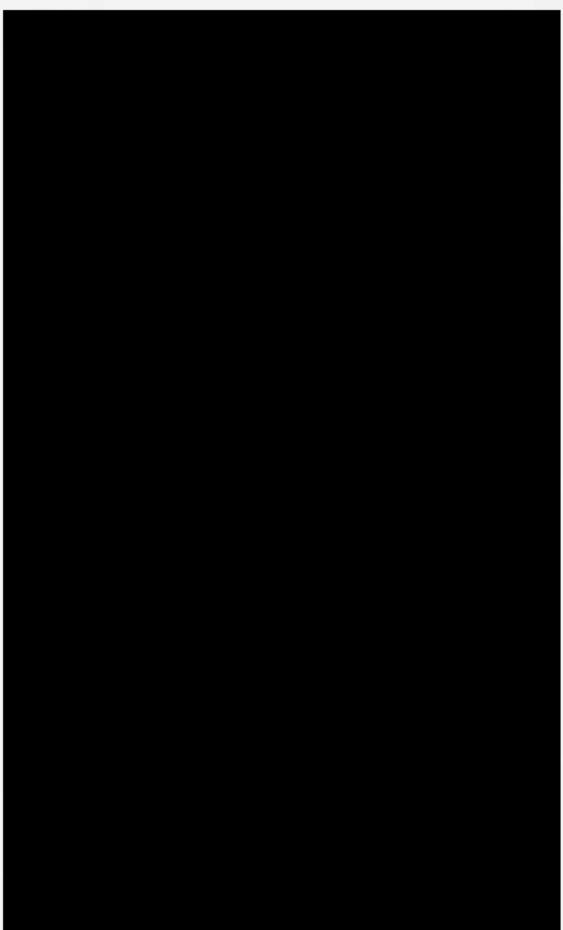
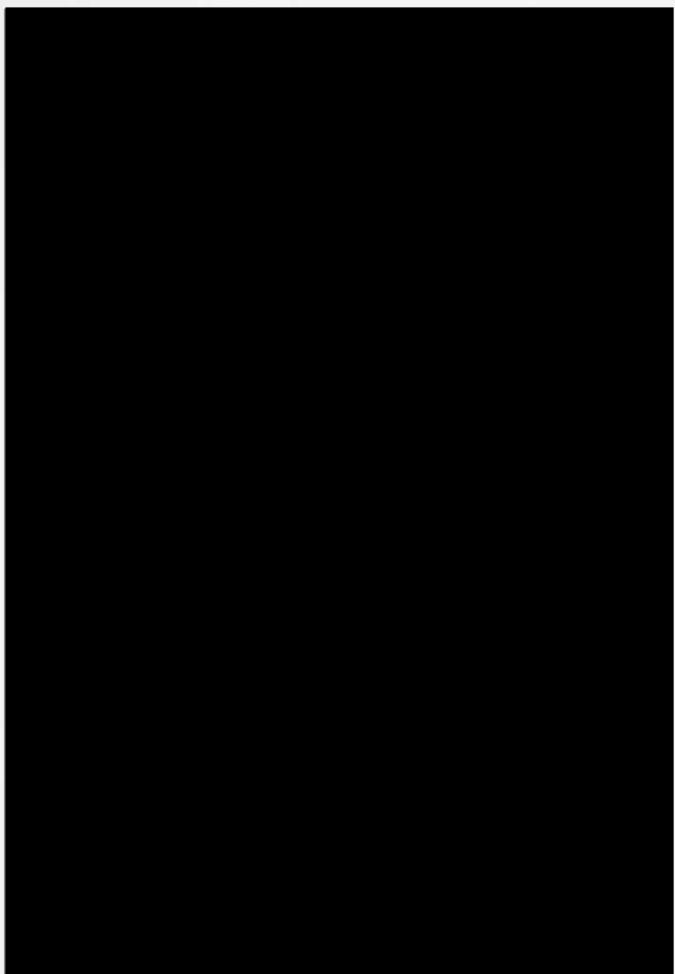
騎馬打毬 仲日の馬場

二日の大祭仲日には市中は興行や附祭、神樂、虎舞、駒踊、藝妓屋臺等の得意先訪問でお祭氣分充盈したが長者山櫻の馬場に於ては八戸打毬會の騎馬打毬が行はれ昔ながらの扮装で紅白のまりを奪ひ合つて壯觀を呈し見物人は兩側の土手を埋めた

きのう神輿還御 朝から曇天で暑い

三日目の昨三日は神輿還御の日であつて昔時其儘の行列を拜観しようとする人出は數萬に及んだ賑はひの間を行列は午後四時長者山麓を出發、鍛冶町、大工町寺横町通りを過ぎ六日町に折れ下通りを柏崎新町に到り下組町に出で大町通りを三日町まで上り停車場通りに入つて薄暮解散し、夜おそらくまで賑はひを續けて終了したが朝から曇天で蒸し暑く雨が降つてはとの人々の心配も其の儘に近年稀な好天気に恵まれた三日間のお祭りであつた





付

表

年	町 内	題 名	賞	
S 3	六日町	天の岩戸	1等	
	下大工町	恵比壽		
	塩町	丸橋忠彌		
	吹上	安倍保親		
S 4	十六日町	本能寺	1等	
	吹上	川中島		
	鍛治町	五條の橋		
	下組町	野狐三次		
	朔日町	夜叉丸		
	廿八日町	鐘馗		
	新荒町	水戸黄門		
	廿六日町	桃太郎		
	十一日町	敵愾樓錦		
	下大工町	太田道灌		
	六日町	和藤内		
	塩町	か組の虎松		
S 5	吹上	藤堂高虎、馬場三郎兵衛の奮戦	1等	
	鍛治町	頼光館の蜘蛛退治		
	朔日町	輝虎配膳の場		
	十一日町	夜討曾我狩場曙		
	廿八日町	義經千本櫻吉野落		
	下大工町	楠父子 櫻井驛の訣別		
	塩町	夏祭浪花鑑		
	六日町	三條小勝の刀打ち		
	下組町	討入忠臣藏		
	新荒町	仇討快撃録 宮本武蔵		
	廿六日町	凱旋の桃太郎		
	十六日町	塚原小太郎		
S 6	朔日町	新田義貞	1等	
	六日町	石切梶原		
	十六日町	曾我五郎		
	塩町	新門辰五郎		
	廿八日町	河野通有		
	新荒町	宮本武蔵と塚原卜傳との鍋蓋試合		
	下組町	宮本武蔵 妖怪退治		
	鍛治町	村上義光		
	吹上	南部政長逆賊曾我師助討取の場		
	下大工町	足柄山 新羅三郎義光		
	八幡町	八幡太郎義家		
	廿六日町	花車玉童富貴の場		
	十一日町	泊瀬山中の場		
T 11	吹上町附祭	恵比壽大黒の乗合萬歳の内柱立乃舞 後見：鼠の荷倉入魚釣の段		
	廿六日町	鬼退治		
	鍛治町	勢獅子		
	塩町	紅葉山		
	鍛治町	磯烟伴藏		
	吹上	司馬温公		
	十六日町	鎮西八郎爲朝		
	六日町	娘道成寺鐘供養		
	新荒町	矢ノ根五郎		
	廿六日町	勧進帳		
	十一日町	児雷也		
	下大工町	恵比須舞		
T 15	十一日町	夕顔棚（明智光秀）	1等	
	廿八日町	四條畷（楠正行）		
	塩町	土蜘蛛		
	下大工町	大黒天		
	新荒町	忠臣蔵（松の廊下）		
	廿六日町	辨慶（安宅の閨）		
	十六日町	奥州安達ヶ原（安倍貞倍・宋倍）		
	六日町	坂田金時 妖怪退治		
	鍛治町	楠公（櫻井驛）		
	十一日町	樋口次郎兼光		
S 2	下大工町	大黒様	1等	
	廿八日町	檜山騒動（相馬大作）		
	塩町	清水一角		
	下組町	蛇頭紅流し		
	鍛治町	浦島太郎		
	吹上	加藤清正		
	新荒町	大久保彦左工門（木村の梅）		
	朔日町	一に頼光		
	廿六日町	小栗判官		
	十六日町	保昌と袴垂		
S 3	六日町	素盞鳴尊		
	廿六日町	牡丹と唐獅子		
	鍛治町	森蘭丸		
	下組町	原田甲斐		
	朔日町	太平樂		
	十一日町	佐々木高綱		
	十六日町	仙台萩		
	廿八日町	諫鼓の鳥		
	新荒町	千葉周作		

年	町 内	題 名	賞
S10	六日町 鍛治町 廿六日町 新荒町 吹上 朔日町 廿八日町 十六日町 十一日町 塩町 旭町	桃太郎鬼退治 加藤清正 勢獅子 戻橋 堀尾茂助 猪退治 水滸傳 勤王志士坂本竜馬 寺田屋の場 一ノ谷嫩軍記 熊谷陣屋の場 櫛巻お藤 神明恵和合取組 め組の喧嘩 國定忠治赤城山の場	1等
S11	十六日町 六日町 十一日町 下大工町 朔日町 廿八日町 八幡町 廿六日町 類家 下組町 新荒町 塩町 鍛治町 吹上	荒神山 血煙吉良仁吉 奮戦の場 朝比奈三郎 和田城門破る 白虎隊 佐賀の夜桜 月形半平太 女勘助 源平盛衰記 畠山重忠 岩見重太郎 狩々退治の場 桂川力藏 一心多助 大森彦七 大楠公 素盞鳴尊 八岐大蛇退治 源希義	1等
S12	八幡町 鍛治町 下組町	八幡太郎義家 加藤清正 輝く日章旗	
S14	塩町 八幡町	四條畷 小島高徳	
S21	朔日町 廿八日町 六日町 十一日町 鍛治町 吹上 大工町 湊柳町	塩汲み 小野道風 壽三番そゝ 野狐三次 明鳥（捕里時次郎） 扇谷熊谷 八千代獅子 藤娘	

年	町 内	題 名	賞
S 7	吹上 廿八日町 下組町 塩町 八幡町 新荒町 廿六日町 六日町 鍛治町 朔日町 下大工町 十六日町 十一日町	義經八艘飛 彰義隊 柳生十兵衛 諸國漫遊 湯殿の長兵衛 四方田但馬守 仙臺萩 頼光と瀧夜叉 辨慶と釣鐘 加賀の夜櫻 鍋嶋猫騒動 潮吸	1等
S 8	八幡町 十一日町 廿八日町 六日町 十六日町 下組町 下大工町 塩町 廿六日町 新荒町 鍛治町 吹上 向田屋 朔日町	石橋 大岡政談 桶狭間の戦 源頼政怪獣射止 鎌倉三代記 赤城山 國貞忠治 國貞忠治 怪船安宅丸 源三位頼攻 鶴退治 忠臣蔵 兜攻め 佐倉義民傳 羽柴秀吉と佐久間玄蕃 曲垣平九郎 神恵和合取組	1等
S 9	廿六日町 吹上 十六日町 下組町 朔日町 下大工町 塩町 十一日町 廿八日町 六日町 新荒町 八幡町 鍛治町 旭町	お祭左七 佐藤忠信 平維盛 鬼女退治の場 祐天吉松 娘道成寺 名月八幡祭 碁盤忠信 丹下左膳 平知盛 歌舞伎十八番 暫 奥州安達ヶ原 南部師行公 奮戦の場 新田義貞 鎮西八郎爲朝	1等
S 10	下組町 八幡町	間宮林藏 里見八犬傳 芳流閣の場	

年	町 内	題 名	賞	
S 25	鍛治町 下組町 八幡町 吹上 六日町 廿八日町 廿六日町	國定忠治 里見八犬傳 村上義光 源義経 浦島太郎 月形半平太 花咲爺	佳作 1等 2等 3等	
S 26	下組町 塩町 新荒町 廿六日町 十六日町 六日町 吹上 鍛治町 朔日町 八幡町 十一日町 下大工町 柏崎新町 廿八日町	寶船七福神の場 天狗の安 紅葉狩 登龍門 京鹿子娘道成寺 岩見重太郎 五條の橋 森の石松 曲垣平九郎 新編八犬傳 庚申山の猫 高田の馬場 義士傳之内 一方茶屋の場 三番叟 右門捕物帳 片眼狼	3等 2等 1等 秀作 秀作	
S 27	吹上 新荒町 六日町 柏崎新町 廿六日町 下組町 十六日町 下大工町 朔日町 八幡町 鍛治町 廿八日町 塩町 十一日町 類家	朝比奈三郎義秀 矢ノ根の五郎 羅生門 相馬大作 羽衣 大國主命 かぐや姫 大黒様 梁川庄八 厳流島の決闘 羽衣 素盞鳴尊 八岐の大蛇退治 菅原傳授手習鑑 車曳の場 早川鮎之助 赤穂浪士岡野金右衛門 絵図取りの場	秀作 秀作 2位 秀作 3位 1位	
S 28	吹上 新荒町 廿六日町 十六日町 六日町 鍛治町	一寸法師 巴御前 勸進帳 助六由縁 江戸櫻 源爲朝 枕獅子	秀作 2等 3等	
S 22	湊柳町 六日町 十一日町 八幡町 朔日町 廿八日町 塩町 下大工町 鍛治町 吹上町 廿六日町 下組町	エビス様 勸進帳 喧嘩薦 鎮西八郎爲朝 越後獅子 甘酒屋甚九郎 碁盤忠信 大藏郷 笛野權三郎 山馳退治 太田道灌 連獅子 曾我兄弟		
S 23	十六日町 六日町 鍛治町 吹上 朔日町 廿六日町 廿八日町 下組町 塩町 八幡町 十一日町	忠彌 検舉の場 積恋雪閥の扉 岩見重太郎ヒヒ退治 川中島の決闘 歌舞伎十八番の内 舊 め組の辰五郎 流轉 幡隨院長兵衛 め組のけんか 佐々木信綱 宇治川の先陣 たぬき御殿		
S 24	朔日町 廿六日町 八幡町 十一日町 下大工町 廿八日町 塩町 下組町 鍛治町 吹上 十六日町 六日町	曾我五郎 佐倉宗五郎 頼光渡辺の綱 茨木童子 お祭佐七 小林平八郎 新皿屋敷 ※この年は 森蘭丸 特選山車が 清水一角 6台、その 夏祭浪花鑑 他の山車が 豊臣秀吉 優良山車と 清水一角 なった 樋口次郎兼光		特選 優良 特選 優良 優良 優良 特選 特選 特選 優良 優良 特選
S 25	朔日町 十六日町 新荒町 塩町 下大工町 柏崎新町 十一日町	水滸傳 維新前夜 池田屋騒動の場 大原女の奴 怪猫佐賀の夜櫻 村上喜劍 里見八犬傳 原田甲斐		佳作

年	町 内	題 名	賞	年	町 内	題 名	賞
S31	十六日町	桜門五三桐		S28	類家	義經千本櫻吉野落 佐藤忠信	
	朔日町	桃太郎	2位		八幡町	丸橋忠彌	
	十一日町	渡辺綱	1位		朔日町	娘五人道成寺	1等 秀作
	下大工町	安宅関			十一日町	根元 草すり引	
	吹上	加藤清正			下大工町	福恵比須	
	六日町	牛若丸と弁慶	3位		柏崎新町	双蝶々曲輪日記	
	鍛冶町	滝の白糸	秀作		塩町	大楠公	
	柏崎新町	御所五郎藏の内 松の場			廿八日町	熊谷陣屋	
	八幡町	安珍清姫			合同酒精	樽御輿	
	新荒町	鳴神	秀作				
	廿六日町	歌舞伎十八番 象引	秀作	S29	吹上	文福茶釜	
	塩町	茨木	秀作		類家	歌舞伎十八番のうち解脱	努力賞
	類家	里見八犬伝	秀作		八幡町	江戸育ちお祭り左七	
	上組町	那須与一			下大工町	土蜘蛛	3位
	本鍛冶町	和唐内紅流し			新荒町	三人石橋	
	下組町	森蘭丸			廿六日町	櫻御殿	
	新組町	助六由縁江戸桜			十六日町	は組の小町	
	廿八日町	岩見重太郎			塩町	義經千本櫻	
	子供お祭会	えびす様			六日町	鏡獅子	2位
					朔日町	足柄山の金太郎	努力賞
S32	十一日町	亡靈知盛	1位		十一日町	天竺徳兵衛	1位
	類家	西遊記 青獅子	2位		鍛冶町	天の岩戸	努力賞
	六日町	岩見重太郎	3位		柏崎新町	勝相撲 浮名花觸	
	鍛冶町	鞍馬の牛若丸	秀作		下組町	ひよどり越	努力賞
	下組町	司馬温公	秀作		廿八日町	國性爺合戦	
	朔日町	雷電爲右衛門の少年時代	秀作	S30	八幡町	関三奴 奴さん	審査なし
	下大工町	錨知盛	秀作		本鍛冶町	小栗判官	
	吹上	素盞鳴尊	秀作		廿八日町	岩見重太郎 ひゝ退治	
	廿六日町	傾城反魂香			鍛冶町	九尾の狐	
	新荒町	賤嶽七本槍			上組町	大黒様	
	上組町	日高川の清姫			廿六日町	元禄花見踊り	
	本鍛冶町	風流 猪々寿酒饗応の場			十六日町	弁慶	
	新組町	流鏑馬			六日町	娘道成寺	
	柏崎新町	羅生門			朔日町	大江山	
	八幡町	児雷也 忍術競			下組町	七福神	
	塩町	佐賀の夜桜			塩町	鏡獅子	
	廿八日町	孫悟空			新荒町	毬獅子	
	十六日町	船辨慶			十一日町	和久半太夫	
S33	廿六日町	將門忍夜恋曲者			下大工町	日蓮上人	
	新荒町	村上四郎義光 錦旗奪還の場			柏崎新町	弁慶	
	上組町	小牧山合戦			類家	伝説 十和田の開祖	
	本鍛冶町	忠臣高徳桜の木に赤城を記す			吹上	仁田四郎	
	新組町	怪傑紅蜘蛛					
	売市	勧進帳					

年	町 内	題 名	賞	年	町 内	題 名	賞
S 35	糠塚 廿六日町 上組町 新組町 壳市	花咲爺さん 一寸法師 石川五衛門 釜ゆでの場 将門忍夜恋曲者 大石蔵之助		S 33	内丸 吹上 鍛冶町 下組町 塩町 柏崎新町 十六日町 六日町 類家 朔日町 十一日町 下大工町	柳生十兵衛隠密丸の場 一寸法師 新門辰五郎 鞍馬山 だんまり 壇ノ浦 義経八艘飛 連獅子 歌舞伎十八番 女暫 鳴神 海彦山彦 風流五人男 関の扉 天人お国飛竜乃術	秀作 秀作 1位
S 36	塩町 下組町 柏崎新町 下大工町 廿六日町 新荒町 上組町 本鍛冶町 新組町 壳市 糠塚 朔日町 吹上 鍛冶町 十六日町 六日町 内丸 類家 十一日町	源義経の弓流し 唐犬権兵衛 神靈矢口渡 風神 雷神 山の神 乾龍坤龍 伊達候と高田太夫 山田長政 天女の舞 龍虎 忍術合戦 猩々 村上四郎義光芋瀬・錦旗奪還ス 頼光と四天王 大国主命 厳島の戦い 千姫と出羽守 紀ノ国屋文左衛門と蜜柑船 源頼光と怪賊鬼童丸 いなばの白うさぎ 百合若大臣	努力賞 努力賞 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作	S 34	柏崎新町 廿六日町 新荒町 本鍛冶町 塩町 上組町 壳市 新組町 下大工町 吹上 鍛冶町 十六日町 内丸 類家 十一日町 六日町 下組町 内丸 朔日町 類家	土蜘蛛 娘道成寺 川中島の合戦 双蝶々曲輪日記 加藤清正 虎退治 太田道觀 山吹の里 鞍馬獅子 豪勇俵藤太 三上山のむかで退治 日蓮と蒙古大襲来 猿蟹合戦 牡丹と唐獅子 倭仮名在原系団蘭平物狂の場 俵藤太 むかで退治 源三位頼政ぬえ退治 宮本武蔵 赤銅鈴之助 鬼面党退治の場 少年 猿飛佐助 羅生門妖鬼茨木	秀作 秀作
S 37	本鍛冶町 下組町 塩町 新荒町 新組町 壳市 糠塚 吹上 鍛冶町 十六日町 六日町 内丸 類家 十一日町 朔日町 下大工町 上組町 柏崎新町 廿六日町	宮本武蔵 安宅丸 白蛇伝 孫悟空 鎧知盛 最後の奮戦 畠山重忠の鶴越 安宅の関 足柄山の金太郎 源為朝と鬼夜叉 坂田金時 船弁慶 正行四條畷奮戦の場 八またの大蛇 山彦 八またの大蛇 永平寺開祖道元禪師 宋国より帰 路 一葉観音に救われるの場 舌切雀 鳴神上人 鎮西八郎為朝	努力賞 努力賞 秀作	S 35	塩町 柏崎新町 十六日町 本鍛冶町 朔日町 十一日町 鍛冶町 下大工町 六日町 内丸 類家 吹上 内丸 下組町 新荒町	大江山 酒呑童子 道行 初音の旅 雪月花 曾我兄弟 為朝の竜魔王退治 布引の滝 海彦山彦 吹雪の吉野山 金太郎鯉捕り 賤ヶ嶽一番槍 桃太郎 義貞 鎌倉攻めの場 清水一角 泉水奮戦の場 黒田武士	努力賞 1位 2位 3位 秀作

年	町 内	題 名	賞	年	町 内	題 名	賞	
S40	新荒町 上組町 廿六日町 本鍛冶町 新組町 壳市 鍛冶町 吹上 糠塚 十六日町 六日町 類家 朔日町 十一日町 下大工町 柏崎新町 下組町 塩町 内丸	恵比寿鯛 賢女烈婦伝 勝五郎と恋女初花 連獅子 牛若と弁慶 大阪夏の陣 木村重成の奮戦 本能寺の変 長恨尽きず本能寺 安達ヶ原の鬼女 力チカチ山 小野川喜三郎 九尾狐退治 清涼寺七ふしき 黒雲の怪 浦島太郎物語 楽園 成田山 不動明王開眼 女車引 平和(極楽浄土) 慈母觀世音菩薩 コブとりじいさん 赤穂浪士討入り 耳なし芳一 春興鏡獅子	秀作 秀作		S38	新荒町 上組町 下組町 本鍛冶町 塩町 新組町 壳市 糠塚 吹上 今川義元 鍛冶町 十六日町 六日町 内丸 類家 朔日町 十一日町 下大工町 柏崎新町 甘六日町	お江戸日本橋 ねずみの嫁入り 岩見重太郎 蜘蛛退治の場 南総里見八犬伝 芳流閣上の決斗 芝神明惠和合の取組 鮫を捕獲する朝比奈義秀 清海入道の猪退治 恵比寿大黒 今川義元 源義経大物捕の逆襲 一寸法師 弁慶の引摺鐘 斎藤実盛最後の奮戦の場 かぐや姫 天下を狙った風雲児 平将門の怨 靈 成田不動と文覚上人 浦島太郎と龍宮城 大蛇を退治する為朝 日蓮波にえがく七文字 南無妙法 蓮華経	努力賞 2位 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作
S41	新荒町 上組町 廿六日町 本鍛冶町 新組町 壳市 吹上 鍛冶町 糠塚 十六日町 内丸 六日町 朔日町 十一日町 下大工町 類家 柏崎新町 下組町 塩町	那須与一 猿蟹合戦 かぐや姫 毛槍奴 海神新田義貞の鎌倉攻め 曲垣平九郎 男坂の妙技 神武天皇東征(大和地方平定) 古代神話 八咫鳥 菅原道具公の怨靈 桃太郎 魚籃觀音 猿飛佐助 甲賀流忍術修行の場 鬼神に勝る巴御前の大奮戦 鬼ヶ島 大力 根井大弥太行親 龍宮城 加藤清正城攻めの場 牛若丸と弁慶 六歌仙容彩	3等賞 秀作 秀作 秀作 秀作 2等賞 秀作 秀作 秀作 秀作 1等賞 秀作		S39	新荒町 上組町 廿六日町 塩町 本鍛冶町 新組町 壳市 糠塚 下組町 鍛冶町 吹上 柏崎新町 十六日町 六日町 内丸 下大工町 類家 朔日町 十一日町	重盛、義平紫震殿外奮戦の場 弟橘媛 九紋龍と花和尚 鎮西八郎為朝 強弓にて敵船を沈 める 碇知盛 加藤清正の虎退治 南祖坊と八ノ太郎の決闘 鬼上官清正兀良給城の奇襲 神功皇后の三韓征伐 弟橘媛 源三位頼政 ぬえ退治の場 いっすんぼうし鬼たいじ 夕鶴(鶴の恩返し) 羅城門 八郎物語 大黒雲湖の主の争い 七福神 鞍馬寺の牛若丸 西遊記 瑞鳳	努力賞 秀作 努力賞 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作
S42	廿六日町 上組町 新荒町 本鍛冶町 新組町 壳市	夕鶴 鶴の恩返し 五人石橋 娘道成寺 風雲児 平将門 豪勇 梁川庄八 閔の扉	秀作 努力賞					

年	町 内	題 名	賞
S48	内丸	一寸法師	
	淀	南部酒造・助公大砲試射の場	
	十六日町	聖人日蓮	
	鍛治町	かぐや姫	優秀
	類家	赤穂浪士悲願達成	秀作
	吹上	豊臣秀吉 小牧山の合戦	努力賞
	六日町	大昔の捕鯨の場	秀作
	青年会議所	十二支と守本尊	最優秀
	日商月金会	楠正行 四條畷の奮戦	努力賞
	デーリー東北	忍法竜虎の対決	
	八戸市職員互助会	竹取物語 かぐや姫天女昇天	優秀
S49	廿六日町	中将姫ものがたり 阿弥陀如来來迎の場	秀作
	新荒町	浦島太郎童宮に遊ぶ	
	上組町	だるま大使と恵比須大黒	
	新組町	日吉丸	
	壳市	海彦山彦	
	朔日町	八幡太郎義家	努力賞
	下大工町	水滸伝 九紋龍と花和尚の戦いの場	努力賞
	下組町	加藤清正の虎退治	努力賞
	塩町	恵比須大黒豪遊の場	秀作
	十一日町	関の扉	努力賞
	柏崎新町	孫悟空	努力賞
S50	内丸	水滸伝 梁山泊進軍	秀作
	淀	新八犬伝	
	十六日町	南総里見八犬伝 芳流閣上の竜虎	
	鍛治町	舞樂 番舞	優秀
	糠塚	柳生十兵衛 山中修練の場	
	吹上	南総里見八犬伝 伏姫と八犬士	優秀
	類家	うらしまたろう	秀作
	六日町	浦島太郎	
	青年会議所	天照大神・天の岩戸の場	秀作
	PG日商月金会	水滸伝	努力賞
	デーリー東北	寿子守大黒	
S51	八戸市職員互助会	大阪夏の陣	最優秀

年	町 内	題 名	賞
S46	内丸	波切不動明王	努力賞
	類家	赤穂浪士討入り	最優秀
	六日町	義経の八艘飛び	
	糠塚	燕島の弁財天 海に投げ込まれた弁財天を拾い上げる量光和尚	秀作
	青年会議所	大江山魔人	秀作
S47	吹上	南祖坊と八之太郎	
	廿六日町	鎮西八郎 源為朝	優秀
	上組町	金太郎と雷神	
	本鍛治町	仁田四郎の猪退治	
	新組町	南祖坊と八之太郎の死闘	
	壳市	天草四郎の亡靈の場	
	朔日町	雪の中の落人	秀作
	新荒町	一葉観音と道元禪師	努力賞
	下大工町	牛若鞍馬山奥 僧正が谷の修行の場	努力賞
	下組町	吹雪の吉野山	秀作
	塩町	常盤御前	秀作
	十一日町	源頼光と怪賊鬼童丸	努力賞
	柏崎新町	須佐之男命の八岐の大蛇退治	
	類家	会津飯盛山白蛇隊二十士	最優秀
	内丸	牡丹と唐獅子	内丸
S48	十六日町	おとたちばなひめ	
	鍛治町	単騎部下を救い出す木村重成	優秀
	六日町	弁慶と牛若丸	
	糠塚	角浜衛獅子（越後獅子）	
	青年会議所	七福神	秀作
	八戸市職員互助会	鎮西八郎源為朝 強弓にて敵船を沈める	秀作
	日商月金会	岩見重太郎の狛々退治の場	
	廿六日町	源平盛衰記 壇の浦決戦の場	秀作
	新荒町	千早城の戦い	努力賞
	上組町	鶴の恩返し	
	本鍛治町	奮闘する清水一学	
S49	新組町	南部伝説 七崎普賢院観音由来	
	壳市	頼光四天王の一人渡辺綱 羅城門鬼女退治	
	下大工町	会津落城悲話 鶴ヶ城を後に出陣する娘子軍	
	朔日町	本能寺の変	
	下組町	紫宸殿奮戦の場	
	塩町	火事と喧嘩は江戸の華	
	十一日町	源三位頼政の鶴退治	秀作
	柏崎新町	妖怪九尾の狐退治	秀作
			努力賞

年	町 内	題 名	賞	年	町 内	題 名	賞
S52	内丸	竜頭觀音	秀作	S50	朔日町	羅生門	秀作
	PG日商月金会	祇園祭	秀作		下組町	厳島の戦い	優秀
	十六日町	娘道成寺			塩町	大岡越前と町火消し	
	鍛治町	鳥居強右衛門勝商			十一日町	宮本武蔵厳流島の決闘	
	廿六日町	桃太郎の鬼退治			類家	宝船と桃太郎	秀作
	新荒町	川中島の合戦			柏崎新町	忍法龍虎の対決	
	上組町	弁財天と福神			内丸	シャム国山田長政	秀作
	新組町	海神新田義貞の鎌倉攻め			淀	高館夜襲の場	
	壳市	安達原の鬼女			六日町	俱利加羅谷の夜襲	秀作
	下大工町	吉野山道行			城下	七福神	
	下組町	鞍馬山の天狗と牛若丸			十六日町	為朝奮戦の場	
	淀	自来也			鍛治町	汐汲	努力賞
	城下	南祖坊と八郎太郎			吹上	弘安の役・日本水軍統帥 河野通	秀作
	塩町	(新)め組の喧嘩	最優秀			有の大奮戦	
	十一日町	悪源太義平 布引の滝			糠塚	伊達政宗	努力賞
	柏崎新町	五大明王			青年会議所	竜虎の戦い	優秀
	朔日町	京鹿子娘道成寺			PG日商月金会	極楽	
	糠塚	加賀美流騎馬打毬	優秀		八戸市職員互助会	菅原伝授手習鑑 車引の場	最優秀
	吹上	魚籃觀音	秀作		デーリー東北	いなばの白兎	
	類家	百合若大臣	秀作	S51	新荒町	本能寺の変	奨励賞
	六日町	茨木童子			上組町	足柄山の金太郎	
	青年会議所	南部三郎光行石橋山の戦い	優秀		廿六日町	南総里見八犬伝	
	八戸市職員互助会	白浪五人男	秀作		新組町	亀遊山・浮木寺由来	
	デーリー東北	牛若丸と弁慶			壳市	牛若丸と弁慶	
S53	廿六日町	亡靈知盛と源義經との戦いの場			下大工町	竜神觀音菩薩	
	新荒町	頼光の鬼退治			下組町	怪猫佐賀の夜桜	
	上組町	岩見重太郎の狒々退治			淀	頼光の鬼退治	
	新組町	大阪冬の陣 真田幸村の奮戦			城下	西天雷音寺より帰る三藏法師	奨励賞
	壳市	良弁杉由来			塩町	連獅子	最優秀
	下大工町	騎龍觀音			十一日町	赤穂浪士討入りの場	
	下組町	平家の亡靈 摂州大物捕に現わる場	優秀		柏崎新町	西遊記 牛魔王との闘い	
	淀	金太郎の鬼退治			朔日町	道元禪師・一葉觀音に救われる場	
	城下	幕末軍艦威脅丸渡米の場			内丸	聖徳の吉兆「四端」	秀作
	塩町	新五人石橋	最優秀		PG日商月金会	加藤清正の虎退治	
	十一日町	豊年の舞			十六日町	鯨とりの闘い	
	柏崎新町	西遊記 金角・銀角大魔王との闘い			鍛治町	京鹿子娘道成寺	奨励賞
	朔日町	孫悟空 分身の法			糠塚	新田義貞と足利尊氏の奮戦の場	奨励賞
	内丸	竹取物語 竜の五色の玉 伴大納言の話	秀作		吹上	南部師行公 出陣の場	秀作
	PG日商月金会	鞍馬寺の天狗と牛若丸	秀作		類家	竜踊り	優秀
	十六日町	足柄山の金太郎			六日町	海神	
	鍛治町	大仏建立			青年会議所	金太郎の鬼退治	秀作
					デーリー東北	大漁恵比須	
					八戸市職員互助会	かぐや姫	優秀

年	町 内	題 名	賞	年	町 内	題 名	賞
S55	塩町 十一日町 柏崎新町 朔日町 内丸 PG日商月金会 六日町	助六由縁江戸桜 昇天かぐや姫 男鹿の赤神と竜飛の黒神 十和田 湖上の斗い 駿河大納言忠長の大猿退治 源頼光と四天王鬼退治 南総里見八犬伝 芳流閣の一騎討ち 羅城門	優秀	S53	糠塚 吹上 類家 六日町 デーリー東北 青山会 新井田 八戸市職員互助会	菅原道真の怨霊 自来也 一休さんと將軍さま 紀伊国屋文左衛門 大江山の鬼退治 孫悟空 金角銀角の場 南部神楽の舞 義経八艘飛び	秀作 秀作 秀作
	十六日町 新井田 糠塚 吹上 類家 青山会 三菱製紙株 八戸市職員互助会	須佐之男命と八岐大蛇 加藤清正の虎退治 真田幸村十勇士出陣の場 日蓮と蒙古大襲来・神風 真田幸村 大阪冬の陣 出世鯉滝のぼり かぐや姫 竹生島	秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 優秀	S54	廿六日町 新荒町 上組町 新組町 壳市 下大工町 下組町 塩町 淀 城下 十一日町 柏崎新町 朔日町 内丸 PG日商月金会 十六日町 鍛冶町 糠塚 新組町 壳市 下大工町 下組町 淀 城下 十一日町 柏崎新町 朔日町 内丸 PG日商月金会 十六日町 鍛冶町 糠塚 新組町 壳市 下大工町 下組町 塩町 淀 城下 十一日町 柏崎新町 朔日町 内丸 PG日商月金会 十六日町 鍛冶町 糠塚 新組町 壳市 下大工町 下組町 淀 城下 廿六日町 新荒町 上組町 新組町 壳市 下大工町 下組町 塩町 淀 城下	王朝貴族の船遊び 一の谷の合戦 義経と亡靈知盛 一ノ谷の戦い鶴越えの逆落し 須佐之男命八岐大蛇退治 秦王破陣樂（太平樂） 畠山重忠ひよどり越え奮戦の場 南部俵つみ 竜現菩薩と竜頭觀世音菩薩 海神新田義貞の鎌倉攻め 鎮西八郎為朝の強弓 水滸伝 梁山泊の戦い 八俣遠呂智 阿弥陀聖衆来迎 西遊記 風神・雷神 源平壇の浦の戦い 文覚上人修行の場 逆將、平将門の最期 日蓮上人佐渡流罪 武藏坊弁慶 南部の宴 南部の踊り 桃太郎の凱旋 七福神	秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 優秀 最優秀
S56	新井田 六日町 類家 廿六日町 吹上 新荒町 上組町 糠塚 新組町 壳市 下大工町 下組町 淀 城下 塩町 十一日町 柏崎新町 朔日町 内丸 PG日商月金会 鍛冶町 十六日町 青山会 三菱製紙株 八戸市職員互助会	大江山魔人 神話 天の岩戸 七福神 義経千本桜 鞍馬山天狗と牛若丸 花咲爺さん 平安の舞（舞楽） 賤ヶ嶽七本槍 壇の浦決戦 桃太郎 安宅の関 勧進帳 義経都落ち雪の吉野山 亡靈の場 京鹿子娘道成寺 桜田門外の変 賑七福神と高砂 南総里見八犬伝 芳流閣の決闘 花咲じいさん 北条早雲の龍魔王退治 陸奥の戦乱 南部信直公出陣 太閤記 巴御前奮戦の場 一寸法師の鬼退治 法盡神社老婆の難病を救う場 (新) 娘道成寺 歌舞伎十八番 暫		S55	廿六日町 新荒町 上組町 新組町 壳市 下大工町 下組町 塩町 淀 城下 廿六日町 新荒町 上組町 新組町 壳市 下大工町 下組町 塩町 淀 城下	竜虎の争覇川中島の決戦 源為朝 五人石橋 楠木正成湊川の合戦 足柄山の金太郎 七福神と唐子の遊戯の場 水がめに溺れる子を救う司馬温公 (新) 菅原伝授手習鑑 車引の場 新撰組 池田屋騒動	秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 優秀 最優秀

年	町 内	題 名	賞	年	町 内	題 名	賞
S 58	朔日町 城下 新井田 吹上 八戸市職員互助会	大江山 (新) 龍の子太郎 江戸の華・火消し縁 巖島の戦い 十人石橋	秀作	S 57	新井田 十六日町 類家 六日町 糠塚 廿六日町 新荒町 上組町 新組町 壳市 新荒町 上組町 新組町 壳市 三菱製紙株 淀 下大工町 十一日町 青山会 塩町 下組町 柏崎新町 城下 PG日商月金会 新井田 糠塚 六日町 鍛治町 吹上 八戸市職員互助会	(新) 娘道成寺 うらしまたろう かぐや姫 日蓮と蒙古大襲来 七福神 源平壇の浦の決戦 源義経八艘飛び 孫悟空 将門・忍夜恋曲者 浦島太郎・龍宮城の宴 下大工町 下組町 淀 城下 塩町 十一日町 柏崎新町 朔日町 内丸 PG日商月金会 鍛治町 吹上 八戸市職員互助会	最優秀 秀作 努力賞 努力賞 努力賞 優秀 秀作
S 59	内丸 朔日町 類家 十六日町 廿六日町 新荒町 上組町 新組町 壳市 三菱製紙株 淀 下大工町 十一日町 青山会 塩町 下組町 柏崎新町 城下 PG日商月金会 新井田 糠塚 六日町 鍛治町 吹上 八戸市職員互助会	神仏習合 八幡大菩薩除難の開眼 源為朝の龍魔王退治 中将姫 西遊記 十和田湖の伝説 南祖坊と八郎太郎の鬭い 南部藩に纏わる七福神と十二支 新諸国物語 紅孔雀 巴御前奮戦の場 寿三番叟 西遊記 孫悟空奮戦の場 燕島伝説 真田十勇士の内 忍法競べ 亡靈知盛 西遊記 壇之浦の合戦 義経の八艘飛び 赤間の浦 源平決戦の場 ひよどり越えの合戦 水芸 秀吉の三日普請 豊年祭 机先陣争いの場 空海 子と七福神 牡丹に唐獅子 二人知盛 空海入唐	努力賞 努力賞 秀作	S 58	鍛治町 十六日町 類家 六日町 糠塚 廿六日町 新荒町 上組町 新組町 壳市 三菱製紙株 下大工町 柏崎新町 内丸 PG日商月金会 鍛治町 吹上 八戸市職員互助会	縁小町 かぐや姫 天の羽衣 朝比奈三郎義秀 徳川家康出陣の場 象引 楠公奮戦の場 かぐや姫 自来也 三番叟 七つ面 蒙古襲来 竹崎五郎李長奮戦の場 宇治川の合戦先陣争い ももたろう 法盡大明神縁起絵巻 加藤清正の虎退治 一ノ谷の合戦 (新) 七つ面 まるみつ 下組町 淀 十一日町	努力賞 努力賞 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作
S 60	長横町 廿六日町 新荒町 上組町 新組町 壳市 十一日町 青山会 朔日町 下組町	豊漁・満作・恵比須大黒 連獅子 (新) 牛若丸 ねずみの嫁入り 赤間ノ浦源平大戦平教経と源義経 当世流南総里見八犬伝 庚申山の妖猫 娘道成寺・龍変化の場 加藤清正虎退治の場 須佐之男命の八岐大蛇退治 一ノ谷の合戦 鶴越逆落の場	努力賞 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作	S 58	鍛治町 十六日町 類家 六日町 糠塚 廿六日町 新荒町 上組町 新組町 壳市 三菱製紙株 下大工町 柏崎新町 内丸 PG日商月金会 鍛治町 吹上 八戸市職員互助会	蒙古襲来 竹崎五郎李長奮戦の場 宇治川の合戦先陣争い ももたろう 法盡大明神縁起絵巻 加藤清正の虎退治 一ノ谷の合戦 (新) 七つ面 まるみつ 下組町 淀 十一日町	優秀 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作 秀作

年	町 内	題 名	賞	年	町 内	題 名	賞	
S62	廿六日町 新荒町 上組町 新組町 壳市 新井田 内丸 十一日町 柏崎新町 青山会 下組町 淀 城下 下大工町 朔日町 月金会 塩町 十六日町 鍛冶町 八戸市職員互 助会 吹上 糠塚 長横町 六日町 類家	弘安の役 河野通有奮戦の場 本能寺の変 大江山の酒呑童子 独眼竜政宗 五穀豊穣 大かがり火招運の舞 福運招来 山の神と七福神 日本風物詩 宵宮・水園の戯 攝州大物浦 怨霊知盛 浦島太郎 (新) 娘道成寺 壇の浦 源平決戦の場 櫛引八幡宮 流鏑馬神事の場 伊達政宗と愛姫 政宗出陣の場 大江山鬼女妖艶の舞 渡辺綱・羅生門の鬼退治 (新) 鳴神(雷神不動北山桜) 秀吉出陣の場 壇ノ浦合戦 義経の八艘飛び 国姓爺合戦 八戸三社大祭縁起 三社祭神と 野村軍記・大沢多門 神仏に見守られ出陣 独眼竜政宗 新・廓獅子(枕獅子) くじらの八戸太郎と熊野浦の漁師 藤娘		努力賞 優秀 秀作 努力賞 優秀 秀作 努力賞 努力賞 獎励賞 努力賞 獎励賞 獎励賞 獎励賞 優秀 最優秀 努力賞 努力賞 秀作	S60 柏崎新町 新井田 淀 内丸 下大工町 塩町 城下 糠塚 六日町 類家 十六日町 鍛冶町 八戸市職員互 助会 吹上	本能寺の変 源義経物語 騎馬打毬 大安吉日 三姉妹祝の宴 正月の恵比寿大黒 (新) 七つ面 大石蔵内助良雄 京にて偽遊の場 宝船 茨木童子 りゅうぐうじょう 義組・女町火消し 伝説 麒麟送子 双面道成寺 源平盛衰記 落日の平家一門		努力賞 秀作 秀作 優秀 努力賞 最優秀 努力賞
S63	廿六日町 新荒町 上組町 新組町 壳市 新井田 柏崎新町 塩町 月金会 青山会 朔日町 船弁慶 新・ヤマトタケル 源頼光の大蜘蛛退治 祝舞豊年獅子と牡丹 種差に遊ぶ七福神 八戸義経伝説 小田の毘沙門の縁 起 加藤清正 虎退治の場 平賀源内・エレキテル夢物語 將軍綱吉の花見の宴	七福神 新亡靈知盛 一寸法師 九戸の乱 義経千本桜・狐忠信 源義経八艘飛び かぐや姫 七福神と八戸風土記 船弁慶 新・ヤマトタケル 源頼光の大蜘蛛退治 祝舞豊年獅子と牡丹 種差に遊ぶ七福神 八戸義経伝説 小田の毘沙門の縁 起 加藤清正 虎退治の場 平賀源内・エレキテル夢物語 將軍綱吉の花見の宴	獎励賞 努力賞 努力賞 最優秀	S61 新組町 新荒町 上組町 壳市 青山会 月金会 下組町 十一日町 城下 下大工町 塩町 廿六日町 朔日町 柏崎新町 淀 内丸 新井田 類家 十六日町 鍛冶町 八戸市職員互 助会 吹上 糠塚 長横町 六日町	壇ノ浦合戦 義経の八艘飛び 大石蔵内助豪遊の場 ももたろう 雷神不動北山桜 鳴神の破戒 祝舞 源平若武者 紫宸殿の一騎討ち 源平盛衰記 摄州大物浦亡靈の場 恵比寿・大黒 招運の舞 あまのいわと 風流源平合戦 知盛亡靈 法靈神社 名馬の難病を救う場 七福神 駿河大納言忠長の妖猿退治 一寸法師 根城南部正経 出陣の場 八戸が生んだ名僧 穂山禪師・献 身説得の場 源平合戦 少林寺 天の岩戸 南部祝いづくし 新歌舞伎 ヤマトタケル 南総里見八犬伝 水戸黄門 漫遊記 招福惠比須・大黒 新羅神社絵巻 山椒太夫		努力賞 努力賞 秀作 優秀 努力賞 秀作 秀作 最優秀 秀作 秀作	

年	町 内	題 名	賞	年	町 内	題 名	賞	
H 2	根城新組町 壳市 YSグループ 下大工町 内丸 青山会 下組町 月金会 塩町 新井田 十一日町 朔日町 柏崎新町 淀 城下 吹上 糠塚 長横町 六日町 類家 十六日町 鍛冶町 八戸市職員互 助会	蒙古襲来 大願成就 一富士二鷹三茄子 八 戸市民の幸福を願う 天照大神と七福神 新・加藤清正虎退治 西遊記 齊天大聖・孫悟空如意 棒の術 新・竹取物語 船弁慶 九戸の乱 忠臣・弁慶立往生の場 加藤清正虎退治の場 敦煌 一寸法師 足柄山の金太郎 南部俵づみ 初夢縁起 新七つ面 南部福づくし招福万来 高砂と十 二支 名工佐甚五郎 天長地久七福神 杜子春 弁慶 主従の別れ 三社主祭神の守護 四神 南部駒と南部の神様 新・里見八犬伝	努力賞 努力賞 秀作 努力賞 努力賞 努力賞 努力賞 獎励賞 優秀 秀作 獎励賞 努力賞 秀作 努力賞 秀作 優秀 秀作 獎励賞 努力賞 秀作 最優秀		S 63	鍛冶町 八戸市職員互 助会 吹上 糠塚 長横町 六日町 類家 十六日町	七福神 五人娘道成寺 女七福神と高砂 武田の騎馬隊 三社大祭に福を招く七福神出現の 場 乙姫様と浦島太郎 赤穂浪士の討ち入り 阿弥陀仏如来 来迎の場	獎励賞 優秀賞 優秀賞 秀作 秀作 努力賞 秀作
H元	廿六日町 新荒町 上組町 新組町 壳市 新井田 十一日町 城下 月金会 柏崎新町 塩町 下大工町 青山会 下組町 内丸 朔日町 淀 八戸市職員互 助会 吹上 糠塚 六日町 長横町 類家 十六日町 鍛冶町	三社大祭神明宮供ぞろえ 義経八艘飛び 亡靈知盛 壇の浦合戦 南部八百年を寿ぐ産土の神と机伝 説 橘藤九郎盛國 鎧知盛絵巻 龍虎の戦い 南部俵づみ 南部正経 蟻崎城攻略の場 十和田湖伝説 南祖坊と八郎太郎 の闘い 南部師行 出陣の場 祝宴 南部祝いづくし 新・龍王 一の谷の合戦 鶴越え逆落しの場 阿修羅 茨木童子 南部八戸・鯨漁の場 南部発祥八百年 豊年祝いの舞 南部各家の御遠祖 新羅神社主祭 新羅三郎義光公 加賀美流附伝 八戸騎馬打毬 浦島太郎 七福神の山車引き 八戸祭りの始 まり法盡さん 元禄風花見踊 四神と七福 靈妙燕島大明神本地弁財天鮫浦の 浜に現れる				獎励賞 獎励賞 努力賞 獎励賞 秀作 獎励賞 獎励賞 秀作 努力賞 秀作 獎励賞 秀作 獎励賞 秀作 獎励賞 努力賞		
H 3	廿六日町 新荒町 上組町 根城新組町 壳市 吉田産業'ルフ' ^ア 朔日町 柏崎新町 下大工町 青山会 月金会 塩町 内丸 十一日町 下組町 城下 新井田	七福神 赤穂浪士 舌切雀 湊川の合戦・楠木正成奮戦の場 中国京劇 白蛇伝 十和田湖伝説 南祖坊と八の太郎 新・三国志 桃太郎の鬼退治 新・櫛引八幡宮縁起 新・オグリ 蕪島に遊ぶ七福神 元禄風おりがみ遊び 大沢多門・机復興の場 ラストエンペラー (中国最後の皇 帝) 源頼光四天王大江山鬼退治 新・祝舞 鎧知盛奮戦の場	獎励賞 優秀 獎励賞 獎励賞 獎励賞 秀作					
H 2	廿六日町 新荒町 上組町	京鹿子娘道成寺 船弁慶 歌舞伎十八番 助六由縁 江戸桜						

年	町 内	題 名	賞	年	町 内	題 名	賞
H 5	上組町	七福神と十二支		H 3	淀	津要法師といわし大漁の場	努力賞
	根城新組町	壇ノ浦合戦・義経の八艘飛び	秀作		糠塚	名僧西有穆山禅師巡錫 みちのく紀行	秀作
	壳市	日本振袖始・須佐之男命の大蛇退治	秀作		長横町	新・鳴神 雲の絶間姫竜神開放の場	努力賞
	内丸	菅原伝授手習鑑 車引	努力賞		六日町	龍宮城に遊ぶ七福神	
	下組町	源平盛衰記・壇の浦義経八艘飛び			類家	りゅうぐうじょう	
	十一日町	孫悟空・羅刹女との戦い	優秀		十六日町	日本最高神 天照大神と吉兆の舞	
	青山会	新・ヤマタノオロチ			鍛冶町	め組の喧嘩・火消し先陣争い一番纏	
	新井田	宝船に七福神			八戸市職員互助会	京鹿子娘二人道成寺	優秀
	塩町	藤姫	努力賞		吹上	歌舞伎舞踊日本振袖始・八岐の大蛇	最優秀
	淀	八戸根城・南部政長奮戦の場					
	朔日町	菅原道真伝説 火雷神	奨励賞	H 4	廿六日町	新・鏡獅子	奨励賞
	下大工町	祝・大漁祈願・蕪島弁財天七福			新荒町	五人藤娘	
	月金会	壇ノ浦大海戦・平知盛奮戦の場	努力賞		上組町	新諸国物語 紅孔雀	
	柏崎新町	雲上天界			根城新組町	風流忍術合戦 猿飛佐助	
	城下	火の神と獅子王の戦い			壳市	スーパー歌舞伎・京劇リュウオーラ(龍王)	最優秀
	六日町	朝比奈三郎義秀・巨鯨捕りの場			吉田産業'ル'ブ	平知盛と源義經 壇の浦の合戦	努力賞
	類家	鞍馬寺の鞍馬僧正法と牛若丸 剣術修行の場			下大工町	摂州大物浦 鎧知盛と平家一門	
	十六日町	石橋 獅子と胡蝶の舞			内丸	女鳴神	努力賞
	鍛冶町	石川五右衛門・大阪城鱗の目盛り	努力賞		柏崎新町	いなばの白うさぎ	
	八戸市職員互助会	新・国性爺合戦	秀作		下組町	源平盛衰記 海戦絵巻	努力賞
	糠塚	歌舞伎十八番 暫	秀作		淀	角力と南部の殿様	
	長横町	新・二人娘道成寺	優秀		青山会	一五九二年 倭乱 加藤清正軍を迎え討つ李舜臣將軍	
	八戸共作連	恵比須・大黒豪遊の場			十一日町	孫悟空分身の術 妖魔退治の場	努力賞
	吉田産業'ル'ブ	須佐之男命と八岐の大蛇	努力賞		朔日町	南祖坊と八郎太郎の決戦	
	吹上	国性爺	最優秀		城下	遙かなる原始七福神と伝来変貌	
H 6	新荒町	安珍清姫			塩町	加藤清正の虎退治	秀作
	上組町	義経千本桜			新井田	高砂祝賀の宝船	秀作
	根城新組町	鎧知盛 奮戦の場			長横町	初夢縁起	優秀
	壳市	鍾馗大臣と端午の節句	秀作		六日町	俱利伽羅峠の夜襲	優秀
	吉田産業'ル'ブ	安東水軍安倍重任 唐交易航路			類家	新・女七福神	奨励賞
		平征の戦い			十六日町	思想家・安藤昌益	
	朔日町	俵藤太の大百足退治			鍛冶町	祭礼春暦三題	
	青山会	南総里見八犬伝			八戸市職員互助会	浦島伝説 乙姫と太郎の別れの場	
	内丸	法靈縁起	努力賞		吹上	蜘蛛絲梓弦 土蜘蛛	秀作
	塩町	八百屋お七	奨励賞		糠塚	め組の喧嘩 神明恵和合取組	努力賞
	新井田	高砂祝賀 夢の神々の舞	優秀				
	淀	八戸河童伝説	奨励賞				
	十一日町	新・娘道成寺 亡靈清姫龍変化の場					
	下大工町	加藤清正 虎退治		H 5	廿六日町	源平合戦・亡靈知盛	
	下組町	一の谷合戦 鴨越			新荒町	水芸 (滝の白糸)	奨励賞
	柏崎新町	三国志					

年	町 内	題 名	賞	年	町 内	題 名	賞
H 8	廿六日町	三社大祭参加百周年 神明宮供そろえ	奨励賞	H 6	城下	初夢縁起（七福神出現の場）	努力賞
	新荒町	かぐや姫			月金会	錦知盛 舊戦の場	奨励賞
	上組町	新桃太郎 鬼ヶ島奮戦の場	奨励賞		類家	(新) 竹取物語	
	根城新組町	大物浦の決戦 亡靈知盛出現の場			十六日町	豪傑児雷也・綱手・大蛇丸との妖術合戦	
	売市	根城南部家 向鶴伝説	優秀		吹上	紅葉狩	最優秀
	吉田産業グループ	高砂と七福神 観桜の宴	秀作		廿六日町	大江山絵詞 魔人酒呑童子	
	淀	初夢縁起			鍛治町	竹取物語 かぐや姫飛天の絵巻	
	塩町	南部政長 根城奮戦の場			八戸市職員互助会	鮫ヶ浦に遊ぶ七福神	努力賞
	下組町	新説 吹雪の吉野山			糠塚	(新) 桃太郎の鬼退治	秀作
	下大工町	牛若丸 鞍馬山修行の場			長横町	(新) 七つ面	優秀
	十一日町	酒呑童子	秀作		六日町	四面楚歌 加藤清正	努力賞
	内丸	七つ面	努力賞		八戸共作連	恵比須・大黒大漁の場	
	朔日町	鎮西八郎誉弓勢					
	柏崎新町	七夕伝説 織女と牽牛		H 7			
	新井田	三社大祭豊作加護と報恩山車祭り	優秀		廿六日町	寿狂言十八番 矢の根五郎	
	城下	豊年満作大漁祈願 七福神と南部の祝い	努力賞		新荒町	花見双 春の宴	
	青山会	西遊記（三面六臂身外身の術）	奨励賞		上組町	真田十勇士の内 忍法競べ	
	鍛治町	明暦振袖火事（娘の執念 江戸の町を焦がす）			根城新組町	亡靈知盛 ✓	奨励賞
	八戸市職員互助会	龍虎相搏つ（新）め組の喧嘩	秀作		売市	道成寺	努力賞
	吹上	椿説弓張月	最優秀		吉田産業グループ	新・里見八犬伝	努力賞
	糠塚	京劇 大鬧天宮孫悟空	努力賞		淀	加賀美流附伝 騎馬打毬	
	長横町	新・娘道成寺	努力賞		十一日町	新・三国志	優秀
	十六日町	雪獅子 天空の舞	奨励賞		柏崎新町	西遊記 金角・銀角との闘い	奨励賞
	六日町	浦島太郎物語・乙姫様出迎えの図			青山会	(新) 娘道成寺縁起絵巻	
	類家	大阪夏の陣・真田幸村 家康本陣最後の突入			朔日町	岩見重太郎英雄伝 大拂々退治	
	八戸共作連	新説 かぐや姫			下大工町	源九郎狐	奨励賞
					内丸	歌舞伎十八番 景清牢破りの場	努力賞
					塩町	琵琶湖伝説 竹生島	秀作
					下組町	新・平家物語 亡靈五人知盛	
					新井田	商売繁盛 至福の宴	秀作
					城下	新・鳴神 雷神不動北山桜	
					十六日町	忍術合戦 新・児雷也	奨励賞
					鍛治町	壇の浦合戦 平家落日（公達の形相甲羅に蘇る）	努力賞
H 9	廿六日町	菅原伝授手習鑑伝記・怨靈菅原道具公			八戸市職員互助会	琵琶湖伝説 竹生島	
	新荒町	義経八艘飛び			吹上	北の義経伝承・蝦夷渡海	最優秀
	上組町	かぐや姫			糠塚	豊年満作大漁祈願 本地弁財天七福	秀作
	根城新組町	南部実長公七百遠忌郷土芸能奉納	努力賞		長横町	女七福	優秀
	売市	南部光り武者 大阪夏の陣奮戦の場	優秀		六日町	源頼政 鳩退治	
	吉田産業グループ	大国主命			類家	賤ヶ岳の合戦	
	青山会	新・八犬伝 悪靈玉梓と八犬伝			八戸共作連	豊年 恵比須・大黒	
	朔日町	梵天国					
	塩町	毛利元就・嚴島の合戦					
	城下	八戸三社大祭縁起 三社祭神と七福神	努力賞				
	十一日町	新・桃太郎	秀作				

年	町 内	題 名	賞	年	町 内	題 名	賞
H10	十六日町 鍛治町 八戸市職員互 助会 八戸共作連	出雲伝説 大蛇 燕島大明神由来記 菅原伝授手習鑑 車引きの場 孫悟空	特別賞 優秀	H 9	柏崎新町 淀 下大工町 下組町 新井田 内丸 八戸市職員互 助会 吹上 糠塚 長横町 六日町 類家 十六日町 鍛治町 八戸共作連	西遊記・牛魔王との戦い 女七福神 戦国最強軍団 武田の騎馬隊 八戸祭事記 燕島弁財天と六福神 桃太郎伝説 鬼退治奮戦の場 西遊記 火炎山の牛魔王 羅刹女 との戦い 石橋	努力賞 努力賞 奨励賞 優秀
H11	廿六日町 新荒町 上組町 根城新組町 壳市 吉田産業'ルフ' 朔日町 淀 下組町 内丸 新井田 城下 下大工町 柏崎新町 十一日町 塩町 青山会 糠塚 長横町 六日町 類家 十六日町 鍛治町 八戸市職員互 助会 吹上 八戸共作連	歌舞伎舞踊 六歌仙容彩 船弁慶 大江山酒呑童子 南部師行家臣豪勇西沢民部行広 織女と牽牛の願い～七夕伝説～ 日本伝説物語絵巻 土蜘蛛 初夢縁起 保元の乱 強弓源爲朝奮戦の場 新・三国志演義 八戸えんぶり豊年祈願予祝乃舞 四天王楓江戸粧 児雷也見参 桃太郎 もの姫 燕島賑七福神 戦場俱利伽羅峰奮戦 巴御前 鈴鹿山の鬼人大嶽丸 龍虎伝説 (兜率天・大上老君 両 雄修武) 鮫ヶ浦に吉兆 長篠の合戦 竹取物語 十五夜の迎え 市制70周年記念 招運祈願・祝い の舞 西遊記 金角・銀角との戦い 源平合戦 一ノ谷の奇襲 源義経 いなばの白うさぎ	秀作 努力賞 努力賞 秀作 努力賞 秀作 努力賞 秀作 優秀 努力賞 秀作 努力賞 秀作 努力賞 秀作 努力賞 秀作 努力賞 秀作 優秀	H10	廿六日町 新荒町 上組町 根城新組町 壳市 吉田産業'ルフ' 朔日町 塩町 青山会 柏崎新町 内丸 城下 下組町 淀 新井田 十一日町 下大工町 吹上 糠塚 長横町 六日町 類家	鳴神 奇襲義経 鶴越の逆落し 織田信長 桶狭間の戦い 馬の殿様 南部通信奨励 加賀美 流馬術 騎射八道 阿修羅伝説 竹取物語 かぐや 海宮遊幸 山幸彦と海幸彦の物語 かぐや姫 忠臣蔵 播州赤穂義士 吉良邸討 入りの檄！ 足柄山の金太郎 京劇 百花公主 南部俵つみ 高砂に豊作を捧ぐ七 福神 燕島に遊ぶ七福神 南部七踊りと七福神 加藤清正虎退治奮戦の場 風流才女・紫式部 ～源氏物語～ 歌舞伎十八番 暫 九郎判官源義経奇襲鶯鶯 櫛引八幡宮ものがたり 八幡様と メドツ 新・西遊記 竹取物語 満月への旅立ち 龍虎の戦い (謙信対信玄)	奨励賞 秀作 努力賞 努力賞 努力賞 秀作 努力賞 秀作 努力賞 秀作 努力賞 秀作 努力賞 秀作 努力賞 秀作 努力賞 秀作 優秀
H12	廿六日町 新荒町 上組町 根城新組町 壳市 吉田産業'ルフ' 朔日町 淀	神明宮天照皇大神と火消し二番組 十和田山由来記 龍神伝説 南藏 坊と八之太郎の戦い 義経八艘飛 南部光経 勝利の正夢 向鶴伝説 英雄 源九郎判官義経「成吉思汗 蒙古統一」 竹生島縁起 龍神と辨財天 道成寺鐘 (新)娘道成寺	奨励賞 奨励賞 秀作 優秀 努力賞	下組町 淀 新井田 十一日町 下大工町 吹上 糠塚 長横町 六日町 類家	風流才女・紫式部 ～源氏物語～ 歌舞伎十八番 暫 九郎判官源義経奇襲鶯鶯 櫛引八幡宮ものがたり 八幡様と メドツ 新・西遊記 竹取物語 満月への旅立ち 龍虎の戦い (謙信対信玄)	努力賞 最優秀 秀作 秀作	

年	町 内	題 名	賞	年	町 内	題 名	賞
H13	八戸市職員互助会 吹上 八戸共作連 糠塚 長横町	京鹿子娘道成寺 大江山の酒呑童子 児雷也 九郎義経鶴越逆落一ノ谷合戦の場 猿之助歌舞伎 華果西遊記・天界 一の勇神顯聖二郎真君	秀作 奨励賞 優秀	H12	下組町 内丸 新井田 城下 下大工町 柏崎新町 十一日町 塩町 青山会 糠塚 長横町 六日町 類家 十六日町 鍛治町 八戸市職員互助会 吹上 八戸共作連	亡靈知盛 八犬伝 天長地久神々の宴 妖艶 辰夜叉御前妖怪変化 新・四天王楓江戸粧 児雷也 陰陽師 安倍晴明 日本創生記伝説新・ヤマトタケル 歌舞伎舞踊 花競姫姿舞揃 新・源平盛衰記より 巴御前・亡 靈義仲～栗津が原の怒り～ 師範 野村軍記 八戸騎馬打毬 新・龍虎伝説 大漁祈念 燕嶋伝説 石橋 かぐや姫 満月への旅立ち 源平盛衰記（壇の浦合戦図） 歌舞伎十八番のうち 不動 錨知盛 摂州大物浦 義経二崇ル 平家ノ怨霊 やまたのおろち (八岐大蛇)	最優秀 努力賞 秀作 奨励賞 努力賞 努力賞 秀作 努力賞 努力賞 優秀 秀作 奨励賞
				H13	廿六日町 新荒町 上組町 根城新組町 壳市 吉田産業グループ 新井田 柏崎新町 下組町 淀 朔日町 下大工町 十一日町 塩町 青山会 内丸 六日町 類家 十六日町 鍛治町	連獅子 勇将南部信光甲州波木井の戦い 奮戦若武者西沢平馬 決戦川中島 南部師行ひきいる南部騎馬軍団奮 戦の場 楊貴妃「平安陰陽絵巻」 祝本地弁財天七福八戸に遊ぶ 「景気昂揚祈願」招運大吉 雷神菅原道真魑魅魍魎悪鬼と怨霊 平家の猛将能登守教経決戦壇の浦 (新) 女七福神 戻り橋～茨木童子虚空飛天の術～ 八戸藩主南部信真公と「加賀美流 附伝八戸騎馬打毬」 ヤマトタケル 京鹿子娘道成寺 大安吉日・花嫁御寮祝の門出 鬼揃紅葉狩 恵比寿浜大漁三昧 歌舞伎狂言仮名手本忠臣蔵 鬼伝説 大江山酒呑童子 乱世英雄伝説 源九郎判官義経	努力賞 秀作 秀作 努力賞 努力賞 秀作 努力賞 努力賞 優秀 努力賞 努力賞 努力賞 努力賞 努力賞 努力賞 努力賞 努力賞 努力賞 努力賞 努力賞 努力賞 努力賞 努力賞

八戸三社大祭参加芸能一覧（明治38～昭和44年）

○明治38年（明治38年8月23日／東奥日報）

※「七年振り口で珍らしくも鮫、小中野の藝妓連は踊り屋台を出して…」

○明治39年（明治39年9月11日／東奥日報）

大神樂 虎舞 神樂 ※「夜間町内の重なる商家口於て種々なる手踊などありて…」

○明治40年（明治40年8月31日、9月3日／東奥日報）

大神樂 虎舞 神樂 手踊（湊藝妓連）

○明治41年（明治41年10月6日／東奥日報）

大神樂 神樂 「サツキリ」 虎舞

※「例年ハ湊及鮫などの藝妓連中は矢張り附祭として屋臺の上で特意の手踊を演しつゝ各町内を引廻はし夜中大景氣を付けて居つたが是れ口口本年の大祭に加はらなかつたから;…」

○明治42年（明治42年9月7日／奥南新報）

屋台手踊（小中野藝者連） 劍舞ひ

○明治43年（明治43年9月4日、9月7日／奥南新報）

劍舞（小松倉、惡虫、平内、江花澤等） 駒踊（高館、階上）

花屋台（鮫、小中野藝妓連）

○明治44年（明治44年9月1日、9月4日／奥南新報）

花屋台（鮫湊等） 大神樂 虎舞 鶴舞 駒踊

○大正2年（大正2年8月22日、8月28日、9月4日／奥南新報）

・神明宮…廿六日町大神樂 駒踊（高館）

・靈神社…獅々神樂 廿八日町大々神樂

・新羅神社…中居林大神樂 神樂 虎舞 鶴舞（小松倉、平内、惡蟲）

花屋台（小中野藝妓）

※花屋台（鮫湊） 劍舞

○大正3年（大正3年9月4日／奥南新報）

手踊（小中野藝妓） 鶴舞（階上村） 虎舞 大神樂 願人舞（高橋村） 等

○大正4年（大正4年8月19日、9月1日、9月4日／奥南新報）

・神明宮…大神樂 神樂 駒踊（高館） 鶴舞（惡蟲）

・靈神社…二十八日町太神樂 鶴舞（七崎） 願人踊（下組町） 神樂 鮫踊子

・新羅神社…中居林大神樂 御神樂 御神樂（八幡町奉納） 虎舞 伊勢音頭

鶴舞（平内） 湊踊子連

※花屋台（小中野、鮫藝妓連） 願人踊

○大正5年（大正5年9月1日、9月4日／奥南新報）

- ・神明宮…大神樂 里神樂 鶴舞
- ・靄神社…獅大神樂 二十八日町太神樂 神樂 花屋台（鮫踊子） 鶴舞
- ・新羅神社…中居林大神樂 片岸村神樂 八幡村神樂 虎舞
伊勢音頭（糠塚、類家、下斗賀） 湊踊子 鶴舞（北市川） 張出獅子踊
鶴舞（平内）
- ※花屋台（小中野、鮫） 願人踊

○大正6年（大正6年8月31日、9月3日／東奥日報）

- 手踊屋台（鮫湊藝妓） 太神樂 鶴舞（階上村平内） 駒踊 虎舞 伊勢踊
- ※「小中野鮫遊廓藝者連の花屋臺も小中野より一臺増し三臺となり…」

○大正7年（大正7年9月1日、9月4日／奥南新報）

- 大神樂 虎舞 手踊花屋台（小中野藝妓）（村落より） 鶴舞、獅子舞、駒踊 等

○大正8年（大正8年9月1日、9月4日／奥南新報）

- ・神明宮…大神樂 神樂 獅子踊
- ・靄神社…獅子大神樂 廿八日町大神樂 御神樂 島守村口踊 小中野村踊子
鶴舞踊（島守村）
- ・新羅神社…中居林大神樂 御神樂 新井田村大神樂 虎舞 湊踊子 鶴舞（小松倉）
※劍舞 駒踊

○大正9年（大正9年9月1日／奥南新報）

- ・神明宮…大神樂 神樂 駒踊（高館） 鶴舞（上野）
- ・新羅神社…中居林大神樂 御神樂 口口口神樂 虎舞 湊踊子
- ・靄神社…獅子大神樂 廿八日町大神樂 里神樂 花屋台（小中野）

○大正10年（大正10年9月1日／奥南新報）

- ・神明宮…大神樂 神樂
- ・靄神社…獅子大神樂 廿八日町大神樂 里神樂 花屋台（小中野村）
- ・新羅神社…中居林大神樂 大神樂 虎舞 湊踊子屋台
- ※花屋台（鮫）

○大正11年（大正11年9月13日／奥南新報）

- ・新羅神社…中居林大神樂 御神樂 虎舞 湊踊子屋台 大神樂（重地村）
- ※花屋台（小中野） 大神樂

○大正13年（大正13年9月3日／東奥日報）

- 口屋台（小中野藝者）

○大正14年…芸能についての記事なし

○大正15年（大正15年9月4日／奥南新報）

- 大神樂 虎舞 花屋台 等

○昭和2年（昭和2年9月1日／奥南新報）

- ・神明宮…大神樂 神樂
- ・新羅神社…中居林大神樂 御神樂 重地大神樂 虎舞 笹屋臺 湊踊屋台
市川村和野鶴舞
- ※藝妓踊屋台 願人踊

○昭和3年（昭和3年9月4日／奥南新報）

駒踊 剣舞 願人踊 獅子舞 虎舞 藝妓屋台 等

○昭和4年（昭和4年9月1日，9月4日／奥南新報）

大神樂 虎舞演舞 小中野藝妓連，口新地少女連の手踊 駒舞（赤保内） 等

○昭和5年（昭和5年9月4日／奥南新報）

大神樂 駒踊 小見藝妓屋台 等

○昭和6年（昭和6年9月4日／奥南新報）

大神樂 駒踊 藝妓の屋台 等

○昭和7年（昭和7年9月1日／奥南新報）

大神樂 駒踊 藝妓屋台 鶴舞 等

○昭和8年（昭和8年9月1日，9月4日／奥南新報）

大神樂 駒踊 藝妓屋台 鶴舞 等

○昭和9年（昭和9年9月1日，9月4日／奥南新報）

大神樂 駒踊 藝妓屋台 鶴舞 等

○昭和10年（昭和10年9月1日，9月4日／奥南新報）

大神樂 駒踊 藝妓屋台 鶴舞 等

○昭和11年（昭和11年9月4日／奥南新報）

大神樂 駒踊 藝妓屋台 等

○昭和12年（昭和12年9月4日／奥南新報）

大神樂 神樂 鶴舞 等

○昭和13年…芸能についての記事なし

○昭和14年（昭和14年9月4日／奥南新報）

神樂 虎舞（十六日町）（近在の）駒踊藝妓屋台

- 昭和21年…芸能についての記事なし（デーリー東北）
- 昭和22年（昭和22年8月30日、9月3日／デーリー東北）
館村の八幡かぐら
- 昭和23年（昭和23年8月29日、9月1日／デーリー東北）
駒踊り
- 昭和24年（昭和24年9月2日、9月4日／デーリー東北）
大神樂 小中野藝妓見番の手踊り屋台
- 昭和25年（昭和25年9月2日／デーリー東北）
大神樂
- 昭和26年（昭和26年9月3日／デーリー東北）
虎舞 駒踊り
- 昭和27年（昭和27年9月3日／デーリー東北）
獅子舞 駒踊り 鶴舞 等
- 昭和28年（昭和28年9月1日／デーリー東北）
虎舞 駒踊り 鶴舞 御神樂 等
- 昭和29年…芸能についての記事なし
- 昭和30年…芸能についての記事なし
- 昭和31年…芸能についての記事なし
- 昭和32年…芸能についての記事なし
- 昭和33年（昭和33年9月1日／デーリー東北）
・神明宮…大神樂 神樂 駒踊り 獅子舞 鶴舞 南部手踊り その他
・新羅神社…神樂 剣舞 手踊り など
・靄神社…里神樂 大神樂
※虎舞
- 昭和34年…芸能についての記事なし
- 昭和35年…芸能についての記事なし
- 昭和36年（昭和36年8月21日／デーリー東北）
大神樂 獅子舞 駒踊り 虎舞

○昭和37年（昭和37年8月21日／デーリー東北）

大神楽 獅子舞 駒踊り 虎舞 鶴舞

○昭和38年…芸能についての記事なし

○昭和39年（昭和39年8月22日／デーリー東北）

※「十六日町の虎舞い花屋台が今年から姿を消した」

○昭和40年（昭和40年8月22日／デーリー東北）

大神楽 八戸小唄踊り街頭行進

○昭和41年（昭和41年8月20日，8月22日／デーリー東北）

大神楽 権現舞い 虎舞い 八戸小唄踊り街頭行進

○昭和42年（昭和42年8月19日，8月20日，8月22日／デーリー東北）

大神楽 獅子舞 剣舞 駒踊り 虎舞い 南部神楽 八戸小唄盆踊り大会

盆踊り大会

（「四百年の伝統を誇る郷土民謡『おしまこ踊り』と『白銀ころばし』の保存を兼ねて」）

○昭和43年（昭和43年8月24日／デーリー東北）

虎舞い 神楽

○昭和44年（昭和44年8月20日／デーリー東北）

大神楽 獅子舞 鶴舞 駒踊り 虎舞い 盆踊り大会 八戸小唄流し踊り

平成12年度八戸三社大祭山車貸出表

	8/21～8/23 三沢まつり	8/24～8/26 野田観光まつり	8/25～8/27 上北町秋まつり	9/1～9/3 七戸秋まつり	9/1～9/3 五戸まつり	9/1～9/3 六戸秋まつり	9/8～9/10 十和田市秋まつり	9/8～9/10 東北町秋まつり	9/15～9/17 百石まつり	9/15～9/17 軽米秋まつり	9/17～9/19 久慈秋まつり
内丸附祭親睦会山車組	●										
上組町山車組	●			●					●		
廿六日町山車組	●			●		●					●
糠塚山車組	●					●			●		
塩町山車組	●										●
類家山車組	●										●
新井田附祭振興会山車組	●			●					●		
朔日町山車組	●		●	●					●		
新荒町山車組	●		●							●	
十一日町龍組山車組	●		●				●				●
下組町山車組			●	●			●		●		
壳市山車組			●	●							
下大工町山車組			●	●							
根城新組町山車組			●						●		
長横町山車組									●		
柏崎新町山車組		●							●		
十六日町山車組		●				●				●	
吹上山車組						●	●				●
鍛治町山車組				●							
青山会山車組						●					
八戸共作連								●			

八戸三社大祭編年表

時代	年号	主なできごと
享保五年（一七二〇）		明年から法靈御神輿の長者山御旅出許可となる『八戸藩目付所日記』
同		御神輿建立のため、御家中御侍中家来まで一人につき十銭づつ寄進するようにとの触れが出される『八戸藩目付所日記』
享保六年（一七二一）		法靈御輿始めて長者山御旅出あり『八戸藩目付所日記』
延享四年（一七四七）		「出し」と記載あり『法靈御神事行列』
安永三年（一七七四）		祭り飾り物として人形組二ツ（代銀三〇匁）注文『永歳覚日記』
天明四年（一七八四）		出し銘々店前に飾り置くこと『法靈御口口諸色覚』
同（同）		卯年凶作二付御通行御榊、御旗、御神輿、笠錐斗り、御徒目付様跡押、出しは銘々の前置『永歳目安録』
文化元年（一八〇四）		「出し」と記載あり『法靈御神事諸事覚』
文政八年（一八二五）		九月一日 八戸城から新羅神社まで始めて武者行列の通行あり『南部史要』
天保四年（一八三三）		信玄式三番双 真田左衛門佐 関羽 金平 弁慶 草刈山王 僧正坊 『法靈御神事行列』

時代	年号	主なできごと
天保九年（一八三八）		法靈御神事、江戸にて大奥様御遠行のため八月一七・一八・一九日に行う。当年不作により難波のため出しは銘々家の前に飾り置く『永歳覚日記』
江 戸	天保十年（一八三九）	当年も御神事去年の通り略す。出し屋形も銘々の家の前に飾り立て置くこと。ただし、御還りの時は通行あり『永歳覚日記』
嘉永元年（一八四八）		信玄 太公望 関羽 式三番双 僧正坊 金平 真田 左衛門佐 草刈山王 弁慶 神功皇后 武内宿祢『法靈御神事行列』
安政三年（一八五六）		信玄公 太公望 神成皇后 武内宿祢 恵比寿 布袋 弁慶 金平 草刈山露 『法靈御神事行列』
明治二年（一八六九）		「出し」と記載あり『法靈御神事行列』
明治三年（一八七〇）		当年の祭事は誠に渡輿有之のみ『多志南美草』
明治四年（一八七一）		法靈大明神号靈神社と改む『多志南美草』
明治四年（一八七一）		美濃屋・河内屋・近江屋・古屋・六日町（二台）・十三日町と三日町で一台・二六日町と一六日町から山車が出る。合計八台『おがみ神社御祭事二付人足大略調書書上帳』
明治四年（一八七一）		異作に付ては湊駄の踊子、御供も無之淋敷事也『多志南

時代	年号	主なできごと
明治二十九年（一八九六）	明治二九年（一八九六）	長者山新羅様のヒモロギが参加し二社祭になる「上杉修八戸祭と大沢多聞」『北方春秋』第一号一九五六
明治三十三年（一九〇〇）	明治三十三年（一九〇〇）	コレラ大流行のため祭り中止「上杉修 八戸祭と大沢多聞」『北方春秋』第一号一九五六
明治三四年（一九〇一）	明治三四年（一九〇一）	コレラ退散の意味でコレラ祭りと称し盛大に行う「上杉修 八戸祭と大沢多聞」『北方春秋』第一号一九五六
明治四四年（一九〇二）	明治四四年（一九〇二）	三社による行列となる『三社御祭礼行列帳』
明治四五年（一九〇三）	明治四五年（一九〇三）	大沢多聞の口入りで各町内毎に毎年新しい人形を作るようになる。「作り人形」「つけ祭り」とか呼ぶようになる
明治四六年（一九〇四）	明治四六年（一九〇四）	「上杉修 八戸祭と大沢多聞」『北方春秋』第一号一九五六
明治四七年（一九〇五）	明治四七年（一九〇五）	六
明治四八年（一九〇六）	明治四八年（一九〇六）	兒島高徳 太公望 神功皇后と武内宿彌 鎮西八郎為朝
明治四九年（一九〇七）	明治四九年（一九〇七）	草刈童 八幡太郎義家 布袋 恵比寿 鐘鳩赤鬼 小栗
明治五十年（一九〇八）	明治五十年（一九〇八）	判官 加藤清正など いずれも皆三十人位の脇付にて此
明治五一年（一九〇九）	明治五一年（一九〇九）	も一樣に黒布染の脚半黒の角鳥帽子を被り 長者山の賑わいたる蓋し奥羽中無比と云うも過言にあらず「陸奥国八戸靈祭」『風俗画報』
明治二十九年（一八九六）	明治二十九年（一八九六）	日清戦争勝利祝賀祭として祭旗・神輿一臺購入、祭りを四日間開催、一関以北青森迄の鉄道賃金を五日間位半減せられんことを鉄道会社へ請求 祭事世話人大沢多聞『東奥日報』八・一五

時代	年号	主なできごと
明治二十九年（一九〇九）	明治二十九年（一九〇九）	八戸駅より盛岡青森間に至る乗客の賃金を半額に減じ・・・風と降雨のため延期『東奥日報』八・三〇
明治三四年（一九〇四）	明治三四年（一九〇四）	伝染病発生の憂い・・・屋台は各々店頭に飾置し『東奥日報』八・一八
明治四五年（一九〇五）	明治四五年（一九〇五）	「九月一日より四日間、青森より八戸、盛岡より八戸までの汽車賃割引の件を祭典総代より日鉄会社へ請願せり
明治四六年（一九〇六）	明治四六年（一九〇六）	『東奥日報』八・三一
明治四七年（一九〇七）	明治四七年（一九〇七）	山車の数は十一個にして・・・其他商家は思い思いの見世飾り生花等ありし又從来の山車は各見世先に飾りそ
明治四八年（一九〇八）	明治四八年（一九〇八）	の・・・・『東奥日報』九・七
明治四九年（一九〇九）	明治四九年（一九〇九）	河津屋及各商店では人形其他の飾物を為して景況を添え・・・昔の所謂山車は年々出さぬようになつてきた『東奥日報』九・三
明治五十年（一九一〇）	明治五十年（一九一〇）	両屋供に河内屋の上杉謙信和吉の神功皇后と武内宿彌その他の人形は店頭に飾られて景気を添えて居つた『東奥日報』一〇・六
明治五一年（一九一一）	明治五一年（一九一一）	本年は電話開通の為高大の旗さし物及び屋台等は凡て改造するの必要あり旁々夫等の為社務所は非常に多忙を極め居れり『奥南新報』八・一九
明治五二年（一九一二）	明治五二年（一九一二）	小中野芸者連の屋台手踊及び近年珍しき剣舞ひ等にて見物の喝采を博したり『奥南新報』九・七

時代	年号	主なできごと
大正元年（一九一二）		本年は御大喪中に当たるをもつて三社とも其礼祭日に於て各社にて例祭を執行の事となりたるより自然取止めとなりると『はちのへ新聞』九・一
大正二年（一九一三）		野辺地一戸間の汽車賃二割引を其筋に請願中なるが多分許可せらるべしとの事なり『奥南新報』八・二二
大正六年（一九一六）		二六日町（新田義貞の武勇）高さ十三尺巾十尺・尚旧山車にて参加は一六日町の「草刈山童」大工町加賀平酒造店の「恵比須」三日町の「笠鉢」等小中野鮫両郭芸者連の花屋台も小中野より一台増し三台となり、他に階上村平内鶴舞その他駒踊なども申込ある由『東奥日報』八・三一

時代	年号	主なできごと
昭和二年（一九三七）		日支事変の戦雲いよいよ拡大しつつある折柄の・人気を呼ぶ山車は時局柄八幡町の「八幡太郎義家」、鍛冶町の「加藤清正」、下組町の「輝く日章旗」の三台だけで・又街頭の其処此處に千人針を乞う人々のあつたのや行列中に国防献金神樂の旗も見えたり・『奥南新報』九・四
昭和二年（一九四六）		平和の象徴として八戸市を口る秋祭三社大祭は涼風そよぐ九月一日から三日間盛大に執行されることになった。戦後初の大祭であり、・『デーリー東北』八・二二八戸観光協会は三社まつりの山車審査の是非について参加一八町内からのアンケートを求めていたが、回答を寄せた十五町内のうち審査を希望するもの十一町内、希望しないもの四町内だつたので審査実施と決定した『デーリー東北』八・二三
昭和三年（一九五八）		山車は運行について、警察側から山車の高さ標準四メートル前後を厳守し、電線切断事故を起さないようにと要望が出された。『デーリー東北』八・二三
昭和三五年（一九六〇）		同大祭は今年から八月二十日（前夜祭）二十一日（ミコシ渡御）二十二日（中日）二十三日（ミコシ還御）のスケジュールで行われる。『デーリー東北』六・七

人手多數を予想し鉄道省久慈間五往復、尻内湊間四往復の上り下り各列車に客車三輛乃至四輛を増結して乗客難踏を穏和する筈『奥南新報』九・一

時代 年号	主なできごと
昭和三九年（一九六四）	<p>これまで三社が管理していたまつり行事を三社から切り離し三社大祭運営委員会が一切の運営を担当し、観光効果を高めることになった『デーリー東北』八、十一</p>
昭和三九年（一九六四）	<p>電線に引っかかるのを心配して折畳式の新スタイルや見返り八戸地区の新産業都市指定を喜ぶ工員が、新産の旗を振った人形をあしらうなどのニューフェースもお目見え『デーリー東北』八、二二</p>
昭和四一年（一九六六）	<p>八戸の三社まつりが「はちのへ祭」と今年から改称することになつたという。誰がそうしたのか知らないが・・・『デーリー東北』八、二三</p>
昭和四八年（一九七三）	<p>山車の本体が動いたり、煙を出すなど、仕掛けに手が込んで“静”から“動”へ。ますます立体化やパノラマ化が進んでいるとの声も聞かれた。『デーリー東北』八、二二</p>
昭和四九年（一九七四）	<p>これまで人形を固定したものが普通だつたが、回り舞台を採用したり動く人形を使うなど巧妙な仕掛けをしたものもある。『デーリー東北』八、二二</p>
昭和五〇年（一九七五）	<p>県南地方を代表する夏祭り「はちのへ祭」の名前が、十年ぶりで「八戸三社大祭」に復元されることに決つた</p>
昭和五七年（一九八二）	<p>『デーリー東北』六、一八</p>
昭和五七年（一九八二）	<p>祭りの開催日が八月一日から三日間に変更になる</p>

本書は、八戸市教育委員会の承認を得て、八戸三社大祭保存伝承事業実行委員会が増刷したものである。

平成14年3月

〒031-8686 八戸市内丸一丁目1番1号
八戸市教育委員会文化課内
八戸三社大祭保存伝承事業実行委員会事務局
電話 (0178) 43-2111 内線455

平成14年3月31日

八戸三社大祭文化財調査報告書

編集・発行 八戸市教育委員会

〒031-8686 青森県八戸市内丸一丁目1番1号
電話 (0178) 43-2111

印刷・製本 株式会社 中長印刷

〒031-0072 青森県八戸市城下四丁目24番23号
電話 (0178) 44-3362